
ポケモン不思議のダンジョン ブレイブトレジャーズ

フォック・リザハート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン ブレイブトレジャーズ

【Nコード】

N8918P

【作者名】

フォック・リザハート

【あらすじ】

ポケモンだけの世界、この世界は二度の危機があったが、ある探検隊により、世界は二度救われた、それから5年後、トレジャータウンは変わり、さらに二つのギルドによって探検隊は激増した、プクリンのギルドともう一つ、ギルド『ブレイブ』これはこのギルド『ブレイブ』にいるある探検隊とその仲間達の、いろんなところを回る、カオスな物語、そしてこれはポケモン不思議のダンジョン希望の空と絆の続編の物語

※ただいまテイルズオブデスティニー・デスティニー2の世界編へと突入しています。残酷表現ありを追加しました。

ブログ依頼（前書き）

ついにあのコンビが帰ってきた!!

はちゃめちやなカオスな物語をお楽しみください

ではどうぞ!!

プロローグ 依頼

???? 「はあはあ……」

一匹のポケモンは全速力で走る

何者かに追われているようだがその慌てぶりからはそのようだ

???? 「捕まってたまるか！ あいつらなどに！」

そのポケモンはお尋ね者という罪を犯した者

この世界はポケモンだけの世界：人間のいない世界で、ここは不思議のダンジョンという不思議な場所だ

そのポケモンは体が紫で、目が赤く、口が三日月のような形をしているポケモンだ

シャドーポケモンのゲンガー

彼は逃げる

しかしそれは彼らを立ちばかせる

???? 「逃がさねえよ！ お尋ね者ゲンガー！」

ゲンガー 「!？」

ゲンガーの目の前には一匹のポケモンが現れた

腕と太ものたくましい筋肉質な体、そして頭には炎が灯っている
ポケモン…火炎ポケモンのゴウカザルだ

ゴウカザル「オイラ達から逃げられると思ってる？」

ゲンガー「うるせえ！！」

ゲンガーはゴウカザルに向かってシャドーボールを放った

ゴウカザル「はあく言ってもわからないね…」

ゴウカザルは呆れた表情をする

ゴウカザル「マッハパンチ！」

ゴウカザルの拳が光り、拳がシャドーボールを殴る

するとシャドーボールは跳ね返されてゲンガーに向かう

ゲンガー「くそっ！」

ゲンガーは回避した

ゴウカザル「やるね、でも」

すると今度は

何処からか緑の光線が何処からかゲンガーに向かって放たれた

ゲンガー「うわっ!？」

ゲンガーは咄嗟とっさに回避した

????「チッ、はずしたか」

するとそこから一匹のポケモンが現れた

背中には木が生えていて、目は鋭く鼻は黒く、耳には鋭いトゲが両方ついていた

ゲンガー「ゲッ!？お…お前は!？」

このポケモンは大陸ポケモンのドダイトスだ

ドダイトス「おいおい、俺達から逃げられると思ってるのか、幽霊野郎」

と、ドダイトスはゲンガーを睨む

ゲンガー「くっ!」

ゲンガーはこの二匹のポケモンに囲まれた

ゲンガー「くそっ!ならこれでも食らえ!！」

半端でゲンガーはシャドーボールを繰り出した

その対象はドダイトスだ

ドダイトス「聞きてえか？」

ゲンガー「何っ!？」

ドダイトス「聞きてえよなく俺達の事」

ドダイトスはなぜこのような事を言うのか

それはこの二匹は

ドダイトス「俺達は探検隊ブレイブ!! ロマンを求める探検隊だ!
! テメエのハートに刻んどきな!!」

ブレイブ

この二匹は、ポケモンの世界を二度救った有名な探検隊である

ドダイトス「ロックフェンス!!」

ドダイトスの周りから岩の壁が現れシャドーボールは防がれた

ゲンガー「何っ!？」

ドダイトス「よし! 行くぞ! シルム!!」

ゴウカザル「うん! ドルク!!」

二人は互いに攻撃技を出した

ドルクと呼ばれたドダイトスはエナジーボール

と、二人はハイタッチした

ドルク「それじゃあ戻るか、ギルド『ブレイブ』に！」

シルム「おおっ！」

ドルク達は探検隊バッジをかざして脱出した

プロローグ依頼（後書き）

いやーしょっぱらからゲンガーには犠牲になってもらいました（笑）

シルム（ゴウカザル）「いや作者さん（汗）犠牲はないと思うけど（汗）」

ドルク（ドダイトス）「でも進化できていいぜ♪すげえよ力がわいてきたぜ♪これが進化なんだな♪」

でもドダイトスって素早さ低いよ？

ドルク「んなもん関係ねえよ、まあ結構よかったぜ♪」

5年後だからもう二人して18歳なんだからね（汗）

ドルク「まあ進化してもよろしくな♪」

シルム「オイラ達の活躍がまた来たからみんな！応援よろしくな！」

続編は色々やっておかないかね（黒）

ドルク「楽しみだぜ♪（黒）」

シルム「やっぱそうなるのかよ（汗）」

依頼1 ギルド『ブレイブ』（前書き）

ドルク「おっ！ ついにか♪」

うん、まあ今回はギルドである『ブレイブ』の紹介とかです
少しメンバーも出ますので

ではどうぞ

依頼1 ギルド『ブレイブ』

あれから5年

ドルク達だけでなく色々と変わってきている

ここはトレジャータウン

町はさらに活気に溢れていて、多くの探検隊などが足を運ぶ

そんなトレジャータウンの通りをドルクとシルムの二人は歩いている

カクレオン（普通）・カクレオン（色違い）「いらっしゃ〜い！」

ドルク達はカクレオン商店&専門店に来た

お腹の赤いギザギザ模様が特徴のポケモン、カクレオンが店を開いている

緑のカクレオン、つまり普通のカクレオンは兄

薄紫のカクレオン、つまり色違いのカクレオンは弟

この二人が店を切り盛りしている

カクレオン（普通）「おやおやドルクさん、今日も依頼を片付けたんですか？」

ドルク「ああ、まあ大したことでもなかったぜ」

そりゃあそうだろう（汗）

カクレオン（普通）「さすがギルド『ブレイブ』の親方、大体探検に出るのもすごいですね」

ドルク「体とか動かさねえとな、そういえばアレは入荷しているのか？」

アレとは？

カクレオン（普通）「アレですか…ありますよー！！これですね」

カクレオン（普通）「がとりだしたのは黄緑色のグミだ」

これは若草グミと呼ばれるグミで

食べるとかしこさがあがるという食物で、食材などでも使えるのだ

カクレオン（普通）「おまけに茶色グミもありますよー♪」

ドルク「おっ！気が利くじゃねえか♪それじゃあ買ったぜ」

ドルクはポケを払った

この世界ではポケが通貨となっている

カクレオン（普通）「まいどありー♪」

シルム「それじゃあ戻ろうか」

ドルク「おう」

ドルク達は買い物を済ませて自分達のギルドへ

……

サメハダ岩

その場所に一つの建物があった

壁はレンガでできていた、それはドルクの顔…ドダイトスの顔の形をしていた、しかも口が開いているようであれが入口だろう、ドルク達は中へと入っていった

中に入るとそこは別世界のようなだった

まず入口付近が1階

1階は広々としていて、それぞれイスと広い木のテーブルがいくつもある

ここは食堂なのだろう、しかもそれぞれお店があった

どれもこれもすごいため、色んなお店が出迎えてくれているようだ

ドルク「帰ったぞ!!」

ドルクが叫ぶすると

????「パー！お帰り」

一匹のポケモンが1階の食堂の地下階段から上がって来た、つぶらなかわいい目に胸に赤いものがついている。かいゆうポケモンのマナフィだ

ドルク「ただいまミネラ」

このマナフィの名はミネラという

5年前ドルク達が閉ざされた海で拾った卵から孵ったポケモンで今はドルクの義理の息子でブレイブのメンバーだ

ミネラ（マナフィ）「ねえねえ！今回はどうだった？」

ドルク「ああ、捕まえたぜ♪」

ミネラ「わあ〜やっぱパパは強いね♪」

こうして見るとドルクがある意味親バカに思えてくる

????「ドルクさん、シルムさん、お帰りなさい」

さらに別の2階の階段から一匹のポケモンが降りて来た、頭は三日月の形のもの、そして周りにはピンクのわっかがついているポケモン、みかづきポケモンのクレセリアだ

ドルク「帰ったぜシムーン」

このクレセリアの名前はシムーン…彼女もブレイブのメンバーだ

シムーン（クレセリア）「今回もお手柄ですね」

シルム「まあオイラ達二人いるからがんばれるよ」

ドルク「シルムいねえとサポートもできねえしな」

ミネラ「でも一人でも十分強いよパパは」

ドルクは時に一人で探検することがある、だがシルムがいるからブレイブは一つ、お互い大切なパートナーであるのだから

ドルク「ああ♪そういえばシムーン、こっちでは何か変わった様子とか異常はなかったか？」

シムーン「いいえ、こちらには異常はありませんでした」

毎回ドルク達は色々と時間や空間の異常などを確認している。過去に2度起きた世界の危機：1度目は星の停止、2度目は空間の歪みの事件があった：だが探検隊ブレイブが2度世界を救った：ドルクとシルム、そしてもう一人のポケモンと共に：それからというものドルク達は二度とこのようなことが起きないように、こうして確認をしている

????「まあ私達もいるんだ、世界だって色々もあるかもしれん」

入口から一匹のポケモンが現れた

胸には青い宝石が埋め込まれていて、4足でさらに水色の透き通る体色のポケモン、時間ポケモンのディアルガだ

ドルク「おっ！ディシアか」

ディシアと呼ばれるディアルガは頷いた

元々彼は闇に一度染まってしまったが、ドルク達のおかげで元のディアルガへと戻った、そしてドルク達は空間の歪みを解決した後、ディアルガ、ディシアと再び戦って仲間にしたのだ

ディシア（ディアルガ）「まあこうして見てくれているドルク達には感謝している、ここまでやってくれるとは、私も時間を司る者としては嬉しいことだ」

ドルク「いや、またそうなるとだめだ：そうなたらまた再び星の停止が起きるのはごめんだ」

二度とこのようなことがないように：：そう思い見ているのだ

ディシア「とりあえず今日の依頼はどうだったのだ？」

ディシアはドルクの今日の依頼を聞きたいらしい

ドルク「捕まえたぜ、まあ俺とシルムにはちょうどいい相手だったぜ」

ドルクもシルムも変わってきた

ドルクは前にも増して強くなり

さらにバトルの腕も磨きがかかる

シルムは臆病といくじなしがなくなり、前よりも積極的がんばっている。さらにはバトルもヒコザルの時と比べて強くなった

今でもドルクをサポートしている

ドルク「さてと、俺達は部屋に行くぜ」

シムーン「食事になったら呼びますので」

ミネラ「ゆっくり休んでねパパ」

ドルクとシルムは自分達の部屋で

……

地下1階

ここにはいくつも部屋がありその階段の向かいにドルクとシルムの部屋があった

窓は一面地平線が見えている、まるでサメハダの口に窓がついたような感じだった

ドルクの部屋の中に入るとでかいベットにさらに大きなイスがある
さらにはテーブルがあり、周りには今まで取ってきた宝がたくさんある

そしてドルクのとなりの部屋がシルムの部屋だ

壁には地図がはってあり、ベットもある、さらに同じく、取ってきた宝がたくさんで二人の部屋はちゃんときれいだった

ドルク「はあゝ」

ドルクはイスに腰掛ける

ドルク「このギルドの親方になって、毎日いいぜゝプクリン親方様と同じギルドの親方になるとはな」

シルム「うん、オイラ達の努力が実って、秘密基地を改造して、ギルドを立てたんだよね」

そう、元はドルク達の秘密基地だった場所、そこを改造してギルドを設立したのだ

ドルクはこのギルドの親方になり、シルムはそのドルクのサポート兼副親方だ

ドルク「まあでも今でもプクリン親方とは同盟とかも結んでるしな」

トレジャータウンにはもう一つのギルドがある

それがプクリンのギルドだ

そこはドルクが探検隊を目指した故郷であり、探検隊の修行をした場所だ

今でもプクリンのギルドには行っているドルクとシルム

いつもお世話になっているプクリン親方に挨拶したり、話したりもしている

そしてギルド同士で同盟を結んでいる

今でもお互いがんばりあっている

シルム「まあ、僕達はプクリンのギルドを卒業してからだしね」

そう、二人はプクリンのギルドを卒業して探検隊として活動してきた

そして世界は二度救われ、今でも平和だ

それでもドルクは親方になってもまだまだ現役の探検家

シルムや他のみんながいたから彼は親方になれた

ギルドのマスターとして

ググウ~~~~~

すると何処からか音がする

ドルク「話してたら腹減ってきたな」

ドルクの腹から音がしたのだ

シルム「あはは♪ドルクはやっぱり大食いで食いしん坊だな」

ドルク「うるせえ／／／／」

ドルクは顔を赤くする

シルム「まあそろそろ食事に行きましょうか」

ドルク「そうだな」

ドルクとシルムは部屋を出て1階の食堂へと向かった

依頼1 ギルド『ブレイブ』（後書き）

秘密基地というかギルド『ブレイブ』は元はドルクとシルムのブレイブの秘密基地を改造して作られました

ちなみにディグダみたい足音とかの反応とかのチェックはしないです

かわりに別の防犯があるので次回かそのぐらいで明かします

ミネラ（マナフィ）「わ〜い♪続編嬉しいな♪」

シムーン（クレセリア）「私達も出ましたね」

まあ二人はもうメンバーだから出てもいいものだよ

他にもメンバーはいるけど

ディシア（ディアルガ）「私までメンバーになるとはな」

入れないと意味ないでしょ

ディシア「まあ悪くはないが時限の塔の管理とかは大丈夫なのか？」

まあドルク達もいるからちゃんとチェックもしてるよ

ディシア「これで私も一安心できるな」

さて今回はまだまだ続く、ギルド『ブレイブ』の全貌などを公開し

ていきます

依頼2 仲間達（前書き）

はい、『ブレイブ』の紹介は続きます

依頼2 仲間達

ドルク達は1階の食堂へのぼってきた

食堂はすいてるが座っている者もいる

シムーン「あつ、ドルクさん、シルムさん、今食事に行こうと思って声をかけに行こうと思ってたところなんです」

ドルク「ちょうどよかったな」

デイシア「まあ私もいるし、後はまだ帰ってこないな」

他にメンバーがいるらしい

すると

????? 「帰ったぞ」

入口から3匹のポケモンが入ってきた

一匹は背中に6つの黄色の小さな玉がついていて、尻尾はジャング
ルで見かける葉っぱのようなもの、腕には2つの鋭い葉、そして2
足でお腹には赤いラインがついている

一匹は妖精のようでピンクの体色だ

そしてもう一匹は足がなく、一つ目のポケモンだ

上から順番にジュカイン、セレビィ、ヨノワールだ

ドルク「おっ！帰ったか相棒」

ドルクは相棒と呼ばれた一匹に言う

????「ああ」

シルム「お帰り、ジュク、レビィ、ゼラス」

シルムは3匹の名前を言う

まずジュクと呼ばれているジュカインは5年前にドルク達と一緒に冒険し、そしてドルクのパートナーである元ジュプトルだ

彼が消えなかったのはドルク達には嬉しいことだった（詳しくは『フォックの短編集』で）

そしてレビィと呼ばれたピンクのセレビィ、このセレビィも未来のポケモンでドルク達を元の世界に戻したのだ、彼女もまた、恋する彼（ジュクの事）と一緒にこの世界に来たのだ、今はその彼ともゴールインしている

そしてゼラスと呼ばれたヨノワールは、かつてドルク達の星の停止を邪魔した者で、ジュク（その時の名前はジュプトル）と共に未来に帰ってきた、そしてジュクと探検してから彼もジュクの言葉などで胸を刻み込まれ、そして彼もまた、この世界に来て、ドルク達にやった罪を償うためにブレイブで探検などとして働いている

ジュク（ジュカイン）「こっちの方もその様子じゃやったみたいだ

な」

レビィ（セレビィ）「さすがブレイブね♪」

ゼラス（ヨノワール）「まあドルク達ならやり遂げられるだろうと思ったがな」

未来から来たのは3匹だけではない

????「ドルク親方！食事を持ってきました！」

ドルク「ごころうさん、1号」

食事を持ってきたのは一匹の小さなポケモン

両目はダイヤモンドをしていて、爪は鋭く、紫の体色でお腹辺りには赤い宝石が埋め込まれている

このポケモンはヤミラミと言って、ゼラスの忠実な部下しんじの一人でドルク達の仲間だ

現在は他のヤミラミ5匹で雑用やギルドの食事など色々とやってくれる

そして同じヤミラミでは言うのは難しいのでドルクはそれぞれの番号で呼んでいる

6匹とも同じヤミラミなので（汗）

すると入口から

???? 「帰ったぜ〜兄貴〜」

入口から一匹のポケモンが入ってきた

両肩には白い宝石が埋め込まれて、薄桃色の体色に目が鋭いポケモンだ

空間ポケモンのパルキアだ

デイシア 「帰ったのか、パルサ」

パルサと呼ばれるパルキアにデイシアが言う

パルサ 「あゝ結構奴らを叩きつぶせていいぜ〜なんとかお尋ね者は逮捕したしな」

ドルク 「それはいいが、やりすぎたるなよ？」

パルサはその言葉で焦り

パルサ 「は！はい！わかってるって兄貴〜」

絶対やっただろうこいつとみんな視線をパルサに向ける

パルサ 「うっ！」

パルサはもはややっただろうというみんなの視線に動きが固まる

元は空間の歪みをドルク達が原因だと思って攻撃したが、ダークラ

イというポケモンにだまされ、怒りでダークライに攻撃してことは収まった。さらにドルク達ブレイブの仲間にもなり、勝負でドルクに負けたためドルクの事を兄貴と呼んでいる、だがパルサは空間を司るものでも怒りっぽく、さらにバカなためかドルクなどみんなに説教される時が多い、もちろん暴れるのもいいが、暴れすぎると被害が大きくなるため、なるべく対策などをしている

ドルク「とりあえず何もやってないなら食事にするぞ！」

とりあえずみんなで食事にした

……

ドルク「あゝうまかった」

ドルクは満足そうに言う

ドルクの周りには皿が多く積まれていた

大食いもさらにパワーアップしたようだ(汗)

シルム「最近のドルクの胃袋が気になるよ(汗)」

ジユク「さすが俺のパートナー(汗)」

元パートナーであるジユクは啞然としていた

本当にあのドルクなのかというのを

ゼラス「(元人間なのかこいつは(汗)もはや人間ではなくなって

きているようだぞ（汗）」

分析するゼラスもさすがにドルクの力量が計り知れなくなっていた

……

ドルク「ふう〜やっぱ温泉はいいな〜♪」

ここは2階、ここは温泉などが入れる浴室や、弟子部屋もある

ちなみにここは崖でほとんど弟子部屋と客室部屋はある、しかし問題は崖がくずれて落ちてしまうというのもある、だがそれも対策はしている

このギルド『ブレイブ』は実は水陸空両用のギルドで、もしものときに備え、船になったり、飛行機になったりなど対策をしている

何処でそんな素材を手にいれているのかは企業秘密だ

シルム「まあこうやって温泉に入るのもいいね」

この温泉はあのコータス長老の温泉からだ

ここからサイコネシスなどで少しずつ組んでいる、温泉じゃなくても普通のお湯もある

そんなこんなで

……

ドルク「あゝいい湯だったぜ♪」

ドルクは満足そうに自分の部屋へ

シルム「それじゃあお休みドルク」

ドルク「ああ」

ドルク達はそれぞれの部屋で寝た

依頼2 仲間達（後書き）

はい、ギルド『ブレイブ』には様々な機能などもついているハイテクな秘密基地になっていま〜す

ドルク「まあ娯楽施設もありって感じだしな」

シルム「ある意味ね（汗）」

ジユク「まあ俺達もだがな（汗）」

レビィ「ホントよね（汗）」

ゼラス「理解不能だ（汗）」

パルサ「兄貴は俺の自慢ツスよ」

壊すお馬鹿が何処にいる（笑）

パルサ「んだと〜!!」

ドルク「だまれ!!」

パルサ「すみません!!」 ↑土下座

ミネラ「まあこんなメンバーだけど」

シムーン「よろしく願いしますね」

次回はあの子が帰ってきます、そしてもう一人：第2の主人公の登場です

依頼3 再会と新たな仲間（前書き）

ついにもう一人の主人公の登場です

ドルク「誰だ？」

それは秘密、さらにあの悪魔亀大魔王の弟子がついに帰ってきます
！では依頼3

ドルク「刻んどきな！」

依頼3 再会と新たな仲間

次の朝

今日もギルド『ブレイブ』は活動をする

するとギルドの外から

シルム「ふう〜今日もスッキリしたな〜」

シルムだ

しかもタオルを首にかけている

実はシルムは海岸までランニングしていたのだ

ドルク「おっ！おかえり〜」

ドルクが入口にいた

シルム「ただいま〜」

すると

ミネラ「ただいま〜」

ミネラが朝の散歩から帰ってきた

ドルク「ミネラもおかえりな♪」

こうして朝はむかえられる

……

ギルド食堂

ドルク「やっぱうめえくな♪」

ドルクはご飯を結構食っていた

朝は人間世界の食い物もある

グミだけでそうなるとだめなので、ちゃんとした食事を用意している

もはやポケモンだけの世界でも発展はしている（汗）

……

ドルク「さてと、今日は何っすかな」

ドルクは自分の部屋で色々と資料などを整理している

シルム「今日は新しい子が来る日だよ」

どうやら新人の子が来るらしい

ドルク「新人？」

シルム「うん、今日新しく入る子は……」

……

一方

????? 「ここがトレジャータウン」

交差点に一匹のポケモンがいた

ラッコのような姿のポケモンで、お腹に貝がついていて、顔にはそばかすがついているポケモン

ラッコポケモンのミジュマルだ

ここでは珍しいポケモンだ

ここの世界ではそれぞれの大陸があり、その大陸によって住むポケモンも違う

このミジュマルは遠いところから来たポケモンだろう

ミジュマル「でもここからどう行けばいいんだろう？」

どうやら迷ったらしい

すると

ミジュマル「ん？あのポケモンに聞いてみるか」

ミジュマルは近くにいたポケモンに聞く

そのポケモンはふさふさの銀の体毛でつぶらな瞳のポケモンだ

ミジュマル「すみませ〜ん！」

????? 「はい？」

そのポケモンはミジュマルに振り向く

ミジュマル「ギルド『ブレイブ』が何処にあるか知りませんか？」

すると

????? 「僕もちょうどそこに行くところですよ、知ってますよ」

ミジュマル「えっ!？」

????? 「それじゃあ行きましようか」

ミジュマルはそのポケモン…イーブイに連れていかれる

色違いの銀イーブイだ

……

銀イーブイ「つきましたよ、ここが師匠のギルドかあ〜」

ミジュマル「えっ? 師匠?」

すると銀イーブイは振り向く

銀イーブイ「あつ、自己紹介がまだでしたね、僕は銀イーブイのソウ」

ミジュマル「銀イーブイのソウさんですか…俺はミジュマルのシェルマルです」

シェルマルと呼ばれたミジュマルはぺこりと頭を下げた

ソウ「はい♪よろしくお願いします、それじゃあ入りましょう」

シェルマル「はい！」

二人はギルドの入口に入る

すると

ピーピー

入口から警戒音になる

ソウ「なんでしょう？」

すると

ピー

確認完了

するとギルドの扉が開く

ソウ「さすが師匠、防犯までやるとは」

シエルマル「入りましょう」

2人は入った

……

ギルド食堂

ソウ「結構広いですね」

シエルマル「そういえば俺、ここのギルドに弟子入りで来たんだけど……」

すると

????「ようこそいらっしゃいました」

そこからシムーンが出てきた

ソウ「シムーンさんお久しぶりです」

シムーン「お久しぶりですソウさん」

シエルマル「えっ!?!」

シエルマルは驚いていた

ソウとシムーンが知り合いだということに驚く

シムーン「それとたしか君が今回弟子入りを志願する子ね？」

シエルマル「は…はい！」

若干緊張しているシエルマル

シムーン「そんなに緊張しなくていいわ、さ、親方のところまで案内するわ」

シムーンにつられてソウとシエルマルはついていく

……

ギルド地下1階

シムーン「ここが親方の部屋です」

シムーン達はドルクがいる部屋の前に

シムーン「さて、シエルマル君」

シエルマル「は、はい！」

シエルマルは呼ばれて焦る

シムーン「くれぐれも親方に失礼のないようにしてください」

シエルマル「わ、わかりました」

シエルマルは冷や汗をかく

でもちよつと疑問が

シエルマル「（なんでソウさんには失礼とかの忠告をしないんだろう？）」

シエルマルだけは忠告したのになぜソウだけは忠告しないのか
後にわかることになる

シムーンは扉に向かって

シムーン「ドルク親方、シムーンです、ソウさんと弟子入りの子を連れてまいりました、入ります」

シムーン達は部屋へと入った

部屋に入ると

ドルク「おおーソウ！よく来たな♪」

ドルクが笑顔で迎える

ソウ「師匠！！」

ソウはドルクのそばへ

ソウ「師匠がたくましくなって、さらに進化するなんてすごいです

♪
」

ソウは目をウルウルとする

ドルク「ハハハッそうかそうか♪」

シエルマルは哑然とした

シエルマル「（なんなんだこの人（汗））」

と、若干引きつった表情をする

ドルク「ん？お前が弟子入りのポケモンか？」

ドルクはシエルマルに気づいて声をかける

シエルマル「ひゃ！？はい！」

と、口をかんだように言う

ドルク「そんなに緊張すんなよ、それじゃあ探検隊キットだ、これからもよろしくな」

シエルマル「は…はい！」

シエルマルは探検隊キットを手に入れた

シエルマルは中身を開けるとそこには不思議な地図とトレジャーバツクと探検隊バツジが入っていた

シエルマル「ありがとうございます!!」

と、シエルマルは頭を下げた

ドルク「ああ、がんばれよ」

すると部屋から

シルム「ドルクって!? ソウ!?」

シルムは入ってきてソウが来たことに驚く

ソウ「シルムさんまで大きくなりましたね!」

シルム「オイラもおかげでね」

と、ソウと話す

すると

シルム「ん? 君がシエルマル君だね」

と、シエルマルに視線を向く

シエルマル「はい! ドルク親方様とシルム副親方様にあこがれて来たんです! よろしくお願いします!」

と、シルムに頭を下げる

シルム「そうだったんだ…オイラ達も照れるな」
／／／／

と、シルムは少し赤くなる

シエルマル「はい！俺、世界を救った二人にあこがれまして」

ドルク「いや、3人だ」

「シェルマル えっ!？」

3
人

実はシエルマルは一人見落としていた

シルム「ドルクとオイラとそこにいるソウと一緒にね」

「シェルマル えっ!？」

ソウ「はい♪僕も参加していましたので」

[illegible]

シエルマルは驚く

ドルク 「そんなに驚くなよ（汗）」

シルム「まあ無理もないよ」

ソウも含めているのだからそりや驚くだろう

ソウ「なのでまた師匠と探検できるのは嬉しいですのでよろしくお
願います」

ドルク「ああ」

こうしてシェルマルの探検隊修行が始まる

……

ギルド食堂

ここにはドルク・シルム・シムーンがいる

そこから

ジュク「来たぞ」

シュク、レビィ、ゼラスが来た

ソウ「あ！あなたは！？」

ソウはヨノワールを睨む

ドルク「いやソウ、もうこいつは味方だ」

ソウ「え？」

ソウは睨むのをやめた

ドルクはソウに色々と説明した

ソウ「そうだったんですか、それでゼラスさんは罪を償うためにヤマミ達と一緒にここで働いているんですね」

ゼラス「ああ、あの時はすまなかった、私も本当は」

ソウ「まあでも師匠がそう言うなら許してあげますよ」

話してる途中で

ミネラ「パー！」

ミネラが来た

ソウ「ミネラ君も!？」

ミネラ「あっ!ソウも久しぶり♪」

ミネラは回る

ソウ「まさかジュプトルさん…いやジユクさんまで」

さらに

ディシア「私もだ」

パルサ「俺もだけだな」

そこからディシアとパルサまで現る

ソウ「みなさん元気ですね」

ドルク「ああ、さて、飯にするか♪」

ソウ「はい♪」

ソウは元気に返事をする

シエルマル「（俺、この先やっていけるかな（汗））」

と、シエルマルは先が不安になる

ここからが本当の始まりだ

依頼3 再会と新たな仲間（後書き）

はい！再びクルペッコさんのところからソウ君が来ました！

ソウ「お久しぶりですフォックさん♪」

そして、もう一人の主人公である

シエルマル「ミジュマルのシエルマルです」

ドルク「もう一人の主人公がシエルマルなんだな」

そうだよ、でもほぼ準主人公かもね

シエルマル「えっ!？」

まあでも出番は出すから安心して

シルム「まあ再びソウと会えるなんてね」

ペッコさんから再び出してほしいという許可をいただいたからソウ君を出したんだ

ドルク「これからもよろしくなソウ♪」

ソウ「はい♪」

依頼4 俺って入るところ間違えたか(泣)byシエルマル(前書き)

シエルマル「なんなんだ！？このタイトル！？」

はい！もう一人の主人公君は黙ってようね(黒)

シエルマル「黒っ！？」

シルム「それじゃあ依頼4」

ドルク「かかってこいやぁ！！」

どこぞのあの人かお前は(汗)

依頼4 俺って入るところ間違えたか(泣) by シェルマル

次の朝

ギルド地下1F 弟子部屋

シエルマル「Z
Z
Z
……」

シエルマルは寝ていたすると

弟子部屋から誰かがそおくと入ってきた

しかもメガホンを持って

「起きろ――――」

.....!

シエルマル「わあー」

! !

L

シエルマルは大きい声により飛び起きた

シエルマル「イツツ……」

天井まで届いたため頭をさする

????「おっ起きたか♪」

その犯人は

シエルマル「お！親方様！？」

なんとドルクだった

ドルク「もう朝だぜシエルマル、そろそろ朝礼が始まるから準備しろ」

シエルマル「え？…あ？…」

シエルマルは混乱する

ドルク「寝ぼけてるのか？俺は行くぜ」

ドルクは弟子部屋から出た

シエルマル「…って！？朝礼！？急がなきゃ！？」

シエルマルは急いで準備をした

…

ギルド食堂

シエルマル「はあはあ…遅れてすみません！！」

シエルマルが来た

シルム「来たねシエルマル」

そこにいたのは親方であるドルクと副親方であるシルム、順番にソウ、ミネラ、シムーン、ジユク、レビィ、ゼラス、ディシア、パルサそして他には

両耳にはピンクの花でふわふわした草の色の体毛のポケモンと両腕には鯨のヒレのようなものがついていて、額が星のようなものがついているポケモンと巨体でつぶらな瞳に大きな両翼で肌色の体色のポケモン

それぞれ順番のシェイミ、ガブリアス、カイリユーのようだ

シルム「それじゃあ朝礼を始めるよ、まずはドルクから何か一言を」

ドルクが前に出る

ドルク「えゝ朝礼を始める前に、今日から俺達の仲間になる奴を紹介だ、シエルマル！」

シエルマル「は、はい！」

シエルマルはぎこちない歩き方でみんなの前に出る

ドルク「えゝ今日から新しく入った、ミジュマルのシエルマルだ。みんな仲良くしてくれ」

すると

パチパチパチ！

みんなから拍手が

シエルマル「（うわぁーこんな歓迎するなんて…でも今日からここで探検隊をやるんだ！）」

それでも意気込むシエルマル

ドルク「じゃあ自己紹介からしてくれ」

シエルマルは前に出る

シエルマル「えー今日からここでお世話になるシエルマルです、みなさんよろしくお願いします！」

と、おじぎをした

パチパチパチ！

みんなから拍手が響いた

シルム「ありがとう、では最後に誓いの言葉！」

全員『ひとつ！仕事は絶対さぼらない！ふたつ！脱走したらおしおきだ！みーっつ！最後まであきらめない！よおーっ！仲間を大切に！いつーっ！みんな笑顔で明るいギルド！』

みんなが誓いの言葉を言う

ダンジョンで倒れたポケモンの救助とそして怪我をしている場合の回復などだ

シエルマル「よろしくお願いします」

と、シエルマルはおじぎをした

グラデル（シェイミ）「そんなにおじぎしないで、ここみんなは優しいポケモン達ばかりですし」

シエルマル「そうなんですか？」

グラデル「はい♪」

と、グラデルは笑顔で言う

さらに

ガブリアス「おめえが新人だな、俺はガブリアスのグロリアルだ」

次にシエルマルに挨拶したのはガブリアスだ

シエルマル「はい！」

と、返事をする

ガブリアス「いい返事だ、その調子でがんばれよ」

と、頭をなでた

見た目は怖いが根は優しい

彼の担当は救助とお尋ね者退治などが担当だ

カイリユー「僕も自己紹介だよ、僕はカイリユーのリュラ、担当はグラデルと同じ救助よ他は届け物などを担当しているんだ、よろしくね♪」

と、カイリユー、リュラがシエルマルに握手した

シエルマル「はい！よろしくお願いします！」

こうして挨拶を済ませ、朝食をとった

……

朝食後

シエルマル「さて、俺はどうすればいいんだろう？」

シルム「シエルマル君」

シルムが声をかけた

シエルマル「シルム副親方」

シルム「こっちだよ、ついてきて」

シルムにつられ、シエルマルはついていく

……

食堂の壁には掲示板がはってあった

そのうちの一つ、額縁が青い掲示板の前に来た

シエルマル「これは？」

シルム「初心者の君にはここの依頼から始めるんだ」

この青い掲示板は依頼掲示板だ

ドルク「おっ、やってるな、俺が選ぶぜ」

シルム「そうだね、じゃあドルク選んで」

ちょうど来たドルクが選んでみせる

シエルマル「どれどれ？」

その依頼内容は

道に迷ってしまった！！どうか助けてください！！

すごく迷いました、どうか助けてください（泣）

依頼主…父（魔王）&ピツケル

場所…暗夜の森

シエルマル「もしかして？ プクリンのギルドの（汗）」

シルム「うん、ペラップなんだけど、ドルクによっていじられキャラになってね（汗）」

[illegible]

シエルマルは驚く

ドルク「まあいいけどな、とりあえずペラ八、今回は俺の新しい弟子の特訓に付き合え」

ペラハ「みたところミジュマルだが大丈夫なのか（汗）」

シルム「とりあえず行こうよ（汗）」

早速ドルク達は暗夜の森へ出発した

依頼5 黒いリザードンとヒトカゲ（前書き）

はい！さらにコラボです

ドルク「誰だ？」

この依頼主の名前、実は…

シルム「まさか（汗）」

はいじゃあそこは本編で、依頼5

シルム「行くぜ！」

依頼5 黒いリザードンとヒトカゲ

暗夜の森

シエルマル「それにしてもここは暗いな」

シルム「まあオイラ達には慣れっこだよ」

ペラ八「結局は私まで（泣）」

4匹は暗夜の森を進んでいた

まずは

ドルク「シエルマル、ケムツソの相手は任せた、俺達はお前の實力を見るからやってみな」

シエルマル「はい！」

シエルマルは前に出る

ケムツソはいとをはくを繰り出す

シエルマル「こんなの！シエルブレード！」

シエルマルはお腹についた貝、ホタチを使って糸を切りつけた

ホタチは鋭い青い剣に具現化して切りつける

シエルマル「水鉄砲！」

今度は水鉄砲でケムツソを攻撃

ケムツソは耐えられず倒れてしまった

ドルク「ホタチか…武器になるんだなそれ」

ホタチはミジュマルという種族にとってはかなり重宝する物だ

シエルマル「まあこれがないと守りもうまく固まりませんし」

ドルク「なるほどな」

ドルクは納得する

シルム「それじゃあ先に進もうか」

ドルク達は先へと進んだ

……

かなり奥まで進んだドルク達

シエルマル「す…すごい……」

シエルマルは啞然とした

なぜなら周囲のポケモンは倒れていたのだ

まず一匹は尻尾に炎を灯して、さらに小さくてお腹はクリーム色のポケモン

もう一匹はそのポケモンと同じく尻尾には炎があり、両翼の翼に黒い体色で龍の顔をしたポケモンだ

それぞれ順番にヒトカゲとリザードンだ

だがこのリザードンは通常はオレンジの体色だが

このリザードンは黒の体色なので色違いのようだ

ドルク達は声をかけた

ドルク「おい！あんたらが助けを出したのか？」

すると

ヒトカゲ「助かったよ！僕達ポケモンにされてここで迷っていたんだ」

シルム「えっ？」

ヒトカゲの言葉にみんな氷つく

だがリザードンだけは氷ついてはいない

ヒトカゲ「あれ？僕なにか悪いこといいました？」

と、ヒトカゲは聞く

ドルク「いや、俺と同じ元人間がいたとは思わなくてな」

ヒトカゲ「いや、こっちの世界に来たときに僕は人間で父さんは魔王なんです(汗)」

シルム「魔王？」

すると黒いリザードンは

リザードン「そう！私は魔王だ」

と、ズビシとポーズを決めた

ヒトカゲ「いや父さん(汗) 僕達ポケモンの世界に来たからって通
用するの(汗)」

と、ヒトカゲはつつこむ

ペラハ「つまりドルクと同じ元人間ってことか…しかも魔王って！
？」

ペラハも驚く

ドルク「とりあえずはギルドに戻るぞ」

そう言ってドルク達は探検隊バッジを取り出して脱出した

……

ギルド『ブレイブ』食堂

シルム「じゃああんた達は父であって魔王で息子であって自称勇者
ってことだね」

ヒトカゲ「はい（泣）」

リザードン「おお！この姿は最高だな♪」

黒いリザードンもとい魔王は喜んでいる

ヒトカゲ「父さん、そこ喜ぶところ（汗）」

息子であるヒトカゲはつつこむ

ドルク「とりあえずまずは名前だな」

彼らは自己紹介した

ヒトカゲ「僕はピッケルっていいいます」

リザードン「私は父（魔王）、本名はテツって名前だ」

ピッケルと名乗るヒトカゲと父（魔王）もといテツと名乗る黒いリ
ザードンはそう言う

ディシア「聞いたことがあるが、ある村で魔王城を立て、昔はかな
り強かったって聞いたことがあるな、後はその息子が勇者ってこと

だ」

ディシアは聞いたことあるみたいなことを言う

シルム「つまりこの2人の事だよねきっと」

そのとおりだ

ドルク「そうか♪まあなんかあんたとは気が合いそうだな♪」

父（魔王）「おお！たしかにあなたみたいな人とも気が合いそうだな♪」

魔王というつながりでドルクと父（魔王）は仲良くなる

シルム「（汗）とりあえずはしばらくはブレイブの仲間ってことにする？」

シエルマル「いいんですか（汗）」

ドルク「OK♪」

ピッケル「よろしくお願いします（汗）」

こうして父（魔王）とピッケルはブレイブの仲間になった

ドルク「とりあえずはよろしくな♪」

父（魔王）「こちらこそドルク君♪」

魔王と悪魔亀大魔王は握手する

ある意味嫌な予感しかない

シエルマルはそう思った（汗）

ホタチ日記

○月×日

俺はギルド『ブレイブ』に入った

ドルク親方とシルム副親方は優しい

でもあの親子、特に黒いリザードンは魔王らしく

この先不安だ（汗）

依頼5 黒いリザードンとヒトカゲ（後書き）

最後のホタチ日記はシェルマル君の日記です

そしてまたこの人達が来ました

父（魔王）（リザードン）「どうも〜魔王で〜す」

ピッケル（ヒトカゲ）「ピッケルです」

バトル部に続いてポケダンにも登場しました、実はドルクとの魔王同盟という感じにしようと考えていましたので登場させました

父（魔王）「父さんパワーは強いぞ〜♪」

ピッケル「誰か止めて（泣）」

今回はそんな父（魔王）とドルクが対決します

ドルク「それはそれは楽しみだな♪」

シルム「どうなることやら（汗）」

依頼6 ドルクVS父(魔王) 親方は強かった(前書き)

はい！大魔王と魔王が対決します

シエルマル「マジですか(汗)」

まあカオスにはなるけどね(黒)

シルム「とりあえずやろうか(汗)」

父(魔王)「それでは依頼6」

ドルク「暴れるぜ！」

からそれぞれ依頼だけでなく、時にトレーニングしないよね」

シルムの場合は、朝のランニングが日課で走っている

ミネラ「今日は僕とリユラ君と一緒に行くね」

リユラ「はい、ミネラ君は僕が面倒みるので」

ジユク「じゃあ俺もトレーニングするか」

レビィ「じゃあ私も」

ゼラス「私は単独で探検してくる」

ソウ「師匠！僕も！」

今回も朝食を食べて、そこからそれぞれ今日の予定を決める

シエルマルの今日の内容はトレーニング

とりあえず食休みしてからやることになった

……

ギルド『ブレイブ』1階トレーニングルーム

トレーニングルームはそれぞれ違ったのがあった

滝があり、瓦が数枚あり、バトルできるフィールドがあったりなどがあった

シエルマル「うわぁ〜すごい」

シルム「こうしないとね、それにシエルマル君もトレーニングするんだよ」

シエルマル「はい！」

と、威勢のいい返事をするシエルマル

ソウ「さすが師匠♪」

ドルク「ありがとな♪」

ソウも喜んでいる

そこに

父（魔王）「お〜すごいな〜」

ピッケル「僕も結局こうなるの（泣）」

父（魔王）とピッケルが現れる

ドルク「おっ！来たか♪ちようどいい、おい！父（魔王）！俺と勝負してくれないか？」

すると

父（魔王）「私は強いぞ〜♪かかってきなさい♪」

と、ファイティングポーズをして構える

シルム「じゃあバトルフィールドに移動しよう」

ドルク達はバトルフィールドに移動した

……

バトルフィールドは草などが生えたフィールドや岩があるフィールド、さらに熱いフィールドや氷のフィールドや水のフィールドなどがある

ドルクと父（魔王）が戦うフィールドは岩のフィールドだ

岩に囲まれたこのフィールドでどう戦うかだ

シルム「それじゃあこれよりドルクVS父（魔王）の試合を開始します、どちらかが戦闘不能になった時点で試合終了、両者準備はいい？」

ドルク「バッチリだ！」

父（魔王）「こっちも♪」

どちらも準備万端のようだ

シェルマル「どんな戦いなんだろう…」

ピッケル「どうなるか（汗）」

ソウ「師匠がそう簡単に負けるはずないですよ」

三人は観客席で二人の試合を見る

シルム「それじゃあバトル開始!!」

シルムの合図とともに試合が始まった

父（魔王）「今こそ私の拳を受けてみろ！父さんの拳は痛いぞパンチ!!」

父（魔王）はドルクに向かってパンチを繰り出そうとしている

ドルク「ロックフェンス！」

すぐさまドルクはロックフェンスで防ごうとするが

ピキピキ

なんとロックフェンスがパンチで壊された

ドルク「何っ!？」

パンチがドルクの顔を直撃

ドルク「ぐおっ!？」

ズザーっとドルクは後ろにすべる

だが

ドルク「今のは効いたぜ」

ニヤリと顔が微笑む

父（魔王）「私の拳に耐えるとは、私もまだまだだな」

と、父（魔王）両手を見て言う

シエルマル「親方すごい!？」

ピッケル「あの父さんのパンチに耐えるなんて、へたすれば小惑星ほど破壊できるパンチなのに」

技名はつつこむが強いのだ

だがドルクも伊達にトレーニングしたわけでもない

シルム「（ドルクは防御など色々な特訓してここまで鍛えたんだ、オイラもラッシュに会った時、色々の特訓したな）」

シルムもまた、ドルクと共にトレーニングしていた

5年前、ジュクに言われたあの言葉

『お前達は最高のコンビだ!!』

そう、あの言葉もあったから彼らはがんばれた

姿は変わっても彼らはいつでも一緒だ

それでもドルクは守るべき者がいるから

信頼できるパートナーがいるから

ドルク「ストーンエッジ！」

周りからとがった岩が現れて父（魔王）に襲い掛かる

父（魔王）「くっ!？」

父（魔王）にとがった岩があたる

リザードンである父（魔王）には効果はばつぐんだ

だが

父（魔王）「さすがはギルドの親方、これでこそバトルは燃えないな♪」

少しボロボロだがまだまだ余裕の表情な父（魔王）

ドルク「それでこそだぜ♪」

ドルクも微笑む

父（魔王）「なら今度は父さんの息は生暖かいぞハリケーン!！」

今度は口から生暖かい風を吐くが

父（魔王） 「あり？」

なぜか炎の風が吐かれた

ドルク 「グランドフェンス！」

ドルクは炎を防いだ

父（魔王） 「なぜこの技が出ないんだ？」

父（魔王） は思っていた技とは違うことに首をかしげる

ドルク 「たぶんポケモンの技になってる奴があるってことじゃないか？」

シルム 「たぶんあの技は熱風じゃない？」

父（魔王） 「！？なんということだ！？」

父（魔王） は重大なミスをおかした

ここはポケモンだけの世界

ポケモンに変わったため、技も違う感じになってしまい発動できない技もあるってことだ

ドルク 「さてと、そろそろいかせてもらうぜ！ハードプラント！！！」

ドルクがそう叫ぶと地面から植物の蔓が現れて父（魔王）に襲い掛

依頼6 ドルクVS父（魔王）親方は強かった（後書き）

やっぱ変わってくると技も影響でるな〜

ドルク「まああのパンチは結構効いたな、あ〜いて〜」

その割にはあまり効いてないように見えるけど？

シルム「まあ防御高いしね」

ドルク「伊達にトレーニングしているんだ、俺もまだまだがんばらないとな」

そうだね

ソウ「やっぱ師匠は強いな〜」

君もだよ（汗）

依頼7 トレーニング（前書き）

はい、今回はトレーニングです

ドルク「続きだぜ」

シルム「それじゃあ依頼7」

父（魔王）「燃えるぞ」

依頼7 トレーニング

バトルの後ドルク達は休憩をした

まず色々用意されているのはこっちではありえない物が（汗）

それは

シルム「スポーツドリンクっていいな」

ドルク「ごくごく、ぷはあーやっぱこうでないとな♪」

ソウ「へえー色々あるんですね師匠のギルドは」

そう、トレーニングにはかかせないスポーツドリンクがあるのだ

それぞれのポケモンのグミを使ったスポーツドリンクでドルクは若草ドリンク、シルムは赤ドリンクだ

作っているのはゼラスの忠実な部下であるヤミラミ達だ

最近になってドルク達は人間達の世界に行ったりもあり、そこで色々調達もするのだ

シエルマル「でも捕まるってこともあるんじゃないですか？」

そう、ポケモンの姿なので捕まることもありそうなのだが

レヴィ「ドルクはあれでも強いから大丈夫よ♪」

ジユク「俺達もな、それじゃあ特訓するか」

ジユクもトレーニングルームへ

シエルマル「(うわぁ俺どうしよう?!)」

シエルマルはパニックに陥った

ピッケル「僕すごく不安だよ(泣)」

ピッケルも涙目だった(汗)

……

シルム「ほっ!はっ!」

シルムは華麗にステップを踏んでリズムよくボクシングマシンのパンチを避ける

ゴウカザルという種族は主に攻撃と特攻と素早さが高い種族だ、シルムはその素早さをいかしてこうやってリズムよく避ける

シエルマル「シルム副親方はすごいな、リズムよく避けてる」

ソウ「しかも避けるのうまいですね、さらに素早いですから」

シルムは避けながらボクシングマシンにパンチを繰り返す、隙を見て攻撃を加えているようだ

ピッケル「すごいな、僕はあまりできないけど（汗）」

自身があまりないピッケルは言う

シルム「これでとどめ！」

シルムはこれでもかとボクシングマシンにパンチした

するとボクシングマシンは煙をあげてだらりとする

シルム「ふう〜」

シルムは汗をぬぐう

ジユク「シルム、タオルだ」

ジユクはシルムに向かってタオルを投げた

シルム「ありがとう」

シルムはタオルを受け取って汗を拭いた

すると

ドカーーーーーーン！！

シェルマル「なっ！？なんだ！？」

何処からか爆発音が聞こえる

シルム「ああ、たぶんドルクの方かな、ちょっと様子を見てみよう」

ということでシルム達はドルクの方へと向かう

……

ドルク「ふう〜まだまだだな俺も」

ドルクの目の前には

パルサ「ピクピク」

すごくボロボロになっているおバカなパルキアの姿が

実は組み手をドルクはしていたのだ

ドダイトスという種族は主に攻撃と防御が高い種族で、素早さや特攻などはあまり期待できないが、ドルクの場合は攻撃と特攻そして防御や特防などが異常に高いためかエナジーバスターなどの特殊攻撃が強い、しかも相手はパルキアであるパルサ、伝説のポケモン相手に組み手をするのは逆に自分がやられることにもなる

だがドルクの場合は大食いやグミの効果もあってかあまり効いていないのだ、このバカキアにもだ

シルム「うわぁ〜やっぱりこうなるか（汗）」

ソウ「パルサさんがやられていますね」

依頼7 トレーニング（後書き）

ある意味チートなトレーニングでした

シルム「ここまでやるドルクもある意味すごいけどね（汗）」

ドルク「いや、俺もまだまだだ」

ソウ「師匠はすごいですよ♪さすがです♪」

まあ君もドルクの弟子だしね（汗）

シェルマル「俺、ついてこれるのかな（汗）」

大丈夫、君もがんばればね

ドルク「作者？次回は？」

次回はねーとりあえずはあの場所である種族同士の争いになります

シルム「争い？」

たぶんどルク達も一度は合ったことがあるよ

依頼8 三つ巴!?! エレキ平原の戦い (前書き)

スツキリした〜♪↑休んだためスツキリ

ドルク「おっしゃあ! 今回はなんだ作者?」

今回はあのエレキ平原のあの戦いが時・闇も加えた感じになります

シルム「時とか闇とかなんなんだよ(汗)」

それは自分達で確認しろ、では依頼8

シルム「どうぞ」

依頼8 三つ巴!?! エレキ平原の戦い

次の朝……

シエルマル「おはようございます」

シエルマルはみんなに挨拶した

そんなこんなで今回も朝礼が始まる

……

ドルク「もぐもぐ、それで今回の依頼は？」

シルム「今回はなんかエレキ平原の最奥部で縄張り争いが酷くてやばいみたいなんだ」

ゼラス「たしかここは前にドルク達があったところだったな」

5年前、ドルク達がマリルとルリリの兄妹から水のフロートを取り戻す依頼を受けて以来だ

あそこは電気タイプのポケモンが多く生息している

だが最奥部には縄張りをもっているポケモン達もいた

シエルマル「エレキ平原ですか…俺じゃ無理がありますね」

父（魔王）「なら私も行こう♪」

ピッケル「僕も不安だけど行くよ（汗）」

本当は4匹なのだがジユクとペラップ、そして父（魔王）とピッケルは別々らしい

ジユク「で？シルム、縄張り争いをしているのは誰なんだ？」

シルム「うん、オイラ達が5年前に戦ったライボルト達とルクシオ達を連れたレントラーがリーダーのレントラー軍団と、こっちではめずらしいゼブライカというポケモンがリーダーのゼブライカ軍団らしいんだ」

ドルク「エレキ平原は電気タイプのポケモンにとってはいいがここまで来ると他の電気タイプのポケモンの被害が拡大されると困るしな」

そう、他の電気タイプのポケモンにも影響が出てしまうのだ
なので

ドルク「準備して行くぞ！」

他のみんなは頷いて準備をした

……

エレキ平原入口

ペラ八「一体なんで私まで巻き込む!! (怒)」

早速ペラ八のキレツツコミが炸裂した

ドルク「うるせえな、どうせ暇だろうと思ってプクリン親方に許可をいただいたんだ、文句言うんじゃないよ」

ペラ八「だからって私も色々仕事残っているんだけど!! ってか私はなんだ!! ああ!! どうせ私を身代わりのペラ八ガードとかそんなことするつもりだろ!! (激怒)」

激怒するペラ八

ドルク「は〜いとにかく行くぞ」

ペラ八「って聞いてねえし!!」

ペラ八のキレツツコミはスルーしてドルク達は別々の組で入っていた

……

エレキ平原中間地点

シエルマル「はあはあ…きつい」

シエルマルの息が荒くなる

相当きついのだろう

ドルク「俺達はなれてるから平気だけどな」

シルム「オイラ達のは慣れっこだし」

ソウ「シエルマル君もなればなんとかありますよ」

ドルク、ソウ、シルムはなれているため平然としている。三人はベテランだ、ソウは長く離れていたが、まだまだがんばれるようだ

シエルマル「すごいな〜親方達、かなわな〜（汗）」

シエルマルも三人の凄さを実感した

ドルク「よっしゃ、行くぜ」

4人は最奥部へ

……

エレキ平原最奥部

ジュク「お前達もついたか」

ソウ「ジュクさん」

ドルク「こっちも今着いたようだな」

ジュク達と合流

ジュク「見てみろ」

ドルク達は視線を向く

するとそこには

????? 「ここは私の縄張りだ！邪魔をするな！！」

黄色の髪を立てたポケモンが相手の二匹を睨みつける

????? 「何を言う！ここは我々の縄張りだ！！」

ピンとした黒い髪に目が鋭いポケモンが同じように睨みつける

????? 「なんだと！ここは俺達シママ一族のものだ！！」

しまうまみたいなポケモンが二匹を睨む

それぞれ順番にライボルト、レントラー、ゼブライカだ

ドルク 「これはやべえな」

シェルマル 「これをどうやって止めろというんですか！？」

ペラ八 「つかものすごく怖いんですけど！？どう止めろというんだ！！？」

パニくるシェルマル&ペラ八

ドルク 「ここは俺が行くぜ」

ドルクが歩き出す

シルム「ドルク、大丈夫かな？」

ジユク「あいつは地面タイプを持っているからな」

そう、地面タイプは電気タイプには通用しない

だがどうなのかわからない

ドルク「おい、テメェら何やってんだ？」

すると3匹がドルクを睨みつける

ライボルト「邪魔するな!!！」

ライボルトが雷をドルクに向けて繰り出す

レントラー「貴様などに関係ない!!！」

レントラーもドルクに攻撃

ゼブライカ「そうだ!! 邪魔するな!!！」

ゼブライカもドルクに攻撃

3匹の攻撃がドルクに直撃して爆発

あたりが煙に包まれる

依頼9 縄張りは誰の者? (前書き)

はい、この三つ巴を解決します

ドルク「俺達でやってやるぜ」

ペラ八「お前がやるとすごく不安だよ!!」
(怒)

依頼9 縄張りは誰の者？

シルム「大丈夫？（汗）」

ライボルト「すまない（泣）」

ドルクの攻撃によりダメージを受けた一族の者達は治療のためドルク達が治している

ドルク「これで大丈夫だな」

ドルクは回復魔法のケアルガで回復させる

ドルクはバンバン魔法使うが色々魔力の事なども考えないといけない

シルムは補助系統の魔法は覚えているが回復魔法はあまり覚えていない

父（魔王）「私も回復といきたいな」

だが角は抜けないためか使えないがとりあえず回復魔法を唱えたが

ゼブライカ「こんなのが魔法か！！（怒）」

父（魔王）の回復魔法の実験台にされたゼブライカはさらにダメージを受ける

ライボルト「だが私は一度このドルク殿と戦った、二度目も負ける
とは、私もまだまだだ、なら私はここをあきらめよう」

なんとライボルトはあきらめてしまった

レントラー「我もたしかにそうだ、この縄張りはブレイブの所有と
いうのも」

ゼブライカ「ありだな」

レントラーとゼブライカも言う

シルム「でもそうしてもね（汗）」

ドルク「そこだな：そうだ！なあなあお前ら」

ドルクが3匹に提案した

ドルク「なら俺達ブレイブの仲間になればいいんじゃないか？それ
なら文句ねえな」

ライボルト「仲間か：なら私はお前達に負けたのなら仲間になろう」

ラクライ達「はい！」

ライボルト達が仲間になった

レントラー「なら我：いや俺も仲間になろう」

ルクシオ達「なってやろう」

依頼9 縄張りは誰の者？（後書き）

ソウ「仲間になってよかったです」

ここから3匹のリーダー達も登場します

ドルク「次回ぐらいには名前がつくしな」

シエルマル「なんだかあつけないように思うような（汗）」

気にするな、さてお知らせです。次の話からコラボなどしたいのですが、そこで依頼募集です。

こっちの世界に来てほしいなど依頼は自由です。このようになります

110

・依頼内容

・詳細

・依頼主

・報酬（金額はポケ単位で別の世界で変えます）

という風です。メッセージもしくはここの感想でお願いします

ドルク「依頼待ってるぜ♪」

依頼10 再会! 黄金の間探し (前書き)

はい! 今回からコラボ入ります!

ドルク「で? 最初は誰なんだ?」

今回はあの二匹の登場だよ

シルム「二匹?」

二人が知ってる人物、では依頼10!

ドルク「行くぜ!」

依頼10 再会!黄金の間探し

ここはギルド『ブレイブ』

今日も彼らはがんばっていた

シルム「1! 2!」

ピッ!ピッ!

シルム「1! 2!」

ピッ!ピッ!

ドルク、シルムはシェルマルとピツケルとソウと共にランニングをしていた

シルムは掛け声をかけて走り、ドルクはホイッスルをくわえて吹いて走っている

シェルマル「ぜえ…ぜえ…」

ピツケル「きついよ(泣)」

ソウ「さすが師匠とシルムさん、僕もがんばらないと」

シルム「ほら!二人ともしっかり! 1! 2!」

ピッ!ピッ!

……

シエルマル「疲れた〜」

ピツケル「僕も…」

シエルマルとピツケルは床に大の字で倒れた

ドルク「まだまだだな〜」

ソウ「まあなれてきたのでまだまだ余裕ですよ♪」

対してドルク、シルム、ソウはまだまだ余裕のようだった

シルム「それじゃあ二人は休憩してて、ドルク、オイラ達は依頼の方を」

ドルク「そうだな、ソウは二人を休ませてから休憩してくれ、その後二人と共に次の特訓をしろといってくれ」

ソウ「はい！師匠もお気をつけて」

ソウは二人を連れてギルドの中へ

ドルク「俺達も依頼の方」

シルム「行こうぜ」

ドルクとシルムもギルドの中へ

……

ギルド食堂

ドルク「さて、依頼っと」

ドルクとシルムは早速依頼を探す

1階のギルド食堂は探検隊の憩いの場でもあり、様々な揭示板があるため、依頼はここで受けることになる

すると

シムーン「ドルクさん！シルムさん！」

シムーンが来た

ドルク「シムーン、どうした？」

シムーン「二人宛に依頼ですよ」

シルム「依頼？」

ドルクは自分達宛の依頼を受け取った

その依頼内容は

シルム「黄金の間か…」

ドルク「場所は…隠された遺跡…ん？」

するとドルクは何かに気づいた

ドルク「こ、これは!？」

シルム「依頼主が!？」

ドルクとシルムが驚いた

その依頼主が

ドルク「アレンと…ガガリじゃねえか!？」

シルム「あの二人が来るなんて」

すると見ていたシムーンが二人に問いたたす

シムーン「アレンさんとガガリって誰ですか？」

ドルク「ああ、アレンはリオルの早でガガリはダークライなんだがこっちとは別の世界のダークライだ、敵じゃねえよ」

シムーン「別の世界にもダークライっているんですね」

世界はどうだろうとダークライはいい奴や悪い奴もいる

最も5年前にドルク達が倒したダークライはパルサが時空ホールに攻撃したためダークライ自体の行方も知らない

シルム「シムーンは知らないと思うけど、オイラ達の世界とは違っていい人なんだガガリさんは」

ドルク「シムーンはまだ仕事残ってるだろ？とりあえず後は俺達に任せてくれ」

シムーン「わかりました、それでは」

シムーンは別の仕事があるため去った

ドルク「行くか、隠された遺跡に」

ドルクとシルムは隠された遺跡へと向かった

……

隠された遺跡入口

そこに2匹のポケモンがいた

一人は大きな目に、黒いたれている耳、そして小柄な体型の水色の体色のポケモン、もう一匹は白い髪に黒い体色、そして首には赤いアクセサリのようなものがついているポケモン

水色のポケモンはリオル、黒いポケモンはダークライだ

リオル「先生ここですね、ドルク達がいる世界のは」

ダークライ「ああ、どうやらそうだな…それにしても黄金の間の依頼なんてシャドーで依頼してもいいが」

この二人こそ依頼主の二人だ、リオルのアレンとダークライのガガリだ

アレンは一見リオルで男に見えるのだが、彼女は♀ポケだ、そしてカガリというダークライと共にシャドーという組織で働いている

実はこの二人はドルク達に会っている（詳しくは爆炎爆雷のアレン！！にて）

なので二人の事は知っているのだ

そこに

ドルク「久しぶりだな！アレン！カガリ！」

アレン「ドルクさん！」

シルム「久しぶり！」

アレンはドルクとシルムの元へ

アレン「うわぁー見ないうちに立派になってる！」

ドルク「まあ進化してな」

シルム「オイラ達もあの修行のおかげが強くなったよ」

ドルクとシルムは自慢する

カガリ「たしかに、進化前は強い感じの波動もあったが、それ以上に強くなってるな…さすがブレイブだ」

カガリがよってくる

ドルク「ああ、シャドーも悪い組織でもないようだしな」

シルム「それより黄金の間の依頼だったね？」

アレン「うん♪先生も探検楽しみにしてたんだよ♪」

カガリ「そうだ♪楽しみだな♪」

二人は嬉しくなる

特にカガリが一番嬉しいようだ（汗）

ドルク「そんじゃ行こうぜ」

アレン「よっしゃ！」

シルム「ダンジョンは強いポケモンいるから油断しないでね」

カガリ「俺を舐めるなよ、これでも強いからな」

そんなこんなで四人は隠された遺跡に入っていた

依頼10 再会!黄金の間探し(後書き)

はい!『爆炎爆雷のアレン!!』からリオルのアレンちゃんとダー
クライのカガリさんが来てくれました!

アレン「私はリオルのアレンだよ♪ちなみに早だからそこんところしく!」

カガリ「カガリだよ♪」

カガリさん嬉しそうですね(汗)

カガリ「1回探検したかったんだよな〜俺♪」

そうですか(汗)

アレン「あ〜次回が待ちきれないよ〜♪」

まあ待ってね(汗)

ドルク「嬉しいな、アレン達と探検できてな」

シルム「どうなるか楽しみだよ」

依頼11 黄金の間とアレンの召喚龍達（前書き）

ドルク「ん？このタイトルは？」

今回で黄金の間&さらにアレンちゃんの2匹のポケモンが登場だよ、
それじゃあ依頼11

アレン「オスッ！」

依頼11 黄金の間とアレンの召喚龍達

隠された遺跡10F

ドルク「エナジーバスター!!」

ドルクがエナジーバスターを放つ

アレン「きあいだま!」

アレンはきあいだまで敵ポケモンを倒す

シルム「シルムシュート!」

シルムは炎の弾を作って、左足で蹴りとばし、さらに手で炎の弾を作って相手に向かって投げ、高速回転で上に上昇して炎の弾をシュートして放った

カガリ「すごいな…あのナエトルとヒコザルとは思えないな(汗)」

カガリは二人の成長に咂然としていた

……

ドルク「なんとかなったな」

アレン「すげえ!ドルク先輩とシルム先輩!」

アレンは♀と思えない言葉をした

ほとんどの敵がドルクとシルムとアレンによって

カガリ「俺の出番（泣）」

カガリは涙目になる（汗）

ドルク「とりあえず降りるぞ」

ドルク達は次の階へと降りた

……

降りた階へ来たドルク、そこは黄金に輝いている部屋だった

アレン「すげえ！ここが黄金の間！」

カガリ「ほとんど黄金だな」

シルム「さて…ひきよせ玉！」

シルムはトレジャーバックからひきよせ玉を取り出して使った

すると何処からか宝箱が2つひきよせられた

黄金の間には水路があり、行けない、だが不思議な玉などを使えばなんとかなる

ドルク「とりあえず持って行って鑑定するか」

アレン「じゃあここから脱出しよう♪」

カガリ「ちょっと待て」

ここでカガリが待ったをかける

カガリ「こっちではダークライは敵とかだろう？俺は大丈夫なのか？」

そう、カガリ自体はダークライという種族だ、どうなるかわからない

ドルク「それなら事前に俺の仲間達が伝えてある、安心しろ」

どうやら事前に依頼で行く前にトレジャータウン周辺などで伝えてはある

カガリ「そうか…それじゃあギルドへ行くか」

ドルク達は頷いて探検隊バッジをかかげてダンジョンを脱出した

……

カガリ「ふう〜どうやらなんとかなったな」

カガリは安堵の表情をする

事前に伝えたため、敵でないことはなんとかなった

アレン「でも先生♪こうして埋蔵金なども手に入れましたし♪」

アレンが持っているのは先程ネイティオの鑑定で手に入れた宝箱の中身だ

中身は黄金のリングと埋蔵金だ

アレンはすごく喜んでいた

アレン「これで遊んでくらせそうですね先生♪」

カガリ「そうだな♪」

不安もなくカガリは笑顔になる

アレン「あつ、そうだ、これ報酬だよ♪」

ドルクとシルムはフォレストリングとごうかのマフラーをもらった

これはドダイトスとゴウカザル専用の道具だ

ドルク「ありがとな♪早速つけてもらうぜ」

ドルクとシルムは早速道具をつけてみる

シルム「うわぁーマフラーすごくいい!」

ドルク「どうだ?」

アレン「うん♪すごく似合う!」

ドルク達には好評だ

シムーン「それにしてもこっちの方はいい人なんですね」

シムーンは元々ダークライと対となす者だ

少し警戒はしているが

カガリ「まあ無理ないか、俺は種族的にもな」

種族の壁は超えられるものかどうかだ

後は信じることだけ

アレン「どうせだし、このまましばらくはここに居ていい？ドルク先輩？」

アレンはこのまましばらく『ブレイブ』に居たいらしい

ドルク「ああ、かまわねえよ」

ソウ「それにしても世界によって違うんですね」

シエルマル「いいダークライや悪いダークライっているんですね」

デイシア「たしかに、世界は広いな」

パルサ「なんかこいつを信用できないんだけどよ」

それぞれがカガリに対してだが、パルサはだまされたことで疑っている感じだ

ドルク「とりあえず食事にするか、黄金のリングはたくさん持つて
るからな」

アレン「えっ!?!それって?」

もちろん黄金の間はアレン達だけでなく、他にも色々とだ

ドルク「とりあえず腹減ったしな」

アレン「じゃああの二匹を呼び出さないと!」

アレンは咄嗟とつぱに白くて丸い石と黒くて丸い石を取り出した

すると二つの石は光って、周りから白いものと黒いものが包まれる

石は姿を変えて2匹のポケモンになった

一匹は純白に染まり、尻尾がターボエンジンのようなもので目が青
い龍

もう一匹は黒に染まった体色に白いポケモンと同じくターボエンジ
ンのようなものがついている、さらに目は赤くなっている龍だ

白いポケモンはくようポケモンのレシラム、黒いポケモンはこく
いんポケモンのゼクロムだ

ソウ「えっ!?!」

シムーン「これは!?!」

ミネラ「すごい!？」

ピッケル「なんなんだ!？」

シエルマル「レ：レシラムとゼクロム!？」

レシラム『お久しぶりですねドルク様にシルム様』

レシラムはドルクとシルムに敬語で話す

ゼクロム『久しぶりじゃけん!ドルクにシルム!』

ゼクロムは訛った感じで話す

ドルク「久しぶりだな炎丸、雷吉」

説明しよう

この二匹はアレンの召喚、つまりアレンのポケモンであるのだ

カガリも召喚は使えるがここではディシアやパルサと同じポケモンがいるため召喚はしない

レシラムの方は炎丸と言う名前だ

ゼクロムの方は雷吉と言う名前だ

炎丸『おや、結構広いですね』

雷吉『結構広いけん、俺結構気に入ったわ』

二匹のイッシュの伝説がそう言う

まあ伝説などでも入れるスペースにはなっている

ソウ「レシラムにゼクロムですか…すごいですね」

ドルク「まああいつらはアレンの仲間だ♪それじゃあ夕食にしようぜ」

こうしてアレン達はしばらく、『ブレイブ』に滞在することに

依頼11 黄金の間とアレンの召喚龍達（後書き）

はい！アレンちゃんの召喚ポケモンの二匹が登場しました！

ゼクロム
雷吉『俺はゼクロムの雷吉じゃ、よろしくな♪』

レシラム
炎丸『私はアレン様の召喚ポケモン、レシラムの炎丸と申します』

来てしまったというか雷吉君の訛り難しいな（汗）

雷吉『そうか？俺はこれがいいじゃけん』

炎丸『たしかにフォック様には難しいものですね』

まあなんとかできるようにがんばってみるから

アレン『おいしい♪』↑夕食を食っている

ドルク『うまいだろ♪』

さて、今回はあの方が登場です

ソウ『誰なんですか？』

俺も知っている人で…実は…っと次回でわかります

カガリ『気になるな〜』

依頼12 ハチャメチャな作者登場！（前書き）

ドルク「ん？なんだこのタイトル？」

今回はとある方が登場します

シルム「まさか作者さんが登場するとか？」

んなわけないだろ（汗）俺とは別の作者さんだよ、しかもポケモンの姿で登場+ドルク達は知っているはずだよ

ドルク「あいつだな」

そしてシェルマル&ピッケルに悲劇が（汗）では依頼12

ドルク「かかってこい！！」

依頼12 ハチャメチャな作者登場！

次の朝

今日も朝礼をやって朝食だ

ドルク「ガツガツ」

ドルクは相変わらず量が多い

シエルマル「すごいな〜親方（汗）」

父（魔王）「さすがドルク君だ！ピッケル！お前も見習え！」

ピッケル「いやこんなに食えないって（汗）」

ピッケルが無理があるのでつつこんだ

ドルク「ガツガツ…ああそういえば今日からピッケルとシエルマルを指導してくれる奴が来るんだが」

ソウ「指導？」

ソウは頭をかしげる

シルム「どうやら直接こっちに来るらしくて、オイラ達やピッケル君の事知ってるみたい」

ピッケル「僕を知ってる？」

ピッケルは頭をかしげる

知り合いなんていたのか？ピッケルはわからなくなる

アレン「ねえ？その人ってどんな人？」

アレンは気になって質問する

ドルク「そうだな：俺と同じ腹黒な奴だ」

カガリ「なんか怖いな（汗）」

ダークライなのになぜか不安がるカガリ

一体誰なのか？

その頃

????「ここがトレジャータウンか」

一匹のポケモンが交差点の看板を見ていた

犬のような顔立ち、腕にはトゲの突起がついていた、さらに腰には銃、背中には剣を持っていた。剣は青い透き通った色をしている

リオルの進化系、波動ポケモンのルカリオだ、武器を持っているルカリオはここではめずらしい

「?????」「さてと!ギルド『ブレイブ』はあっちだな♪」

笑顔でルカリオはギルド『ブレイブ』の方向へと向かう

……

その頃こちらは夕食を食べ終えていた

ドルク「ふう〜食った食った♪」

ドルクは腹をさする

まあそれでもヤセの大食いなのだから

ミネラ「それでその人はパパの知り合いって事?」

ドルク「ああ」

シムーン「どんな方なのでしょうね」

グラデル「気になりますね」

それぞれ気になるようだ

すると

ビービー!

何処かから警戒音になる

数秒だがなんとかおさまる

ドルク「来たか」

すると入口から

ルカリオ「おお！ここがギルド『ブレイブ』なんだな！」

来たのはルカリオだ

腰には銃、背中には剣を背負っていた

シムーン「ようこそギルド『ブレイブ』へ」

シムーンがルカリオに挨拶する

ルカリオ「ああ！それでドルクはいる？」

ドルク「いるぜ」

ドルクがルカリオの前へ

ルカリオ「おお！ドルクじゃん！」

ドルク「そういうお前はクラウドじゃねえか！」

ドルクがクラウドと呼ばれたルカリオに言う

このルカリオ、実は作者だ

依頼12 ハチャメチャな作者登場！（後書き）

はい！なんと作者であるクロウドさんが登場しました（汗）

シエルマル「えっ！？作者さん！？」

いやゝ本人がシエルマルとピッケル君を鍛えたいと言ってきたから
まあ面白そうなので来てもらったってわけ♪

シエルマル「俺すごく嫌な予感しかないよ（泣）」

ドルク「とりあえずはクロウドも来たな」

次回はそんなクロウドさんがシエルマルとピッケル君を鍛えさせます

シエルマル・ピッケル「いやあああああああああああああああ
あああああああああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!?（泣）」

依頼13 暴走大特訓!! その1 (前書き)

はい!今回はついにシエルマル&ピッケル君のためにクラウドさんがすごい特訓メニューを考えてくれました

シエルマル「嫌な予感しかない(汗)」

ピッケル「もう嫌(泣)」

はいはい、せっかくなんだからがんばろ!それでは依頼13

クラウド「暴れるぜ!!」

依頼13 暴走大特訓!! その1

クラウド「うまいなこれ!」

ただいまクラウドは食事をしていた

ちょうど朝食の途中だったので

ドルク「ありがとな、ヤミラミ達などが作っているんな」

ドルク達はすでに食べ終えている

……

数時間後

クラウド「よっしゃあ!! 早速特訓じゃあああああああああああああ
あああああああああああああああああああ!!」

気合十分に叫ぶクラウド

シエルマル「(すごく嫌なんだけど(汗))」

ピッケル「(殺される(脅))」

二人はすごく嫌な予感がして顔が青ざめる

ドルク「さて、俺もやるか」

シエルマル・ピッケル「（黒っ！？ってかすごくやばいし！？）」

シエルマルとピッケルは心の中でつつこんだ

すると

???? 「ん？何やってんだお前達？」

そこにペラ八が現れた

ドルク「おっ！ちょうどよかった♪ペラ八、お前も特訓付き合え」

ペラ八「特訓？」

クラウド「俺のすげえ特訓をな♪お前強制参加な♪」

ペラ八「ちょっと待て！？」

ここでペラ八がつっこむ

ペラ八「まだ私参加するとかいってないし！？しかも何！？あんた誰よ！？しかも強制参加って！？」

クラウド「うるせえな鳥（黒怒）焼き鳥にして食うぞゴラァ！（黒怒）」

クラウドはすごい形相でペラ八を睨んで怒る

ペラ八「こわっ！？ってか結局私も参加させられるのか…でも何の

特訓するんだ？」

クラウド「2時間全力疾走♪（黒）」

すごい笑顔で言うクラウド

ペラ八「ちょっと待て!!？」

ペラ八が待ったをかける

ペラ八「全力疾走って疲れるわ!! ってかそれ以前に特訓じゃない
だろ!？」

ペラ八のキレツツコミが炸裂

クラウド「うるせえよ!（黒怒）波動弾!!」

クラウドは波動弾を数発ペラ八に放つ

ペラ八「ごべばっ!？」

数メートルぶっ飛ばされてペラ八は星となった

クラウド「全力で走ってなかったら…波動弾100発とロケットラ
ンチャーとアルテマ食らわすからな…あ、ドルクとシルムとかは別
な…」

ドルク「ちなみにソウもな」

ソウ「僕にそれ食らわせたらどうなるかわかりますよね?（黒）」

すごい笑顔になってない顔をするソウ

クラウド「こわっ!?! わかったから怖い顔するな」

とりあえずソウの機嫌をなんとかなおした

シエルマル・ピッケル「(ずりい!!?)」

クラウド「そんじゃ始めるぞ!!」

こうして2時間全力疾走が始まった

……

シエルマル「ぜえ…ぜえ…」

ピッケル「無理だよ(泣)」

クラウド「オラァ! テメェら二人走れ!! (黒怒)」

クラウドの厳しい罵声でシエルマルとピッケルは汗をたらしながら走る

ここまで1時間

ただいま空の頂をのぼっている

大体の敵はほぼドルクやシルム、さらにジュクやソウが倒している。もちろんクラウドも波動弾や銃や剣などで次々と倒していく

シエルマル「(なんでこうなるの!!?)」

ピッケル「(もう嫌(泣))」

シエルマルとピッケルは心の中で嫌なことを叫ぶ

その後

ペラハ「はあ…はあ…もうだめ…」

ペラハはフラフラしながらのぼる

クラウド「オラオラ!のぼりやがれペラハ!」

ペラハ「ペラップだ…」

疲れてツツコミする気力がない

……

2時間後

クラウド「はいお疲れ様でした!!」

ドルク「ふう〜いい汗かいたぜ♪」

シルム「きついけどいい特訓だよオイラ達には」

ジユク「フン!このぐらいでくたばるか」

ソウ「きつかったですが、師匠もいたからよかったです♪」

ドルク、シルム、ジユク、ソウはなんともなく汗をかいていてただいまスポーツドリンクを飲んでいる

一方

シエルマル「……」

ピッケル「……」

ペラハ「……」

こちらの三人は屍状態だ（汗）

クラウド「よし！今度は100キロのおもりで全力疾走やるぜ！！」

今度は全力疾走、100キロおもりバージョンをやるらしい

シルム「その前に休憩したほうがいいよ」

ドルク「そうだな、クラウド、ひとまずは休憩してからだ」

クラウド「わかった！」

とりあえず休憩することに

依頼14 暴走大特訓!! その2 (前書き)

はい! クロウドさんの暴走大特訓の続きです♪

ペラ八・シエルマル・ピツケル「鬼!! 悪魔!! (泣)」

はいはい、さぼるとクロウドさんのお死おきが待ってるから落ち着いて

シルム「お死おきって(汗)」

それじゃあ依頼14

クロウド「燃えるぜ!!」

依頼14 暴走大特訓!! その2

休憩した後

クラウド「よし!早速走るぞ!」

今度はおもりをつけて走るようだ

シエルマル・ピッケル・ペラ八「おもっ!」

シエルマル、ピッケル、ペラ八はなぜか200キロのおもりをつけていた

クラウド「ちなみにお前ら三人は200キロおもりだからな(黒)」

三人「ふざけるなああああああああああああああああ
あああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
(激怒)」

三人が見事なシンクロツツコミをした

ドルク「100じゃ軽いな、俺は300ぐらい頼む」

シルム「100ぐらいなら大丈夫かな」

ジュク「俺もだな」

ソウ「僕もです」

ドルクは300キロ、シルム、ジユク、ソウなどは100キロだ
ちなみに

アレン「暇だから私も♪」

アレンも参加でアレンは50キロのおもりを

カガリ「俺は100だな」

カガリは100のおもりを背負っている

クラウド「そういえば初めての奴らだな」

クラウドは気になっていた

ドルク「ああ、こいつらはシャドーという組織に入っていて、しばらくはこっちにいるつもりでな」

ドルクが説明した

クラウド「へえ、そうだったのか、なあなあドルク！お前腹黒同盟のリーダーだろ？俺を腹黒同盟に入らせてくれ！それとブレイブに入れてくれ！」

なんとクラウドはブレイブの仲間になりたい＋腹黒同盟に入りたいらしい

ドルク「いいぜ♪」

ドルクは快く（こころよく）OKしてくれた

クロウド「マジ!? ありがとな!! そんなじゃあ全力疾走パート2! 行くぜ!!」

なんとか仲間になれたクラウドは喜んでいてやる気を出したようだ

そして全力疾走パート2が始まる

•
•
•
•
•
•

さらに2時間後

三人「……」

父（魔王）「おおピツケル。シエルマル君。ペラ八さん。死んでしまふとは情けない」

[illegible]

三人はブチキレ復活した

クラウド「チッ！」

クラウドは軽く舌打ちした

三人「ちょっと待て!?! 舌打ちすんな!」

三人はクロウドにつっこんだ

ドルク「中々のもんだな」

シルム「重いけどなんとかあったよ」

ジユク「素早さを上げるにはちょうどいいな」

ソウ「いい汗かきましたね♪」

ドルク達はまだ疲れていなく余裕だった

アレン「まだまだ!」

カガリ「すごいな」

アレンはまだまだ余裕の表情、カガリはすごいことに感心している

ドルク「そろそろ昼メシにするぞ」

クロウド「今度は俺が作ってやるよ!」

なんとクロウドが作るらしい

ドルク「おっ! そんじゃあ任せたぜ」

ドルク達は早速ギルドの中へ

……

クラウド「完成だぜ！」

クラウドは満足そうにした

テーブルにはクラウドが作った料理がたくさんあった

和・洋・中など色々な料理がある

クラウド「さあ！食ってくれ！」

全員『いただきます！！』

全員がクラウドの料理に手をつける

……

ドルク「ガツガツガツ…おかわりな」

クラウド「ドルク、お前すげえな（汗）」

ただいまドルクは100皿食っていた

シルム「それでもヤセの大食いだけどね（汗）」

シルムが付け足して答えた

ドルク「ぷは〜食った食った♪」

ドルクは満足そうになる

依頼14 暴走大特訓!! その2 (後書き)

クラウドさんが料理上手なので昼食をそうさせてもらいました

ドルク「いやゝこいつがブレイブに入ったら飯とかもいしいなゝ」

でもたまにヤミラミ達にもだけどね (汗)

シルム「12歳で若くてもすごいなゝ」

そうだね、次回もクラウドさんの特訓は続きます

……

全員がバットを持っている

ドルクは口でくわえている

カガリは筋肉痛でお休み

アレン「なんだか面白そう♪（黒）」

アレンはなぜかバットを持って何かたくらんでいるような感じだった

アレン「これでいじめっ子どもを撲滅できればいいな♪」

と、いじめ経験があるためかそのような恐ろしいことを考えていた

クラウド「マジか、それじゃあアレンはそいつらの顔を思い出しながらすぶりをやれ」

アレン「わかった♪」

笑顔で答えるアレン、ある意味恐ろしく感じる（汗）

……

クラウド「もっと気合入れろ！ シェルマル！！ ピッケル！！」

シェルマル「そういわれても〜！！」（泣）」

ピッケル「これ以上は〜！！」（泣）」

二人とも涙目である

クラウド「もっと回数増やしたいのか♪そうかそうかならh」

シエルマル・ピツケル「ごめんなさい×100!!」(泣)

涙目になりながら必死にごめんなさいを連語しながらすぶりをやる
シエルマルとピツケル

一方

シルム「なんか軽いな」

ドルク「ほい！」

アレン「潰す！」

シルムはクラウドが用意した重いバットを軽々ともって振る

ドルクも同様に口でくわえながら振る

アレンはすごい形相でいじめた奴らの事を思い出しながらすぶりを
する

父(魔王)「ふん！」

父(魔王)はものすごい顔ですぶりをする(リザードンだが)

ジユク「ここまでやるなんてすごいな」

ジユクは関心しながらすぶりをする

ソウ「みなさん順調ですね」

ソウは持てないため見学だ

……

クラウド「よし！今日の特訓はここまで！この調子でやるZ E ☆」

シエルマル・ピッケル「もう勘弁して（泣）」

シエルマルとピッケルは疲労となりベタリと座り込む

ドルク「まあいい特訓にはなったな」

シルム「汗かいてきたな、それじゃあ温泉とかに入ってリフレッシュするか！」

クラウド「マジ！俺も入る！」

ジユク「とりあえず二匹を運ぶか（汗）」

ドルク達は二匹を運びながらギルドの温泉へ

その後シエルマルとピッケルは筋肉痛となったがクラウドの回復薬などで復活して、また地獄の特訓を受けるハメになったとさ

ペラハはさらに1ヶ月も筋肉痛となった

依頼16 クロウド初めての探検へ（前書き）

はい！今回は探検です

ドルク「クラウドと一緒に」

シルム「どうなるかな」

それじゃあ依頼16

ドルク「テメエのハートに刻んどきな！！」

依頼16 クロウド初めての探検へ

次の朝

今日も誓いを言い終えて朝食へ

クラウド「朝食はやっぱりご飯と味噌汁だぜ！」

そう、日本人の朝の定番のご飯と味噌汁だ

さらにおかずは色々ある

納豆に卵焼きや目玉焼きなどもある、もちろんふりかけもある

全員『いただきます!!』

全員が朝食をいただく

……

クラウド「さて!今日はどうしようかな♪(黒)」

クラウドが笑顔に言う、逆に口元がニヤリとしているが

ドルク「とりあえず今日は探検に行くぞ」

シルム「クラウドさんも一緒にどうかな?」

クラウド「マジ！いくいく！！」

どうやら行きたいらしい

ソウ「師匠？場所は何処なんですか？」

ソウは今回探検する場所が何処なのかをドルクに言う

ドルク「そうだな、ちょうど海のリゾートで食料調達しようと思っ
てな」

クラウド「あそこはグミがうめえんだよね♪」

海のリゾート

そこはミネラが教えてくれた場所だ

ドルク「今回はシエルマル達は特訓していてくれ」

シエルマル「はい…」

シエルマルがなぜか暗くなる

昨日のクラウドの地獄の特訓がある意味トラウマになってきた

クラウド「さぼったら追加するからな（黒）」

クラウドがさりげなくシエルマルとかに言う

それだけでなくピッケルもだが

ドルク「それじゃあ出発するぜ」

ドルク、シルム、ソウ、クラウドは海のリゾートへ

……

海のリゾート

ソウ「食料が結構ありますね」

クラウド「おっ！この銀色のグミいただき♪」

ドルク達は海のリゾートで食料などを探す

ただ探すだけでなく、探検も怠らない

クラウド「レールガン超電磁砲！！」

クラウドは腰につけている銃を取り出して襲い掛かってくるポケモンに撃った

撃たれたポケモンは倒れた

ちなみにこの銃は弾は大体死なない程度で、さらに炎や雷などの属性の弾なので影響はない

クラウド「波動弾！」

今度は銃に波動弾を込めて撃つ

さらに敵ポケモンは吹っ飛んだ

シルム「すごいな」

シルムが羨ましそうになる

クラウド「シルムもなんか武器を具現化すればいいんじゃない？」

ためしにシルムは頭の中でイメージする

すると炎で出来た銃が二丁でてきた

それをシルムは両手で持つ

シルム「できた！」

ドルク「おっ！新しい技ができたな」

シルム「でもまだここからだよ、これに炎の弾とかで撃てるようにしないかね」

クラウド「まあ死なない程度なら大丈夫だろうな」

とりあえず何事もなかったように先へと進んだ

……

クラウド「うひょー！お宝がいっぱいだー！」

宝物エリア

クラウドはお宝を入れた

ドルク「そんじゃあ帰るか」

クラウド「おう！」

ドルク達はワープゾーンでダンジョンから脱出した

依頼16 クロウド初めての探検へ（後書き）

シルムに新技ができました

シルム「銃とはすごいね」

まあ玉とかは死なない程度にはしてあるから、次回あたりでなんとかなるかな

シルム「楽しみ♪」

次回はそんな新技を使っの練習バトルになります。相手はまあ楽しみにしてください

依頼17 バーニストガン（前書き）

はい！今回は前回シルムが具現化した二丁の炎の拳銃でシルムがバトルします

ドルク「ってかよく相手って誰だよ？」

それは誰かはお楽しみ、それじゃあ依頼17

シルム「燃えるぜ！！」

依頼17 バーニストガン

次の朝

ドルク「ガツガツ…やっぱグミパンはいいな♪」

クラウド「やっぱこうするのが一番だな♪」

朝食はクラウドがグミを使って作ったグミパンだ

それぞれ色が違っていて、色んな味がある、たとえば今ドルクが口
にしているのは黄緑色のパンだ

これは若草グミを使った若草パンというグミパンだ

それぞれグミパンを食べて今日も1日が始まる

シルム「昨日の新技…とりあえずためしてみたいな」

シルムはそう言う

前回、クラウドの銃を見てシルムは二丁の拳銃を炎で具現化した

シルム「とりあえず殺傷能力はないようにしてるしダメージを与える
程度はなんとかなるから」

ドルク「そうだな、相手はどうするんだ？」

そう、相手をどうするかだ

シルム「うーん、そうだな」

ソウ「せっかくですし、僕と相手しますか？」

ソウが言ってくる

シルム「それもそうだな…じゃあ」

カガリ「俺も相手にしてもいいが？」

カガリもだ

シムーン「とりあえずはソウさんの方がちょうど相手にはいいですし、ソウさんの方が」

アレン「まあ楽しみだし早くみたいな」

楽しみにする者もいる

シエルマル「まあ俺も特訓だけでなく、相手の事も知っておく必要がありますし」

まあ相手の事も知っておくのも探検の心得だ

父（魔王）「ならシルム君の戦いも見ておく必要があるな」

ピッケル「たしかに」

しかし

クラウド「抜け駆けで悪いけど、ピッケルは特訓な」

ピッケル「ガーン!?」

ピッケル、地獄特訓へ(汗)

ピッケル「ふざけるなああああああああああああああああ
あああああああああああああああああつ!!!!!!」
!!
(泣怒)」

ピッケルの叫び声がギルドに木霊する

……

ここはギルドのバトルフィールド

ソウとシルムが対峙する

クラウド「それじゃあこれよりシルムとソウのバトルを行うぜ! ルールは先に戦闘不能にしたほうの勝ちだ、それじゃあバトル開始だ!」

ドルク「この勝負どうなるかな」

ドルクや戦わない者はバトルフィールドの横にあるベンチで二人の戦いを見る

シルム「まずはフレイボール!」

シルムの口から数発の炎の弾を吐く

ソウ「そう簡単にいきませんよ」

ソウはニヤリと口をニヤケだす

するとフレイボールはソウに当たらず逆にシルムに跳ね返ってきた

シルム「くっ！」

シルムは自分の放った技をかわす

シルム「跳ね返った！？一体！？」

シルムはわからずに少し焦る

ソウ「僕もパワーアップしたんです、この結界でね♪」

ソウの周りには結界が張られていた

だからシルムの攻撃を跳ね返したのだ

シルム「結界ならこれで！」

シルムは素早くソウに迫る

ソウ「何を攻めてくるかわかりませんが無駄ですよ？」

ソウは余裕の表情だ

シルム「それはどうかな？瓦割り！！」

シルムは結界に瓦割りをした

すると結界が

パリーン！！

ソウ「なっ！？身代わり！」

ソウは咄嗟に身代わりを使ってかわした

シルム「やっぱソウは強いや」

ソウ「シルムさんもまさかここまで強くなっているなんて…それでこそですよ！サウザントカッター（水）！！」

ソウは青色の真空波を繰り出す

シルム「（やっぱりサウザントカッターで来たね、ならここでためさせてもらうぜ！）バーニストガン！！」

シルムはそういうとシルムの両手から炎で作った拳銃が二丁も出てきた

シルムは二丁の拳銃を構える

シルム「ショット&フレア！」

シルムの拳銃から青い炎の弾が発射された

クラウド「うおー!!」

ドルク「いい感じじゃねえか！」

観客から歓声が来る

青い炎の弾は真空波を打ち消した

ソウ「（僕のサウザントカッターを打ち消した!?!）」

ソウは驚き、焦る

シルム「ロード！」

シルムはそう言うとかシッ!と拳銃から音になる

シルム「ショット！」

シルムは連続で炎の弾を銃で連発する

ソウ「でも! 結界！」

ソウは結界を作る

炎の弾は跳ね返される

シルム「守る！」

シルムは守るで防ぐ

シルム「(やっぱここは...) ブレイクショット!」

シルムは再び拳銃から青い光の弾を発射させる

ソウ「瓦割りではだめですが、遠距離からでも結界は壊れませんよ!」

しかし

パリーン!と再び結界が破られる

ソウ「くっ!」

ソウに青い光の弾が当たる

ソウ「いたたた…」

ソウはいたそうにするがまだ大丈夫のようだ

シルム「ブレイクショットは結界などのバリアを打ち破る効果があるんだ、まあどれも殺傷能力は打ち消してあるから安心して」

どうやらの弾にも殺傷能力はまったくないようだ

ソウ「どうやらかなり強くなってますね、ならライオットカッター
&セイントカッター!」

それぞれ光の真空波がシルムに向かう

シルム「よっと！」

シルムは見切るように避ける

ソウ「ホーリー！」

ソウは光球を5発飛ばす

シルム「マッハパンチ！」

シルムはマッハパンチで光球をはじき返す

そしてジャンプした

拳銃の銃口から光が吸収する

それは炎の弾と青い光の弾だった

シルム「フレアライトレールガン！！！」

シルムが引き金を引くと同時に一方に炎の光線が放たれ、もう一方に青い光の光線が放たれた

ソウ「やばい！？ 守る！」

ソウは守るを使って防ぐが

ソウ「ヒビが！？」

守るのベールにヒビが入り、ソウに直撃した

ソウはボロボロになって倒れた

クラウド「ソウ戦闘不能!! シルムの勝ち!」

シルム「オイラ勝っちゃった!？」

シルムは驚く

シルムはソウの元へ

シルム「ソウ、大丈夫?」

ソウに声をかける

ソウ「負けました、ここまでやるなんて…シルムさんは強くなりましたね」

ドルク「お前もよくがんばったぜソウ」

そこにドルクが駆けつける

ソウ「師匠…」

ドルク「シルムは色々と努力してここまで強くなれた、俺とも戦ったことも数回あったからな」

シルム「それでもドルクには勝ったり負けたりはしてるよ」

二人がいるからお互いが強くなれた、そして互いが認め合う、それがバトルなのだから

シルム「オイラもこれを使いこなせたのは嬉しいし、さらにがんばらないと」

それでも強くなっている。ドルクも、シルムも

アレン「すごいバトルだったな」

クラウド「俺の超電磁砲レールガンとはちょっと違う感じだな」

それぞれの技には技名に何かついていて見た目からして同じように見えるが同じ感じではない、技は不思議に思うことばかりだ

ドルク「さてと、昼飯にすっか」

ドルクの一言でみんなは食堂へ

依頼17 バーニストガン（後書き）

やってみたかったんだよね〜とある科学の超電磁砲とかにあるレールガンを

ドルク「クラウドの超電磁砲とは違うんだな」

技っていつでもそれぞれが違うものだよ、シルムの場合は炎属性と格闘タイプだから

シルム「あの青いのって波動弾？」

いや、大体気合玉かな、一応アレも格闘タイプの特殊技だし

シルム「まあオイラ波動弾とかは覚えないけどね（汗）」

そりゃね、エナジーダマシーとかも気合玉とかの原理もあるし

ドルク「そうなのか〜」

さて今回はプクリンのギルド訪問とかです

依頼18 プクリンのギルド（前書き）

ドルク「おっ！ついにか」

うん、やっとプクリン親方の登場です。では依頼18

ドルク「ロックでいくぜ！！」

依頼18 プクリンのギルド

次の朝

今日もいつもと変わらない日だ

ドルク「さて、今日はプクリン親方のところに行くか」

シルム「そうだね、ペラップがクラウドさんの特訓で休みっぱなしだったしね」

クラウド「まっ！どうせ暇だし行くぜ♪」

クラウドも行きたいらしい

ピッケル「じゃあb」

父（魔王）「ピッケルは父さんと特訓だぞ♪」

ピッケル「ちょっと待て！！？」

ピッケルは特訓で行けないようだ

父（魔王）「プクリン親方がどのような方なのか会ってみたいが、また機会あったらで」

都合が悪い感じのようだ、まあドルクに負けているため負けたくない気持ちが高いのだろう

シエルマル「じゃあ俺も」

シエルマルもだ

ソウ「それなら僕も行きましょう」

ソウも行くらしい、ソウは怪我は完治している

アレン「私も♪」

カガリ「俺も挨拶ぐらいはしておかないとな」

アレンとカガリも行くようだ

ジユク「俺達は依頼の方をやらないとな」

シムーン「こちらも色々忙しいですし」

まあほぼ行けるメンバーと行けないメンバーで分けられた

……

プクリンのギルドに行くメンバーはドルク、シルム、ソウ、シエルマル、クラウド、アレン、カガリの7人だ

ここは交差点だ

ドルク「この上にプクリン親方のギルドがあつてな、まあプクリン親方には失礼ないようにな、シエルマル、クラウド」

クラウド「わかった」

シエルマル「はい」

ドルク達はプクリンのギルドへ

……

プクリンのギルド入口前

ドルク「ここだが、まずはこの鉄格子で囲まれた穴に乗ってからだ」

まずはドルクが穴に乗った

????? 「ポケモン発見!! ポケモン発見!!」

????? 「誰の足型? 誰の足型?」

????? 「足型はドルクさん! 足型はドルクさん!」

シエルマル「わわっ!?! 穴の中から声が聞こえてる!?!」

シルム「プクリンのギルドはこうして足型で判断するんだ、オイラも最初は緊張してすごく怖かったんだ」

クラウド「今はすごく成長してるなシルムも」

シルム「まあな」

どんとんと穴に乗るブレイブ一行

ただシエルマルはミジュマルなのでめずらしく穴の中は少し騒動があったが何もなくプクリンのギルドへと入った

……

プクリンのギルド地下1階

シエルマル「すごい!?!」

プクリンのギルド地下1階は掲示板があり、広がった

そこに

????? 「あら! ブレイブのドルクとシルムではありませんの!」

ドルク達に近付いてきたのはひまわりのような顔で葉っぱのような両手のポケモンだった

ドルク「おっ! キマワリ姉さん」

そう、このポケモンの名はキマワリでプクリンのギルドの弟子の一人で実力者だ

キマワリ「今回も来てくれて嬉しいですわ♪」

さらにそこから

????? 「へいへい! お前ら来たんだな!」

ハイテンションで来たのは両手はハサミで頭に3つの突起がついて、体色が赤いポケモンだった

シルム「ヘイガニ！」

プクリンのギルドの弟子の一人、ヘイガニだ

ヘイガニ「ヘイヘイ！それにしてもダークライまでいるなんてな」

ドルク「ああこいつは別の世界のダークライで敵じゃねえからな」

ドルクが説明した

とにもかくにも地下2階へ

……

ギルド地下2階

ドルク「ここだ」

ドルク達はプクリンの部屋の前に来た

ドルク「プクリン親方！ドルクです！失礼します！」

ドルク達の中に入った

プクリンの部屋

プクリン親方は後ろを向いていた、ピンクの体色でふわふわした体毛だ

ドルク「プクリン親方」

プクリン「……」

シエルマル「あれ？」

アレン「どうしたのかな？」

すると

プクリン「やあ！」

シエルマル・アレン「わっ!？」

突然プクリンが振り向いたことにシエルマルとアレンが驚く

プクリン「ドルクいらっしやい、それに君達はシエルマルにアレンにカガリだね♪」

アレン「私の名前知ってるの!？」

ドルク「俺達が前もって教えたんだ」

アレン「あっちのとは違うんだね」

アレンは同じプクリンでいじめっこのあいつを思い出していた

プクリン「それにしてもすごいね」

ドルク「まあ結構こっちはなんとかやってますよ」

プクリン親方とか色々会話しているドルク

クラウド「すげえな」

プクリン「うわぁ、君めずらしいね、銃とか剣とか」

ドルク「クラウドは一応作者です」

ドルクが説明した

その後色々話してプクリンのギルドを後にした

クラウド「いや、すごいな、すごい威圧感というのも感じるな」

クラウドはプクリンから来る何かを感じた

ドルク「まああれでもすごい方だからな、さてパッチールのカフェで飲み物飲んで帰るか」

シルム「そうだね」

アレン「あそこって飲み物とかすごいんだよね」

カガリ「俺も♪」

シェルマル「（なんだかドルク親方と同じような感じがする…）」

ソウ「プクリン親方が元気でやってるなんて僕も嬉しいですね♪」
みんな喜び、その後パッチールのカフェで飲み物を作ってもらって
満足して帰った

……

夜

ドルクの部屋

ドルク「（俺もがんばらないとな…俺ももっと強く…まだまだかもしれないねえが明日もがんばらねえとな）」

ドルクは少し起きていた、考えことをしていて寝ていなかったのだ

ドルク「さあて寝るか」

ドルクは眠りについた

依頼18 プクリンのギルド（後書き）

さて、あまりにもグダグダになってしまった（汗）

ドルク「しっかりしろよ」

ごめん（汗）さて次回は作者キャラ&コラボキャラが登場します。

依頼19 新たな者達（前書き）

はい！今回はまたコラボです、なんとその方は読者さんで感想送ってくれた方ですが、作者になった方です。クロウドさんと関係ある方です

ドルク「関係ある方？」

うん、さてどうなるか依頼19

ドルク「デメエ等のハートに刻んどきな！！」

依頼19 新たな者達

交差点

????? 「ここから左に行くとギルド『ブレイブ』があるんだな」

????? 「でもヨ、ボケール?ここで強くなれるって本当なのかヨ」

一匹は頭に突起がついていて、岩色の体色にお腹には赤いもの、背中
の腰には短剣がついている

もう一匹は小さい翼にトゲトゲした白いいくつもの突起に三角の赤
と青の斑点がついている

一匹は岩肌ポケモンのヨーギラス、もう一匹は幸せポケモンのトゲ
チックだ

????? 「ああ、ここでつよい奴がいるみたいでな、俺の剣術と
かの修行などにちょうどいいんだデイン」

????? 「そうなのかヨ」

その二人はギルド『ブレイブ』の方へと向かった

……

ギルド1階トレーニングルーム

クラウド「超電磁砲^{レールガン}!!」

シルム「フレアライトレールガン!!」

ただいまシルムとクラウドがバトルしている

ドルク「二人してやるじゃねえか♪」

ミネラ「シルムもクラウドもすごいな」

ジユク「まあシルムはサポートなど色々してるから強いしな」

アレン「すげえ!」

カガリ「やっぱブレイブ:あなどれないな」

こちら観戦しているドルク達

父(魔王)「いやゝさすが副親方だ!ピッケルも見習え」

ピッケル「いや僕は僕でシルムさんはシルムさんだから(汗)」

ピッケルがツツコミをする

すると

ビービー

シルム・クラウド「ん?」

突然警報音が聞こえてきたためシルムとクラウドは一時バトルを中断した

ドルク「誰か来たようだな」

シルム「行ってみよう」

ドルク達はギルド入口へ

……

ギルド入口

ヨーギラス「それにしてもすげえな」

デイン「すごいヨ！でかいヨ！」

ヨーギラスとデインと呼ばれたトゲチックがギルド『ブレイブ』の
でかさに驚く

ヨーギラス「入るぞ」

デイン「わかったヨ」

二人は中へと入った

……

ギルド食堂

ヨーギラス「すげえ（汗）」

デイン「ボケール、ここ広いヨ！」

二人はギルド食堂の広さに驚く

すると

ドルク「ん？お前らか、ここに入ってきたのは」

二人「!？」

ドルク達が来た

ヨーギラス「あんたがここのギルドの親方？」

ドルク「ああ」

ドルクは答えた

ヨーギラス「俺はミゲール、修行のために来ていてな、ここのギルドで修行できると聞いてきたんだ」

ヨーギラス、ミゲールは自分の紹介と目的を言う

デイン「そしておれっちはデインだよ」

デインも紹介する

すると

クラウド「おっ！誰かと思えばミゲールさんじゃん！」

クラウドがミゲールの前に

ミゲール「ってクラウドさんじゃん！」

ドルク「知り合いか？クラウド？」

クラウド「ああ！俺とも知り合いなんだ」

どうやらクラウドとも知り合いらしい

クラウド「つか修行で来たの、まあちょうどここでバトルとかしていたんだ」

ミゲール「バトルか？それなら俺もやろうかな」

と、ミゲールはバトルしたいらしい

ドルク「どうせだから俺とバトルするか」

ドルクがバトルしたいらしい

ミゲール「お！おう！ならバトルしてやるぜ！（って！？いきなりバトル申しこまれたー！！無理無理！？ぜってえ勝てる気がしねえ！？）」

と、大量の汗をかくミゲール

シルム「無理しないほうがいいよ（汗）」

とりあえずシルムがそこをカバーする

ドルク「まあいきなりバトルするのも無理あるか、ごめんな、それじゃあ聞きたいか？」

ミゲール・デイン「はい（ヨ）？」

ドルク「聞きてえよな〜俺達の事」

ミゲール「うん、聞きたい」

するとドルクが高らかに決めゼリフを言う

ドルク「俺達は探検隊ブレイブ！ロマンを求めて探検する探検隊だ！
！テメエらのハートに刻んどきな！！」

ドルクの決めゼリフが決まった

ミゲール「すげえ〜（汗）」

デイン「ボケール、おれっち達大丈夫なのかヨ（汗）」

不安がる二人

ドルク「まあとりあえずクラウドの知り合いだしよ、ブレイブに入る許可を出すぜ」

こうしてミゲールとデインの二人を仲間にした

だがこの二人は後にドルク達のすごさを目の当たりにする

依頼19 新たな者達（後書き）

はい！作者のミゲールさんとそのミゲールさんのキャラ、デインです！

ドルク「まさかあの二人がな」

感想でも実は出たいという出演依頼が来ていてね、まあまさかクロウドさんとそんなつながりがあるとは思ってもみなかったけどね（汗）↑詳しくは感想をみればわかります

シルム「でもこの二人大丈夫なのかな（汗）」

そんな次回はミゲールさんとデインの特訓です。ある意味カオスになるかもしれません（黒）

依頼20 混沌（カオス）なバトル&特訓（前書き）

ドルク「おっ！すげえタイトルだな♪」

クラウド「ククク（黒）あの二人を（黒）」

シルム「なんかクラウドさんがやばい感じになってる（汗）」

アレン「わあ〜なんだろう〜♪」

カガリ「なんかカオスになりそうだな（汗）」

それでは依頼20

ソウ「行きますよ♪」

依頼20 混沌（カオス）なバトル&特訓

ギルド1階 トレーニングルーム

ドルク「よっしゃあ！ミゲール、お前の實力見せてくれよ♪」

ニコやかになるドルク

ここはトレーニングルームのバトルフィールド

ここにドルクとミゲールの二人がフィールドにいる

ミゲール「お、おう！（無理×100！！）」

ミゲールは冷や汗がダラダラと落ちる

もはや嫌な予感しかない

シルム「バトル開始！」

シルムの合図とともにバトルが開始される

ミゲール「もうだめもとで！龍の舞！そしてストーンエッジ！」

ミゲールは龍の舞をしてストーンエッジを繰り出した

ドルク「ロックフェンス！」

……

1時間後

ミゲール「死ぬかと思った（泣）」

ミゲールは三途の川をあやうく行ってしまふところだった

クラウド「よし！ミゲールさんとデインを含めて俺の特別特訓を開始する（黒）」

再び地獄の特訓が始まろうとしていた

クラウド「まずは全員で空の頂を登ってそして降りてここまで帰ってこい！ちなみに重りをつけたままだ（黒）」

空の頂はグラデスのシェイミの里から行けるダンジョンだ

そこから頂上からギルドまで帰ってくるのが今回の特訓だ

カガリ「俺はとりあえず見学する」

カガリは筋肉痛になったため休み

グラデル「私はとりあえず様子などですね」

グラデルはスカイフォルムでみんなの様子などを伝える

シムーン「私は救護の方をやっていきます」

シムーンは救護の方を担当

クラウド「それじゃあ…スタート!!」

全員が走る

アレン「おっしゃあ!行くぜ!!」

アレンががんばって重りを50でスタート

他はそれぞれ100や300あたりだ

ドルク「まあこのぐらい軽いな」

ドルクは背中に500kgの重りをのっている

ジユク「フン!」

ジユクは300kgの重りをつけている

レヴィ「ジユクさ〜ん!がんばって〜!」

レヴィが応援する

ゼラス「重い…ここまでやるとは(汗)」

ゼラスは100kgの重りをつけている

ソウ「僕は軽く50ぐらいですけどね」

ソウは50kgだ、あまりソウを怒らすとやばいということで（汗）

クラウド「さて、どうなるのかな〜♪（黒）」

楽しそうにクラウドは黒い笑顔を見せる

デイン「重いヨ〜（泣）」

ミゲール「おもっ!?!?ってかマジきつい!?!?」

ミゲール&デインは100kgの重りをつけて走っている

ちなみに空を飛ぶことは不可能

……

空の頂

シエルマル「水覇斬!」

シエルマルは重りをつけながら新しい技を使って敵ポケモンを倒していく

シエルマルのホタチが水をまとい、そこから地面に叩きつけ水の衝撃波を放つ

ピッケル「火炎放射!」

ピッケルは火炎放射で応戦する

一方

ミゲール「はあはあ…しんど…」

デイン「おれっちもヨ…」

この二人は疲れていた

歩きながら頂上を登る

…

3時間後

ドルク「はあゝいい特訓だったぜ♪」

シルム「あゝ重かったよ」

ドルク&シルムは疲れた表情を一つもせずゴール

シエルマル「はあはあ…やっとゴールできた…」

シエルマルは汗をかきながらなんとかゴール

アレン「ゴール！あゝ結構きつかった」

アレンも疲れながらなんとかゴール

ジユク「こっちもゴールだ」

ゼラス「なんとかゴールできた…」

ジユクは汗をぬぐってゴール、ゼラスは汗びっしょりになりながらゴール

ソウ「やっとゴールです」

ソウもゴールした

しかし

クラウド「ミゲールさんとデインはまだか？」

この二人はどうしたのか？

すると

ミゲール「やっと…」

デイン「ゴールヨ…」

足を引きずりながら二人はなんとかゴールへと一歩一歩歩き出す

そして

ミゲール「やっとゴールだ…」

デイン「やったヨ」（泣）

なんとかゴールなのだが

クラウド「あつ二人とも遅れたからもう一回な」

二人「何いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいいいい(ヨ!?)!?

その後、二人はまた地獄の特訓で辛い思いをし、筋肉痛になったのは言うまでもない（汗）

依頼20 混沌（カオス）なバトル&特訓（後書き）

カオスな感じになってしまった（汗）後、ミゲールさんすみません（汗）

ドルク「まあクロウドの特訓って結構いいな」

シエルマル「なんかなれてきたみたいで（汗）」

シルム「まあオイラは300kgだけど、なれてきたな」

強くなっていくね（汗）さて次回はさらにコラボキャラが来ます、なんと腹黒同盟のメンバーになった新たな腹黒キャラが（汗）

依頼21 狂気なルカリオ（前書き）

ドルク「おっ！すげえタイトルだな〜♪」

はい！今回はあのキャラの登場です

シルム「ルカリオ？」

クラウド「俺の他にいるんですかフォックさん？」

実はいるんですよ（黒）

シルム「なんか黒いよ作者さん（汗）それじゃあ依頼21」

クラウド「暴れるぜ！！」

依頼21 狂気なルカリオ

ここはトレジャータウンなど色んなルートで行く交差点

そこに一匹の赤いコートを来たルカリオがいた

そのルカリオは普通とは違って身長が種族より少し高かった、さらに背中にはそのルカリオ以上ある剣があった、剣は半月のような片刃であり、剣の腹の中央には赤く光る石のようなものが埋め込まれている、その剣の柄には赤色の文字で言葉が刻まれていた：D a i n s l e i f：ダーインスレイブと書かれていた、コートの胸部分には白と黒の拳銃がついていた、それぞれ文字が刻まれていた、白の方はw h i t e d e v i l：ホワイトデビルと英語で文字が刻まれていた、黒の方はb l a c k a n g e l：ブラックエンジェルと英語で文字が刻まれていた。それぞれ白い悪魔と黒い天使という意味だった

ルカリオ「さて♪ここにギルド『ブレイブ』というギルドがあるんだよね（黒狂笑）」

このルカリオは狂気笑いをする

どうやら血の気があるようなルカリオのようだ

だがギルド『ブレイブ』になんの用があるのだろうか？

そんな狂気なルカリオはギルド『ブレイブ』の方向に向かった

……

ギルド『ブレイブ』1階 トレーニングルーム

シエルマル「はあ…はあ…」

クラウド「進化してもやるじゃねえか、結構いいぜ」

ただいまシエルマルがクラウドとバトルをしていた

しかもシエルマルはミジュマルの姿ではなかった

腰に二枚のホタチをつけていて、さらに体色が水色になっていた

修行ポケモンのフタチマルになっていた

シエルマル（フタチマル）「はあ…はあ…シエルスラッシュユ！」

シエルマルは二枚のホタチをつかって青い透き通った剣へとホタチを変化させ、そこからたくみにクラウドに攻撃しようとする

クラウド「ダークヘイズ！」

クラウドの剣が闇に包まれた

カキーン！

互いの剣がぶつかった

すると

シエルマル「うわっ!？」

シエルマルははじきとばされ倒れた

クラウド「まだまだだな」(黒笑)

クラウドは笑いながら言う

ドルク「シエルマルも中々の成長だったぞ」

ドルクがシエルマルをほめる

シルム「いいバトルだったよ」

雷吉「やっぱバトルはこうでないとだめじゃけん♪」

炎丸「そうですね」

シルムもいいバトルと褒め、雷吉と炎丸も楽しんでみていた

アレン「私も強くならないと、雷吉、炎丸」

炎丸「はい」

雷吉「そうじゃけん♪」

ガガリ「そうだな♪」

すっかりなじんできたシャドー組

ピッケル「はあゝまだまだ進化は遠いな」

父（魔王）「ピッケル！ならもっと特訓だな」

ピッケルは進化がまだまだ及ぶレベルでないため進化していない

ちなみにピッケルのヒトカゲでのレベルは13だ

ミネラ「最近賑やかでいいよね♪」

ミネラは踊りながら言う

ミゲール「もういやゝ（泣）」

ミゲールは涙目になりながら思っている

デイン「かなり厳しいヨ（汗）それにしてもよくあんな特訓受けるヨ、あのフタチマルはヨ」

デインもあんな厳しい特訓を受けているシエルマルに納得する

ソウ「でも楽しいですよ♪（黒）」

ミゲール「（黒いよゝ！！この子ゝ！！（泣）」

ソウは笑顔で口がニヤリとする

すると

ビービービー

警告音が響いた

ドルク「誰か来たようだな」

シルム「行ってみよう」

ドルク達はギルドの玄関へ

……

ギルド『ブレイブ』入口

ルカリオ「なんだ？」

一匹のルカリオは入口で立ち止まる

ここで色々とチェックをしている

武器もあるためか警戒も激しい

するとそこから

ドルク「誰だ…おっ！お前は！？」

ドルクは何か知っているような口で聞く

ルカリオ「おっ！お前はドルクじゃねえかよ♪」

どうやらこのルカリオはドルクの事を知っているようだ

ドルク「ちよっと待ってな…」

ドルクが操作パネルを操作した

すると警戒音はおさまった

ルカリオ「いやゝ助かったぜ♪さすがギルド『ブレイブ』だな♪」

ルカリオは笑顔になる、ただ笑顔が逆に狂気っぽい感じの笑顔で怖いのだが（汗）

そこから

シルム「あっ！来たんだな！」

シルムが出てきた

ルカリオ「よっ！来てやったぜ（黒狂笑）」

赤いコートのルカリオは狂気笑いをする

クラウド「俺と同じルカリオで！？しかも身長たけえ！？」

クラウドはそのルカリオに驚く

ルカリオ「そういやあ紹介がまだだったな（黒狂笑）俺は便利屋
f e n r i r の事務長ソルだ」
エンリル

ルカリオ、ソルがそう紹介する

アレン「へえ、便利屋なんだ」

ガガリ「（なんだ！？このルカリオから黒い感じと狂気のオーラを感じるな…）」

ガガリはソルのオーラを感じていた

黒くて狂気のオーラが

ソル「ここに来たのはドルクのギルド『ブレイブ』がどんどころか来てやったんだぜ（黒狂笑）」

どうやらギルドを見に来たらしい

ドルク「それにこいつは腹黒同盟にも入っていてな、さらにこいつの情け容赦なし同盟に俺も入ってるんだぜ♪（黒）」

なんとお互い同盟に入っているらしい

クラウド「おもしろえ〜！！マジ！」

クラウドはすぐ入りたい気持ちになっている

シルム「とりあえず中入ろうか」

みんなは頷いてギルドの中へと入っていった

依頼21 狂気なルカリオ（後書き）

はい！『f e n r i r魂の乱獲者を喰らう者達』から、狂気のデビルハンターでf e n r i rの事務長、ルカリオのソル君が来てくれました！

ソル「ひゃっはああああああああ！！俺がルカリオのソルだ！！よろしくなあ！！ひゃっはああああああああああ！！」（黒狂笑）

あゝとりあえずこっちは残酷表現ないから残酷にはならないから、むしろ倒す程度というか死なない程度にしてるからね（汗）

ソル「マジ！でも暴れるんだろう？」

まあ暴れてもいいけど、やりすぎて依頼のお礼が減るようなことにならないようにね？

ソル「わかってるぜ♪（黒狂笑）」

今回はそんなソル君とのギルド『ブレイブ』をまわります

ドルク「次回も楽しみにしてくれよな♪（黒）」

依頼22 案内!ギルド『ブレイブ』

ソルが来たところで

ドルク「それじゃあ案内するか」

ミゲール「あっ!俺も行く!」

デイン「おれっちもいくヨ」

ミゲールとデインが言ってくる

ドルク「そうだな、お前等二人は案内してねえからちよいどいい」

するとドルクは何処からか旗を取り出した

旗にはギルド『ブレイブ』案内ツアーと書かれていた

ピッケル「いやそこ案内ツアーと言えるの(汗)」

細かいことは気にしない、さてドルク達はまずこのギルド食堂からドルクは紹介した

ドルク「まずギルド食堂はここは結構な食い物がこっちは違う感じのがあってな様々な料理が楽しめるぜ」

ソル「おいしそうだな♪」

クラウド「まあ俺も作ってるから後で食べてくれよな♪」

クラウドが自身満々に言う

彼の料理はうまいので絶品だ

ドルク「それじゃあまずは二階から行くぜ」

ドルク達は二階へと上がる

……

二階

シルム「ここは温泉があって、とてもいいんだ」

二階は温泉があり、とてもくつろげることができるのだ

ソル「おっ！すげえな♪（黒狂笑）俺の方でも温泉あったらいいのにな」

ソルは羨ましくなる

ミゲール「温泉かゝさすがブレイブ（汗）」

デイン「すごいヨ（汗）」

ミゲールとデインは啞然とする

ドルク「次行くぜ」

次の場所へと移動する

……

ドルク「ここは応接室だ」

二階の応接室は広かった

相談など急な依頼などにはここを使うことができる

直接の依頼でもここは使われる

ソル「まあ俺のところで応接室はあるけどな」

雷吉「俺達も入れるスペースがあるけんな」

どうやらここにもちゃんと伝説系統で大きいポケモンなどに合わせた天井の高さにしている

シルム「それじゃあ次は地下一階だよ」

今度は地下一階へ

……

地下一階

ドルク「ここは来客用や俺達の部屋があるんでな」

アレン「そういえば私達の部屋もそうだったね」

部屋は順にドルク、シルム、ソウとミネラ、ジュクとレビィ、ゼラス、デイシア、パルサ、シムーン、グラデル、グロリアルとリユラ、シエルマル、父（魔王）とピツケル、ミゲールとデイン、そして他は来客用と弟子部屋に分けられている

ソル「さすがだな♪俺は来客用の部屋だな」

ソルは来客ということなので一応しばらくはいるつもりだ

ドルク「次はまた一階に戻るぜ」

今度は一階へと戻る

……

ドルク「ここはバトルフィールドとトレーニングルームだ」

最後に連れてこられたのはトレーニングルームとバトルフィールドだ

もちろんここでは

シルム「ここはオイラ達が強くなるために作られたんだ、オイラ達もまだまだかなわない敵もいるし、お尋ね者も強い奴が現れた時の事を考えてこうして特訓しているんだ」

アレン「結構よかったから♪」

炎丸「見学とかもできますし」

シエルマル「まあ結構きついトレーニングもあるけど（汗）」

シエルマルはあのクロウドの地獄の特訓でトレーニングしたのだ、それによってこうして進化できた

ソル「これで全部か？」

ドルク「まあこれで全部だな、ちなみにこのギルドは色々に対応できるように船になったり空飛ぶ戦艦とかにもなるぜ」

ソル「面白れえじゃねえか♪（黒狂笑）」

ソルが狂気笑いをする

ミゲール「（なんかすげえゝ嫌な予感が（汗））」

デイン「（おれっち達とんでもないところに来たようだヨ（汗））」

ミゲールとデインは汗だらだらになる

ソル「やっぱ師匠はすごいです♪」

ドルク「案内終わったところで夕食にするか」

全員『賛成!』

ドルク達はギルド食堂へ

依頼22 案内!ギルド『ブレイブ』(後書き)

案内って説明するの難しいな(汗)↑説明苦手な作者

ソル「まあこっちはすげえんだな、ドルクのは」

まあね、これでもドルクは親方だし

シエルマル「作者、次回は？」

次回はその子が来ます

シエルマル「誰？」

ミゲールさんと関係ある子だよ

依頼23 ベビーチートな（前書き）

ドルク「なんだよこのタイトル？」

今回は…あの子が登場です

シルム「あの子だね」

ドルク「ああ、あいつだな…まああいつも強ええしな」

そんな依頼23

ドルク「ぶっ放すぜ!!」

依頼23 ベビーチートな

次の日

クラウド「オラァ！気合入れろ！」

ミゲール「そういったってえゝ（泣）」

デイン「なんでこうなるんだヨ！（泣）」

ミゲール&デインはただいま走らされている

ドルク「まだまだ！」

クラウド「さすがドルクだな！」

ドルクはクラウドの特訓を受けている

ソウ「師匠ゝ待ってくださいよゝ」

ソウがドルクの後を追う

他のメンバーは

シエルマル「はっ！」

シエルマルは攻撃をホタチでガードした

シルム「うん、その調子！ブレイクショット！」

シルムは青い光の弾を繰り出した

シエルマル「（貫通能力あるのなら…）シエルブレード！」

シエルマルはシエルブレードで青い光の弾を斬りつけて防いだ

シルム「うん、いい感じだよ」

シルムがシエルマルを褒める

ソル「今度は俺だ！」

ソルがダーインスレイブでシエルマルを斬りつけようとする

シエルマル「はっ！」

カキーン！

シエルマルは二つのホタチでダーインスレイブの斬りつけを防いだ

ソル「やるじゃねえかよ」

シエルマル「（すごい…この大剣の重圧…）」

シエルマルはダーインスレイブの重圧を感じた

ディシア「はっ！」

ディシアは波動弾を繰り出した

パルサ「こっちもだ！」

パルサも波動弾を繰り出す

波動弾が二つとも相殺された

パルサ「なんかお前最近張り切ってるな」

パルサがディシアの様子を言う

ディシア「私も強くないと…」

ディシアはそう言う

パルサ「ふくん、だけど無理すんなよな」

ディシア「わかっている」

ディシアはそう言われ頷く

シムーン「クレセリスカッター！」

シムーンがパール色のカッターを繰り出す

グラデル「シードバリア！」

グラデルが緑色のバリアを張り、守る

ジユク「いい感じだ」

レヴィ「グラデルもいい感じ♪」

ジユクとレヴィが二人のバトルを見ていた

アレン「いくよ！」

アレンはとてつもなく巨大な電撃の球体をもっていた

雷吉「今じゃけん！」

アレン「バーンバルテックス爆雷！！」

アレンはその巨大な電撃の球体を投げた

相手はカガリだ

カガリ「守る！」

カガリは守るで防いだ

カガリ「力の中々だ…だがまだまだだ」

カガリはアレンにそう言う

アレン「はい！先生！」

炎丸「アレン様のために私も強くならないといけませんね」

雷吉「そうじゃけん！ここでの修行もわるくないけんな♪」

……

その頃交差点で一匹のポケモンがいた

龍の顔でまだ幼さが残っているようなポケモンだ

このポケモンはタツベイというポケモンだ

タツベイ「あゝあいつらたしかこの世界の何処かにいるんだよな」

あいつらとは誰なのかわからないが人を探しているようだ

ポケモン

タツベイ「今度はギルド『ブレイブ』に行ってみるか」

タツベイはギルド『ブレイブ』へと向かう

……

ギルド食堂

ドルク「ガツガツガツ」

雷吉「ガツガツガツ」

ドルクと雷吉は大食いをしている

ちなみに今はお昼だ

シルム「結構な特訓だったし、午後は依頼をこなすよ」

午後は依頼をこなす予定になっている

その時

ビービー

再びアラームがなる

誰かが来たようだ

そこに一匹のタツベイが現れた

タツベイ「ここだな、ギルド『ブレイブ』は」

交差点でいたタツベイのようだ

ドルク「ん？なんだ？依頼か？」

ドルクが近付き言う

タツベイ「人を探しているんだけどよ…それより肉ないか？」

タツベイは肉を要求してきた

ドルク「それならあるぜ…ほらよ」

ドルクはタツベイに肉を渡した

タツベイ「おっ！サンキューな！お前いい奴だな！俺様はアトリっ
ていうんだ」

ドルク「俺は探検隊ブレイブのリーダー兼ここのギルドの親方で元
人間のドダイトスのドルクだ」

ドルクとアトリと呼ばれたタツベイが握手する

シルム「それでアトリ君は人を探しているって言ってたよね？名前
とかは？」

アトリ「ミゲールとデインって言うんだが知らないか？」

この言葉にドルクとシルム：そしてみんながアトリに注目する

そこから

ミゲール「おおー！！いとしの我が息子アトリちゃん！！ん！！」

ミゲールが咄嗟にありえないスピードでアトリに迫るが

アトリ「キモイんだよテメェ！！（怒）ブラスト！！」

アトリは膝蹴り（ひざげり）をミゲールに食らわせた

ミゲール「ぐはっ！？」

ミゲールはそのままぶっ飛んだ

ドルク「ポチッとな」

ドルクは何処からかりモコンを取り出してボタンを押した
すると着地点から床が飛び出た

ミゲール「がつ!？」

それにミゲールはぶつかりそのままずると飛び出た床に顔を引
きずって倒れた

デイン「ボゲエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエエエルウウウウウウウウウウウウウウウウウ
ウウウウウ！！！！！！！！」(泣)

「

デインが泣き叫ぶ

アトリ「まったく、喋れるようになったってのにアトリちゃんと俺様にふざけた呼びで言いやがって（怒）」

アトリはご機嫌がよくない様子だ

ソウ「とりあえず肉とがありますからどうぞ」

ソウは肉を差し出した

アトリ 「おお！ ありがとう♪」

アトリは喜んで食った

ドルク 「どうやら用件は済んだようだな」

すると

アトリ「まああいつは俺の父親なんだよな…でもギルドで働いているのなら俺様も働いていいか？」

なんとアトリがギルドに入りたいらしい

ドルク「構わないぜ」

OKのようだ

すると

クラウド「アトリが来るなんてな♪」

アトリ「おっ！クラウドじゃん、おめえも来てたんだな」

アトリはクラウドとも知り合いのようだ

クラウド「アトリが来てよかったぜ♪」

クラウドは嬉しそうだ

ソル「ひゃっはあああああああああ！面白くなってきたじゃねえか！（黒狂笑）」

ソルが黒狂気笑いをする

シルム「これはかなり穏やかどころじゃなさそうだな（汗）」

シエルマル「あのタツベイすごい（汗）」

父（魔王）「（このタツベイ…できるな…）」

父（魔王）は真剣な目をしてアトリを見た

ピツケル「（すごく嫌な予感しかしない）」

こうしてアトリがブレイブの一員になった

ついでに腹黒同盟にも入った

依頼23 ベビーチートな（後書き）

はい！『いろんな世界へレッツゴーマシン』から続けてアトリが来てくれました

アトリ「よろしくな」

本当は赤ちゃんなのですが、喋るようにしておいてありますので、ちなみに頭いたためか天才です

アトリ 「それよりフオック、肉くれ」

ほい↑こんがり肉を渡す

アトリ 「ありがとな」

ドルク「いっそう賑やかになりそうだぜ♪」

ソル「ひゃっはああああああああああああああああああああ！次回も楽しみだぜ♪（黒狂笑）」

次回はさらに別のキャラが登場です。

依頼24 神出鬼没（前書き）

ドルク「なんだ？このタイトル？」

なんとか書ける！今回はあのキャラが登場ですが…出番が少ししかない感じもあるので（汗）

ドルク「あいつ神出鬼没だからわかるな」

ソル 「そうそう」

シルム「あの人だね（汗）」

それでは依頼24

ソル「ひゃっはあああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ！！（黒狂笑）」

依頼24 神出鬼没

そんなこんなで午後

アトリ「それにしてもすげえな〜ここは」

アトリはこの後ギルド『ブレイブ』を見学してギルドの作りとかに驚いている

ドルク「まあとりあえずはゆっくりしていいぜ、それに肉ならちやんと注文すりゃあクロウドやヤミラミ達に作らせるからな」

アトリ「ありがとな♪」

アトリは嬉しそうに笑顔になる

ミゲール「しくしく（泣）」

その様子を見ていたミゲールは涙目になりながらいじけてしまっていた

前回、息子との再会のはずが逆に膝蹴りをされたためさらに色々言われたためかショックは大きいようだった（汗）

するとそこから

????? 「すごいなここは」

ドルク「!?!?ってお前は!?!」

いつの間にか一匹のポケモンがドルク達のところからいたのだ

半分クリーム色の体毛に半分黒っぽい体毛のポケモンだった、さらに左目には眼帯をしていて背は2メートル、背中には黒い大剣を背負っていた

このポケモンはふんかポケモンのバクフーンだ

シルム「ギルガメスさん、あなたも来たのか?」

????? 「ああ」

ギルガメスと呼ばれたバクフーンは頷いた

デイン「ギルガメツシュヨ?」

シルム「違うよデイン、この人はギルガメスという名前だよ、決して某ゲームのあのキャラじゃないからね」

まあたしかに名前似ている部分はあるが(汗)

ソル「お前どうやって入ったんだよ(汗)」

ソルが質問した

ギルガメス「とりあえずはこっちに入れるようにチェックしといた安心しろ」

どうやら入れるようにしたらしい

ドルク「まああれは敵か味方がどうかを見極めるからな、防犯上は色々チェックしてからだしな」

ギルド『ブレイブ』の防犯も色々だ

ギルガメス「とりあえずこの依頼などもらっておく」

と、ギルガメスは1枚の依頼書を持っていた

ドルク「とりあえずアトリは最初どの仕事にするんだ？」

ギルガメスの方がさておき、ドルクはアトリがどういう依頼がしたいのかを選択している

アトリ「とりあえずはこれだな」

アトリは指さしたのを見ると、お尋ね者の依頼だ

そこにはお尋ね者Aランクのカブトプスと書かれていた

しかもアジトので、場所は磯の洞窟だ

ドルク「まあちょうどAランクのお尋ね者とかの依頼あったからな、まあアトリの実力を見るのにはちょうどいいしな」

とりあえず依頼することに

ドルク「とりあえずメンバーは俺とシルムとソウ、そしてアトリに

するか」

アトリ「よろしく頼むぜドルク」

他のメンバーは別の依頼をすることになった

ソル「ってかいつの間にかあいつ、行ったな（汗）」

いつの間にかギルガメスの姿はなかった

まさに神出鬼没な奴だ

もちろんクロウドはミゲールとデインとピッケルと一緒に依頼をこなしながらの自主トレも含めての特訓をすることになる

とりあえずドルク達は目的のダンジョンへと向かった

依頼24 神出鬼没（後書き）

さて、どういうことになるのか

ギルガメス「俺の出番ってたしかに少ないな」

まああなたの場合はそうですね

ドルク「そうだよな」

ソル「まあ少し出番あったりだしな」

次回はブレイブVSお尋ね者達です

依頼25 全滅のお尋ね者達（前書き）

さて、恐怖の制裁の時間です

シルム「違うだろ!？」

ドルク「それじゃあ依頼25」

アトリ「見ろよ」

依頼25 全滅のお尋ね者達

磯の洞窟

アトリ「ブラスト!!」

アトリの膝蹴り：ブラストが炸裂して敵ポケモンを倒した

アトリ「フン! 口ほどにもねえな」

ドルク「俺にとってはいい修行だしな」

ソウ「まあ師匠は草タイプですし」

ドルクにとっては磯の洞窟は相性では有利な場所だ

シルム「でも水あるからオイラにはね」

逆に炎タイプには不利な場所だ

シルム「まあそれでもオイラは特訓してるけどね」

アトリ「オメエも中々の腕前だと思うぜ」

アトリはシルムをほめる

シルム「ありがとう」

アトリ「それに剣とかも使えそうじゃねえ？」

シルム「そうかな？」

シルムは剣を使えるとアトリは言う

後にそうなるかもしれない

ドルク「行こうぜ」

ドルク達は先に進んだ

……

ドルク「広いところに出たな」

ドルク達は広いフロアにいた

そこに

????「ようこそ俺達のアジトへ……ここが貴様等の墓場だ!!」

そこから数体のポケモンが現れた

その中心にリーダーがいた、茶色の硬い体に腕には鋭いかまをもったポケモンだ

アトリ「どうやらこいつらのようだな」

ドルク「準備はいいか？」

ソウ「いつでもいいですよ師匠」

シルム「オイラもいけるよ」

ドルク達は攻めた

アトリ「ブラスト!!」

アトリは膝蹴りもといブラストを繰り返した

敵ポケ達「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!」

敵ポケ数体がぶっ飛ばされた

カブトプス「なんだと!?!」

リーダーでありお尋ね者のカブトプスが驚く

ソウ「守護方陣!」

ソウの周囲から立ち昇る光弾が相手を襲う

敵ポケ「ぐわっ!?!」

ソウ「さらにホーリークラスター!」

ソウの周りから光弾が数発敵ポケ達を蹴散らす

敵ポケ達「うわあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!」?

シルム「ヒートバレット! ブレイズバレット!」

シルムはバーニストガンで炎の弾を連発する

敵ポケ達「ぐわっ!?! がっ!?!」

敵ポケ達は次々とぶっ飛ばされる

シルム「とどめ! エクスプロードパレット」

銃弾が広範囲に爆発し敵ポケ達がさらにぶっ飛ばされる

カブトプス「何っ!?!」

一瞬でカブトプスの部下達は全滅

残るはお尋ね者のカブトプスのみだ

カブトプス「舐めるな!!!」

カブトプスは攻撃をしかけようとするが

ドルク「残念だが俺達を敵にしたのが間違いだったな…ダマシーマ
シンガン!!!」

ドルクの口から小さい青いエネルギーがカブトプスに直撃する

カブトプス「がっ!？」

さらにおいうちをかけるようにドルクは

ドルク「響け!! 俺のシャウトを!! エナジーシャウト!!」

ドルクが叫ぶと緑音符が数個現れカブトプスに直撃する

カブトプス「ぐわあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!」

音の衝撃でカブトプスは壁にぶつかり倒れた

ドルク「よっしゃあ! 任務完了だ!」

アトリ「やったぜ!!」

ソウ「やりましたね」

シルム「よしっ!」

こうしてブレイブのお尋ね者依頼は完了した

依頼25 全滅のお尋ね者達（後書き）

ドルク「エナジーシャウトすげえ!!」

やっぱシャウトモンだから歌や音楽系統の音を使った技がいいかね新技を

ドルク「やっぱこうでねえとな♪」

アトリ「俺のおふくろとはまだまだだな」

まあそれほどじゃないよ（汗）

シルム「たしかに（汗）」

ソウ「でもそのうち技も結構覚えてきますね」

まあ基本技とかは覚えられるようにオリ技は考えているよ

シルム「オイラもオリ技もつと覚えられるようにしよう!」

うん

ドルク「俺のオリ技すくねえからなくもつとオリ技増やしてえゝかな」

ちゃんとするから

依頼26 バトル好きのリザードン（前書き）

ドルク「おっ！ついにあいつが来るんだな」

そう、今回もコラボス

シルム「結構ブレイブにも来るよね」

まあそうだね

一体誰なのか…それじゃあ依頼26

ドルク「燃えるぜ！！」

依頼26 バトル好きのリザードン

交差点

そこに一匹のポケモンがいた

龍のような顔に両翼、尻尾には炎が灯っていてクリーム色の腹をしたポケモンだ

????? 「ここに…ギルド『ブレイブ』があるんだな…たしかこっちだったな…ここですってえ強くなってやる！」

そのポケモン…リザードンは強くなりたいと意気込む

リザードンは『ブレイブ』の方向へ歩いていく

……

ドルク 「ただいま帰ったぜ」

ドルク達はギルドへ帰ってきた

ギルガメス 「帰ったか」

なぜかギルガメスはいつの間にか食事を取っていた

ドルク 「お前何処でも出るような感じだな（汗）」

ドルクはギルガメスの神出鬼没な現れ方にタジタジになる

シムーン「お帰りなさい」

シムーンが来た

ドルク「ただいま」

ドルクはシムーンに挨拶する

ミネラ「パパお帰り!!」

ミネラがドルクに駆け寄る

ソル「おっ! 帰ってきたな♪こっちはクラウドさんの特訓が結構よかったですひゃっはあああああああ!!」(黒狂笑)

ソルが高笑いしながら駆けつけた

クラウド「おっお帰り♪」

クラウドは重りをつけながら駆け寄る

ミゲール「……」

デイン「はあ…はあ…」

シェルマル「親方、副親方、ソウさんお帰りなさい」

父(魔王)「おお! 帰ってきたか♪」

ピッケル「……」

アレン「ドルク先輩おかえり♪」

雷吉「おお！帰ってきたけんな」

炎丸「お帰りなさいドルク様、シルム様、ソウ様にアトリ様」

カガリ「よくやったな」

ジュク「帰ってきたか」

レビィ「おつかれさま♪」

ゼラス「帰ったか…」

約2名屍と化しているがみんなが帰ってきたドルク達を迎える

そこから

ビービー

ドルク「誰か来たのか？」

入口から

リザードン「ここがギルド『ブレイブ』なんだな」

ドルク「お前は？」

ドルクがリザードンに話かける

リザードン「俺はリードン、あんたがここの親方だな？」

ドルク「ああ、そうだが？」

リードンと呼ばれたリザードンがドルクに話す、すると

リードン「ここに来たのは強くなるために来た…だからあんたのこのギルドに入らせてくれ！！」

リードンは土下座してドルクに頼む

すると

ドルク「頭上げてくれ…いいぜ♪俺がしっかり鍛えてやつからよ」

ドルクは胸をはってそう言う

リードン「ありがとな！あいつに勝ちたいし…なにより俺もまだまだだからな」

シルム「ねえ？そのあいつって誰なの？」

シルムがリードンに質問した

リードン「ポケハン学園バトル部部長の俺と同じリザードンだが名前はラッシュと言うんだ」

シルム「ラッシュュ!?それならオイラ達知ってるよ!」

ドルク「あいつもがんばっているんだな」

ドルクとシルムは5年前にラッシュュと会っていた

リードン「俺はあいつにも勝ちてえ…だからあんた達のギルドに来たんだ…」

理由がそうらしい

ドルク「まああいつ強いからな…まあいいか…でもきっちり働いてもらうぜ?しっかりついてきな!」

ドルクが吠えるように言う

リードン「ああ!よろしく頼むぜ!ギルド『ブレイブ』の親方…ドダイトスのドルク!」

リードンは気合が入ったように言う

依頼26 バトル好きのリザードン（後書き）

はい！『スイクンとギラティナの物語』からリザードンのリードン君が来てくれました！！

リードン「リードンだぜ！よろしくな！！」

えゝスイクンさんどうもありがとうございます

ドルク「まあ俺の誘いでこいつの修行をじきじきにさせてもらうぜ」

リードン「強くなってやるぜ！」

まあラッシュに会うとすぐに喧嘩になるというけど…負けず嫌いな性格だからラッシュに勝てない感じだしね（汗）

リードン「あいつにはぜってえ勝つ！！ここで修行してぜってえ！勝ってやるぜ！！」

まあ難しいけどね（汗）

リードン「何iiiiiiii！！」

ドルク「さて…リードンにはクラウドの地獄特訓とかやっておくか」

リードン「すんげえ嫌な予感が（汗）」

依頼27 体力をつけろ！リードン体力トレーニング1（前書き）

今回はリードン君の体力トレーニングです

リードン「体力か…でもあいつを倒すためなら」

ドルク「俺にしっかりついてこいよ」

それじゃあ依頼27

リードン「気合入れていくぜ！！」

しかし

シルム「昨日体力テストなどすぐやったのに体力があまりなかった
感じだよ（汗）」

どうやら体力テストをしたようだ

クラウド「まあ俺の特訓とドルクの特訓でリードンを特訓してやる
ぜ」

シェルマル「今回俺までも（汗）」

ソウ「いいですね♪それにアトリ君と特訓できるのは嬉しいですし
♪」

アトリ「俺様もソウと特訓できるしよ…」

今回はリードンのための特訓だ

ドルク「じゃあまずはリードン、体力強化のため…重りを足につけ
てもらうぜ」

そう言うドルクはリードンに重りを両足と両腕につけた

リードン「おもっ！」

つけると重く感じるリードン

ドルク「ちなみに空を飛ばないでくれな、特訓の意味ねえからな」

クラウド「俺も重りを」

クラウドも重りを両腕と両足につける

ドルク「クラウドは特訓できたらイチゴ牛乳をあげるぜ」

クラウド「マジ!？」

クラウドはイチゴ牛乳に反応する

ドルク「とりあえず俺達も重りとかはつけている」

ドルク達の両足と両腕には重りがついていた

リードン「ってか重くねえのか？」

リードンはドルク達に聞く

シルム「とりあえずは平気だよ」

ドルク「探検隊ブレイブを舐めるなよ、このぐらい平気だ」

どうやら平気のようだ

ミネラ「僕はまだ無理だからそのままだよ」

シムーン「私は回復などをさせてもらいますね」

二人はサポートと特訓に付き合う

ドルク「それじゃあ今回は修行の山の頂上まで登るぞ！」

リードン「マジかよ!？」

リードンにはきつい特訓だが

ドルク「あいつに勝ちたいんだろ？」

リードン「そうだな…ここであきらめてちゃあいつに勝てないしな」

リードンはある一匹のリザードンに負けたくないために特訓に付き合うことに

ミゲール「マジで重いゝ（泣）」

デイン「重いヨ（泣）」

二人は涙目だ

ケッコ「がんばがんば」

ケッコは応援する

……

修行の山

クラウド「波動弾!!」

ドルク「エナジーフルバスター!!」

シルム「ヒートバレット!」

ミネラ「スプレットボム!」

シムーン「ムーンオブリング!」

ジユク「リーフカルデット!」

ミゲール「爆碎斬!!」

デイン「グレイブ!!」

シエルマル「シエルスラッシュ!」

ブレイブのみんなの攻撃で次々と敵ポケモンが倒れていく

リードン「すげえ(汗)」

リードンはブレイブメンバーの強さに哑然とする

リードン「俺も! うおりゃ!!」

リードンはきりさくやアイアンテールなどで次々と倒していく

ケッコ「頂上まで後8階」

ケッコは頂上までのカウントをする

……

リードン「はあ…はあ…」

修行の山頂上

全員なんとか頂上までついた

ドルク「なんとか登れたな」

リードン「きつすぎるぜ…」

リードンは疲れた表情をしながら言う

ジユク「だがまだまだこれからだ、覚悟しとけ」

リードン「わあゝたよ」

ドルク「それじゃあ降りて昼食にしようぜ」

みんなはうなずいて頂上を降りてギルドへと戻っていった

依頼27 体力をつけろ！リードン体力トレーニング1（後書き）

リードン君の体力特訓は続きます

リードン「さすがにきついぜ（汗）」

ラッシュならこのぐらいがんばれるよ

リードン「なんだと！？ ならがんばるぜ！！」

（単純だ（汗））

ドルク「（まああいつには体力をつけないともたねえしな）」

シルム「（そうじゃないと勝てないからね）（汗）」

依頼28 体力をつけろ！リードン体力トレーニング2（前書き）

まだまだ続きます

リードン「なんか俺のために」

ドルク「まあラッシュに勝ちたいその努力は認めるがまだまだだ、あいつはそれなりに強いからな」

シルム「そんな依頼28ガンドコ行こう！」

依頼28 体力をつけろ！リードン体力トレーニング2

ギルド食堂

昼食

リードン「うわっ！？量おおっ！？」

リードンは驚く

なぜなら目の前にある料理がかなりの量あるのだ

まあ人数的にもそうだが特にリードンのは量がかなりあるのだった

クラウド「俺特製のスタミナがつく料理だ！リードンは体力ねえからスタミナ料理の量多めで他の也多めに作らせたぜ、たーんと食ってくれ」

リードン「（こんなに食えるのか（汗））」

内心食えるのか不安なリードン

ドルク「それじゃあ食おうぜ」

全員『いただきます！！』

全員がいただきますを言う

ガツガツガツガツ

ドルクはいきおいよく食う

リードン「（あいつ結構食うな（汗））」

ドルクの食いっぷりにリードンは唾然とする

リードン「（とりあえず食うか）」

リードンは料理を口に入れる

リードン「（うめえ！！ってかあのルカリオ料理うまいんだな）」

リードンはクラウドの料理をうまいと評価する

リードン「よしっ！食ってやるぜ！」

リードンは料理にがつつく

シルム「やっぱクラウドさんの料理はうまいね」

クラウド「ありがとな♪」

クラウドは喜ぶ

シエルマル「やっぱおなかすきますね」

ミネラ「そうだね♪」

ソウ「動いた後は特にいいですし♪」

アトリ「ああ、ソウと一緒に特訓して楽しいしな♪」

他は喜ぶ

ドルク「おかわり大盛でな」

リードン「(はやっ!?! あいつ食うのはええ)(汗)」

ドルクはすぐさまおかわりをした

……

リードン「ゲップ……う……おかわりもしてかなり食っちゃったがうまかったな」

リードンの腹がパンパンになる

リードン「(それにしてもあいつもすげえな(汗))」

ガツガツガツガツ

ドルクはただいま50皿とかなりの量を食っている

リードン「(それでもあいつの体力はすげえな……俺もあいつを見習わないとな)」

リードンはそんなドルクを見る

……

ドルク「ふうく…さて休憩してから特訓再開だ」

リードン「で？次はどういう特訓だ？」

リードンはドルクに聞く

ドルク「そうだな…まあお前は重りはつけたままでいい、リミッター制限というものだけだな」

シルム「まあ重りはなれるまでは苦勞するけどね」

重りはその動きなどの制限だけでなく…つけている状態とつけていない状態での効果が違う

ジユク「とりあえずは力をつけるにはそれほどの特訓だ、とりあえず覚悟しておけ」

リードン「ああ、わかったぜ」

リードンは納得する

クラウド「次の特訓はつけた状態で腕立てと腹筋してくれな、ちなみに回数は最初は500だけど3回当たりやって合計1500回やつてくれ」

リードン「かなりきついがやってやるぜ」

リードンは意気込み次の特訓を開始する

依頼28 体力をつけろ！リードン体力トレーニング2（後書き）

まだまだリードン君の特訓は続きます

ドルク「俺とクロウドの特訓すりゃあ大丈夫だ」

まあクロウドさんのはダイエットに効果ありそうな特訓だしね↑実際ヘタレウスに効果はあったので

シルム「でも身体のバランスもね」

ドルク「リザードンの平均とかもあるしよ」

たしかにね

依頼29 体力をつけろ！リードン体力トレーニング3（前書き）

張り切っていきます！！

ドルク「さて、さらに今回はあいつの弟が登場みたいだ」

それは誰なのか、依頼29

ドルク「気合入れろ！！」

依頼29 体力をつけろ！リードン体力トレーニング3

トレーニングルーム

早速リードンは特訓を開始した

リードン「1…2…くっ！きついぜ」

重りをつけた状態での腕立てはかなりきつい

ドルク「俺は監視している、クラウドは？」

クラウド「俺は今日弟を連れてくる予定だから」

シルム「へえ、クラウドさんに弟がいるんだ」

初耳である

クラウド「とりあえず連れてくるからその間リードンの特訓の監視してるだろ？じゃあ行ってくる」

クラウドは出かけた

ドルク「とりあえずはシルムは特訓していてくれ」

シルム「わかった」

シルムは席をはずした

……

リードン「はあ…はあ…」

なんとか1セット目の腕立てを終わらせたリードン

ジユク「バテていてはまだまだだ、少し休憩してからだな」

ドルク「ああ、リードン、少し休憩してから次の第2セット始めてくれ」

リードン「ああ…」

とりあえず休憩した

……

それから数時間後

リードン「498…499……500！」

腹筋をしていたリードンはなんとか3セットすべて終わらせた

リードン「はあ…はあ…」

さすがにこれはきつく、かなり消耗したらしい

ドルク「これからこういう特訓をするからな、なれるまで時間かかるががんばってくれ」

リードン「はあ…ああ…」

疲れてあまり話せないリードン

するとそこに

クラウド「連れてきたよ!!」

そこにクラウドがトレーニングルームに入ってきた、別のポケモンを連れて

連れてきたポケモンは足が長く額にVの字の突起物に髪がブロンドなポケモンだった

????「初めまして、弟のレイです」

レイと呼ばれたバシャーモが挨拶する

ドルク「よろしくな、俺はドルク、このギルドの親方だ」

シルム「オイラはシルム、このギルドの副親方だよ、よろしくねレイ君」

ドルクとシルムはレイに挨拶する

レイ「それにしても今は何をやっているんですか？」

レイがドルク達に質問する

ドルク「今リードンというリザードンの特訓をしていたんだ」

レイ「へえ、そうだったんですか……このギルドは結構いいですね」

レイが褒める

ドルク「ありがとな、それじゃあ今日からよろしく頼む」

レイ「はい」

こうしてクラウドの弟レイが仲間になった

……

ドルク「特訓は以上だ、これから毎日やるからな、もちろん依頼とかも特訓だからな、しっかりしとけよ」

リードン「わかったぜ」

特訓は終了し、リードンはかなりボロボロになっていて汗だらけになっていた

ドルク「とりあえず風呂にでも入って綺麗にしとけ」

リードン「じゃあ遠慮なく入らせてもらうぜ」

リードンは2階のお風呂場へ

依頼29 体力をつけろ！リードン体力トレーニング3（後書き）

はい！クラウドさんの方からレイ君が来てくれました

ドルク「これからリードンには厳しい特訓になるけどな」

成長できるように全力でがんばってやらないとね

次回はリードン君を入れての依頼です

依頼30 リードン特訓依頼1 依頼前（前書き）

さて、依頼です

リードン「一体何やるんだ？」

それは見てからのお楽しみっと、ついに30話まで行きました！！
それじゃあ依頼30

ドルク・リードン「燃えるぜ！！」

依頼30 リードン特訓依頼1 依頼前

次の朝

リードン「あゝ体中がいてえゝな」

リードンは昨日のトレーニングで結構体に響いていた

しかし

ドルク「今日も特訓だ、とりあえず明日から朝はランニングをするぞ、リードンは重りをつけながらやってくれ」

リードン「わかった」

リードンが承諾する

ここで説明をしておこう

リードンがつけている重りは道具でおなじみ、パワーシリーズだ、彼の両腕には攻撃を上げるパワーリストと体力を上げるパワーウエイト、両足には素早さを上げるパワーアングルととくこうを上げるパワーレンズの4つの重りをつけている

なのでかなり重いのだが素早さも下がるため動きも限定される

……

お昼

リードン「はあゝ…あゝ疲れる」

リードンはさすがにバテていた

これほどの運動量と特訓量だ、さすがに疲れる

クラウド「とりあえず飯でも食えよ」

クラウドに食を進められ、とりあえずリードンは昼食を食った

ガツガツガツガツ

あいかわらずドルクは結構な量を食っていた

シルム「もぐもぐ…おかわり」

シルムはおかわりをした

運動した分おながが多く、大体ドルクやシルムなどがおかわりが多くなっている

リードンもおかわりをして結構な量を食べた

……

1時間後

ドルク「今回はピーピーマックスを届ける依頼だ、場所は空の裂け

目で俺とシルムと今回はミネラと一緒に行くぜ」

ミネラ「パパとシルムと一緒に嬉しいな♪」

ミネラは小躍りをする

リードン「（重いがやるしかねえ）」

シルム「それじゃあ出発！」

ドルク達は空の裂け目へ

依頼30 リードン特訓依頼1 依頼前（後書き）

さて、色々とリードン君の特訓は続きますよ

ドルク「まあよくやるな」

やっぱなんかやりたい気持ちあるんだよね…次回は依頼2です

依頼31 リードン特訓依頼2 強くなるために（前書き）

依頼です

リードン「やってやるぜ!!」

ドルク「熱意だけは十分あるな」

リードン「おう!俺だってあいつに負けてられねえからな」

それじゃあ依頼31

リードン「負けねえ!!」

依頼31 リードン特訓依頼2 強くなるために

空の裂け目

リードン「やけに暗いとこだな」

シルム「ここはパルサが支配していた空間なんだ、パルサは空間の神だからこうして大体こことかの依頼とかもするし」

空の裂け目：パルキアであるパルサの支配する空間のダンジョンだ、今回はピーピーマックスを届ける依頼だ、もちろんトレジャーボックスにはピーピーマックスが入っている

ドルク「来たぞ」

ドルク達のところから敵ポケモンが攻めてきた

リードン「へっ！やっぱ敵のお出ましかよ」

ドルク「リードンはそちの敵をやってくれ、まあ動きが宣言されているようだがミネラ、リードンのサポートを頼んだ」

ミネラ「まかせてパパ♪」

それぞれ構える、モンスター達が襲い掛かってきた！

リードン「火炎放射！！」

リードンは火炎放射でジバコイルを倒した、だが敵にはリードンと同じリザードンもいる

リードン「くそっ！」

リードンは避けるが攻撃が来て食らってしまうが

リードン「はあ…はあ…」

なんとか耐えている

リードン「（少し体力ついた感じだな…でもやっぱきつい…ダメー
ジを受けているしな…どうすりゃあいいんだ…）」

リードンは少しボロボロになりながら目の前の敵をどうするのか考
えている、そこに

ミネラ「ミネラルスター！」

ミネラは星型の水をそれぞれの敵に飛ばした、敵ポケモン達は食ら
うが耐えたその時

リードン「なんだ？傷がなくなってくる」

リードンの体の傷がみるみるふさがれていた

ミネラ「僕のミネラルスターは食らうと味方や自分の体力と傷を癒
す僕のオリ技だよ」

ミネラのオリ技ミネラルスターはギガドレインやドレインパンチの

ように相手の体力を奪う効果があるらしい

ミネラ「でも僕の実力はこんなもんじゃないよ♪ミネルイラプション！」

ミネラの前から魔方陣が現れ、敵の頭上と地面から大量の水が敵ポケモンを飲み込んだ

リードン「すげえ（汗）」

ドルク「終わったぞ！こっちはどうだ？」

そこからドルクとシルムが敵ポケモンを倒して戻ってきた

ミネラ「こっちは終わったよパパ、シルム」

ドルク「おっ！さすがだな♪」

ドルクが笑顔になる

リードン「すげえなミネラ（汗）」

ミネラ「僕は水系統の技と術とか色々とかんばって覚えたんだ、オリ技もパパとシルムや他のみんなと一緒にやって出来たんだ」

リードン「そうか（汗）」

リードンは改めてミネラの凄さを知った、こんな小さなポケモンでも力はすごいんだから、それが幻のポケモンであるマナフィだからなのだ

……

ドルク「あれだな」

ドルクは依頼主であるポケモンを見つけた

顎は斧のようなものが両頬についていて、黄色い鱗の体色をした龍だった

そのポケモンはここでは見られないポケモン、オノノクスだ

オノノクス「どうもありがとうございますブレイブのみなさん」

これで依頼完了だ

ドルク達は探検隊バッジを使って脱出した

……

ドルク「今日も依頼終わってなんとか報酬もらえたぜ♪」

今回の報酬はドルク達は10000ポケを手に入れた

それほどの報酬だがリードンのは2000ポケ、ドルクとシルムは3000ポケ、ミネラは2000ポケだ

ミネラ「達成できてよかった♪」

リードン「あゝでも達成感が充実していいしな♪」

リードンは笑顔で言う

クラウド「おっ！依頼終わったんだな」

そこにクラウドが来た、さらには

ミゲール「……」

デイン「なんとかがんばれたヨ……」

疲れ気味のデインともはやただのしかばねになった青いマントに頭に青いハチマキを巻いているヨーギラスが……

レイ「兄さんの特訓はかなりのものですし」

レイも来ていた

ドルク「じゃあ早速だがクラウド、料理頼む」

クラウド「わかった！やってやるぜ……！」

クラウドは早速料理を作りに入る

……

その頃、交差点である一匹のポケモンがいた

目つきが鋭く、龍のような顔でお腹は青くなっていて、それ以外は赤色のポケモン、ガバイトとよばれるポケモンだが、このガバイト

は色違いらしい、通常のガバイドは青い体でお腹は赤と下腹部分は白なのだ、さらに腰にはロングソードと呼ばれる剣がついていて背中にはマント、頭には赤いハチマキを巻いていた

ガバイド「ここに父さん達がいるんだ…まったく父さん達、僕を置いてここに来ていたなんてね…」

そのガバイドはガバイドらしくない普通の目つきな感じだった、むしろほころかなような感じだ

ガバイド「たしか父さん達がいるのはギルド『ブレイブ』だったな…待っててね父さん」

色違いのガバイドはギルド『ブレイブ』へ

依頼31 リードン特訓依頼2 強くなるために（後書き）

ドルク「最後のあのガバイドは誰だ？」

次回でわかるよ、実はミゲールさんがヒントです。そしてそれはあの有名な初代主人公です…わかりますか？

シルム「あっ！わかった！あの人だ！」

依頼32 登場！初代主人公！！（前書き）

はい！ついにあの初代主人公のあのキャラがポケモンの姿で登場です！！

ドルク「どうなるかな」

そんな依頼32

ドルク「きやがれ！！」

依頼32 登場！初代主人公！！

ドルク「ガツガツ…あゝうめえ♪」

ドルクは喜びながらガツガツと料理を食っている

リードン「結構うめえ〜！！」

リードンもガツガツと食いながら笑顔で言う

シルム「働いた後のご飯はうまいんだよな♪」

デイン「特訓してうまいヨ♪」

デインが笑顔で言う、やっぱりゲチックだろうか笑顔な感じが一番だ

ドルク「ガツガツ、とりあえずはデインはなれてきたようだな…そろそろ依頼とか受けるようにしてやるよデイン」

デイン「ホントかヨ！？おれっちがんばるヨ！！」

デインが小躍りをする

アトリ「よかったなデイン…それに比べてクソ親父は」

ミゲール「……」

ミゲールは屍状態ですでに戦闘不能ひんし状態だ

クラウド「おかわりならいくらでもあるぜ」

リードン「おかわりだ!!」

リードンが早速おかわりを要求した

アレン「ホントだよね♪」

雷吉「うまいな♪」

ソル「やっぱ仕事の後のチョコサンデーは格別だぜ♪」

炎丸「みなさん喜んでますね」

カガリ「そうだな(汗)」

シエルマル「今のうちに食べておこう」

ジユク「レビィの料理もうまいな」

レビィ「ありがとうジユクさん♪」

ゼラス「このカオスな食事は見てもカオスだな(汗)」

父(魔王)「おかわり!!」

ピッケル「父さん(汗)」

デイシア「まあ私は楽しいからいい」

パルサ「こっちもおかわりだ!!」

ミネラ「やっぱおいしい♪」

シムーン「おかわりはたくさんありますので」

みんな楽しそうに食事する、ちなみにギルガメスは依頼中

すると

ビービー

アラームがなった

入口から一匹のポケモンが現れた、お腹の色が青で体色が赤でロングソードを腰につけている色違いのガバイドだ

ガバイド「すみません、ここの親方はいますか？」

そのガバイドはドルクを呼ぶように言う

ドルク「俺がここのギルドの親方だが？何かようか？」

ドルクは用件を聞く

ガバイド「実は…探している人がいるんですが…ここにミゲールという人とデインという人とアトリという人はいますか？」

すると

アトリ「お前…クレスか？」

アトリが出てきた、するとそのガバイドは！

ガバイド「えっ！？アトリ！？」

さらにそこから

デイン「クレス！」

デインが出てきた

ガバイド「デイン！」

ガバイドは一目でアトリとデインだとわかった

ガバイト「ということは父さんも」

しかし

ミゲール「……」

返事がない…ただの屍だ

ガバイド「父さん（汗）」

こうしてクレスと呼ばれたガバイドは会いたかった人と再会できた

……

ドルク「なるほど…ミゲールと色んな世界をまわってここに来たんだな」

クレス「うん、僕はアルベイン道場の師範をやっている、それに僕の世界でも悪者がいてね」

ドルク達はクレスの話を聞いていた

シルム「でもすごいなく僕も剣を習おうかな？」

クレス「それなら稽古つけてあげるよ」

クレスはガバイドでは有り得ないほど笑顔で言う

シルム「クレスさんありがとう」

シルムはクレスに頭を下げる

クレス「ハハハ、でもここでちゃんと働かせてもらおうよ、これからよろしくね」

こうしてあの初代主人公であるクレスがブレイブに加入した

依頼32 登場！初代主人公！！（後書き）

はい！ミゲールさんの小説…そしてテイルズオブファンタジア主人公！クレスが来てくれました！！

クレス（ガバイド） 「どうも…アルベイン道場師範で父ミゲールの息子、クレス・アルベインです」 ↑ガバイドとは思えないさわやかな笑顔で

えゝ説明するとミゲールさんは作者さんでもあってクレスの父親です。まあ俺もファンタジアはやったことないですが、テイルズザワールドレディアントマイソロジ―3でクレスを知りました。初代主人公の意味はテイルズシリーズで一番最初の主人公がこのクレスからです

クレス 「さすがフォックさんだよ、まあ別のフォックさんの小説でも僕は出ているけど」

あっちのクレスとは同じでも違う感じもありますので

クレス 「でも僕がポケモンの世界にいけるなんて嬉しいな♪」

まあ次回はさらに別のコラボキャラ登場です

依頼33 腹黒なダイケンキと愉快な仲間達（前書き）

はい！今回登場する方はなんと読者さんからの参戦です

シルム「参戦って（汗）」

ドルク「楽しみだな♪」

そんな依頼33

ドルク「行くぜ！！」

依頼33 腹黒なダイケンキと愉快な仲間達

????? 「ここがギルド『ブレイブ』♪すぐでかい♪」

????? 「ここに強いコンビがいるって噂みたいだよ、あたいも熱くなってウズウズしてくるよ」

?????・????? 「まあ俺等も姉御のために生きてきたものですし」

ギルド『ブレイブ』の前には4匹のポケモンがいた

一匹は貝の一本角に白いヒゲをしたポケモン、かんろくポケモンのダイケンキ、一匹はゼブライカ、一匹は鋭い目に透き通った少し白いぎこちない翼のポケモン、きょうかいポケモンのキュレム、そしてもう一匹は6枚の赤い羽根の蛾のようなポケモン、たいようポケモンのウルガモスだ

ダイケンキ「まあいいじゃない、私もここに来たかったんだから♪」

ダイケンキは嬉しそうにする

ウルガモス・キュレム「はあゝ（汗）」

呆れた表情をする二匹のポケモン

ゼブライカ「行くよ」

ウルガモス・キュレム「待ってください！姉御！」

ダイケンキ「あっ！待ってよ！」

4匹は中へと入る

……

その頃トレーニングルーム

リードン「はあ…はあ…」

ドルク「どうした！そんなんじゃないまだまだだ！」

リードンは傷だらけでボロボロになりながらドルクと一戦していた
ちなみにまだパワーシリーズをつけているためはずしていないリードン

リードン「まだまだだ！」

リードンはボロボロでもまだまだいける状態だ

別の方では

シルム「はっ！」

クレス「やっ！」

カキーン！！

シルムとクレスが剣の稽古をしていた

シルムの剣は炎のようでオレンジ色の剣だ、この剣の名はバーニスベルジュと呼ばれる武器だ

クレス「中々剣になれてきたねシルム」

シルム「はい！クレスさんの指導でがんばれてよかったです」

二人は気が合うように剣を稽古を続ける

あれからもう1ヶ月もしていた

リードン「はあ…はあ…」

ドルク「よしそこまでだ」

ドルクが止める

リードン「はあ…はあ…まだまだだが…さすがに疲れたぜ…」

べたりとリードンは座ってしまった

ドルク「まあ筋肉もついてきて強くなった感じはあるぜ」

リードン「ありがとな」

リードンも腕の筋肉がついてきて力強くなった、体力も少しずつ増えてきたがまだまだこれから強くなっていくのだ、ドルクもそう感じていた

ソル「みんながんばっていますね」

デイン「おれっちもがんばるヨ」

ピッケル「もう勘弁して（泣）」

父（魔王）「まだまだ！」

こちらはそれぞれ特訓していた

ミゲール「はあゝ早く俺も依頼とかしてえゝなゝ」

ミゲールは剣の特訓をしていた

アトリ「ブラストブラストブラスト！！」

アトリはサンドバックでブラストを連発している

クラウド「オラオラ！」

クラウドもサンドバックで殴りまくりだ

レイ「（なんか兄さんすごい勢いで恨むような感じで殴っているよ
うな（汗））」

レイはそんな兄を見ている

アレン「はっ！」

ソル「おっと！」

アレンはソルと一戦していた

ソル「中々なもんだなアレン」

アレン「そうかな：私だってもっとがんばらないと」

ソル「まあ無理すんなよ」

と、ソルは優しく言う

……

ダイケンキ「ここがギルド『ブレイブ』：すごくひろい♪」

一方こちら先程の4匹はギルド食堂にいた

すると

シムーン「ようこそギルド『ブレイブ』へ」

シムーンが出迎える

ダイケンキ「こんにちは、私はサフィーっていうの、ここで働かせてもらいに來たんです」

サフィーと呼ばれたダイケンキが自己紹介する

キララ「あたいはキララ、サフィーと同じく働かせにきたんだ：そ

れと戦いたい相手と戦いついでに修行に来たのさ」

キララと呼ばれるゼブライカも自己紹介する

ゼロ「俺はキュレムのゼロ、姉御同様ここに働きに来たんだ」

カゼル「俺はウルガモスのカゼル、ゼロと同じく姉御同様にここに働きに来た」

ゼロと呼ばれるキュレムとカゼルと呼ばれるウルガモスが自己紹介する

シムーン「そうでしたか…では親方のところにご案内します」

サフィー達は頷いてシムーンの後についていく

……

シムーン「親方」

ドルク「どうした」

ドルクが出てくる

シムーン「弟子入りしたいという方達が来ています」

ドルク「今行く！…リードンは自主トレしといってくれ」

リードン「わかった！」

ドルクはシムーンの元へ

サフィー「すごい！なんか熱気が伝わったような感じ♪」

キララ「あたいにとっては喧嘩したくてウズウズするよ！」

サフィーは喜び、キララは戦いたくてウズウズしている、そこにドルクが出てきた

ドルク「ごころうシムーン、で？お前等が弟子入りしたいという奴等か？」

ドルクがサフィーたちに質問する

サフィー「そう♪そして腹黒同盟というのがあるという噂を聞いてはるばるやってきたの♪私はサフィー、そしてこっちにいるのは私の友達のゼブライカのキララとキュレムのゼロとウルガモスのカゼル」

キララ「よろしくな」

ゼロ・カゼル「よろしくな」

ドルク「ああ、こちらこそ」

ドルクは挨拶した

ドルク「腹黒同盟なら入っても構わないぜ、それに弟子入りしてやるが…サフィーの腹黒さはいいな…」

サファイー「そうですか♪私これでも★」

サファイーはどこからかチェーンソーを取り出していた

ドルク「まあ殺傷能力は消してあるからOKにしておくれ」

こうしてあらたに弟子入りする者が仲間になった

キララ「なああんた早速だがバトルしてくれない？あたいすごくウズウズしているんだけど」

キララはバトルしたいとウズウズしていたが

ドルク「わりいが後にしてくれ、こっちも色々あるからな」

キララ「わかったよ…やりたかったのにな」

ふてくされそうにキララは言う

ドルク「悪いな…とりあえずシムーン、案内とかしてくれ」

シムーン「わかりました…それではこちらへ」

シムーンはサファイー達を案内する

するとそこからミネラが入ってきた

すれ違いに通っていく

ミネラ「ねえパパ？あの人達は？」

ドルク「今日から弟子入りする仲間だ、後で挨拶に行くんだぞ」

ミネラ「うん♪」

ミネラがニコやかに言う

依頼33 腹黒なダイケンキと愉快な仲間達（後書き）

はい！読者さんからサファイアさんが来てくれました

ドルク 「読者参戦したな」

感想でサファイアさんが色々とくれたので、今回出演させてもらいました、さてここからどうなるかです。というか次回もコラボですが次回はあの作者さん&単純なワニとその仲間達の登場です（黒）

ドルク 「誰なのか楽しみだな」（黒）

依頼34 手があるマグカルゴとワニと愉快な仲間（前書き）

はい！今度はとある作者さん&あの面白い探検隊の登場です。

ドルク「タイトルからして一体誰なのかだな」

シルム「誰だろう？」

クレス「気になるね」

サフィー「そうですね」

それでは依頼34

サフィー「がんばります！」

依頼34 手があるマグカルゴとワニと愉快な仲間

ここはギルド食堂

????? 「いやゝここのギルドはいいですねゝ」

ドルク 「いやゝこれでもまだまだだけどな」

ドルクが誰かと話していた。話しているのは一匹のポケモンだった、岩の殻はうずまき状態で、体はマグマで目が二つあるポケモンだった、このポケモンはマグカルゴと呼ばれたポケモンだ、だがこのマグカルゴ、普通のとは違って手があるのだった、さらに伊達メガネもつけていた

シムーン 「どうぞお茶です」

マグカルゴ 「どうも」

マグカルゴはシムーンにおじぎして言う

ドルク 「まあ今回は作者によって出演となったなゝノコタロウ」

マグカルゴ 「はいゝ今回出演ありがとうございます」

ノコタロウと呼ばれたマグカルゴはドルクにおじぎした

ドルク 「まあ今回鍛えたい奴等が来るようだが？」

ドルクはノコタロウに聞いたたす

ノコタロウ「はい：今回あいつらを鍛えるために私はここに来たのです」

どうやら彼には目的があるらしい、それはある探検隊を鍛えるためのようだ

なのでそれを待っているようだ

……

その頃

シルム「はっ！ やっ！」

クラウド「まだまだだ！」

一方他のメンバーも今回は特訓だ、ちなみに依頼で行っているものもただいま依頼中だ

ソル「オラオラオラァ！！」

ソルは銃を連射している、的を使つての射撃特訓だ、ただし殺傷能力は抜いている

リードン「うおりゃ！」

クレス「はっ！ 鳳凰天駆！！」

クレスは炎をまとして上ななめにしてリードンを打ち上げてななめ

……

ケッコ「コケッ！上空から何かが飛んできますコケッ！」

ケッコは警報を鳴らす

ドルク「何っ!？」

すると

ドカーーーーーー
ーン!!

何処からか大きな音が聞こえた

ドルク「トレーニングルームから聞こえたな」

ノコタロウ「あ…たぶんあいつらだと（汗）」

ドルクとノコタロウとケッコは急いでトレーニングルームへ

……

トレーニングルーム

シルム「（汗）」

トレーニングルームにいた全員がいた

カガリ「なんだ(汗)」

バトルフィールドの地面にはくっきりと形を残した後があった、しかも3匹のポケモンの落ちた後だった

そこから3匹のポケモンが出てきた

一匹は背中の種があるカエルのようなポケモン、一匹は背中に甲羅があり頭には若葉が生えたポケモン、そしてもう一匹はワニのようなポケモンだった

そこから

ドルク「おい！みんな！」

シルム「あっ！ドルク！」

ドルクとノコタロウとケッコが駆けつけた

ドルク「一体何があったのか？」

ソウ「師匠、実は」

ソウが説明する前に

ノコタロウ「おっ！来たか…というか天井突き破って出てきたか(汗)」

ノコタロウがそう言う、どうやらこの3匹のポケモンが鍛えたい奴等だろう

ドルク「ノコタロウ？こいつらなのか？鍛えたいという奴等は？」

ノコタロウ「はい…こいつらです」

????「って!?!ここは何処じゃ!?!」

????「なんやここ!?!」

????「ってかクロー様!なんか見知らぬポケモン達が!?!」

3匹は辺りを見渡して言う

ノコタロウ「おいお前達」

ノコタロウが3匹に近付く

????『って!?!作者!?!(やないか!?!じゃねえか!?!?)』

3匹は叫ぶ

それでは紹介しよう

この3匹はノコタロウさんの別世界から来た探検隊なのだ

まずワニのようなポケモンがクローと呼ばれたワニノコだ、探検隊のリーダー的存在だ、次に背中の種を背負ったポケモン、シードと呼ばれたフシギダネだ、クローの手下らしくクローを様つけで絶対服従のポケモンだ、最後にドルクの種族でもいえるドダイトスの進化前のナエトルの名はシノと言うらしい、同じくクローの手下であ

り、関西弁を喋るナエトルだ

ノコタロウ「以上です！」

クロー「って何さらすんじゃバカ作者！！（怒）」

クローは怒っていた

ノコタロウ「せっかくフォックさんから特訓をしに飛ばしたのだから感謝するべきだよそこは」

真面目そうにノコタロウは言う

ドルク「つかその前に…お前等…」

ドルクはクロー達を睨みながら近付く

クロー「な…なんじゃ！お前は！」

ドシーン！！とドルクの足音が大きくなる

それは怒りを表してる

ドルク「天井など…こっちできっちり払ってもらうからオラァ！
！（激怒）」

どうやら彼等は着陸したのはトレーニングルーム…しかも天井のため天井には穴が開いているためドルクは穴を開けた張本人達をエナジーフルバスターやさらに派生技エナジーフルバースト、エナジーバスターXなど豪快に放った、クロー達は被害にあって結局天井の

修理代および地獄特訓を受けるために結局強制的にブレイブに入
させられたのであった（汗）

依頼34 手があるマグカルゴとワニと愉快な仲間（後書き）

はい！『ポケモン不思議のダンジョン 葉炎の物語』から、作者さんのノコタロウさん、そしてライバルの探検隊であるクロー、シード、シノの4人が来てくれました

ノコタロウ「こんにちは、ノコタロウです」

クロー「ワニノコのクローじゃ（怒）」↑ドルクにやられたためミイラ状態

シード「フシギダネのシードだ（怒）」↑同じく

シノ「ナエトルのシノや（怒）」↑同じく

ドルク「ついにだな」

そんな次回は：やっぱりやっちゃう地獄特訓（黒）はたしてクロー達の運命は（黒）

クロー「おい！ワシ達を殺す気か！！（怒）」

えっ？何言ってるの（黒）

クロー「（この龍！（怒））」

シルム「どうなるんだろう（汗）嫌な予感しかない（汗）」

依頼35 クロー達の特訓1〜楽しい地獄特訓♪〜(前書き)

クロー「おい!? なんだこのタイトルは!?!」

楽しい地獄特訓開始です♪

クロー「おい!?!」

では依頼35

クロー「負けん!?!」

依頼35 クロー達の特訓1〜楽しい地獄特訓〜

なんとかことが収まりとりあえずは特訓を開始することに…だが

ドルク「さらにクラウドのコーヒー牛乳弁償やソルのチョコレート
サンデー代含めて合計15万払ってもらうぜ」

クロー「なんだと!?! わし等そんな大金持っていないぞ!?!」

もちろん無一文だ

ノコタロウ「じゃあお前達は強制的に働いてもらうからな、まあそ
れで返すってような感じでいいですかドルクさん?」

ドルク「いいぜ、どうせこいつらにはきっちり特訓+働いてもらう
からな」

クロー「もとはといえばそのバカ作者が大砲撃っただからだろ!
!(怒)」

そうクローはいうが

ノコタロウ「ハ〜イワタシニホンゴワカリマセ〜ン」

と無視した

クロー「無視すんなあああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ!!(怒)」

キレるワニの木霊が響く

ドルク「まあとりあえずまずは特訓だな…」

すると

クラウド「テメエ等は俺のコーヒー牛乳を台無しにした…よって特訓を厳しくしてやるから覚悟しとけテメエ等！！（黒激怒）」

クラウドがコーヒー牛乳の事でまだごりつぶくの様子だった、がドルク「とりあえずコーヒー牛乳は後で届けておく、待っていてくれるか？」

するとクラウドは

クラウド「マジ！ありがとなドルク♪」

笑顔になるクラウド

クラウド「じゃあ…特訓開始だが…テメエ等ワニとカエルとなにわ亀…覚悟はできてるだろうな」（黒激怒）」

クラウドの背後には鬼人やらなにやらが現れてくる

シード「（ククククロー様！？すごく嫌な予感が！？）」

クロー「（そ…そんなことワシに聞かれても！）」

シノ「(どうしようクロー様!?)」

そう3匹は考えてもどっちみち特訓はされるのだ…強制的に

…

クロー「はあはあ…」

シード「ぜえ…ぜえ…」

シノ「き…きつ…い…」

クロー達はすでに汗だくで疲れまくっていた

クラウド「オラオラ!! 走れ!!」

クラウドは重さ1000kgの重りをつけて走っている

クロー・シード・シノ『それ以前にお前何者だよ!?(なんや!?)』

クロー達は驚く

彼は一応神で若き青春突入の少年なのだから(汗)

リードン「ふう…なんだかなれてきたなこの特訓」

リードンも走っていた

ちなみにこれは地獄特訓その1、ギルド内のグラウンドを1000

周（重り付き）まわるのだ

ノコタロウ「ほう〜これはすごいですね〜♪（黒）」

ニヤリと笑う一匹の作者マグカルゴがクロー達を傍観する

ドルク「まあクロウドも作者だがこれでもあいつの特訓はすげえ役に立つぜ（黒）」

それがクオリティーなのだ

……

クロー・シード・シノ『……』

彼等は走り終えて返事がないただの屍状態になった

ノコタロウ「そんなんじゃあいつに勝てないぞ」

ノコタロウがそう言う

クロー「なんだと!？」

単純なワニ、クロー復活

クロウド「よしっ!次やるぜ!！」

クロー「おう!」

クローだけ復活したが他二人はそのまま屍状態でダウン

シルム 「オイラ達も」

ドルク達もついていく

•
•
•
•
•
•

クロー「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああつ……！！！！！！！！！！」

クローは当たりまくられた

クロウド「オラオラ!! このぐらいの波動弾避けろや!!」（黒激怒）

クラウドはバットを持ちながら怒る

もはや千本ノツクならぬ千本波動弾ノツクだ

ちなみにドルク達は

クレス「あのクローというワニノコ…やばいね（汗）」

シルム「まあたぶん大丈夫だとは思いますが……なんか単純に起きていましたし（汗）」

クレスとシルムは剣の稽古をしていた、本当はクロウドと続きをしたいのだがクロウドは今クロー達の地獄特訓の真っ最中なのでクレスに交代して特訓をしていた

アトリ「あのワニいい気味だぜ（黒）」

ソウ「面白くなりましたね♪（黒）」

ミゲール「マジおもしろえ〜（黒）」

アトリ、ソウ、ミゲールはクロー達を傍観していた

サフィー「後で激辛パイとかで★（黒）」

サフィーは何か作っている…しかもなぜか素材が辛いものばかりだった

この後クローは色々な目に合い、帰ってきたデイン達は驚いたのはいうまでもない

依頼36 クロー達の特訓2（大食いとバトル前）（前書き）

シルム「もはや修行になってないタイトルだよ（汗）」

気にしない♪

ドルク「おっしゃあ！行くぜ！」

それでは依頼36

ドルク・シルム「行くぜ！！」

依頼36 クロー達の特訓2〜大食いとバトル前〜

ギルド食堂

ドルク「あゝ楽しみだぜ♪」

ドルクは夕食をまだかと楽しみにしている

クラウド「おまたせ！」

クラウドとヤミラミ達が料理を運んできた

ドルク「よしっ！では早速いただくぜ！」

シルム「それじゃあみなさんご一緒に！」

全員『いただきます！』

全員がいただきますを言った

早速ドルクはガツガツと勢いよく食った

ノコタロウ「速い！？」

大食いのノコタロウはドルクの異様な大食いに驚く

クロー「大食いならワシも負けんぞ！！」

クローも負けじと料理をガツガツと食った

ノコタロウ「私もだ！」

負けじとノコタロウも参戦

夕食は大食い対決へとなったが

……

30分後

クロー「ゲフツ……このチート亀……わしよりかなり食うとは……」

ノコタロウ「す……すごい……」

満腹な二人はダウンしたがドルクはというと

ドルク「ガツガツ……おかわりくれ」

かなりの量を食っていたちなみに

ミゲール「俺もおかわり！」

ミゲールもだった

実はミゲールとドルクは大食い対決をしていたことがあって結果はドルクが一気に逆転勝利をおさめたのだ、なぜか仲良く大食いをしている

……

シムーン「とりあえずノコタロウさんは客室で、クローさん達は弟子部屋で」

その後部屋に案内してもらったノコタロウとクロー達

ノコタロウ「さすがギルド『ブレイブ』♪客をもてなしていて最高です♪」

喜ぶノコタロウ

クロー「ワシ等は結局は狭い部屋か」

弟子部屋は狭いが綺麗なのだが彼等三人にはちよつと窮屈きぎゆうくつな部屋なのだ

ドルク「お前等はしかたねえだろ」

サフィー「私のは広いから♪」

サフィーも弟子部屋だが広い

もちろん残りも

クレス「まあ僕や父さん達はそれぞれ広い部屋だしね…」

クレス達ファンタジアオリジナル組は4人一緒の部屋で広い

シルム「それじゃあ寝ようか」

シルム「うん！」

ソウ「眠いですけど師匠の弟子ある僕が師匠と一緒にじゃないと体力が付きませんし」

シエルマル「ふわぁ〜」

ソウとシエルマルもランニングに参加していた

ちなみにミネラは朝の散歩が日課でいつもトレジャータウンをまわっている

……

ドルク「ガツガツ…」

ノコタロウ「（さすがはギルド『ブレイブ』の親方で元人間…大食いとかで体力がかなりある…これはすごいですね）」

朝食もみんなでワイワイと楽しい食事となった

そこにクローが

クロー「なあドルク…ワシと勝負じゃ…！」

いきなりクローがバトルを仕掛けてきた

ノコタロウ「ちょっ!?! お前は何を言っ!?!?」

ドルク「いいぜ」

なんとドルクはOKのようだ

クロー「ワシの実力をみせつけたる！」

そんな二人は対決することに

依頼36 クロー達の特訓2〜大食いとバトル前〜（後書き）

はい！次回はドルクとクローがバトルします

クロー「ワシは負けんぞ！」

はたしてそうかな（黒）

クロー「ワシだってこれ以上は負けんからな！」

ドルク「次回も楽しみにしてくれよな」

依頼37 クロー達の特訓3〜ドルクVSクロー〜やっぱりワニは散る運命とき

はい！対決です

クロー「ワシは負けんぞ！！」

はたしてどうかな〜（黒）そんな依頼37

クロー「行くぞ！！」

依頼37 クロー達の特訓3くドルクVSクローくやっぱりワニは散る運命とき

トレーニングルーム

バトルフィールドにはドルクとクローの二人が立っていた

シルム「それじゃあれよりバトルを始めるよ…どちらかが戦闘不能になった時点で試合終了…二人とも…準備はいい？」

ドルク「いつでもいいぜ」

クロー「ワシは万全じゃ！」

いつも以上に気合を入れるクロー

シード「(クロー様大丈夫なのか…(汗))」

シノ「(クロー様…(汗))」

手下であるカエルと若葉亀は不安がる

シード・シノ「おい!?(怒)」

そんななかバトルが始まった

シルム「バトル開始!」

クロー「ワシの豪快な技で勝負じゃあ!!ハイドロポンプ!!」

クローはいきなり大技のハイドロポンプがドルクを襲う

ドルク「守る！」

ドルクは守るで防いだ

クロー「今度はこれじゃ！氷の牙！」

クローは氷の牙を繰り出してドルクに迫る、ドルクは草・地面タイプを持っているため氷タイプには4倍のダメージがきてしまう…しかし

ドルク「守るだ」

再び守るで防いだ

クロー「くぬぬ…こしやくな！守ってばかりでは勝てんぞ！」

クローは怒りながら言う

クロー「ならば滝登りじゃあー！」

クローは水をまとして突進してきた

ドルク「……」

ドルクは無言で攻撃を受けた

クロー「さらに氷の牙じゃー！」

さらにクローはドルクに噛み付いた、ドルクは甲羅を噛み付かれてしまいだんだんと凍ってきた

クロー「ふははは！ワシの勝ちじゃな！」

クローは勝利を確信するが

ドルク「効かねえなあゝそんな攻撃じゃ俺のロックなハートは打ち砕けねえよ：フン！」

パキーン！とドルクは力を入れて凍った部分の氷を砕いた、ドルクを見るとあんまりダメージを与えたように見えなかった

ドルク「エナジーバスター！！！」

ドルクはエナジーバスターを放つ

クロー「負けん！！！」

クローは避けた

ドルク「エナジーフルバスター！！！」

さらに広範囲となったエナジーバスターを繰り出すドルク

クロー「チッ！」

クローは少しかすったがなんとか避けた

どうやら知らせというのは遠征らしい

遠征とは…ドルクやシルムもプクリンのギルドで体験した遠出での探検の事だ、まだ見ぬ謎や新たな発見など…それが遠征の目的と意味だ、メンバーも誰がいくのかわからない…だがまだ時間はあるため余裕があるようだ

シルム「それじゃあいただくよ」

全員『いただきます!』

久しぶりの遠征…そして他のみんなも初めての事だ、特にシェルマルは喜んでいた

シェルマル「(よし!俺が遠征に選ばれるようがんばらないと!!)」
「

シェルマルはいつもより気合を入れる

ソウ「遠征楽しみです♪」

ミゲール「(よしっ!ぜってえ!選ばれて行ってやる!!!)」

クレス「(遠征か…:どんなところに行くんだろうな)」

デイン「(楽しみヨ♪)」

クロー「(うゝならそこのお宝を絶対にあいつらより先にとつてくれるわ!)」

クローは怪我しながらもそう誓う…運は悪いがその根性だけは一番のようだ

ノコタロウ「（クロー達は無理だろうな…でもどんなところを遠征するのか…わからないな…ドルクさんのことだ…きっとすごい場所に行くのかもしれない）」

遠征場所…そして選ばれるメンバーは！？

依頼37 クロー達の特訓3〜ドルクVSクロー〜やっぱりワニは散る運命とき

やっぱりワニはやられました(笑)

クロー「おい！？ワシ負けてるじゃないか！？」

ドルクが強すぎるからです(笑)

クロー「ふざけるな！！(怒)」

そして：今回なんと遠征が近付きました！！そこでアンケート&募集です。遠征場所ですが：何処がいいでしょうか？もしくは自分達の世界に来て！という方は感想もしくはメッセージでお願いします。そこから1名の方の世界もしくはアンケート募集で行く世界などそれぞれ選ばせてもらいます！それではよろしく願います！そんな次回はついにミゲールさんの初めての依頼となります

クレス「ついに父さんの初めての依頼だね」

まあどうなるかわからないけどね(汗)

クレス「たしかに(汗)」

依頼38 ミゲールの初依頼（前書き）

今回はミゲールさんの初依頼です

クレス「父さんの…」

ファンタジア主人公クレスの父親であり作者のミゲールさんがどう
いう活躍をするのか…依頼38

クレス「負ける…ものかあ!!」

依頼38 ミゲールの初依頼

今日も平和なギルド『ブレイブ』そんな中

リードン「てやっ！」

ドルク「いい感じだ、少しずつ感覚が慣れてきたな」

ドルクはリードンと特訓している、そんな時

ミゲール「ドルクく来たぜ」

ミゲールが来た

ドルク「おっ来たな、今日からミゲールの初依頼だ、しっかりがんばれよ」

ミゲール「気合い入れて行くからな！」

ミゲールは気合い十分だ

ドルク「ほらよ」

ドルクはミゲールに依頼書を渡した、今回の依頼は

ミゲール「：！？マジ！？」

依頼はこうだ

今回の依頼はお尋ね者でさらにお尋ね者はミゲールだけで倒すという条件でとなる。

ミゲール「無理×100！！」

怯えるミゲール、だが依頼なのだから一人で勝てる相手なのかわからない

ドルク「少しサポートする奴もいるから大丈夫だ、がんばれよ」

ドルクは励ます

ミゲール「よっしゃあ！！やってやるぜ！！（マジ無理です（泣））」

がんばる気を見せていても実際は一人でお尋ね者を倒すのは無理があると涙目ではあったミゲール

……

場所は変わって輝きの丘

ミゲール「はあゝ」

ミゲールはため息をつく

今回の同行者はリードン、ソル、クレスの三人だ

クレス「父さん、ため息はいてる場合じゃないよ、ドルクからの初依頼だから」

リードン「俺はパワー系のつけていてあまりうまく戦えねえけどな」

ソル「俺等に任せろ、それにボスと手下だから俺には通用しねえけどなあ」（黒狂笑）

ソルだと一発でお尋ね者をやりそうだ（汗）

すると敵ポケモンが現れる

クレス「次元斬！！」

クレスの剣が青く光る、空間を歪ませて敵ポケモンを一刀両断する

敵ポケモンは次元斬で戦闘不能になった

クレスの技はミゲールから教わった剣術、アルベイン流というのだ
：さらに時空から転移して攻撃して相手を倒す時空の力をもっている

リードン「へえ〜すげえ〜な」

リードンが感心する

クレス「いや、僕もまだまだだよ…僕ももっと腕を磨かないといけないし」

クレスも修行する身、それでも強いのだ…ミゲールのいる…クレスのいる世界はある者の支配によって一度ミゲールは死んでしまったが…クレスの仲間である者の手によって生き返ったのだが…ミゲール自体はボケているようなものになったが、クレスの尊敬する父には変わりはない…彼自体はそのある者を倒したのだから

ソル「でもお前十分強いぜ？それでもすげえとは思う」

クレス「ソル……」

ソルもクレスの強さを理解している、彼も悪魔だが暴れすぎるものがあるがそれでもドルクが彼の世界にやってきたとき、ドルクも喜ぶ…お互いが結ぶ絆というのがあるだろう

クレス「そうだね、僕も仲間と冒険したときはよかったし」

クレスには仲間がいる…自分の世界と自分の世界の過去と未来にいる仲間を

ミゲール「俺はその時死んでいてわからなかったしな」

そりゃわかるわけないだろう（汗）

ミゲール「でもクレスが話してくれてな…」

まあたしかに話せば大体が分かるときがある

ソル「な〜るほどな〜…まあこうして話すのも悪くねえしな」

ギルガメス「そうだな」

リードン「って！？いつの間に！？」

いつの間にかギルガメスがいた

ソル「聞いていたのかよ（汗）」

クレス「気配がなかった…」

ギルガメスなら気配など消してだろう…さすが神出鬼没なバクフー
ンだ

クレス「とりあえず行こう、お尋ね者でも油断できないし」

ミゲール達は頷いてダンジョンを進んだ

……

輝きの丘…お尋ね者アジト

今回のお尋ね者であるデンチュラと言うポケモンとバチュルが5匹
を囲んだ

ミゲール「（ひえ〜おっかねえ〜（泣））」

ミゲールの足がガタガタと震える

ギルガメス「やるぞ！」

みんなが戦闘態勢に入った

クレス「秋沙雨!!」

ソル「オラオラ!!」

リードン「バーングランド!!」

ギルガメス「フン!」

クレスは連続の突き、ソルは二丁の拳銃、リードンは拳を地面に叩きつけバチュルのいる地面から炎を吹き出し、ギルガメスは大剣でバチュルを一掃した

デンチュラ「何っ!?!」

残ったのはボスのデンチュラのみ

後はミゲールがボスを倒すのみとなった

クレス「父さん!がんばれ!」

クレスが応援する

ミゲール「やってやるぜ!!」

ダメ元でミゲールは気合を入れてデンチュラの前へ

デンチュラ「くそ!エレキネット!」

デenchyuは電気を帯びたネットを仕掛ける、エレキネットにかかれば素早さを下げられるのだ

ミゲール「なら斬りつける！」

ミゲールは斬りつけるが

[illegible]

短剣が金属なため電気を通すが

ミゲール「あれ？」

なんともないミゲール

ギルガメス「地面タイプを持っているから電気は通らないようだな」

そう、ミゲールは今ヨーギラスになっているためタイプは岩・地面だ、電気タイプは地面タイプには効果がないためエレキネットは無効になる：エレキネットは電気タイプの技：地面を持っているミゲールには通用しないのだ

ミゲール「よっしゃあ！今じゃあ！！覇王地豪拳！&豪覇斬翔剣！

ミゲールの爆発的なパンチと爆発を入めた剣技でデンチュラを圧倒
デンチュラ「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああああああ
あああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!
「?」

デンチュラはボロボロになって目を回した

ミゲール「おっしゃあ!! 依頼達成だ!!」

ミゲールは喜び依頼を達成した

……

ドルク「ごくろうだったな」

ミゲール「マジきつかったけど達成してよかったぜ!」

ミゲールは喜ぶ

ドルク「ソルもクレスもリードンもごくろうだったな」

リードン「まあ俺もまだまだがんばらねえとな」

クレス「父さんの事心配だったけど…なんとかなってよかったよ…
それにソルとも話とかできたし」

ソル「まあ俺もよかったし…それにお尋ね者を捕まえたしな」(黒
狂笑)

それぞれそう話す、ソルは黒狂笑いをする

ドルク「ミゲールの報酬だが…ほらよ」

ミゲール「…こんだけ？」

ミゲールの手元には500ポケがあった

シルム「ギルドの運営もあるし、それに弟子になった人の報酬は10分の1なんだ」

ソル「まあ俺は客人だが報酬はこんだけだ」

ソルの手元には2500ポケあった、客人のためかそれ以外（ドルクやシルムも含めて）はポケは報酬の半分になる

ミゲール「しよんなあゝ（泣）」

ミゲールは愕然と燃え尽きてしまった、真っ白に

クレス「まあ僕も500ポケだったし（汗）父さんとりあえず休もうよ」

ミゲール「……（灰）」

クレスはミゲールを連れて部屋へ

ソル「それじゃあ俺も休むか」

ソルも部屋で休むことに

ドルク「今回のミゲールはお見事だったな」

シルム「デンチュラ相手によかった、相性では有利だったから」

相性も基本のうち、相手によっては簡単な依頼にもなる

ちなみに残った報酬などはギルドの運営代などに使うのだ、慣れているドルクなどは報酬の半分はギルド運営資金にあてている

依頼38 ミゲールの初依頼（後書き）

ドルク「簡単な依頼な感じだったな」

まあそうだね：デンチュラは電気と虫だから、まあヨーギラスが岩・地面と読めなかったのがアホだったかもね

シルム「まあ相性もあるから有利と不利はあるからね」

次回もお楽しみに

依頼39 クローのハチャメチャ特訓〜強すぎだろ!!〜 (前書き)

クロー「なんだこのタイトルは(汗)」

君の特訓だよ? (黒狂笑)

クロー「(このトカゲ(怒))」

では依頼39

クロー「負けん!!」

依頼39 クローのハチャメチャ特訓〜強すぎだろ!〜

リードン「はあはあ…」

リードンは朝のランニングをしていた

シエルマル「リードンさんももう慣れました?」

シエルマルが走りながらリードンに聞く

リードン「ああ、もうなんだか慣れてきたな…それにあまり疲れとも感じねえし、腕もかなり硬くなったようだしな」

リードンの腕を見るとかなりの筋肉量にはなってきた、相当な特訓をしたためか力が上がったような感じだ

シエルマル「俺も、慣れてきたのでだいぶ体力がついてきましたし」

シエルマルも最近ではあまり疲れなどを感じなくなった、ほぼクロウドの地獄特訓のおかげで体力もついてきた

・・・

クロー「ふわあ…」

クローがあくびをする

ただいま朝食の時間だ

ドルク「さて今日はクローのために特訓付き合ってやるか（黒）」

何かを企むギルド『ブレイブ』の親方：黒くなってる時点で何かやりそうなのだ

ノコタロウ「今回は私が提案した：連続バトルをしましょう」

ノコタロウの提案でクローには連続バトルをしてもらうことに、ここで説明しよう：連続バトルはもちろん相手との連戦でのバトルの事だ：戦闘不能になったらそこで終了となる。なのでかなりのバトルだ：これはさすがに無理があるかもしれないが

シルム「でも無理あるしな：ノコタロウさんそこらへんは大丈夫ですか？」

シルムが質問すると

ノコタロウ「大丈夫でGES、そうじゃないとあの単純ワニ達は強くなれませんし：それにみなさんも強いのでみなさんの修行にもなりますし」

まあ強くなれるメリットにもなるのだ

シルム「まあみんなどれぐらい強くなったのかも見たいしね」

みんなは食事を終えて休憩してからトレーニングルームのバトルフィールドへ

-
-
-
-
-
-

トレーニングルーム

ノコタロウ「よし！お前達三人」

ノコタロウはクロー・シード・シノを呼び出した

シノ「なんや作者、今回はどんな特訓なんや？」

シノが質問する

ちなみにクロー達3人は寝ぼけていたためか内容を聞いてはいなかった

ノコタロウ「今回はここにいるブレイブのメンバーと連続バトルをする」

三人『ちよつと待て!!?』

三人はいきなり待ったをかけた

ノコタロウ「ドルク親方は今回参加はしないが…それ以外の方達と戦ってもらう…以上！」

待ったをかけてもノコタロウは話を進めた

三人「勝手に話進めるなああああああああああああ！！！
あああああああああああああああああああ！！！

(怒)!!!!!!!!!!!!!!

L

というわけで三人の連続バトルが始まった

……

まずはクローからだ

クロー「フン！これも修行だ！ワシは負けん！！」

気合を入れるクロー：まず最初の対戦は

クレス「なんで僕（汗）」

クレスだった

クロー「フン！ワシがこんな奴に負けるわけがない！」

自信満々なクロー

クレス「でもこれ本気でいいのかなノコタロウさん（汗）」

ノコタロウ「どうぞどうぞ♪遠慮なくお願いします♪そうでないと強くなれませんし♪」

なぜか喜んでるように見えるノコタロウ

クレス「それじゃあ遠慮なく（汗）」

クレスは構えた

シルム「それじゃあ第1バトル開始！」

クローの最初のバトルが始まった

クロー「行くぞ！！氷の牙！」

クローは氷の牙でクレスを噛み付こうとする、クレスはガバイドの姿になっているため氷タイプには4倍のダメージを受けることになる。

クレス「空間翔転移！」

クレスは剣を地面に突き刺して掘んだまま青いものに包まれるするとクレスは浮かんで突然姿を消した

クロー「何っ!？」

クローの氷の牙が何もないところを噛み付く

クロー「なっ!?! 何処に消えた!?!」

クレス「せやっ！」

そこからクレスがクローを吹っ飛ばす

クロー「がっ!?!」

クローは大きく吹っ飛ばされ、トレーニングルームの壁に激突する

クロー「ぐはっ!?! 一体!?!」

するとクレスは説明する

クレス「この技は時空を移動して攻撃する技なんだ…これは僕にしかできない技だけだね」

それを見ていた観客席

パルサ「何っ！？これは俺の空間の力と同じような感じだ！？」

ディシア「どうやらクレスという青年は時間と空間を移動するいわばどちらの力も持っているような技を使っているようだな」

神と呼ばれし二人はクレスの時空技に驚く、ディシアやパルサは時と空間の一つの力を持っている…クレスの場合はその時間と空間を合わせた技が時空技だ

クロー「まさかワシの技が当たらないとは…」

クローは気絶した

シルム「第1バトルはクレスさんの勝利だよ」

シルムが勝利コールをする

クレス「僕が時空剣技持っていなかったら今頃ダメージ受けていたよ」

クレスは少し焦った感じもあったがなんとか保った

クロー「くそっ！」

ノコタロウ「7つの秘宝取られたくないのか？」

クロー「ぬっ！やってやるぞ！！」

単純ワニ、クロー復活

クレス「まさかこんな言葉で復活するなんて…彼も結構根性だけはあるようだね」

クレスはそうクローを見ている

次の対戦相手は

ソウ「僕みたいですネ」

次の相手は悪魔亀大魔王ドルクの弟子であるソウだ

クロー「こんな奴が相手だと！？舐めているのか！」

クローは叫ぶが

ドルク「まあ見てろ、それにソウを甘くみるなよ？最悪一瞬で終わるぜ？」

クロー「？」

クローはドルクの言ったことがわからなかった、だがそれが後に知ることになるとは彼はこの時知る由もなかった

シルム「それじゃあ第2バトル始め！」

第2バトルが始まった

クロー「まずはハイドロポンプ！！」

クローは大技ハイドロポンプを繰り出したが

バシヤア！

なぜかソウには当たらなかった…なぜなら目の前でハイドロポンプが打ち消されたのだ…見えない何かによって

クロー「ならこれでどうじゃ！穴を掘る！」

クローは穴を掘って地面にもぐった

ソウ「中々やりますね…でも僕には通じませんよ、ルインライト！」

ソウは黒と白を混ざったエネルギーをクローが穴を掘ったところに向かって放つ、すると穴から光が出てきた

ドカーン！！

さらに爆発がする

クロー「ぐはっ！？」

そこからクローが黒こげになりながらも出てきたが

バタッ！

倒れてしまった

シルム「クロー戦闘不能！ソウの勝ちだよ」

ソウ「僕を甘くみないでくださいね、それでも師匠の弟子ですから」

教訓…どんなポケモンでも甘く見てると痛い目に合う

……

クロー「く…くそっ！」

ノコタロウ「7つの秘宝があいつらに取られたくないのか？」

クロー「よしっ！やってやるぞ！」

再び復活した単純ワニ、クロー、そんな次の相手は

アトリ「俺様だな」

なんとアトリだ

クロー「（油断したがこいつは対したことないな…でも待てよ…あのソウというイーブイだけでなく…あのタツベイも何かありそうだな…だがワシは7つの秘宝のため絶対に勝つ！！）」

クローはそう思っている

しは慣れただろ？」

と、ドルクはリードンに聞く

リードン「ああ、ならやってやるぜ!!」

リードンは燃えるように言う

シルム「とりあえず3連戦にしておくよ、その方がいいと思うし」

リードンは頷いてバトルフィールドに立つ

果たして!!？

依頼39 クローのハチャメチャ特訓〜強すぎだろ!!!〜（後書き）

結局は攻撃が単純で敗れまくりでした

クロー「ちよっと待て!!!?（怒）」↑ミイラになっている

何?

クロー「ワシすんごく被害受けまくりじゃないか!!!（怒）」

このぐらいではまだまだだよ、それに攻撃が単純すぎては勝てないよというか7つの秘宝をとられちゃうよ

クロー「何だと!?!」

ドルク「とりあえずクラウド地獄特訓コース受けろ」

クロー「覚えてろよ!!!（怒）」ワシはすんごく強くなってお前等を絶対倒してやるからな!!!」

フォック・ドルク「（無理だろ）」

っと、さて次回はリードン君の連続バトルです。彼はどこまでやれるのか!

リードン「勝つぜ!」

依頼40 リードン 漢の意地！（前書き）

ドルク「おっ！なんだかすげえ〜タイトルだな〜」

リードン「俺の意地？」

まあ熱いバトルになるよ

リードン「おっしゃあ！！やってやるぜ！！」

では記念すべき依頼40

リードン「行くぜ！！」

依頼40 リードン 漢の意地！

リードンがバトルフィールドに立つ

まず最初の相手は……

キララ「あたいが相手だね！あたもちょうどバトルしたかったんだよ」

ゼブライカのキララだ、彼女にとってはバトルは喧嘩みたいなものだ

リードン「（相手は♀でさらに電気タイプか…これは俺には苦戦するな…だが俺はそれでも負けねえ！）」

リードンが気合を入れる

シルム「それじゃ始め！」

キララ「ニトロチャージ！」

キララはニトロチャージを繰り返した、リードンにとってはダメーシがないが一番厄介なのはニトロチャージの追加効果…それは素早さをあげる効果をもっているため、パワー系のアイテムをつけているリードンには苦戦する。

リードン「（厄介だな…ドルクならたしか素早さが低くても相手をよく見ればいいって言ってたな…）」

リードンはキララの動きをよく見る

キララがリードンに迫る

リードン「（今だ!）」

リードンは技を繰り出す

リードン「バーングランド!!」

リードンが地面を拳で叩きつけると、キララがいる地面から炎が噴き出す

キララ「なっ!?!」

キララは咄嗟に避けた

リードン「ごめんな、れっかれんけん烈火連拳!!」

リードンはそこからキララに連続で炎のパンチを繰り出す

キララ「くっ!やるねえゝあんた!」

キララはなんとか耐えた

リードン「まだまだ!火炎放射!」

今度は火炎放射を繰り出すが

キララ「充電!」

キララは充電を繰り返した、そこから繰り返す技は

キララ「今こそアタイの底力を見せてやる！サンダーインパクト！
！」

キララは電気を帯びてリードンに突進してくる。サンダーインパクトはギガインパクトの電気技であるオリジナルの技、当たればリードンには効果は抜群だ

リードン「ぐわっ!？」

リードンはそれを食らってしまう

キララ「よしっ!」

キララは決まっていたと思っていたが

リードン「まだだ!」

リードンはボロボロになりながらも気合でなんとか耐えた

キララ「嘘っ!？」

キララはリードンが攻撃に耐えたことに驚いた

リードン「紅蓮龍波ぐれんりゅうは!！」

リードンの口から炎で作られた龍が吐き出された

炎の龍がキララを飲み込んだ

キララ「きゃあああああああああああああああ
!!!!!!!!!!!!!!」

キララは炎に包まれて炎が消えた後倒れた

シルム「キララ戦闘不能！リードン君の勝ち！」

リードン「うっしゃあ！」

リードンはガッツポーズをする。だが油断はできない：リードンはサンダーインパクトのダメージもあって体力は不利な状況だ。それでもその根性だけは：ドルクは認めていた。

ドルク「（最初は苦戦したようだがかなりやるな：ダメージを受けているが次とかが不安だな）」

まだ残り2戦もあるのだ（ちなみにクローは強制的に負けても3戦油断はできない

次の相手は……

デイン「今度はおれっちだヨ」

デインだ

デインは術を使って攻撃をする：ただ術でもデメリットがある：それは詠唱時間と詠唱硬直だえいしょうちよく

詠唱時間は術や魔法の詠唱してから術を発動する間の時間の事だ、

だが時間をかけすぎると攻撃されて術の発動を無効にされるのだ、
なのでかならず早く詠唱を済ませることだ…この詠唱を早めるため
の事を詠唱速度と言う、そして詠唱硬直というのは詠唱中自分が術
を詠唱しているときにそのまま動かなくなることと言う、術詠唱で
もかなりのものだ…デインの場合は『星の紋章』という力があり、
その中の『光速の力』というのがある…これは詠唱速度と詠唱硬直
を2倍にして時間を短縮することができる…デインはその術で色々
と練習や集中力を高めている。

リードン「（次はあのトゲチックか…たしか魔法とか使えるんだっ
たな？）」

リードンはデインを見る

デイン「（おれっちも特訓の成果を見せてやるヨ！）」

デインは気合を入れる

シルム「では始め！」

デイン「……」

デインはいきなり詠唱した…デインの周りの地面から茶色の文様が
現れる…

リードン「（どういか!?）」

リードンは構える

デイン「グレイブ!!」

デインは術の名を吐く、リードンの足元からとがった岩が5本も現れてリードンに襲い掛かる

リードン「くっ！」

リードンは咄嗟に空を飛んで回避した、だがパワー系アイテムの重さで少し飛べる範囲まで回避はできる

リードン「(何とかなったが、あの魔法だけは食らいたくねえな)」

グレイブは地属性の術だ、だが同時に岩でもあるため、リードンが食らえば確実に負けてしまうだろう

リードン「(なら一気に攻めたほうがいいな……)」

リードンは迫る

デイン「(来るヨ！なら紋章を発動するヨ！！)」

デインの左手から紋章のようなものが光だした……デインは再び詠唱する

デイン「グラウンドダッシャー！！！」

地面からすごいエネルギーが出てきて、そこから再び岩が地面から出てくる

リードン「(これはふせげねえ！？なら！)」

リードンの拳から炎が出てくる

リードン「烈火連拳！！」

リードンは連続で岩を殴りつけて砕いた…これによって術を防いだ

デイン「（なっ！？砕いたヨ！？）」

これにはデインは驚く

リードン「ウオラァ！！らいげき れつか雷撃烈火拳！！」

リードンは右拳の電気、左拳に炎をまとしてデインを殴った

デイン「ぐわっ！？がっ！？」

デインはパンチをモロに食らって目を回して倒れた

シルム「デイン戦闘不能だよ」

かろうじてリードンは勝てた

リードン「（はあ…はあ…なんとか勝てたが…次で最後だがもってくれよ俺の体力！）」

すでにリードンの体力もそろそろ限界に近付いている。次のバトルで決まるのか…その相手は

シェルマル「俺のようですね」

なんとシエルマルだ

リードン「（最後はシエルマルかよ…相性最悪だな（汗））」

相手はシエルマル…水タイプが弱点のリードンにはかなり不利な状況だ

リードン「（だが雷パンチは覚えている…やるしかねえ!）」

リードンはなんとか気合を入れる

シルム「これで最後だよ、それじゃあ! 始め!」

バトルが始まった

リードン「火炎放射!」

まずリードンは火炎放射を繰り出した

シエルマル「シエルブレード!」

シエルマルは両腰についている二枚のホタチで炎を斬った

リードン「何っ!？」

炎は斬られて消されてしまった

シエルマル「続けていきます! 水の波動!」

シエルマルはそこから水の波動を放った

リードン「くそっ！」

リードンは水の波動を避けた

リードン「（ここは接近戦でいくしかねえ！）」

リードンはシェルマルに迫る

シェルマル「（接近戦ですか…なら俺も！）シェルブレード！！」

リードン「きりさく！！」

シェルブレードときりさくがぶつかる

リードン「ドラゴンクロー！！」

リードンはドラゴンクローを繰り出す

シェルマル「シェルターフェンス！」

シェルマルは二枚のホタチを使ってドラゴンクローを防ぐ

リードン「くっ！」

リードンの技ははじき返された

シェルマル「今だ！^{すいしょうそうは}水翔双破斬！！」

シェルマルのホタチが水に包まれて剣を生成してリードンを斬りつ

けた

リードン「ガッ!？」

リードンは食らってしまい吹っ飛ばされ、地面に倒れたが：

リードン「はあ…はあ…」

体はすでにボロボロでもまだ立っていた、だがシエルマルはそこから攻撃を繰り出す

シエルマル「双牙水斬^{そつが}!！」

二枚のホタチで一気に決めようとする

リードン「(負けねえ! 負けねえんだ!!)」

するとリードンから赤いオーラがまとう、リザードンの特性もうかが発動したのだ

リードン「行くぜ!! 爆炎乱荒拳^{ばくえんらんこうけん}!！」

リードンは拳で炎のパンチをまるで暴れるように連続で繰り出した。それぞれの技がぶつかって爆発が起きた

煙が収まると…二人は倒れていた

シルム「両者戦闘不能!」

この勝負は引き分けに終わった

リードン「最後は引き分けで終わっちまったか…」

リードンは倒れたまま言う

シエルマル「でも俺はいいバトルだったのでよかったですし…」

シエルマルもボロボロになりながら言う

ドルク「お疲れさん、とりあえず今日はここまでにするぞ」

リードン「ああ」

シエルマル「はい」

こうして連続バトルが終わった

それぞれの課題を残して…彼等は成長する

依頼40 リードン 漢の意地！（後書き）

リードン「結構いいバトルになって満足だぜ♪」

シエルマル「俺もまだまだがんばらないと」

その意気だよ…さて！ここでお知らせというかアンケートです。

ドルク「なんだ？」

遠征の事ですが…ここでアンケートをとります、次のうちのこの6つです。

1. 剣士ミゲールさん案の宝島
2. サファイーさん案の聖なる森と聖なる神殿
3. ゼロの島のどれか
4. テイルズオブファンタジアの世界
5. テイルズオブグレイセスの世界
6. レディアントマイソロジー3の世界ルミナシア

以上の6つから1つのどれかにします。

ドルク「すごいな、でもファンタジアとかグレイセスとかレディマ3の世界とかどういう風にするんだ？」

テイルズ系統はたぶんミゲールさん達は人間に一時戻る感じとドルク達はそのままというのもありもしくはドルクとシルムが擬人化するというような感じもあったりも

シルム「遠征と修行だね」

まあそうなるかな…でももちろんお宝とかもちゃんとなんとかしておくから

ドルク「楽しみだな♪」

依頼41 ゼロの島北部での修行と遠征場所（前書き）

ドルク「ゼロの島か」

今回はリードン君と単純ワニの修行です

クロー「よし！やってやるぞ！！」

はたしてどうかな（黒）

クロー「何っ!？」

依頼41 ゼロの島北部での修行と遠征場所

それから1週間後

リードン「はっ！オラァ！！」

リードンは朝から汗をかきながらサンドバックでパンチを繰り返している。ものすごい熱気で連続で殴る

リードン「はあ…はあ…だいぶ体力ついたな」

連続バトル以来さらに彼は強くなっていた、腕の筋肉は逞しくなり、体も体力がついてきたようで腹は変わらないが体力もついてきた

ドルク「おっ！がんばってるじゃねえか」

そこにドルクが来た

リードン「ああ、ありがとな…あいつに追いつけそうかな？」

ドルク「いや、ラッシュだともっと特訓してると思うぜ？あいつならきつとな」

ドルクはそう言う

リードン「そうかもな…あいつも仲間がいたからそうかもしれないな…前の俺は熱中していたから俺もまだまだだったんだ」

リードンは最初の単純である自分を思い出す

ドルク「まあでもお前もよくがんばってきた…それに依頼もこなしてきているしな…これからがんばれよ」

リードン「ありがとな／＼／＼」

リードンは少し照れる

ドルク「そんじゃあ戻ろうぜ、腹が減っては戦はできぬというしな」

リードン「そうだな！それじゃあ行くか！」

二人は仲良くギルドの中へ

…

ドルク「がつがつ！」

リードン「がつがつ！」

シエルマル「がつがつ！」

ドルク・リードン・シエルマルは朝食をがつと食っている

シルム「シエルマル君もよく食べるね」

シエルマル「なんだか慣れてきましたよ、結構動いたから」

シエルマルも地獄特訓によって強くはなっていた

クラウド「そりゃあ、俺の地獄特訓だからな〜♪」

考えた本人が言う

ミゲール「（あゝ逆に俺は嫌だ〜（泣））」

ミゲールは地獄特訓が逆にトラウマになってきた

リードン「おかわりくれ！」

クラウド「おっ！リードンも結構食うな〜」

リードン「まあな！今のうちにスタミナつけねえとな」

おかわりがきてリードンはそのままがつつりと食う

シルム「あまり食べ過ぎて太らないようにね」

リードン「おう！」

そうシルムに忠告されてもガツガツと食い物を食う

……

ドルク「さて、今日の依頼はどうっすかな〜」

ドルクは依頼を選んでいる

シエルマル「それじゃあ俺はソウさんとクレスさんとで」

シルム「いつてらっしゃい」

クレス「シエルマル君をちゃんと鍛えるよ、後でシルムの稽古つけるからね」

シルム「はい！」

シエルマル達は依頼場所へと出発した

ドルク「これにするか」

ドルクが選んだ依頼は

リードン「ゼロの島北部：俺にはやべえな（汗）」

ゼロの島はそれぞれ条件が異なるダンジョンでもある、かなり熟練の探検隊でないとできないのだ北部はある意味簡単だが敵も強い

ドルク「リードン、お前の修行にはちょうどいいから行くぜ」

リードン「しゃあねえな」

リードンが同行

ドルク「後はあの単純ワニと一緒にの方がいいな、あいつには色々教えておかないといけないからね」

シルム「じゃあクローを呼んでくるね」

シルムはクローの元へ

……

シルム「おまたせ」

クロー「ワシを頼むとは、そこのお宝を手に入れてやる！」

クローは意気込むが

ドルク「あゝ悪いが今回は依頼だ、お宝探しではねえぜ？」

クロー「なんじゃと!？」

クローはショックを受ける

シルム「今回の依頼は救出、助けが来ていてね」

どうやら今回の依頼はダンジョンで倒れた依頼主を探すようだ、早速ゼロの島北部へと向かった

……

リードン「くっ! かなりきつい!」

リードンは苦戦していた、重りとかをつけているがさらに強いポケモンもいるため重りつけても苦戦してしまう

ドルク「だがそういうのに慣れるのも修行のうちだ」

ドルクはカイリキーに赤い音符の技、イグニクスシャウトで倒した

クロー「ワシだって！！滝登りじゃ！！」

クローはカブトプスに滝登りするが

カブトプス「きりさく！」

きりさくではじき返された

クロー「どわー！！」

クローは吹っ飛ばされた

ドルク「いきなり単純に攻撃するなよったく…エネルギーボール！」

ドルクはエネルギーボールでカブトプスを倒した

…

リードン「はあ…はあ…」

ただいま依頼主がいる目的地についた、ドルクとシルムはあまりダメージを受けていなく、リードンはボロボロだが体力は残っている状態、ただクローだけは

クロー「なんでワシだけこんな目に合わんといかんだ！！（怒）」

何度もやられてミイラ状態になっていた

ドルク「単純に攻めるからだろ（汗）もう少し考えろよ、俺たちはなれているからあまりダメージ受けねえけどな」

リードン「たしかにすごいな、俺もよく見ていてもそれぞれのポケモンが強いから傷もつくしな」

だがリードンも苦戦はしたがなんとかがんばれた

ちなみにクローのせいで復活の種をかなり消耗してしまった

ドルク「復活の種の代金も追加な、今回お前を連れてきたのは俺たちのバトルをよく見るってことだ、それだけは覚えとけ」

クロー「ワシだってやれるんだぞ！」

クローは言うが

ドルク「そうだとしなくてもな、ただ単純に攻めてはダメだってことをわかってほしい、俺も守りとかそういうの使っただろ？でもお前はただ単純に攻めているから負けるんじゃないのか？」

クロー「うっ！」

クローはそう言われてショックだった

ドルク「まあコツコツと積み重ねが必要だ、慌てていても何も解決はしねえからな」

シルム「クローはパワーあるけどただ闇雲に突き進んではだめなんだ、時に慎重にいかないかね」

ドルクやシルムもクローの事はちゃんと見ているのだ、彼等はベテランの探検隊でもあって親方と副親方なのだから

クロー「(ワシだって! あいつには負けたくもないんじゃない!)」

クローは黙ったままそっぽを向く

クロー「(ワシは豪快なパワーじゃないとワシらしくない! ならここでワシらしい戦いを考えてやる!! 待っておれ!!)」

クローはそう意気込む

……

ドルク「助けに来たぜ」

ドルクは依頼主のポケモンを見つけた、そのポケモンは背中周りがモコモコとした綿のポケモン、かぜかくれポケモンのエルフーンだった

エルフーン「ありがとうございます!」

なんとかこれで依頼は完了した

……

ドルク「ふう〜やっぱここでリフレッシュするのは最高だな」

ドルク達は帰ってきた後、パッチールのカフェでくつろいでいた。

復活の種を使用したため、ただの種になっているのでパッチールのカフェでドリンクにしてもらった

ドルク「ぷは〜！うめえ〜！」

ドルクはただの種を使ったドリンクを飲んでいる

リードン「うまいな」

シルム「うん！」

リードンとシルムはドリンクで幸せな気分になっているが

クロー「なんじゃこのドリンクは！！なんかまずいぞ！！」

クローのは運悪くはずれだった、ドリンクにはまずいのがあって最悪能力が下がる場合があるらしい

パッチール「ごめんなさい（汗）食べ物によってなのです。なので責任は受け付けません」

まあ復活の種の効果でただの種にしたのはクローのせいなので

クロー「くそー！！ワシは絶対強くなってやるー！！」

クローの叫びがパッチールカフェに木霊する

……

ギルド食堂

みんなは席についている。そんな時

シルム「みんな！注目！！」

全員がドルクとシルムに注目する

シルム「今日は発表があるんだ、ドルク」

ドルクが話す

ドルク「発表なんだが…今回の遠征場所が決まったんだ」

ソル「マジ！？どんなところだ！」

ミネラ「パパく何処に遠征に行くの♪」

アレン「何処何処！」

ノコタロウ「気になりますね」

ソウ「師匠く遠征場所何処になるんですか？」

アトリ「何処になるのか楽しみだな！」

みんな何処に行くのかワクワクしている

ドルク「落ち着け、今回の遠征場所だが…別の世界に宝島というのがあってな、そこにはすごいお宝が眠っているというんだ、これはミゲールからなんだがここにしようと思ってな、まあまだ遠征メン

バーの発表まで時間がある、それまでみんながんばってくれ」

ジユク「こりゃ楽しみだな」

レビィ「ジユクさんと一緒なら♪」

ディシア「どうなるかな」

パルサ「絶対遠征メンバーに選ばれてやる！」

グラデル「がんばります！」

みんなが選ばれたという気持ちで楽しみにしている

ドルク「それじゃあ食事とするぞ：後明日ある探検隊が来る」

シエルマル「探検隊？一体何処の方ですか？」

シエルマルはドルクに質問する

ドルク「まあ俺たちとも知り合ってる奴等だ、かなりの腕前だぜ」

シルム「オイラ達はその探検隊と一緒に探検したことがあるんだ」

クラウド「どんな奴等なんだろう？」

クレス「気になるな」

ミゲール「なんか楽しみだな」

一体どんな探検家が来るのか…

それはまた次回

依頼41 ゼロの島北部での修行と遠征場所（後書き）

クロー「ワシがなんでこんな目に!!」

リードン「きつかったな」

ドルク「なぜかクローの場合運も影響しているな」

シルム「たしかにね（汗）」

次回はあの探検隊の登場です。

ドルク「あいつらだな」

そう、あの3人組です。

依頼42 再びチャームズ参上! (前書き)

ドルク「おっ!このタイトルからして!」

はい!その探検隊とは!では依頼42

シルム「ガンドコ行こう!」

依頼42 再びチャームズ参上!

次の朝

今日はいつもと違うようだった

朝食が終わった後

ドルク「俺とシルムは買い出しに行って来るぜ」

シルム「こっちは準備とかしてね」

そう言い、二人はギルドを出た

ジユク「相当すごい探検隊だろうな」

レビィ「どんな人なのかしら？」

ジユクとレビィは気になっていた、もちろん他にもだ

リードン「シエルマルはわかるか？」

シエルマル「いや、俺もさっぱりです」

シエルマルも知らないらしい

クレス「一体誰なんだろう？」

デイン「たしかに気になるヨ」

クレスとデインは首をかしげる

アトリ「なあソウは誰が来るのかわかるか？」

アトリはソウに質問する

ソウ「そうですね…たぶんあの人達ですよ、プクリン親方とは知り合いの方なんです」

ミゲール「あのプクリンのギルドの親方のか？」

ミゲールはそう言い、ソウは頷いた

シムーン「私もお会いしたことがない方達です」

シムーンも会ったことがない人物だ、つまり知り合っているのはドルク・シルム・ソウあたりだろう、そんな時

ビービー！

警報がなり、そこからギルドのドアが開く、入ってきたのは…

…

ドルク「よしっ！これでOKだな」

ドルクとシルムは買い出しを終えたところだった

カクレオン（兄）「今日は何かあるんですか？」

カクレオン（弟）「よほどのことでも？」

カクレオン兄弟はドルクとシルムに質問する

ドルク「ああ、あの三人組がな」

シルム「オイラ達と一緒に探検したことがある…あの三人組だよ」

カクレオン（兄）「もしかして？」

ドルク「ああ、それじゃあ俺達は行くぜ」

ドルクとシルムは会計を済ませてギルドへと行く

カクレオン（兄）「あのマスターランクの探検隊が来るとは…」

…

ギルド食堂

シムーン「お客様ね、ようこそギルド『ブレイブ』へ」

シムーンがギルドに入った者達を迎える

出てきたのは3匹のポケモン、右側のポケモンは細い腕と体に頭に丸いピンクの突起のポケモン、左側のポケモンは白いスカートで緑色の短い髪で左目を隠していて、みぞおちには赤い突起がついているポケモン、そして真ん中のポケモンは兎のようで長い耳に腕にモ

コモコした白い綿がついているポケモンだ

????? 「あたい達はここに用があつてきたんだ」

????? 「ここの親方と副親方はいらっしゃいますか？」

右側と左側にいるポケモンがそう言う

シムーン 「今は出かけておりまして、すぐに帰ってくると思います」

シムーン が丁重に説明した

????? 「あらそうなのゝ久しぶりにブレイブに会いに来たのに二人ともいないなんて」

シムーン 「あのゝあなた方は？」

シムーン が3匹に質問する

????? 「そういえばあたい達の紹介がまだだったね、あたいはチャーレム」

右側にいるポケモン、チャーレムが挨拶する。

????? 「私はサーナイトと申します」

左側にいるポケモン、サーナイトが挨拶する。

????? 「そして私はミミロップよ」

真ん中にいるポケモン、ミミロップが挨拶する

ミミロップ「私達は探検隊チャームズよ♪」

シムーン「えっ!? あなた方がですか!?!」

シムーンが驚く

チャーレム「そう! あたい達久しぶりにトレジャータウンに来て今回ドルク達に会いに来たんだよ!」

サーナイト「5年ぶりですし、それにギルドで活躍していると聞きました来ました」

どうやら来る探検隊というのはチャームズの事なのだ

シムーン「チャームズ…たしかプクリンのギルドの親方であるプクリンの親友であり、マスターランクのトレジャーハンター…まさかうちのギルドに来るなんて」

シムーンはまだ驚いている

ミミロップ「まあ無理ないわね、それじゃあ上がらせてもらおうわ」

シムーン「それじゃあご案内します」

シムーンがチャームズを連れて行く

……

ギルド食堂

シムーン「こちらです」

ミミロップ「すごい！♪ブレイブも立派になったのね♪」

チャームズの三人はギルド『ブレイブ』の広さなどを見て感激する

そこに

シエルマル「すごい！あの有名な探検隊であるチャームズに会えるなんて！」

ソウ「お久しぶりです。チャームズのみなさん」

そこにシエルマルとソウが来た

ミミロップ「あら〜お久しぶり〜ソウ君だったよね？」

ソウ「はい！」

サーナイト「変わらずがんばっているんですね」

シエルマル「(まさかソウさんがチャームズと知り合っていたんて…親方と副親方すごいな〜！)」

シエルマルはそう思っている。

他のメンバーは

ミゲール「あのポケモン達が今日来た探検隊か？」

クレス「どうやらそうみたいだよ父さん」

デイン「なんかきれいな人達だよ」

アトリ「ドルクもすげえ奴等と仲いいんだな」

ファンタジアミゲールファミリーはそう言う

ソル「あいつもすごいな」

クラウド「たしか有名な探検隊だったな、ドルクって顔が広いんだな」

ルカリオ二人はドルクの凄さを思い知らされた

リードン「さすが親方ってとこだな（汗）」

父（魔王）「すごいな」

ピッケル「そうだね」

リードンはドルクの凄さに唖然とし、父（魔王）はあまり驚いていない、ピッケルも父の言葉を受け流す

アレン「すごい♪」

雷吉「さすがじゃけん」

炎丸「ドルク様もシルム様もチャームズという探検隊とは会ったのですね」

カガリ「ブレイブの凄さには驚いたな（汗）」

シャドウの二人と召喚ポケモン二人も驚いている様子だ

ノコタロウ「こうしてはおけない！お前達！お客様が見えている！急いで準備をするのだ！」

三人『結局こうなるんかい！！』

ノコタロウがクロー達に命令して、三人はツツコミをした

そこへ

ドルク「帰ってきたぜ！」

シルム「ただいま！」

ドルクとシルムが帰ってきた

ミミロップ「えっ！？あの二人が！？」

チャーレム「驚いた！？まさか二人して進化していたなんて！？」

サーナイト「私も驚きでした…」

チャームズは久しぶりに会った二人に驚いている

ドルク「おっ！久しぶりだな」

シルム「お久しぶりです。チャームズのみなさん」

ドルクとシルムが頭を下げる

ミミロップ「うっそ〜！ドルクにシルムも久しぶり〜♪あんた達すごいじゃない！すんごくかっこよくなってるし！」

ミミロップは二人の姿にはしゃぐ

ドルク「元気だったか？」

ミミロップ「ええ！早速だけどお腹空いてきちゃったな〜」

シルム「ならここのメンバーで料理とか作りますよ」

ミミロップ「楽しみ〜♪」

こうしてチャームズがギルドに来た

ジユク「聞いたことがあったな、チャームズは」

レヴィ「すごいわ！」

ゼラス「さすがだな（汗）」

未来組は唾然としていた

依頼42 再びチャームズ参上! (後書き)

ミミロップ「みんな〜お久しぶり〜♪希望の空と絆以来ね♪」

サーナイト「私達が来るなんて」

チャーレム「作者もやるね〜」

出さないとなんかしつくりこないからね〜

ドルク「嬉しいぜ♪」

シルム「次回はどうなるんだろう?」

依頼43 来た理由（前書き）

さて、前回チャームズが登場しました、はたしてここに来た目的は！

ミニロップ「それじゃあ依頼43」

チャームズ「華麗に行くわ！」

依頼43 来た理由

ギルド食堂

ミミロップ「それにしてもホントドルクとシルムもかつこよくなつたわね♪」

ドルク「まあな」

シルム「オイラ達も色々がんばってきたからな」

ドルクとシルムはチャームズと話していた。チャームズがこのギルドに來た理由は？

ミゲール「あゝサーナイトさん／＼／＼とても素敵だ／＼／＼／」

ミゲールは鼻の下が伸びていた（汗）

クレス「父さんダメだよ（汗）」

息子であるテイルズ初代主人公がミゲールを抑える、これは母親に見られたら完全にボコボコにされるだろう…

アトリ「だまってろ！ブラスト！！（黒怒）」

ミゲール「シビレビレ……………！！」

某キャラのセリフでミゲールは撃沈した

アトリはミゲールを引きずって退場させた

リードン「すごい探検隊とも知り合いだったんだな」

ノコタロウ「さすがはギルドの親方と副親方：お前達も見習え」

クロー・シード・シノ『作者テメェ！！（怒）』

5年前にドルクとシルムはプクリンのギルドを卒業してから会ったのだ、今回もどうなるのか

ドルク「さて、本題だが：今回の遠征は宝島なんだが、同行などしてくれるか？」

ミミロップ「もちろんよ♪あなた達には借りができているからOKよ♪」

どうやら今回チャームズが来た理由は遠征での同行などであった、理由はチャームズぐらいの探検隊がいたほうが何かと得策なのだ、それにドルクとシルムとも探検したことがあるのでベテランの探検隊は必要なのだ

ドルク「まあ宝とかは山分けという条件だけだな、引き受けるならありがたいぜ」

ミミロップ「まあ山分けも悪くはないわ♪プクリンとも知り合った仲ですし喜んで引き受けるわ」

チャーレム「久しぶりに一緒に探検ができるなんてね」

サーナイト「よろしくお願いします」

こうしてチャームズが遠征に協力してくれた

……

ギルド食堂では昼食の時間となった、みんなが集まって食事を取ろうとした時

シルム「みんな、食事を取る前に今日からチャームズがこのギルドでしばらくお世話になり、さらに今回のギルド遠征にも同行してくれるよ」

ミミロップ「みんなよろしくね♪」

みんな拍手をした

クレス「よろしくチャームズの方々」

クラウド「色々世話になるよ」

レイ「よろしくお願いします」

ミゲール「サーナイトさん！あなたと一緒に俺はどこまで「ブレイブブラスト！！」（黒激怒）シビレビレ！！」

ミゲールはまたもアトリのさらにバージョンアップした膝蹴りを食らって気絶した

クレス「すみませんチャームズの方々（汗）」

クレスはチャームズに謝った

サーナイト「いえいえ（汗）」

ミミロップ「私達は別に大丈夫よ（汗）」

チャールム「まあアトリって坊やも中々いいんだね」

クロー「（あんな探検隊にワシが負けてたまるか！！）」

クローはチャームズに嫉妬する、負けたくないという意味で

リードン「（そういえばあいつらも元気にしてるかな）」

リードンは一緒に旅した仲間の事を思い出していた。

チャームズを加えたブレイブ、遠征もどうなるのか…

依頼43 来た理由（後書き）

今回の遠征：がんばって書こうと

ドルク「まあ色々個性ある奴等ばかりだけど」

シルム「みんな優しいしね」

まあみんないいからね

依頼44 クレスの旅仲間達（前書き）

はい！さらに仲間が増えます

ドルク 「クレスの仲間か：」

シルム 「どんな人達なんだろう」

そんな依頼44

ドルク 「行くぜ」

依頼44 クレスの旅仲間達

次の朝

いつものランニングが始まった

クレス「結構いいトレーニングだね」

クレスは笑顔で走っている。ガバイドは元は目つきが悪いのだが、
が彼は目つきが悪くなく、笑顔でさわやかであった

リードン「クレスもきついトレーニングなのにすごいな」

リードンはクレスが嫌な表情を一つも見せないことに驚く

クレス「僕は父さんの道場の師範でもあるし…僕も仲間がいたんだ」

リードン「仲間？俺も仲間がいるけどな」

クレス「へえ…どんなの？」

クレスはリードンの仲間がどんなのか質問した

リードン「そうだな、種族がスイクンとギラティナとエネコロロな
んだ…まあ俺もジムとか回っているのだがなぜか勝てなくてな…そ
れにあいつと戦っても勝てなくて」

クレス「へえ…まあラッシュも強いからね…僕も戦ったんだ、彼に」

強いライバルの事も勝てないからここにいる…もちろん戦った者は一人だけではない

リードン「クレスもラッシュと戦ったのか？」

リードンは気になってクレスに質問する

クレス「まあ負けちゃったけどすごかったよ」

リードン「そうか…あいつに勝てるようにもつとがんばらないとな…なあクレスの仲間ってどんな奴等なんだ？」

今度はクレスの仲間についてリードンは質問する。

クレス「僕の仲間はね…優しい人とか個性ある仲間だったよ…僕の親友とかもね」

リードン「一度会ってみたいもんだな」

クレスは仲間との思いもある…みんな旅した仲間なのだから

クレス「みんな元気かな…」

クレスは空を見て彼の仲間の事を思っていた

ドルク「結構なれてきたな、ってか何話していたんだ？」

そこにドルクが入ってきた

リードン「ちょうど仲間の話をしていたんだ」

リードンが説明する

ドルク「へえ、たしかクレスの世界の仲間ってそれぞれ時代が違うんだろ？」

クレス「うん、僕の時代からの仲間と過去の世界の仲間と未来の世界の仲間なんだ」

リードン「時間を飛び越えてかゝるすげえなクレスは」

クレスの世界はそれぞれの時代から仲間がいるのだ…時空を超えての出会いなのだから

…

その頃ここは交差点…プクリンのギルド、ギルド『ブレイブ』、海岸とダンジョンに行く道…そこに3匹のポケモンがいた

一匹はつぶらな両瞳に両耳にカールした白いものがついていてさらに白い帽子をかぶっていて杖を持っているポケモン、一匹は赤い鬚たてがみに目つきが鋭く、体毛が黒で弓を持っているポケモン、もう一匹は両腕に黄色のヒラヒラとしたものに黒い耳にはっぺが黄色の丸につぶらな瞳でモモンガのようでホウキを持っているポケモンだ

それぞれヒヤリングポケモンのタブンネ、ばけぎつねポケモンのゾロアーク、モモンガポケモンのエモンガというポケモンだ

タブンネ「ここは一体何処なんでしょう…」

タブンネは清らかな声で言う

ゾロアーク「それにしてもここは俺達の世界とは違うもんだなあ」

ゾロアークは少しさわやかな声で言う

エモンガ「でもあたし達、なんでこんな姿になってるの？ってかここまで来たからどうしよう…」

エモンガはおてんばな声でどうするか困っている

タブンネ「まあ…アーチェさんが空を飛んでいなかったら助かりませんでしたし」

エモンガ「だけどこの姿になってあたし自身も空飛べるけどほうきとかもなんかしっくりこないのよね」

アーチェと呼ばれたエモンガは自分の持つてるホウキに不満をもっていた

ゾロアーク「まあ別に俺達は無事でよかったけどな」

ゾロアークのこの言葉にアーチェと呼ばれたエモンガが反論する

アーチェ「何よ！大体アンタが変な穴を見つけたからでしょ！（怒）」

アーチェの言葉にゾロアークも反論する

ゾロアーク「なんだと！大体お前もわ〜い♪と自分勝手に入るから
だろ！（怒）」

アーチェ「なんですって！この変態！（怒）」

ゾロアーク「言ったな〜！このおてんば娘！（怒）」

二人は喧嘩してしまった

タブンネ「二人とも、喧嘩はやめてください（汗）」

タブンネは困った表情で二人の喧嘩を止める

タブンネ「とりあえずここから何処に行くか決めましょう」

とりあえず何処に行くかを決める三人

アーチェ「でもどっちに行けばいいの？ミント？」

アーチェはミントと呼ばれたタブンネに問う

ミント「そうですね…なら看板にあるギルド『ブレイブ』ってところに行きましょう…なんだかこっちに行った方がいい気がするんです…」

ミントはブレイブの方に行こうと言う

アーチェ「まあたしかにあっちの方がなんかいいかもって感じだけど…でもプクリンのギルドっていうのもあるけどいいの？」

アーチェの疑問にミントは

ミント「たしかにそうですが…でもなんだかこっちに行った方がいいと思って」

そこにゾロアークが

ゾロアーク「まあそうだな…じゃあ行こうぜ」

ゾロアークがギルド『ブレイブ』の方へ

ミント「あっ！待ってくださいチェスターさん！」

ミントはチェスターと言うゾロアークを追う

アーチェ「あっ！二人とも待ってよ！」

アーチェも二人の後を追う

…

こちらギルド『ブレイブ』は朝食にはいていた

ノコタロウ「うまいですね…クラウドさんってすごいですね」

クラウド「俺はそれでも料理は得意なんでな♪」

ノコタロウがクラウドの料理を褒めてクラウドは嬉しくなっていた。

ドルク「まああいつの料理はすげえ〜うめえ〜しなもぐもぐ」

シルム「まあ結構みんなには好評だからね」

リードン「おかわり！」

クロー「ワシもおかわりだ!!」

リードンとクローがおかわりをした

クロー「（ワシだって絶対やってやるぞ!! あんな奴等なんかに負けてたまるか!!）」

クローの目が燃えていた

シード「（クロー様が燃えている（汗））」

シノ「（相当負けたくないんやな（汗））」

仲間である二匹の草ポケ御三家はクローを見て相当なものを感じていた。別の意味で

ミゲール「サーナイトさん！」

ミゲールはサーナイトにナンパしていた

ミゲール「あなたと一緒に食事…」

アトリ「いい加減にしろやクソ親父が!! ブラストV3!!」（怒）

ミゲール「シビレビレー!!」

再びアトリの膝蹴りで鎮圧

クレス「すみませんうちの父がご迷惑を（汗）」

クレスがチャームズの三人に謝った

サーナイト「い…いいですよ（汗）」

チャーレム「後でしごいた方がいいかもね」

チャーレムは膝蹴りの準備をする

ミミロップ「それにしてもみんないいわね」

シェルマル「まあ俺もなれてきましたし」

ソウ「みんないいですよ♪」

と、ソウは言う

デイン「ボゲールまたかヨ（汗）」

デインは呆れた表情で気絶したミゲールを食事しながら見る

アレン「それにしても楽しみだな♪」

カガリ「そうだな♪」

この二人は楽しみでウキウキだった

クレス「（そういえば…カガリさんってなんだかクラスさんの声と似ているな…）」

クレスはカガリを見てある一人の仲間と同じように思っていた。

父（魔王）「さて、私は修行とどうか♪行くぞ！ピッケル！」

ピッケル「ちょっ！？まだ食事中だって！？」

ピッケルは朝食をとりながら父（魔王）の修行へと強制的に引きずり込まれた

ソル「さて、次は何処いこうかな」（黒）

ギルガメス「そうだな」

ソルとギルガメスは今日の依頼についてを決めている。

ミネラ「今日はどうしようかな♪」

レビィ「決まらないわね」

ジユク「そうだな…」

ゼラス「私は一人で行く…二人はソルとギルガメスの方がいい」

こちららも依頼をどうするか決めている。ミネラは楽しそうに食事しているが

クレス「（みんな来てくれればいいな）」

クレスは食事風景を見て、一緒に旅した仲間が来ればいいと思って
いた。そんな時

ビービー！！

警告音になる

ドルク「こんな時間に来るとは…一体誰なんだ？」

シムーン「とりあえず行ってきます」

シムーンがギルドの玄関へ

…

ギルドの玄関には3匹のポケモン…先程交差点にいたポケモン達だ

玄関からシムーンが出てきた

シムーン「どちらさまですか？」

シムーンが出てきた

ミント「あの…私達実は迷いこんでしまって…それでここに来たの
ですが…」

ミントが説明する

シムーン「それじゃあ中に入ってください、少しこちらでしばらく話とかしたほうがいいですし」

ミント達は頷いてシムーンについていく

……

シムーン「親方！」

シムーンがミント達を連れてきた

ドルク「ん？そいつらは？」

ドルクが3匹を視線を向く

シムーン「実は迷ってしまった方達みたいです」

シムーンが簡単に説明する

ドルク「そうか…まず名前を聞きたいんだがいいか？」

ドルクが3匹に名前を聞く

ミント「はい…私はミントと申します」

するとクレスが席を立った

クレス「えっ！？ミ、ミント！？」

クレスはミントの元へ向かう

ミント「えっ!？」

ミントは驚く

クレス「僕だよ! クレスだよ!」

クレスがそう答える

ミント「えっ!？ク、クレスさん!？」

チェスター「まさかお前!？」

アーチェ「えっ!？クレスなの!？」

他の二人も驚いていた

ドルク「（これは思わぬ再会ってとこだな）」

クレス「まさかみんなポケモンの姿になって来るなんて」

ミント「ポケモン? 私達の姿ですか?」

どうやらミント達は自分達の姿がポケモンだとわからないようだ、
そりゃそうだろう…彼女達はこの世界に来たばかりだから

……

とりあえずミント達はここまでの事をドルク達に説明した。

ドルク「まさかクレスの旅した仲間だったんだな」

シルム「へえ、クレスさんの知り合いでもあるんだ」

ドルクとシルムも驚いている様子だ

クレス「うん、まさかこんなところで出会うなんて思ってなかったよ……でもミント達はこれからどうするの？」

そう、これからどうするかだ

ドルク「でもクレスの仲間だから俺達のところにいた方がいいと思うぜ？それにクレスの仲間だからなおさらだ……いいか？」

ドルクはミント達に聞く

ミント「そうですね……クレスさんにミゲールさんにデインさんとアトリ君もいますからここにいた方がいいですし」

チェスター「まあそうだな……それにクレス達がいなかったから心配していたんだ」

アーチェ「まあでも面白そうだし♪」

3人は承諾してくれたようだ

ドルク「じゃあよろしくな……そのかわり働いてもらうがいいか？」

その質問に三人は答える

ミント「私の法術なら傷を癒すことができますから回復とかはお願
いします」

ミントは法術と呼ばれる治癒術をもっており、補助系統も使えるのだ

チェスター「俺は弓で百発百中でしとめてやるぜ」

チェスターは弓を使うようで、遠距離から攻撃はできるようだ

アーチェ「あたしは魔力あるからいいもの♪まあよろしくね〜ドル
ク〜」

アーチェは元人間だがハーフエルフという種族だ、だが今はポケモ
ンの姿だが、魔術は使えるのだ

こうしてクレスの仲間達がギルド『ブレイブ』に入った

依頼44 クレスの旅仲間達（後書き）

今回ファンタジアの三人のキャラをポケモン化しました、ミゲールさんと話してこうしたようなポケモンに

ミント「でもクレスさん達に会ってよかったです…」

クレス「僕も嬉しいよ」

まあせっかくクレスがいることなのでファンタジアの仲間はずせませんし

ドルク「そうだな」

依頼45 それぞれの探検（前書き）

今回は短いです

ミント「今回はなんですか？」

とりあえずは三人が来たから依頼をやってもらおうとね

チェスター「まあたしかにな」

アーチェ「どうなの？」

まあまあ待て待て、とりあえず依頼45

ミント「始まります」

依頼45 それぞれの探検

クレスの仲間の三人を仲間に加えたブレイブ、とりあえずドルクやクレスとかがポケモンについての事をミント達に説明して納得させた。そりゃあ別の世界に来てポケモンに驚くだろう…なので説明をしてからミント達は食事をして…

ドルク「さて今回依頼だが…クレス、今回はミントと俺とシルムで依頼をしていいか？」

ドルクの言うことにクレスは

クレス「それは構わないけど？大丈夫かい？」

クレスは心配するが

シルム「まあ少しなれるのにもちょうどいいですし、それに法術というのもあるから傷とかの回復もできるから一緒に同行して仕事の事を見て覚えたほうがいいですし」

というわけでドルク・シルム・クレス・ミントはダンジョンへ

ミゲール「じゃあ俺はサーナイトさんと…」

アトリ「べるぜバブラスト！！（怒）」

アーチェ「インディグネーション！！」

チェスター「あ、ああ（なんかすごい奴等だな（汗）しかもルカリオのソルだったか？なんかすごく黒いオーラを感じるぜ（汗）」

チェスターは異様にソルの何かを感じていた。彼の狩人という本能からののだろうか：

アーチェ「とりあえずチェスターは足引っ張らないでよね」

アーチェがニマニマとする

チェスター「誰が足引っ張るかって！」

怒ったような口調でチェスターは言う、4人は別のダンジョン：依頼を受け取って出発した。

ノコタロウ「さてお前達は修行だ、特にクローはクラウドさんの特別特訓を受けてこい！」

クロー「ちょっ！？ワシ死ぬ！？」

クローは嫌々言うが

ノコタロウ「7つの秘宝を取られたくないのか？」

クロー「やってやるぞ！！」

結局やることになってしまった

シード・シノ「（クロー様（汗）単純すぎですよ（汗）」

そんなクローに呆れる子分の二人

そんな三人の初依頼、果たして！

依頼45 それぞれの探検（後書き）

ミント「私の法術が役に立ってくれればいいですが…」

クレス「大丈夫だよミント、僕がついてるし…それにドルクやシルムもいるから」

安心してミント

ミント「はい…」

次回はドルク達視点から行きます

依頼46 ミントの力と理由のお尋ね者（前書き）

さて！まずはドルクルートです

ドルク「俺のか」

そしてなんとそこから新しいメンバーができるかもです

クレス「気になるね」

シルム「それじゃあ依頼46」

ミント「よろしくお願いします」

依頼46 ミントの力と理由のお尋ね者

それぞれ三人は依頼を受けることになった

ドルク・シルム・クレス・ミントは神秘の森にいた

ドルク「今日の依頼はお尋ね者だ、しかもトレジャーハンターなのに犯罪者というか盗みとかをやる奴だ」

クレス「それで？そのお尋ね者の種族は？」

クレスが質問する

ドルク「ああ、どうやら♀のジュカインのようなんだ」

ミント「なんだか怖いです…」

ミントは不安がるが

クレス「大丈夫、僕やドルクやシルムが守ってあげるから」

シルム「オイラ達は強いからちゃんと守るよ」

ミント「ありがとうございます」

この四人だといった感じのようだ

……

ドルク「そういえばミントは攻撃術ないようだがどうするんだ？」

ドルクは攻撃技のないミントに質問する

ミント「私は法術を使うので攻撃術とかはないんですが…ほぼ杖で叩くようですね」

シルム「それしかないけど、でも補助や回復はオイラ達にとってはいいと思うし」

クレス「うん、だからサポートはミントとかに任せればいいよ、アーチェは魔術使うし、チェスターは弓でしとめてくれるんだ」

クレスはそれぞれの仲間の特徴を言う

ドルク「なるほどな…だけど相手を状態異常にする術はあるんだろ？」

ミント「はい、ピコハンとかピコピコハンマーなら」

補助の中では相手の動きを封じたりの術もある

すると

ドルク「止まれ」

ドルク達が止まる

ドルク「エナジーバスター!!」

ドルクがエナジーバスターを葉が多いところに放つ、すると

ガサッ！

素早く黒い影が一瞬で移動したのが見えた

「????」あら、さすがブレイブね、あたしのことを見つけるなんて」

そこにいたのは一匹のポケモン：ジュカインだった

ドルク「伊達に探検隊やってねえよ、さすがにやるなくお尋ね者ジュティア」

ジュティア「あら、あたしの名前まで：でもあたしは色々あるのそれじゃあね」

ジュティアは去るが

シルム「シルムシュート！」

シルムがシルムシュートを放つ、ジュティアはそれを軽く避けた

ジュティア「逃がす気ないのね：あたしも事情があるの：ならいかせてもらおうわ！」

ジュティアがリーフブレードとさらに短剣を持って構える

ドルク「来るぞ！」

シュン！

ジュティアは素早く移動、ターゲットは

シルム「うわっ！」

シルムだ、だが咄嗟に剣で防いだためなんとかあった

ドルク「エナジーボール！」

ドルクはエナジーボールを当てるが

ジュティア「そんな攻撃当たらないわ！」

ジュティアはそれを軽々と避けた

ジュティア「ならこれならどうかしら？アイストルネード！」

ドルク「何っ!？」

クレス「魔術を使えるなんて!？」

ドルク達はジュティアが魔術を使うことに驚いた、アイストルネードがドルクを襲う

ドルク「くっ！ロックフェンス！」

ドルクはロックフェンスでアイストルネードを防いだ、しかしロックフェンスは凍って砕けてしまった

ジュティア「隙を与えない！タイダルウェイブ！」

さらに大洪水を発生させた

シルム「うわっ！」

ドルク「くっ！」

クレス「うわっ！」

三人は大洪水で流されてダメージを受けてしまった。特にシルムは水属性に弱いため大ダメージだ

シルム「やばい…オイラかなりダメージを受けちゃった」

シルムは体力が残されていない、炎タイプだがもうかも発動はしているはずだ

ドルク「シルムは休んでいろ！ミント！シルムを治療してくれ！」

ミント「わかりました！」

ミントはシルムの元へ

クレス「魔術を使えるなんて…これはなんとかしないと」

ドルク「とりあえずやるぞ！」

ドルクとクレスが迫る

ジュティア「あたしに勝てると思わないで！ブリザード！」

今度は吹雪がドルクとクレスを襲う

ドルク「エナジールバスター！」

ドルクがエナジールバスターで押し流そうとする

ブリザードとエナジールバスターが押せ押せと一歩も引けない

クレス「隙ができた！秋沙雨！」

クレスが連続の突きをジュティアに繰り出すが

ジュティア「そんなのお見通しよ！」

クレス「なっ！？」

ジュティアは秋沙雨を避ける

クレス「くっ！なんてスピードなんだ！？」

ドルク「これじゃあうまく攻撃があたりねえ…」

もはやピンチのブレイブ

……

ミント「ヒール！」

ミントは法術であるヒールを唱えた、シルムの体に光が包まれていておさまった

シルム「ありがとうございます、助かります」

シルムはミントにお礼を言う

ミント「いいえ、お役に立ててよかったです」

シルム「でもあの素早さじゃうまく攻撃ができないよ」

シルムは戦っているドルクとクレスを見る

ミント「なら方法があります、ちょっと耳を貸していただけますか？」

シルム「わかりました」

ミントがシルムに方法を使えた

シルム「…そんなことができますか!？」

シルムは驚いている

ミント「任せてください、こちらの方をお願いしますシルムさん」

シルム「わかりました、それじゃあ後は任せます!」

シルムはドルクとクレスの元へ

ミント「私の秘奥義なら…」

ミントが言う秘奥義…それがこの戦いのカギになるだろう

……

ジュティア「そろそろあきらめたら？ あたしも色々あるの」

クレス「はあ…はあ…攻撃を避けたりで当たらない…」

ドルク「あきらめるか！ 俺もそう簡単にいかねえ！」

ドルクが強気で言う

ジュティア「強気で言えるわね？ 対策とかもとってないのかしら？ まあどう来てもあたしを捕まえるのは無理よ、あんたも何か理由あって熱くなってるけど捕まえるものなら捕まえてみなさいよ！」

ジュティアは自身満々に言う

????「それはどうかな！ スライディングバレット！」

ジュティア「!？」

ジュティアに炎の弾が数発も飛んできたが、ジュティアはそれをうまく避ける

ジュティア「あら、復活早かったみたいね」

ドルク「シルム！」

ドルクは自分のパートナーの名を呼ぶ

シルム「ごめん遅くなって、パートナーを守るのがオイラの役目だから」

ドルク「ああ、ごめんなお前を守れなくて」

ドルクは落ち込むが

シルム「いや、オイラも魔術には油断したよ…でも大丈夫…オイラも本気でいくから！大地に燃える炎よ！バーンストライク！！」

ジュティアの地面から炎が吹いてきてさらに上斜めから炎の弾が3発降り注ぐ

ジュティア「スプレッド！」

水流を圧縮して上空で炎の弾を打ち消した

ジュティア「なんどやっても無駄よ！」

シルム「それはどうかな…ミントさん！」

ミント「これ以上させません！」

ミントは宙に浮いていた

ミント「時を統べる神の御技今ここに！タイムストップ！」

すると時間が止まり、背景も色が変わってきていた

ジュティア「(なっ!?!?か…体が…動かない…)」

ジュティアは動けなくなっていた。これがミントの方法だ…ミントは法術使いで補助と回復の術が多い…だが攻撃系の術はない…だが彼女には秘奥義があるのだ…彼女の秘奥義は相手を一定時間動きを封じる秘奥義だ…相手の動きを止めれば相手の素早い行動などは封じられたも当然なのだ

ミント「今です!」

シルム「行くよ!」

シルムはジュティアを剣で斬りつけて吹っ飛ばし、そこからバーニストガンを取り出して

シルム「派手に踊れ!!」

バーニストガンの乱射でジュティアにダメージを与える

シルム「アンスタンヴァルス!!」

その技の名で一発炎の弾を発射した

ジュティア「きゃっ!?!」

ジュティアは飛ばされる

ドルク「おっと!」

ドルクが背中の木をクッションにしてボロボロのジュティアを受け止めた

ジュティア「くっ！」

ジュティアはドルクをにらみつけた

ドルク「おいおいにらむなよ…まあ理由と言うのも話しておかないとな…」

ドルクはジュティアを降ろした

……

ジュティア「……」

ジュティアは捕まって縄で巻かれていた

ドルク「さて、突き出す前に聞きたいことがあるんだが…お前本当は何か理由があって盗みとかしていたんだろう？」

ジュティア「!？」

ジュティアは驚いた表情をする

ドルク「やっぱな…お尋ね者の中には何かしらの理由のありなしとかがあるんだよな…それにお前は事情があるとか言っていたしな…話してくれるか？もしかしたら俺達が力になってもいいけどな…」

するとジュティアが口を開く

ジュティア「あたし…本当は孤児院にいる子供達がいるの…みんな親が誰もいないし…それにあたしも両親ともいないんだ…」

シルム「だから子供達のために盗みを働いたってことだね…」

ジュティアは首を縦にふった

ミント「そうだったんですか…ならこれから罪を償えばいいんです。貧に落ちるポケモンもこの世界にはいるんですね…」

ミントは悲しい表情をする

ジュティア「あんた…優しいんだね…」

ミントの言葉で少し涙が出てきた

ミント「私も母をなくしてしまっているんです。だからその気持ちとか少しわかりますし」

ドルク「俺もだ…俺は元人間で両親の事も記憶にはない…」

ジュティア「そうだったんだ…でもあたしこれからどうしたらいい…」

ジュティアは悲しそうな表情を見せる

ドルク「なら俺のところで働くか？それにお前も強いじゃねえか」

ドルクがジュティアの肩をポンと叩く

ドルク「戦ってわかったぜ…理由があって負けられなかった…絶対捕まりたくなかったと…ならこっちで面倒見てやるよ…これからがんばればいい…だから無理してこういうことをやるな…トレジャーハンターというのは盗みとかそういう感じのもんじゃないやねえ…だからそいつらを悲しませるな…そうになったら誰も面倒なんて見てくれねえよ…まあ俺達が色々と事情説明とかしてなんとかしてやっからよ」

するとジュティアの目から涙が零れ落ちてきた

ジュティア「う…くすっ…ありがとう…」

理由はきつと何処かにある…彼女のように大事なものを失うことが

…

ドルク「とりあえず縄ははずしたがまずは戻って警察とかで色々と手続きとかをしてもらうぜ」

ジュティア「ありがとね…（悪魔亀大魔王と呼ばれた元人間でも…なんかあいつの事…）」

ジュティアはドルクの何かを思っていた。それは後にわかるだろう

シルム「それじゃあ行こう！」

クレス「ああ」

ミント「はい」

ドルク「ああ」

ドルク達は探検隊バッジをかざしてダンジョンを脱出した

依頼46 ミントの力と理由のお尋ね者（後書き）

シルム「こういう話を書く作者さんも珍しいね」

そうじゃないとんだかね

ドルク「まあ仲間になりそうかもね」

まあそれは次の次辺りぐらいで、次回はチェスター&アーチエの力
ツプルコンビとソル君とリードン君の四人の探検です。

依頼47 海のリゾートで（前書き）

さて、チェスターとアーチェの視点はどうか、依頼47

チェスター「行くぜ！」

依頼47 海のリゾートで

一方リードン・ソル・チェスター・アーチェの四人は海のリゾートに来ていた

ソル「ここでグミ探しか…しかもくろいグミらしい」

アーチェ「もしかして？そこらへんに落ちているグミの中にあるってわけ？」

海のリゾートはグミが拾い放題＋食べ放題のダンジョンだ

チェスター「ようするに黒色のグミを見つければいいんだろ？」

リードン「ああ、特徴分かれれば後はなんとかなるだろうな」

アーチェ「じゃあ探そうよ！」

アーチェがホウキに乗って飛ぶ

チェスター「あ！おい！」

チェスターがアーチェを追いかける

ソル「ホウキで飛ぶなんて魔女かなんかか？」

リードン「空飛んでいいのか(汗)」

ダンジョンでは低空なら大丈夫だが高く飛ばないように

……

アーチェ「え」と

アーチェは色々とグミを次々と拾っていく」

チェスター「かなりあるな」こりやあ…凍牙！」

チェスターは咄嗟に氷を纏った矢を敵ポケモンに放つ、敵ポケモンは当たって動きがぶくなった

リードン「獄炎拳！」

リードンはさらに火力が強い炎のパンチでさきほどの敵ポケモンを倒した

アーチェ「天光満る所に我はあり…黄泉の門開く所に汝あり！出よ！神の雷！インディグネーション！！」

すると空から雷が降り注ぎ敵ポケモンを倒していった

ソル「おっ！魔術みたいだな」

アーチェがやったのが魔術だ、これは詠唱とかも必要でもあるのだ…たとえばデインの場合は紋章効果とかで詠唱の時間を短縮とかもできたりでさらに地属性の術が多い、しかしアーチェとかは属性の術が豊富である

アーチェ「これでもあたしだって魔術は使えるわよ、今はポケモン
だけどあたしは人間の血とエルフの血であるハーフエルフだから」

クレス達の世界では人間やエルフというのが存在する。エルフは魔
術が使えるが人間は魔術は使えない：しかし人間とエルフの間の血
で生まれたハーフエルフはエルフの血を半分もっているため魔術が
使えるのだ

リードン「（俺も魔術使えたらな〜）」

リードンは自分が魔術を使えればと思っていた。

ソル「とりあえず行こうぜ」

四人は歩き出した

……

アーチェ「あった!」

チェスター「これが黒いグミかゝたしかに黒いな（汗）」

アーチェは黒いグミを見つけたようだ、まあエモンガの姿でもホウ
キにまたがって空を飛んでいるのだから（汗）

リードン「それじゃあ戻ろうぜ」

四人は探検隊バッジを掲げてダンジョンを脱出した

依頼47 海のリゾートで（後書き）

チェスター「なんだかあまり実感わかないな」

依頼は色々あるからこういうのもあるんだよ

アーチェ「へえ、そうなんだ」

次回はドルク達視点に戻ります

依頼48 仲間になったお尋ね者と孤児院の子供達（前書き）

はい！ドルク視点です。

ドルク「ついにか」

そうだね…まあ悪役でも味方になってくれるのもいるからね…それじゃあ依頼48

ドルク「派手に行くぜ！」

依頼48 仲間になったお尋ね者と孤児院の子供達

ドルク・シルム・クレス・ミントはギルドに戻らずジュティアの案内で孤児院へと向かっていた

……

ドルク「ここが孤児院か」

孤児院は少しボロボロだがポケモンが住める面では問題はないようだ、すると

????「あゝ！ジュティアお姉ちゃんだ！」

そこから3匹のポケモンが出てきた、一匹は黒い体毛のキツネのようなポケモン、一匹はバチュルでもう一匹は頭に突起がついていてあごにはキバが平行に生えているポケモン、キツネのポケモンはゾロア、キバが平行に生えているポケモンがキバゴだ

ジュティア「ただいま、みんな大丈夫だった？」

ジュティアが3匹の子供ポケモンに聞く

ゾロア「うん！」

バチュル「いい子に留守番してたよ」

キバゴ「ちゃんといい子にしたよ」

みんな笑顔で言った

ジュティア「よかった…そうだ実は探検隊の人達が来たんだ」

するとみんながドルク達のところに集まる

ゾロア「わあゝお兄ちゃん達探検隊！」

バチュル「すごい！」

キバゴ「サインちょうだい！」

シルム「わあゝすごいね／／／／／」

ドルク「照れるな／／／／／」

ドルクとシルムは照れる

ミント「でもみんな苦しんでいるんですね…」

クレス「ああ、だけど僕達がなんとかしないといけないよ…僕だつて…」

クレスは下を向く

クレスは過去に自分の故郷を燃やされてミゲールと自分の母親を亡くしてしまった…それはある事でミゲールと母親を生き返らせた…だが二度とそのような事が起こらないことをクレスは気にしている。それがクレスの過去に重なる

ミント「クレスさん…」

そんなクレスをミントが心配する。彼女も母親を亡くしてしまっている。その気持ちはミントにもわかるのだ…すると

ポン！

クレス「!？」

ドルクがクレスの肩を叩いた

ドルク「落ち込むなよ…俺も両親がいないからな…それにこのようなことがならないように互いに助けあった方がいいぜ…俺もいるからな…だから今はまずは…」

クレス「わかってる…ありがとうドルク…」

クレスはなんとか元気になった

……

ゾロア「わあゝその『ブレイブ』っていうギルドにオイラ達が！」

バチュル「わあゝいい！」

キバゴ「しかもオイラ達もここに住んでいいの！」

ドルク「ああ、それに困った奴はほっておけねえしな…孤児院も3匹だけで誰も見てくれない様子だろ？」

シルム「大丈夫、みんないい人達ばかりだから」

ジュテア「ありがとう…」

ジュテアの目に涙が零れ落ちる

ドルク「だけどちゃんとその分働いてもらうからな？ いいか？」

ジュテア「わかってるわよ、あたし…がんばるから」

ゾロア「早速準備してくる！」

バチュル「あたしも〜！」

キバゴ「オイラも〜！」

3匹は早速準備をした

…

ゾロア「これでこことはお別れになるね」

バチュル「さようなら…僕達の生まれた孤児院…」

キバゴ「オイラ達こっちに行ってもがんばるからね」

3匹は自分が住んでいた孤児院に別れをつげた

ジュテア「さよなら…あたしはがんばるから…」

ジュティアはそう言い孤児院を後にした

……

ドルク「帰ったぞ！」

シムーン「お帰りなさいドルク親方…そちらの方達は？」

シムーンが後ろにいるジュティア達が気になっていた

ドルク「ああ、新しくブレイブで世話になる奴等だ…3匹はこっちで預かってもらう、それにそのジュカインはお尋ね者だったが俺やシルムが説得してここで働いてもらうことになった」

シムーン「なるほど…わかりました」

すると同時に

ソル「おっ！帰ってたのか？」

そこにソルやリードン、さらにチェスターやアーチェまで帰ってきた

リードン「それに子供までいるじゃねえか？」

リードンは言うが

ドルク「こいつらは俺達の仲間でここで世話になるんだ」

チェスター「そうか…俺にもそいつらみたいなのがいるんだよな」

チェスターは3匹と同じ自分の世界にいる子供達の事を思い出していた。

クレス「チェスターとアーチェが無事に帰ってきてよかったよ」

アーチェ「でもグミ拾いとかでつまんなった」

アーチェはふてくされる

ドルク「まあこれも仕事だ…とりあえず腹減ったな…夕食にしようぜ」

ドルク達は食堂へ

…

クロー「うう……」

シード「……」

シノ「なんでこうなるんや…」

クロー達はぐったりとしていた。クラウドの地獄特訓はきつかったためかかなりのものだ…特にクローは単純なところの改善のため倍の地獄特訓を受けたのだ

ノコタロウ「あいつらに負けたくないのか？」

クロー「負けん！ワシだってあいつには負けんぞ！！」

ノコタロウの一言でクローは復活した、そこだけは人一倍根性あるようだ

クラウド「まだまだこんなもんじゃねえぞ、覚悟しとけ（黒）」

クラウドはもはや何かを企んでる黒さだった

ドルク「帰ったぞ」

そこにドルク達が来る

クラウド「おっ！お帰り〜…ん？そいつらは？」

ドルク「ああ、こいつらは今日から世話になる孤児院の子供達だ」

ドルクが説明した

ノコタロウ「ドルクさんもそういうのがあるんですね」

ドルク「まあ俺は探検家だ、そうじゃないと探検隊なんてやってねえよ」

クラウド「まあでもドルクも悪魔亀大魔王と言われても根は優しいもんな〜」

ドルク「うるせえ／＼／＼」

ドルクは照れる

そんなこんなで夕食の時間がやってくる

依頼48 仲間になったお尋ね者と孤児院の子供達（後書き）

クレス「こうして仲間になってよかったよ」

まあジュティアのモデルはテイルズオブデスティニーのルーティがモデルだし：イメージC Vもルーティだから

ミント「だからなんですネ」

デスティニーですうしたのだからこうした方がいいかなと思ってね

ドルク「いいかもな♪」

（まあドルクにも春を訪れさせておかないかね）

シルム「次回は？」

次回は：あの××なあの子の料理が：

シルム「ものすごく嫌な予感が（汗）」

依頼49 恐怖!××料理パニック! (前書き)

今回はあの料理がヘタなあのキャラの恐ろしい料理が(汗)被害者が出なければいいですが(汗)

ドルク「どうなるかな」

そんな依頼49

アーチェ「行くわよ!」

依頼49 恐怖!××料理パニック!

次の朝

今日もブレイブの1日が始まった

ドルク「おーし! 飯だー」

今日も朝食なのだが

アーチェ「はーい! 今日のはあたしが作ったよー」

クレス「!?!」

ミント「えっ!?!」

チェスター「!?!」

ファンタジア組(アーチェ以外)は驚いていた。なぜかというと

クレスがドルクとシルム、さらにメンバーみんなを集める

ドルク「(どうしたんだ?)」

クレス「(さすがにアーチェの料理はやばいよ!)」

ミゲール「(アレは食ったら死ぬ…俺あれはすごくやべえんだよ!)」

チェスター「（ああ、アーチェの料理はすごくやべえよ…ほとんど食べれば被害が増えるんだ！そうになったらやべえことになる！）」

どうやらアーチェの料理は相当やばいようだ

クラウド「（一応予備の朝食は用意した、ってか前にこういうことあったんだよマジ！）」

クラウドもどうやらあったようだ

シルム「（それってまさか（汗）」

ドルク「（アーチェの料理を食ったらやばいことになるってことか？）」

チェスター「（ああ、絶対あいつに二度と料理を作らせないでくれ、フルーツ類のなら大丈夫なんだがそれ以外だとあいつの料理の被害者が増えていくんだ！だから絶対に！）」

ドルク「（とりあえずはそうしておくが、だがどうする？誰が食べるんだよ？）」

クレス「（たしかに…誰が食べれば…）」

ジュティア「（それにあの子の料理すごくやばそうよ（汗）」

アーチェ「ちよっと！なんでみんなコソコソ話しているのよ？」

ドルク「ああ、わりいな…じゃあ俺とシルムと」

ノコタロウ「じゃあクロー達でいいかい？」

三人「ちょっと待て!？」

三人がツツコミをした

アーチェ「わあゝじゃあ味見してみてよ！」

するとアーチェが作った朝食が出てきた、見た目は普通だが…

ドルク「（これはなんか感じるな…だがもしシルムが…）」

シルム「（ドルクが倒れないか心配だよ（汗）」）

二人は不安になっている

アーチェ「どうしたの？早く食べてよ？」

アーチェが二人の食べてよと言ってくる

ドルク「（しかたねえ…）」

シルム「（覚悟決めて!）」

二人はアーチェの朝食を一口食べた

ドルク「（まずいが…これはダメだな）」

シルム「（うわあゝなんか味がまずいよ）」

なぜか二人は倒れなかった

クレス・チェスター『あれ？』

不思議に思ったクレスとチェスターは二人を呼ぶ

チェスター「なあ？なんともなかったか？」

チェスターは二人に異常がないか確認をする

ドルク「いや、まずいだけでなんともねえよ」

シルム「オイラもだよ」

クレス「でもあれを食べても倒れないなんて…二人ともすごいよ」

そう二人はなんともないのだ…でもなぜ二人は倒れなかったのか？

ドルク「ああ、俺はたぶんサフィーの辛いのを食べてたからかもな」

シルム「その辛味とか色々と食べていて味覚が敏感になったんだと思う」

サフィー「そりゃあ私の特製激辛パイとかだしね♪★（黒笑）」

ドルク「それにかしこさサバイバルっていうのが俺達二人にはあるからかもな」

かしこさとはグミを食べたときにあがるものでスキルがつくのだ…スキルサバイバルはベトベターフードとかだと悪い効果を受けない

ようだ

クレス「でもあれってたしか」

クラウド「ベトベターフードじゃないよな…それが影響とかしてるってことか？」

ドルク「考えてみるとそうかもしれねえな…でも味はまずかったから被害なくてよかったぜ」

シルム「死ぬかと思った（汗）」

この二人も相当な舌の持ち主だろう

アーチェ「ねえ？どうだった？味は？」

アーチェは味の感想を聞いてきた

ドルク「味はちょっとなくやっぱ得意なのがお似合いだと思うぜ？」

シルム「オイラもだよ」

アーチェ「（なんかむかつくけど）そうか、あたしにも得意なのがあるから、そこだけ伸ばせばいいのよね？」

ドルク「ああ」

アーチェは料理は得意ではないが、他の長所を伸ばしたほうが自分らしいだろう

依頼49 恐怖!××料理パニック! (後書き)

やっぱり被害者が(汗)

3匹「なんでワシ(俺! (ワイ!))なんだ!! (怒)」

面白そうだったから

ドルク「まあシルムが無事でよかったぜ」

シルム「そうだね」

まあかしこさの表現はできたかな?

依頼50 単純ワニを強くせよ! ドルクのペット (前書き)

シルム「何このタイトル? (汗)」

実はちよつと『フォックの集会所』とつながります

ドルク「おっ! あいつだな」

そう、では記念の依頼50

ドルク「ダメシー!」

依頼50 単純ワニを強くせよ！〜ドルクのペット〜

アーチェのヘタクソ料理事件から3日後

リードン「とりゃ！」

シエルマル「えいやっ！」

ドルク「いい感じだ！」

リードンとシエルマルがバトルしていた。二人ともかなり特訓したのか傷が多くなっていた。リードンの腕もかなりムキムキの筋肉質になっている。シエルマルもホタチを使った戦いや使わない戦いなどをしていた。腕もあがっていた。

シルム「それじゃあここまで！」

シルムが二人のバトルを止める、二人はバトルをやめる

リードン「あゝありがとなシエルマル」

シエルマル「いいえ、リードンさんも結構なれてきましたね…俺もあれからクラウドさんの特訓で結構な量のトレーニングをさせられましたし（汗）」

シエルマルはクラウドの地獄特訓を走馬灯のように記憶が駆け巡った

リードン「まあ俺もだけどな（汗）まさか俺もここまでやれるとは思わなかったしな…あいつらが見たらビックリするだろうな♪」

ニイツとリードンは笑う

ソウ「まあ僕もアトリ君ともトレーニングしてて楽しいですし♪」

アトリ「そうだよな〜♪」

ソウとアトリも仲良くなってきた

クレス「まあ僕もなれてきたし、でも父さんとかが（汗）」

ミゲール「……」

死んでいないが気絶している。

デイン「ボゲール（汗）」

チェスター「まっ！この世界も悪くはねえな」

ミント「シムーンさんに色々教えてもらいましたし」

アーチェ「まあ結構いいけどね〜♪」

アーチェはホウキにまたがり浮いている。

ドルク「さてと、じゃあリードンとシエルマル、一緒に単純ワニの特訓をするぞ」

シエルマル「なれるのに時間かかりますしね（汗）」

リードン「あいつとんだだけ単純だよ（汗）俺も単純のわりに強くな
ったのにな」

どうやらクローの特訓のようだ

ドルク、シルム、リードン、シエルマルはクローの元へ

……

トレーニングルーム2

ドルク「クロー、特訓だ」

クロー「ワシも逆にバテバテになつとるわ!!」

クローはクロウドの特訓によってすでにバテバテだ

リードン「とりあえずドリンクだ」

リードンはボンドリンクを差し出す

クロー「ん！これはうまい！」

クローは大絶賛だ

クロー「おお！なんだか力がみなぎる感じだぞ！」

クローはドリンクによって力がみなぎるような感じだった、だがこ
のボンドリンクはドーピングとかしていませんので（汗）

クローはビツクリする

ドルク「紹介してやるぜ、我がギルド『ブレイブ』：そして俺のペ
ットであるイビルジョーのデビーだ」

と、ドルクはイビルジョーのデビジョーを紹介する

デビジョー「初めまして！俺はイビルジョーのデビーッス！！ちな
みにポケモンじゃないッスよ！」

ッス口調を使うモンスターだったというか彼はポケモンではなく：別
の世界のモンスターだ、なぜポケモンじゃないモンスターがここ
にいるかというドルクがこのイビルジョーに挑んで勝ってそして
デビーがドルクの飼い犬：いや飼いモンスターとしてこのギルド『
ブレイブ』でのペット&特訓相手をしてくれるようになった：もち
ろん依頼とかもしてくれるので大いに助かってはいる。

ちなみにどうやって仲間にしたのか：詳しくは『フォックの集会所』
にて

ドルク「ちなみにこいつは食いしん坊でな、腹が空く場合が多いか
ら食事也多めに用意はしている」

と、自身満々に言うドルク

クロー「ちょっと待て！？ワシ死ぬ！？ってかなんでそんな化け物
がいるんじゃあ！！？」

クローはつつこむが

ドルク「細かいことは気にするな♪お前のためにだ、それにちゃんと手加減はしてくれるから大船に乗ったつもりで行け♪」

と、ドルクはグーサインを出す

はたしてこの特訓で大丈夫なのだろうか？

依頼50 単純ワニを強くせよ！〜ドルクのペット〜（後書き）

クロー「なぜモンハンのモンスターを出す！」

いやゝ実は『フォックの集会所』でやったのでどうしようかと思っ
たからこうしようと思って

ドルク「まあ設定上は残酷表現にはしねえし、ってかもはや加減も
してる」

シルム「ある意味どうなのか（汗）」

シエルマル「不安ありすぎですよ（汗）」

加減はしてるから大丈夫だよ

デビー「大丈夫ッスよゝ」

依頼51 クローの特訓く補助と守りも必要く(前書き)

逃走中書いていてこっちの更新もしとかないと(汗)

ドルク「待たせるなよ？」

うん、では依頼51

デビー「どうぞッス」

依頼51 クローの特訓と補助と守りも必要

というわけで早速特訓開始

クロー「（こんなので大丈夫なのか（汗））」

クローは不安になるが

クロー「（ワシだってあいつには負けんぞ！！）」

と、目が燃えていた。

ドルク「行くぞ」

デビー「行くッス！」

デビーがクローに噛み付いてくる

クロー「よっと！」

クローは見切って避けた

デビー「今度はこれで行くッス！とりゃあ！」

デビーは身体を回転して尻尾でクローをなぎ払おうとした

クロー「（ここは攻撃と行きたいところじゃが、しかたない！）守る！」

クローは咄嗟に守るを使った

ドルク「（いい感じに守るを使ったな…あいつには少し補助もつけねえとやられるからな）」

クローは単純に補助と防御技を覚えていないので、少し技を覚えさせていたのだ、もちろん技マシンで

ドルク「（本当はオリ技とかの特訓でもいいが、ノコタロウの許可なくやるのは無理があるからな、ここは技とかのでだしな）」

オリ技でもたしかに効果的になる。さてクローの特訓に戻そう

クロー「やるじゃないか、さすがはこのギルドの親方のペットだな！」

デビー「そう言ってもらえると嬉しいッスよ、でもここからッス！龍ブレス！！」

するとデビーは怒り状態になって龍ブレスを吐き出した

クロー「くっ！」

クローはブレスを避ける

デビー「岩飛ばしッス！！」

デビーは地面をえぐって岩を飛ばす

クロー「ならねっとうじゃあ！！」

クローはねっとうを吐いた、岩は飛ばされてデビーにあたる

デビー「アチチチチ！」

岩はねっとうによって熱くなっているためデビーは慌てる

クロー「今じゃ！！氷の牙！！」

クローは冷気をまとった牙でデビーを噛み付いた

ガブッ！

デビー「痛いッス！…でも効かないッスよ！それ！」

デビーは噛まれたが痛みを感じずにそのままクローを振り落とす

クロー「うおっ！？」

クローはそのまま振り落とされた

ドルク「そこまでだ」

ドルクがストップをかける

ドルク「いい感じになったな」

クロー「ワシはたまたまじゃ、ワシだって負けたくないからな！」

と、強気で言う

リードン「それじゃあ今度は俺ともやろうぜ」

シエルマル「俺ですよ」

クロー「よっしゃあ！やってやるぞ！！」

クローは気合を入れる

シルム「あんまりやりすぎないでね」

と、シルムが注意する

ドルク「まあ少しはやれるようだな…後はどうなるかだな」

ドルクはそんなクローを見ている。

ドルク「（これはかなり楽しみになってくるな…遠征が）」

そんな風に思っていた。

依頼51 クローの特訓と補助と守りも必要（後書き）

ドルク「あいつの単純さは変わらないかもしれないがとりあえず守りや補助も必要だしな」

そうじゃないと結局は負けてしまう感じだしね

シルム「でも他の二人（シードとシノの事）も大丈夫なのかな？」

クロウドさんの特訓は過酷かつ地獄だしね、まあ大丈夫だろう

ドルク「そうだな、あいつらもきつとな、まあ俺の進化前々のあいとも単純だが俺とは違うバトルスタイルだしな」

いやゴリ押しだから同じだろ（汗）　　っと次回ですがついに遠征メンバーが決まります。お楽しみに

依頼52 遠征メンバー発表と別れ…さらに対決！ドルクVSソル前編（前書き

はいなんとか戻ってきました。ご迷惑をおかけしてすみません、今日から復帰です。

ドルク 「作者がなんとかなってよかったぜ」

シルム 「そうだよね」

うん、それでは早速依頼52

ドルク 「決めるぜ！」

依頼52 遠征メンバー発表と別れ…さらに対決！ドルクVSソル前編

次の朝

いつもの朝なのだが今日は違う…なんたって今日は……

……

ギルド食堂

みんなが集まっていた。

シルム「みんな、今日は遠征メンバーの発表だよ」

ついに遠征メンバーの発表となった

みんなゴクリと唾を飲み込む、緊迫した緊張が食堂を包む

ドルク「それじゃあ発表するぜ…」

いよいよ発表の時…はたして!!

ドルク「全員だ」

全員『えっ!?!?』

なんと全員のようにだ

ミゲール「やったやった！」

アトリ「うるせえ！」

アトリがミゲールに膝蹴りする

ミゲール「ごはっ!？」

しかし

サフィー「あのー」

ドルク「どうした？」

サフィー「私達はその…色々と事情があるためここでお別れしていいですか？」

突然サフィーからお別れと言われ啞然とする

キララ「ごめんな、あたい達も色々あるんでね」

と、キララは言う

ドルク「そっか、元気だな」

シルム「しょうがないね、まあ時間あったらまた来てね」

ゼロ「じゃあな」

カゼル「こっちもがんばれよ！」

サフィーメンバーはギルドから去っていった

……

シルム「遠征は3日後、それまでは準備とか色々しててね、でもあまり遠くに行かないようにね」

と、シルムは言う

そんなこんなで解散した。

ドルク「つとソル、ちよつといいか？」

ソル「俺か？」

ソルは突然ドルクに呼ばれた

ドルク「どうだ？なれてきたか？」

ドルクはソルになれてきたのかを言う

ソル「まあなんとなくか…力の制御も少しはなってきたかどうかわからねえけど」

ソルは力の制御に不安があった

ドルク「じゃあ俺とバトルするか？」

そこでドルクがバトルを申し込む

ソル「えっ？ お前とか？」

ドルク「嫌か？」

ソル「いや、まあむしろいいかもしれないな…それじゃあよろしく頼む」

ドルク「ああ」

そう言ってドルクとソルはトレーニングルームへ

……

トレーニングルーム

バトルフィールドにはドルクとソルが立っていた。

シルム「それじゃあ始めるよ」

リードン「相手はソル…というか強いんだよね（汗）」

リードンはソルの実力をすでに感じている。まあダンジョンで一緒に
の時に実力を見てみるとそれは常識を覆すような実力だ、そんな相
手をドルクは相手する。

ソル「本気でいいのか？」

ソルは少し戸惑ってドルクに言う

ドルク「俺は別にいいぜ、それに力の方もコントロールもできているはずだからな、それを見るために俺がバトルしてためしてやるぜ」

ドルクが構える

たとお互い同盟を組んでいてもいつかバトルする時があるのだ、全力とためすために

シルム「それじゃあバトル開始！」

ついに戦いの火蓋がきっておとされた！

ソル「（やるしかねえ！）」

ソルはコートの胸部分からホワイトデビルとブラックエンジェルを取り出して連続で撃った

ドルク「ロックフェンス！」

ドルクはロックフェンスで防いだ

ソル「ならこれならどうだ！」

ソルはダーインスレイブを背中から抜いてロックフェンスを破ろうとしていた、そこから岩の壁に何度も斬りつける

ピキピキ

そこからヒビが入った

ソル「これで…どうだ！」

ソルは踏み込んで斬った

パリーン！と岩の壁が割れる、しかし

ソル「なっ！？」

ソルは驚いていた。なぜかという割れたはずの岩の壁にさらに岩の壁が出てきたのだ、そこから岩の壁は崩れてドルクが姿を現す

ドルク「ふう〜バージョンアップしてよかったぜ」

どうやらドルクはロックフェンスをさらに繰り出して二重の壁にしたのだ

ソル「さすがはブレイブのリーダーでギルドの親方だな…こりや本気で行くしかねえな（黒狂笑）」

ソルはニヤリと笑う

ドルク「おっ！そうでなきや面白くねえな♪（黒狂笑）」

互いに狂気笑いをする。ある意味大物な感じな二人だった

リードン「あいつらもすげえな（汗）もはやこれはすごくやべえ戦いになりそうだな（汗）」

シェルマル「たしかにそうですね、さすが親方様にソルさんだ、こ

んな戦いをするなんて」

リードンとシエルマルはそんな二人の戦いにそう言う

ドルク「さて…本気で来いよソル！見せてみろ！お前の力を！」

ソル「おうよ！でも死なない程度にならないかもしれないかもしれねえがそれでもか？」

ソルはドルクに質問する

ドルク「俺はそう簡単にはやられねえよ、かかってこい」

ドルクは構える

依頼52 遠征メンバー発表と別れ…さらに対決！ドルクVSソル前編（後書き

今回コラボしてくれたサファイーさんありがとうございます。色々あってこういうことになりました。すみません

ドルク「まあでも結構よかったからな」

シルム「また会えるかな？」

きつと…まだわからないけど…さてここで始まりました。この二人の戦い

ソル「なんで俺とドルクが戦うのかなんだよね」

まあソル君が色々と不満やふてくされてそうだから本編でもそういう感じもあったからソル君と一度戦ってみた方がいいし、それにここに来てから特訓もさせたのだから実力が見れるいい機会だから

ソル「なるほどな」（黒狂笑）でも本気出したらドルクでもすむかどうかかわからねえぞ？」

あゝそれでもドルクは死なないし、それに悪魔亀大魔王だからそれぐらいは平気だとは思うしね

ソル「大丈夫なのか（汗）」

ドルク「ああ、次回も続きだからかかってこいよ♪」

ソル「まあ俺も特訓とかで色々あったからちようどよかったかも

な
」

依頼53 互いの本気! ドルクVSソル 後編(前書き)

ついに後編です。その前に今回の話ではソル君のリミットである魔力レベルというのが出てきます。とりあえずハボックさん使わせてしまっすみません

ドルク「本気で来るとはいい感じになりそうだぜ♪(黒狂笑)」

黒狂気笑いがソル君に移りまくりだな(汗) それじゃあ依頼53

ドルク「燃えるぜ!」

依頼53 互いの本気！ドルクVSソル 後編

二人の戦いはまだ続いていた。

ソル「シャドークロー！！」

ドルク「ウッドハンマー！！」

カキーン！

お互いの技が火花を散らす

ソル「やるじゃねえか（黒狂笑）」

ドルク「おめえもな（黒狂笑）」

クレス「（この二人：狂気笑いしても楽しくやってる（汗）僕も様子を見に来たけど：ここまで派手になるなんてね（汗）」

クレスはバトルフィールドから少し離れたところから見ていた。クレスの剣技では追いつけないほど彼等にはおよばないものだ、ソルは悪魔の血が流れているため通常のポケモン相手だと一瞬だろう：しかしドルクだけは違った、ドルクは通常とは違って魔力もあり：さらに守りもかたいのだ

ドルク「（あいつも少しは力加減にはなれているな：こうでねえと面白くねえしな」（黒狂笑）」

ソル「（悪魔の血が流れていても…あいつのすごさには共感できるな（黒狂笑））」

互いが認め合うライバルだから彼等はこうしたバトルができるのだ
シルム「（ここまでやれるなんてね…さすが…ソル君の力加減も少しはマシになってきているかな…）」

シルムはそんな二人の様子を見ている。審判でもよく相手の動きなどをシルムは見る。探検隊のサブリーダーでギルドの副親方として…ドルクや仲間を守るために彼は彼の役割で行動する。

ソル「ならこれでも食らえ！インフェルノクライム！」

ソルは黒い斬撃を繰り出す、食らえばかなりやばいがドルクは

ドルク「よっと！」

ドルクは横に避ける、少し斬撃にカスった程度だが少し傷がついた程度だった

ドルク「（それなりに加減するな…まあこういうバトルでいやなことになったらおしまいだけどな）エナジーフルバスター！」

ドルクはエナジーフルバスターを繰り出す

ソル「おっと！」

ソルはエナジーフルバスターの範囲から離れるように避けた、ドルクのエナジーバスターは広範囲なので避け方にも見分けをつけてお

かなければならない：まあジャンプ程度で避けられるが問題は空中では避けられないことが多い：なので色々避け方などを考えなければならぬ

ソル「デストロイスティンガー！！」

ドルク「ギガントウッドハンマー！！」

ソルは黒い炎でおびたダーインスレイブで、ドルクはさらに大きくなったウッドハンマーで、彼等の攻撃は繰り出された

ぶつかるそれが衝撃波となり風圧が襲う

シルム「うわっ！？」

シルムは咄嗟に顔を両手で覆い隠す

すると二人はまだ立っていた。まだまだピンピンで

ソル「（チッ！やっぱあいつにはかなり強力じゃねえとだめだな：魔力レベル1を解放してもあいつの精神はそう簡単にはいかねえしな）」

ソルの魔力レベル1は相手を沈黙させる能力：しかしあれはかなりのもので相手もノックアウトにするほどの能力だ：だがドルクにはそんな生半可な能力では難しいのだ：なぜなら

ソル「（ドルクは何も恐れていねえ感じだしな：あいつの波動は強気だしな：そうしてもあいつには見破られちゃうし）」

ドルクはあまり恐れないのだ、ドルクも色々と不利な状況などそういう経験を積んでいるためソルの魔力レベル1ではドルクを封じることが不可能だ

ソル「魔力レベル2解放、眼前のターゲットが完全沈黙になるまで能力を解放する」

そうソルが言うのとソルの体全体が赤黒いオーラをまとう

ドルク「そうこねえとな…」

ドルクは構える

ソル「行くぞ！」

ソルは巨大なシャドークロウを繰り出す、魔力レベル2が解放されたため、シャドークロウが巨大になったのだ

ドルク「へっ！そうこねえとな♪ハードロックディフェンス！！」

ドルクがそう言うのと緑の膜がドルクを包み込んだ、巨大なシャドークロウがぶつかりはじく

ソル「なっ！？」

これにはソルは驚く、こうも簡単に防ぐとは思わなかったのだ

ソル「だがまだ終わらねえよ（黒狂笑）波動弾！！」

ソルはさらに波動弾を連発してドルクを覆う緑の膜を打ち消そうと

する。すると緑の膜にひびが入って割れ、ドルクは食らってしまった

ドルク「おおーいてえーやるじゃねえか（黒狂笑）」

だがドルクは痛みを感じるがまだまだ余裕のようだった

リードン「すげえ（汗）」

シエルマル「ソルさんとドルク親方…どっちも一歩引けませんね」

シエルマルの言うとおり、ソルとドルクはどちらも一歩も譲らない状態だ

クレス「ここまでやれる二人はすごいな（汗）ソルの技もかなりの大技みたいだな…僕は闇とかは無理だけど…」

アトリ「おお！やってるな♪」

そこにアトリも来ていた

クレス「アトリも来たんだ」

アトリ「まあな、あいつらが気になってな…まあ結構いいバトルでいいぜ（黒狂笑）」

クレス「そうなんだ（汗）」

そんな黒狂気笑いのアトリにクレスはタジタジだった

ドルク「（やっぱこう来るか…さすがに前に魔力レベル2を見たと

きは結構なものだが…さてまだ切り札は隠されているんだよね（やっぱ）」

ドルクはソルの隠された能力を見破いていた。そんなソルは

ソル「（やっぱ見破られているな…さすがはドルクってところ…でもあれはな…でもここまでやるドルクがそうしたい感じなら…やってやるぜ！！ヒャッハアアア！！（黒狂笑）」

ソルは波動でドルクに隠された能力を見破られている。隠す必要がないとソルは判断しソルはダーインスレイブを背中に背負い、右手を前に突き出し、手を広げた後に手の平を裏にして力強く握った

ソル「第4拘束制御魔方陣解除…」

すると大地と大気がゆれ始めた

ドルク「なんだ！？」

これにはドルクは驚く

クレス「（この揺れは一体…！？）」

クレスは揺れの中ソルを見た、ソルの頭上に3つの蒼色の魔方陣が現れ、それぞれ1・2・3と数字が浮かびあがっていた。右腕から暗黒の魔力が集まる

ソル「時空制御法陣…展開！」

そこから広範囲の赤い魔法陣が現れ、バリアのような膜がソルを包み込んでいった

ソル「（なんだか痛みを感じねえ…そうか…少しはこいつを制御できそうってことだな…）」

ソルの表情は真剣になっていた。ここまで戦えるライバルに負けないう気持ち…

さらに数字の魔法陣が回転して赤い光を放ち、4という数字の赤い魔法陣となった、4の数字の赤い魔法陣がソルの中に入る、同時にソルの体が赤と紫のオーラをまとった

ソル「魔力レベル4ソウルイーター…俺も本気で行くぜ！！！！ヒヤッハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！」

ソルの右腕が暗黒の魔力によって5本指の巨大な手と手爪となった、さらにソルの眼が赤と紫で染まる

ドルク「それじゃ俺も本気出してやるか…」

ドルクは詠唱した

ドルク「時空に集いし命の結晶…今ここに能力を解放する…オメガリミット！！」

するとドルクの体全体が金色のオーラをまとった

ソル「それがお前の本気ってわけだな？（黒狂笑）」

クレスがディシアに呼びかける

ディシア「ソルというルカリオの禍々しい力を感じてな…どうやら時空にも影響するようだが…どうやらここでは心おきなく力を使えるようだ」

クレス「と？いいますと？」

ディシアが説明した

ディシア「つまりソルには力の制御に問題がある…あの能力は完全に世界に影響しそうなものだが…力を制御できれば影響はない」

クレス「なるほど…僕の時空剣技能力とかも同じようなものですが…ここまでできるなんて」

クレスは少し驚いていた。

アトリ「さあて、どうなるかだな（黒）」

そんな二人は……

ソル「Gワイバーン!!」

ドルク「ハードロックエナジーダマシー!!」

ソルは赤と紫の頭に鋭い刃があるドラゴンがドルクに向かって突進、ドルクは黄金色のエネルギー球を2発を放つ、二つの技が爆発した

ソル「うわっ!？」

ドルク「くっ！」

二人の攻撃によって煙が立ち込めた

クレス「何も見えない…」

アトリ「これは勝負がわからなくなったな」

だんだんと煙が晴れてくる。そこには

ドルク「……」

ソル「……」

二人が立っていた。しかし

バタッ！

二人同時に倒れてしまった

シルム「両者戦闘不能！」

なんと引き分けに終わった

ドルク「あゝ引き分けかゝ」

ソル「でも結構楽しかったぜゝ魔力レベル4まで使うなんてな」

ソルはそういいながら右腕を見た、少しだが怪我はしていた。

ドルク「でも少しなれては来ただろ？」

ソル「ああ：俺もこのバトルを糧に：がんばっていけるようにしねえとな！」

ソルはそう意気込む、自分の力：それを信じて

ドルク「でもおめえのその魔力レベル4は強かったぜ（黒狂笑）」

ソル「そういうお前のオメガリミットもよかったぜ（黒狂笑）」

何時の間にか二人は笑っていた。これほどのバトルができたことに満足感がうまれたのだろう、そして3日後に迫った遠征でどのようなお宝にめぐり合うのだろうか：このバトルをきっかけに：がんばれるだろうか：それは後にわかるだろう

依頼53 互いの本気！ドルクVSソル 後編（後書き）

ドルク「あゝいいバトルだったぜ♪」

本気で殺傷能力つけたら死んでいたかも（汗）

ドルク「まあ俺はソルの世界であの野郎を協力して倒したしな」

まあたしかにね

シルム「次回はついに遠征だよ」

お楽しみに！

依頼54 遠征出発！発進！バンエルディア号（前書き）

ドルク「このタイトルからしてもはや」

どうかなく

シルム「それじゃあ依頼54をどうぞ」

依頼54 遠征出発！発進！バンエルディア号

3日後

全員が集まっていた

ドルク「よしっ！全員そろっているな」

シルム「みんな準備した？」

クレス「こっちはOKだよ」

父（魔王）「こちら準備は完了だ、いつでもいけるぞ」

カガリ「こっちもだ」

クラウド「俺達の方もOKだ」

ソル「こっちもだ」

リードン「いつでもいけるぜ」

クロー「ワシもだ！」

シエルマル「こちらOKです！」

ミミロップ「もちろん♪」

みんな全員OKのようだ、なおこの留守番はライボルト・レントラー・ゼブライカの3種の軍団が残ることとなった

ドルク「それじゃあ行こうぜ…まずは地下に乗り物を用意したぜ」

ミント「乗り物ですか？」

全員が乗り物に疑問にもっている

シルム「目的地までは途中乗り物で行くよ、それじゃあ行こう」

一体乗り物とは何なのか……全員は地下へと向かう

……

地下2階

ここは地下2階らしい、特別な場所らしく…ここは広い場所だった、地下2階は特別または緊急の時のために作られた場所だ、もちろん遠征も特別には入っているらしい

ドルク「ついたぜ」

一行がついたところは

シェルマル「これは!？」

みんながあるところに視点を向く、そこにあったのは戦艦と言える乗り物だった

ステンドグラスが張っているような壁に甲板は黄緑色、かなりのものだった

シルム「これはバンエルディア号なんだ」

ソル「バンエルディア号？」

ドルク「これはこの世界で伝わるアイフリードに関わるものだ」

シエルマル「ア、アイフリード！？」

シエルマルは驚く

ソウ「シエルマル君、何か知っているんですか？」

ソウはシエルマルに聞く

シエルマル「そりゃあ知ってますよ！なんでも昔ここに海賊ギルドとかがあって、その中で特にアイフリードという名前のポケモンがいて、アイフリードはその海賊ギルドの親方だった：数々のお宝を手にいれ、そのお宝を貧しいポケモン達に分け与えたという伝説があるんです」

どうやら昔：ここには海賊ギルドというのがあったようだ、アイフリード：伝説の海賊を

シルム「まあシエルマルのいうとおりだよ：そしてこのバンエルディア号はね：そのアイフリードの残した船みたいなんだ：部屋も結構あるし、その他色々だね」

クレス「そういえば：僕も聞いたことがあるよ：でもそれぞれの世界ではアイフリードの存在があるかないかで、さらにそれぞれ違う部分と共通する部分があるんだ」

クレスがそう説明する

ソウ「それってどういうことなんですか？」

ミント「私達の世界ではアイフリードの存在はないんですが：他の世界ではアイフリードの存在があるんです。でもそれぞれ違いがありまして、唯一共通するのが『海賊』だけなんです」

ドルクの世界の他に、アイフリードは語られている

ミミロップ「すごい！あのアイフリードの残したお宝を！私達もほしかったな」

ミミロップは羨ましがる、もちろんチャーレムやサーナイトも

ドルク「でもこのバンエルディア号とかぐらいだったぜ？まあこの乗り物を使って旅できるからいいけどよ」

ジュティア「あたしもアイフリードのお宝欲しかったな！あんたが羨ましいわ」

ジュティアは羨ましそうにバンエルディア号を見た

ドルク「とりあえず出発するぞ、乗るぞ！」

全員『おおーーーーー』

「！！！」

全員はバンエルディア号に乗った

……

バンエルディア号1階ホール

みんなはホームに集まっていた

ドルク「とりあえずみんないるな…ここはホールだ」

ホールは床は赤く、綺麗になっている。1階は研究室などがあり、さらに甲板にいけるところもあるのだ

シルム「まあとりあえず部屋は地下1階と地下2階があるから部屋は好きに使ってね」

ギルガメス「そういえば気になるが？誰が操縦するんだ？」

そう、2階には操縦室となっている。誰が操縦するのか？

ドルク「ああ、これは自動操縦とかもできるからなんとかなる…その時はシルムとかが操縦とかできるからな」

ミゲール「ワクワクするな」

シルム「それじゃあ出発するね」

ゴゴゴゴゴゴゴ

バンエルディア号が動き出す

……

ギルド外では岩が動いた、そこにバンエルディア号がカタパルトにつけている。

ドルク「発進！！」

するとバンエルディア号は発進した

今、彼等の遠征が始まろうとしている！！

依頼54 遠征出発！発進！バンエルディア号（後書き）

テイルズシリーズの中の方でアイフリードが出てるシリーズとかも
ありますし：もちろんレディマ3でもバンエルディア号とかが出て
いるためギルドⅡバンエルディア号という感じですね

ドルク「まあたしかに移動式のギルドだしな」

シルム「まあたしかにね（汗）」

クレス「僕は知っているような？」

レディマ3出演してるクレスとかは知っているはずだけど：あつち
の設定上知らない場合とかもあったりかもね（汗）

ドルク「たしかにな」

次回はそんな空の旅へ！

依頼55 到着！宝島！！（前書き）

ドルク「おせえぞ作者！」

色々あるんだよこっちは！

シルム「まあまあ（汗）ついに遠征が始まるね」

まあ今回の遠征がどうなるか

ドルク「さて！依頼55！！燃えるハートで行くぜ！！」

依頼55 到着！宝島！！

バンエルディア号に乗って快適な遠征をしているブレイブ一行、みんなそれぞれの部屋で遊んだりと色々していた。

クレス「それにしてもここは快適だね」

ミント「どうやらそうですね」

クレス&ミントのファンタジアカップルは気に入った様子だ

ミゲール「サーナイトすわぁ〜ん！！」

アトリ「いい加減にしろや！！クソ親父が！！ブラスト！！（黒激怒）」

ミゲール「シビレビレ！！？」

サーナイト「（汗）」

ミゲールはサーナイトにナンパするが、アトリの膝蹴りによって鎮圧

シェルマル「それにしても…まさかアイフリードの船自体が」

リードン「そのアイフリードとかって有名なのか？」

シェルマル「はい、俺も聞いたことがあって」

シェルマルはリードンに説明する

父（魔王） 「ここはかなりのものだ…ピッケルよ、ここでおもいつきり」

[illegible]

父（魔王）がよからぬことをしようとしているためピッケルはとめている

アレシ「それにしてもここは食堂だけじゃなくて研究室までありますね、先生」

カガリ「そうだな」

アレンとカガリはホールの奥の左の部屋、研究室を見ていた

ここで説明しよう

バンエルディア号は次の通りである。まず1階はホールになっていてそこで別々の部屋がある。奥にはシュップと研究室があり、さらに左右の通路のルートもある。左は医務室に通じる通路、右は食堂に通じる通路がある。さらに部屋も用意されていてかなりのものだ、ホールから行ける通路からはこの船の甲板へと行ける

2階はこのバンエルディア号の操舵室である

シルム「異常はないようだね」

シルムは舵をとっている

シルム「これをこうして…」

シルムは他のパネルなどを操作した、すると画面から自動操縦と出てきた

3階は展望室となっている

ミミロップ「わあ〜♪」

チャールム「ホントに空を飛んでいるみたいだね〜」

そして地下一階は機関室、ここにもそれぞれ部屋が設置されている。ここはバンエルディア号の動力のある場所でもある

クラウド「へえ〜こうなっているんだ〜」

ノコタロウ「ホントにすごいでGES」

シード「作者、それがやりたかったんだろう（汗）」

シノ「同じ同族なのになんやこの差（泣）」

クロー「ぐぬぬ…ワシだって絶対お宝をゲットしてやるぞ！」

そして地下2階は船倉であり、たくさん部屋と非常口などもある。ちなみに出口はここしかないが色々脱出のドアが各部屋に用意されている。もちろんパラシュートなどもある。

これがバンエルディア号の見取りだ

さすが歴史に名を残すアイフリードだ

ちなみにアイフリードはポケモンであり、どういうポケモンだったのかは知らない

一行は宝島までゆっくりとした

……

シルム「見えたよ！」

ドルク「よしっ！上陸だ！」

バンエルディア号は目的地の宝島へと到着しようとしていた。

着陸は砂浜にしようとはバンエルディア号をゆっくりと降下する

砂浜にバンエルディア号が着陸した。

みんなはバンエルディア号から降りた

……

宝島は霧に包まれていた。そんな霧が包んでいる砂浜でドルク達ブレイブメンバーは降りた

ドルク「霧が深いな」

シルム「クレスさん、ここの宝島」

クレス「どうやら呪いか何かだとは思うんだけど…後はその呪いを解くしかないよ」

どうやら霧が包まれているのはこの宝島に伝わる呪いみたいだ

この宝島には宝がいっぱいあると噂される島なのだが…ここにはある伝説が残されていた。

それはこの島の宝を手に入れるにはその島の試練があるようだ

その試練とは…この島に伝わる呪いを解かなければ宝を手に入れることはできないのだ

そしてこの島の呪いを解かないかぎりこの島から出られないと言われている。

クレスの説明ではこのようだった

ドルク「かなりやべえもんだな」

リードン「そういう場合じゃねえよ!? つか俺達無事に出られるのか?」

不安になるメンバーも多い…しかしドルクは力強く言った

ドルク「大丈夫だ!俺達がそう簡単にくたばるわけねえ!! 気合入れていくぞテメェ等!!」

と、気合を入れるような一声でメンバーの不安感を吹っ飛ばした

これが探検隊ブレイブのリーダー兼ギルド『ブレイブ』の親方…ドルクだろう

この先…どのような試練が待ち望んでいるのか…

そしてブレイブメンバーははたしてこの島の呪いを解くことができるのか…！

そんな彼等の遠征が始まる…！

依頼55 到着！宝島！！（後書き）

ドルク達はついに宝島に到着した

しかし島の呪いを解く試練を乗り越えなければ島から脱出することはできない

そんな彼等に最初の試練が訪れる！！

シルム「次回！『ポケモン不思議のダンジョン ブレイブトレジャーズ』！！」

ドルク「石版を見つけれ！宝島の大冒険！！テメエ等のハートに刻んどきな！！」

依頼56 石版を見つけろ! 宝島の大冒険!! (前書き)

ついに遠征の開始だよ!

ドルク「どういうお宝なのかだな」

シルム「オイラも楽しみだよ♪」

それじゃあ依頼56

シルム「派手に踊れ!!」

依頼56 石版を見つけろ！宝島の大冒険！！

宝島の砂浜に到着したブレイブメンバー達

そんなドルク達はまずどうするか話し合っていた。

クレスの話によると呪いを解くには呪文を解かなければならない

その呪文は島の何処かにあるようだ

呪文のありかはこの島の何処かにある石版がヒントをくれるようだ

そんな時

ミネラ「パパ！石版があったよ！」

なんとミネラがその石版を見つけたようだ

場所はこの砂浜の大きな岩山の頂上にあっただけ、他のメンバーとともに石版を運び込んだ

……

石版を運び込んだ後すぐにドルク達は石版を読んだ

そこにはこう書かれていた

『この下に呪文があるだろう』

シルム「この下？」

ドルク「どうやらこれか？」

ドルクは石版の下にある丸い小さな石に気づいた

ドルクはその石を押してみた

すると何処からか崩れる音がした、それはここから先の山の方だった

リードン「なんだ!？」

ソル「あっちに何かあったんだと思うぜ」

シルム「行ってみよう!」

ブレイブメンバーはその音がしたところへと行った

……

ドルク「ここだな」

ドルク達の目の前には地下へとつながる階段が現れていた。周りには石柱が6本立っている。

ドルク「ここからは別々に入るぞ、何かあったら連絡はしてくれ」

みんなそれぞれトランシーバーなどを持っている。これは仲間がはぐれても連絡はできるため準備してきたのだ

ここからはチームを分けて進むことになった

まずはチームA

メンバーはドルク、シルム、ソウ、クレス、ミント、リードン、ジュティア、デビーの8人（7人と一匹だ）だ

ソウ「がんばりましょう」

クレス「油断しないように気をつけよう」

「はい」

リードン「そうだな」

ジュテア「お宝ちゃんを拝ませるわ♪」

続けてチームB

メンバーはクロウド、ソル、アレン、カガリ、ノコタロウ、チエス
ター、アーチェの7人だ

クラウド「どんなお宝か楽しみだぜ」

ソル「ヒャッハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！
暴れまくるぜ！（黒狂笑）」

アレックス「お宝手に入ったら『シャドウ』の活動金にしないと♪がん

ばりましょう先生！」

カガリ「ああ、もちろんだ♪」

ノコタロウ「私もお宝見つけないとな…クロー達なら大丈夫だろう…たぶん」

チェスター「（なんでこいつとなんだよ）」

アーチェ「（なんであんなスケベ大魔王なんかと（怒）」

続けてチームC

メンバーはミゲール、デイン、アトリ、シエルマル、ギルガメス、ミネラ、グラデルの7人だ

ミゲール「サーナイトさんと一緒によかったのに」（泣）」

アトリ「くおらぁ！！（怒）さっさと行くぞ！クソ親父！！」

デイン「ボケール、行こうヨ（汗）」

シエルマル「（大丈夫なのかな（汗）」

ギルガメス「油断せずに行くぞ」

ミネラ「はい！」

パルサ「俺に続け!!」

レイ「落ち着いてください」

シムーン「パルサさん、慎重に進みましょう（汗）」

グロリアス「俺も気合入れていくか！」

リユラ「僕達もがんばろうね」

そして他はクロー達三人、チャームズの三人は別々で行動

クロー「絶対ワシ達はお宝を取ってやるぞ!!」

シード・シノ「おお!!」

ミミロップ「今回の探検は油断できないわ、二人ともがんばるわよ！」

チャーレム「もちろんだよ！」

サーナイト「そうですね、ドルクさん達の誘いですからお宝はいただきます」

ちなみにヤミラミ達やライボルト達はバンエルディア号で待機

そんなこんなでみんなそれぞれ地下へと入っていった

この先、彼等に待ち受けるものは!!？

依頼56 石版を見つけろ！宝島の大冒険！！（後書き）

ドルク「俺達はそれぞれ別れて入っていった」

シルム「でもそこに待ち受ける石版の謎」

クレス「僕達はそれでも突き進む！」

ジュティア「次回！『依頼57 それぞれの遠征〜ドルクルート〜』」

デビー「刻め！俺達のハードロックッス！！」

依頼57 それぞれの遠征くドルクルートく（前書き）

それぞれの視点でお送りします。まずはドルクの方から

ドルク「おっしやあ！」

それじゃあ依頼57

ドルク「ロックに行くぜ!!！」

依頼57 それぞれの遠征（ドルクルート）

ブレイブメンバーはそれぞれチームを編成して地下へと入っていった
まずはドルク達から見よう

ドルク「エナジーカタストロフィー！」

シルム「魔神剣！」

ソウ「ホーリーレイ！」

クレス「秋沙雨！」

リードン「業破拳！」

ジュテア「スカイエアー！」

デビー「噛み付き！」

それぞれの技が敵ポケモン達にぶつかり爆発を起こす、爆発がおさまると遺跡のポケモン達は次々と倒れていった、だがまだダメージが残っているポケモンもいる。

ドルク「体力ある奴もいるな」

ポケモンでも体力がある奴は耐えられる、もちろん能力の影響や特性などの影響で耐えることもある。

とりあえずドルク達はそれでも攻撃を繰り返し、遺跡のポケモン達を倒していった

……

ドルク達は炎が灯った場所についた、ここに石版があるようだ、ドルクは石版を見た

『炎が消えると呪文があるだろう』

つまり炎が灯っているのを消せば石版が出るってことだ、早速ドルク達は火を消すことにした

ドルク「ストーンエッジ！」

シルム「とりあえず…風牙^{ふうが}！」

ドルクはストーンエッジ、シルムは剣で風を作り火を消す

すべての火が消えて中央から石版が現れ、そこから地下へと出る通路が現れた

クレス「これで先に進めるね」

ジュテア「お宝は絶対もらうわ！」

ジュテアはお宝で頭がいっぱいだ

ミント「でも油断はできません」

ソウ「そうですね、行きましょう」

ドルク達は先へと進んでいった

……

地下へと上がったドルク達の前には大きい扉があった

シルム「大きい扉みたいだね……ん？あれって？」

シルムは扉にあるくぼみがあることに気づいた

全部で6つのくぼみ、しかも

ジュテア「これって……石版をはめればなんとかなるんじゃない？」

リードン「たしかにそうだけども……でも俺達まだ3つしか手に入っていないぜ？」

リードンの言うとおり、ドルク達の持つてる石版は3つしかない

ドルク「ここは他のチームに任せるしかねえな」

残り3つは何処にあるのか

他のチームは石版を見つけているのだろうか？

依頼57 それぞれの遠征くドルクルートく(後書き)

ドルク「まだまだあるんだな」

さて、次回はミゲールさんルートです。

依頼58 それぞれの遠征くクラウドルートく（前書き）

今回はクラウドさんルートです。

ドルク「それより更新早いな」

まだストックあるから更新できるよ

ドルク「マジで」

うん、それでは依頼59

ソル「ひゃっはあああああああああああああああああああ
あああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」
「?」

依頼58 それぞれの遠征くクラウドルートく

一方こちらクラウド、ソル、アレン、カガリ、ノコタロウ、チエスタ、アーチェのチームC

クラウド・ソル「波動弾!!」

二匹のルカリオは波動弾を連発してさらに自慢の銃などで敵ポケモン達を撃ちまくる

アレン「いくよ! 雷吉!」

雷吉「よっしゃあ! やるじゃき!」

二人は技の準備をしている

アレン・雷吉『バーンボルテックス爆雷!!』

とてつもなく巨大な雷撃の球体を投げつけて敵ポケモン達を一掃させる

カガリ「さすがだな」

アレン「はい! 先生!」

カガリはシャドーボールなどアレンを監視しながら敵ポケモン達を次々と倒していく。これも『シャドー』で経験したことだろう

ノコタロウ「ほい!」

ノコタロウはハンマーを使って敵ポケモン達を倒していく

ノコタロウ「(あいつらうまくいつているのやら)」

と、別々に行動しているクロー達を心配する。

炎丸「今度は私も行きますよアレン様」

アレン「うん！炎丸！やるよ！」

今度は炎丸を呼び出して巨大な炎の塊を生成させる

アレン・炎丸『ヒートエンブレム爆炎！！』

巨大な炎の塊は投げられ、敵ポケモン達を吹っ飛ばした

チェスター「はやて疾風！しんてん震天！」

チェスターは熟練した見事な手さばきで矢を連射し、さらに天に向かって8発の矢を放つ、それはまるで雨のように降り注ぎ、敵ポケモン達を倒していく

アーチェ「サンダーブレード！ファイアストーム！」

アーチェは術を詠唱し、雷の剣を敵に落とし、横から炎の渦が敵ポケモン達を襲いかかった

なんとかすべての敵ポケモン達を倒した7人

チェスター「ふうゝゾロアークでも悪くはねえな」

チェスターは自分がゾロアークでよかったと思っていた。もし他のポケモンになっていると弓が使えないようなことがあれば戦えない、むしろポケモンの技でも出来るんじゃないかというのもあるのだが、ポケモンになった人間だとポケモンの技を覚えるまで時間はかかる、そう考えるとよく考えないといけないのだ

クラウド「たしかになくやっぱ武器使えるんなら手ぐらいはあったりしてもいいよな」

ソル「そうだよな」

そうこうしてるうちについたのは滝だった

アーチェ「行き止まり？」

行ける場所がどこにもない、あるのは滝だけだった

クラウド「ちょっと待て…ん？」

ソル「あれだ！」

クラウドとソルは滝の裏から何かを発見したようだ、滝の後ろには石版があったのだ、ルカリオ特有の波動でわかったため見つけれることができた

早速クラウド達は石版を取った、すると滝の水は出なくなり、滝のあるところの壁がなくなる

チェスター「これは!？」

アーチェ「先に進めるみたいね」

クラウド「行くぞ!」

チームC全員は先へと進んだ

……

クラウド「ん? あれは! おーい!」

なんとかクラウド達チームCはドルク達と合流、ドルクは説明して
チームCのみんなは石版をはめた

残るは後二つ

依頼58 それぞれの遠征くクラウドルートく（後書き）

アレン「なんとか進めたね」

炎丸「そうですね」

雷吉「俺達の活躍みちよかったか」

はいはい、次回はミゲールさんルートです。

依頼59 それぞれの遠征〜ミゲールルート〜（前書き）

今回はミゲールさんルートです。

ドルク「それより更新早いな」

まだストックあるから更新できるよ

ドルク「マジで」

うん、それでは依頼59

デイン「いくヨ!」

貝刃蒼破！」

シエルマルも二つのホタチを使って防御したり攻撃したりと大忙し、ミジュマルから進化しているためさらに技に磨きがかかっている。

ギルガメス「何がなんだかな…フン！」

ギルガメスは大剣を振り回して次々と敵ポケモン達を倒していく

ミネラ「そうだよミゲールおじさん、しっかりしてよくタイダルウェイブ！」

グラデル「そうですよ、シードパニッシュ！」

ミネラは水の上級術、タイダルウェイブで大洪水を発生させて敵ポケモン達を一掃させる、敵ポケモンの地面から緑のエネルギーが現れて逆雨のように敵ポケモン達に襲い掛かる

アトリ「わかってる！ジャージョーブラスト！」

アトリはいつもの膝蹴りで敵ポケモン達を一掃した

ミゲールはいじけてのの字を書いていた

……

デイン「ここのようだよ」

どうやらこちらは地下に出たようだ、そこには

ミネラ「見て！石版だよ！」

目の前には石版があった

ギルガメス「これでなんとかなったな…ん？」

すると石版が光り出してレーザーみたいなのが先の壁にあたる、すると壁は開き、先に進めるようになった

グラデル「ここから先に行けそうですね」

アトリ「ほら行くぞクソ親父！！」

ミゲール「痛い痛い！！」

アトリはミゲールを引きずって、他のみんなも先へと進んだ

……

アトリ「おっ！ドルク！ソウ！」

ミネラ「パー！！」

チームBはドルク達と合流した

ドルク「おっ！アトリ達も無事だったんだな」

合流した後それぞれ説明をした

ミネラ「とりあえずこの石版をはめればいいんだね」

早速アトリ達は石版をはめた

これで後一つ

はたして！

依頼59 それぞれの遠征〜ミゲールルート〜（後書き）

アトリ「あゝあのクソ親父のナンパには呆れるぜ」

ドルク「ミゲールもタ〇シ化しちゃってるしな」

まあテイルズではスパードだしね（汗）次回は父（魔王）さんルートです。

これにピッケルは驚いた

父（魔王） 「さて、行くか」

親子二人で先へと進んだ

……

父（魔王） 「どうやら合流できたようだな」

なんとかこっちもドルク達と合流した

シルム 「あれ？こっちは石版を見つけていないようだね」

父（魔王） 「石版は何処だかわからなかったのだな」

どうやらそう簡単に残り一つの石版を手に入れることは難しいようだ

まだ合流していないチームに任せるしかないだろう

依頼60 それぞれの遠征く父(魔王)ルートく(後書き)

ピッケル「今回は短いですね」

まあ短いのもあるよ、まだまだ連続更新続きます。

依頼61 それぞれの遠征（ジユク&パルサルート）（前書き）

更新祭は続きます。

ジユク「ストックをためたな」

こうしないとねー更新もなんか曖昧なんだよ

ジユク「そうか」

それじゃあ依頼61

ジユク「油断するなよ」

依頼61 それぞれの遠征（ジユク&パルサルト）

一方こちらはジユク達四人のチームE

ジユク「ここはかなり古い遺跡のようだな」

ゼラス「敵も少ないようだな」

こちらは敵が少ないためか色々と調べている。

壁や壁画など

ディシア「3人とも、これを見ろ！」

ディシアは壁画を指差す

レビィ「何々？」

ジユク達は壁画の前に集まりだす

そこに書いていたのは黒い何かが書いてあった

ジユク「これは…」

ジユクは壁画に書いてある文字などを読んでみた

ジユク「『この島の呪いである『ガトルーヴァ』…この島は『ガトルーヴァ』によって島は呪いを受けた…それ以来この島に訪れ

る探険家は誰一人として帰ってこなかった』と書いてあるな」

どうやら呪いの事など色々わかったようだ

レヴィ「これはドルク達にも伝えないと！」

ディシア「一刻も早くドルク達に伝えないとな」

ゼラス「この島の謎もわかったことだ、急がないとやばいぞ！」

四人はドルク達の元へ

……

一方別の方では

パルサ「あく敵を倒しても倒しても出口が見つからねえ」

レイ「不思議のダンジョンですし、まだまだでしょうか」

グロリアル「そうだな〜とりあえず休憩するか？」

リユラ「賛成です。僕も疲れましたし」

こちらチームFの5人

みんな戦闘や歩き疲れたため休憩することに

シムーン「とりあえず麦茶を」

パルサ「ありがとな」

グロリアス「それにしても手がかりがねえんじやどうしようもないな」

こちらは手がかりや石版は見つからない様子だ

……

数分後

パルサ「それじゃあ行こうぜ!!」

なんとかみんな回復して立ち上がる、すると

ガコッ!

パルサ「へ?」

何処からか何かが流れる音がした、しかもパルサ達の先にだ…その先には

ゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

リュラ「水!?!」

グロリアス「おい!?! バカキアテメエ!! (怒)」

パルサ「うるせえ!! 俺は知らなかったただけなんだ!! 俺は悪くねえ!!」

某ゲームのわがまま長髪お坊ちゃんのセリフを言ってパルサは逃げる、それに続けて他のみんなも逃げる

……

ジユク「ん？なんか聞こえないか？」

デイシア「そういえば聞こえるな」

ジユク達は何か聞こえるのを感じていた。するとそこから

パルサ「逃げろおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!」

デイシア「パルサ！それにみんなまで！」

そこから5人がジユク達と合流

パルサ「って！？デイシア！？ってかお前等も早く逃げろ！水が迫ってきたんだよ！！」

と、慌てた様子のパルサ

シムーン「来ます！」

水がそこまで迫ってきた

デイシア「パルサ、お前の空間の力を使えばなんとかなるんじゃない

いのか？」

パルサ「あ」

そう、パルサは水タイプも持っている。さらに空間の力を使えば水を消し去ることだって可能だ

パルサ「忘れてた！　まったくやるしかねえ！！　亜空切断！！」

亜空切断でなんとか水を消し去った

グロリアス「ふう〜一時はどうかることかと思っただぜ」

みんな安堵の表情をする

ジユク「安心してる場合じゃない、ドルク達の元へ急ぐぞ！」

シムーン「こちらは何か進展があったんですか？」

ゼラス「話は後だ、行くぞ！」

合流した2チームは急いでドルク達の元へ！

依頼61 それぞれの遠征（ジュク&パルサルート）（後書き）

ディシア「貴様という奴は（怒）」

パルサ「だから悪かったって！（汗）」

あゝあ（汗）次回はチャームズとクロールートです。

依頼62 それぞれの遠征くチャームズ&クロールート(前書き)

やっとストックがこれでなくなる…

ミニロップ「よくやるわね」

いやゝ考えるのもやっとだし(汗)

クロー「ようやくワシ達だな」

はいはい、それじゃあ依頼62

クロー「やってやるぞ!!」

依頼62 それぞれの遠征くチャームズ&クロールート

一方こちらは

ミミロップ「ここはかなり古いようね」

チャームズの三人は敵ポケモンを倒しながら地下を搜索している。

もちろんここは暗いためかたいまつを持っでの搜索となった

サーナイト「敵も多い感じもありますが他のみなさんは大丈夫なんでしょうか」

チャームズ「大丈夫さ、ドルク達ブレイブだってそう簡単にはくたばらないだろうし」

ミミロップ「そうね♪ブレイブの二人も成長してかっこよくなったんだし大丈夫よ」

チャームズの三人は二人の成長を感じていた。

5年前、彼女達は一度冒険に失敗した

番人のポケモンに敗れてしまった。しかしドルクとシルムの二人によって助けられ、そして協力して冒険を成功させたのだ

ミミロップ「だから今度はあたし達もがんばらなきゃ！」

他の二人は頷いて先へと進んだ

……

一方こちらの三人

シノ「クロー様、ここはかなり行きましたけど中々到着しませんね」

クロー「わ、わかつとる！」

クローは慌てて言う

シード「たしかに全然だな」

敵も倒してはいるが一向にここから出ていない

ちなみにそれぞれ不思議のダンジョンになっているため何処に出るのかわからない

クロー「だがお宝はワシ達物だ！あいつらより先に見つけるぞ！」

シード・シノ『おー！！』

お宝のことで頭いっぱい三人だった

……

こちらチャームズの三人はダンジョンから脱出して、大きな石版の

前についていた。

ミミロップ「こう見ると持ち運べる感じではないわね」

大きな石版には色んな文字などが書かれている。だがかんじんの石版が何処にあるのか、三人は何かあるかどうかを調べる、すると

サーナイト「これは？」

サーナイトは何かを見つけたようだ

すぐさま二人を呼んだ

チャーレム「これは扉のようだね」

すぐに開けてみた、そこはさらに地下へと続く階段があった

ミミロップ「行ってみよう」

すぐにその階段を降りた

……

その頃クロー達は

クロー「うぬぬ…いつまで目的地に着くんだ！」

不思議のダンジョンで迷うクロー達

階段を探して歩いていく

シード「あっ！クロー様！あっちに階段が！」

シードが指指した方角に階段があった

クロー「おお！よくやった！行くぞ！」

『おー!!』

三人は階段のところへ向かう、ところが

カチツ

三人「え？」

三人は何かを踏んだ、その下には穴……つまり落とし穴が！

三人『なんでこうなるんだあああああああああああああ
あああああ——（やあああああああああああああああ
あ）!!!!!!!!!!!!!!』

」

引っかかった三人はそのまま暗い底へと落ちていった

-
-
-
-
-
-

一方のチャームズとはある部屋に来ていた、そこには

チャーレム「あつた！これだよ！」

なんと石版があったのだ、チャームズは石版を手に入れ部屋にあった通路へと行った

……

ミミロップ「あ！みんな！」

ドルク「チャームズ達もこれで合流だな」

なんとかみんな合流できたが、その前にジुक達とパルサ達とも合流して、話したところだったのだ

ジुक達もこの島の事をチャームズの三人に伝え、先に行こうとするが

ノコタロウ「クロー達は来ていないですね」

クロー達はまだ来ていないようだ

ドルク「そのうち来るだろう、行こうぜ」

ミゲール「サーナイトすわぁーん！！」

アトリ「いい加減にしろやクソ親父！！」

再びミゲールの叫びが木霊する。

チャームズが持っている石版をはめると6つの石版が光り出して、扉が開いた

ドルク「この先にお宝があるかだな」

シルム「気を引き締めて行こう！」

ソウ「がんばりましょう師匠！」

クレス「でも油断しないようにしよう」

ミント「行きましょう！」

リードン「最後まで何があるかわからねえからな」

ジュティア「もちろんよ！お宝は絶対に手に入れてやるんだから！」

デビー「もちろんッス！」

ミゲール「やってやるぞ！」

デイン「どんなのかワクワクだよ」

アトリ「気合入れていかねえとな」

シエルマル「（この遠征で親方様に見せつけないと！）」

ギルガメス「油断は禁物だ、心して行くぞ」

ミネラ「パパと一緒にがんばる！」

グラデル「この先嫌な感じです。気をつけていきましょう」

クラウド「たしかに嫌な気配がするな」

ソル「どんな相手だろうがやってやるぜ」（黒狂笑）」

アレン「先生、がんばりましょう！」

カガリ「ああ、ここまで来たのだから最後までがんばるぞ」

ノコタロウ「クロー達は来ていないが心配になってきた」

チエスター「ここまで来たのだから俺達も付き合おうぜ」

アーチエ「あたしだって！」

父（魔王）「さて、お宝手に入ったらもちろん城の建築費にしてやらないとな」

[illegible]

「俺達は負けない！」

ゼラス「もちろんだ」

レビイ「この先油断はできないわ」

ディシア「そうだ、だがそれでも私達は負けない」

「ぜってえやってやるぜ!!」

グロリアス「ああ！ぜってえな！！」

レイ「兄さん達がいる、それでも行きましょう！」

リユラ「油断しないようにしよう」

シムーン「なんとか合流できたのですから何があっても私達は最後まであきらめません！」

全員が気合を入れて先へと入っていった

依頼62 それぞれの遠征くチャームズ&クロールート（後書き）

えゝ修正や色々順序が違ってしまってますみません（汗）とりあえず修正などしてなんとかしたので、ホントすみません（汗）

ドルク「これで先に行けるな」

果たしてどうかな？

ドルク「まだあるんだな？」

気づいたか（汗）

依頼63 ガトウルヴァ (前書き)

ついにこの遠征編もクライマックスに突入です!!

ドルク「よっしゃあ!絶対やってやるぜ!!」

ついにボス戦です。では依頼63

ドルク「行くぜ!!」

依頼63 ガトウルヴァ

ドルク達はこの島の最深部までやってきた

ここは自然があり、さらに天井が広く、上からは少しだが光が差し込んでいる。そして目の前には石版があった

ドルク「ここだな…さて最後の石版はなんて書いてあるんだ？」

シルム「読んでみるよ」

シルムは石版を読んだ

シルム「この石版を読んだ者へ、この石版の上を見ると呪文が必ず書いてあるだろう。しかし、気をつけたまえ…この島の呪い『ガトウルヴァ』が君達を襲うだろう。心してかかれだって」

一体どういうことなのだろうか？

ドルク「つまりその『ガトウルヴァ』ってのがこの島の呪いの原因ってわけだな…ならそいつを消してしまえばこの島の呪いを解くことができるってことだな」

呪文を言えば戦闘になる。相当の覚悟が必要だ、もはやこれは最後の試練というのだろうか…ドルク達はそれでも覚悟を決めた

クレス「ん？みんな！上を見て！」

みんなが上を見た

すると石版の上から黒いモヤモヤとしたものが現れた…その黒いモヤモヤは姿を変え、人間のような姿となった

ドルク「こいつが『ガトウルーヴァ』」

シルム「黒いようだね…」

ドルクとシルムが構えた

クレス「どうやらこいつを倒さないかぎりこの島の呪いを解くことができないようだね」

クレスも構える

他のみんなもそれぞれ構えた

ドルク「行くぞみんな!!」

全員『おおーーーーー!!』

全員が一致団結した

それに反応したのか『ガトウルーヴァ』が襲いかかってきた!

ドルク「エナジーバスター!!」

ドルクはエナジーバスターを放つ、しかしガトウルーヴァはこれはいとも簡単に避けた、そこからドルクに向かって黒い炎を吐いた

ドルク「うおっ！」

ドルクは黒い炎をモロに食らった

ドルク「効いたぜテメエの炎」

ドルクはダメージを受けたが弱点なのにまだまだいけるようだ、だがガトウルーヴァはドルクに隙を与えない、さらに黒い手で突き飛ばそうとする。だが

バーン！

何処からか銃弾などがガトウルーヴァに当たった

クラウド「おっと！」

ソル「俺達を忘れてちゃ困るぜ真っ黒野朗（黒狂笑）」

シルム「ドルクはやらせないよ！」

クラウド、ソル、シルムの三人が銃を構えている。さっきのは彼等三人による発砲だろう、そこから

ソウ「よくも師匠を！！サウザンドカッター（光）！！」

ソウがサウザンドカッターでガトウルーヴァを斬りつけた、ガトウルーヴァは悲痛な叫びを上げて暴れる

ドルク「ビートフェンス！」

ドルクは地面を両手で叩きつける、するとそこから衝撃波がガトウルーヴァの攻撃を防いだ

リードン「俺の実力…見せてやるぜ!!」

リードンは空を飛んで急降下してガトウルーヴァを翼でうつでダメージを与える、だがそこから素早く方向転換してフレアドライブを繰り出しガトウルーヴァに当てる、さらに急上昇してから炎をまとってガトウルーヴァに向かって急降下した

リードン「行くぜ!これが俺の切り札だ!!業炎裂突撃!!」
ごうえんれつとつげき

急降下からの攻撃で地面にクレーターが付き、リードンが翼を広げ、地面に降り立つが少しひざまつく

リードン「へへっ俺もあいつに追いつけたかもな…」

ボロボロになりながらもなんとか立ち上がる

ジュティア「お宝のため!あたしもやるわ!新緑の草の風、今こそ癒しを集え!ライフリーフチャージ!」

草の風が全員の傷を治す

リードン「傷が…治った」

ドルク「ありがとなジュティア」

ジュティア「べ…別にあんたにお礼言われなくても／／／／」

ジュテアは赤くなる、もはやツンデレのようだ

だがガトウルヴァは黒いビームを繰り出す

デビー「ここは俺に任せるッス！龍ブレス！」

デビーは龍ブレスを吐き出し、ビームを相殺した

デビー「行くッスよ！俺の奥義を！ドラゴンバースト！」

デビーは黒いエネルギー球体を吐き出しガトウルヴァにダメージを与える

ガトウルヴァは黒いモヤモヤになるそこからデビーに向かってくつつこうとする

ソル「やらせるかよ（黒狂笑）」

ソルはソウリーターを発動していた。そしてGワイバーンを繰り出す

ガトウルヴァは慌てて避け、人間のような姿になる

だがそこから

アレン・雷吉『バーンボルテックス爆雷！！』

アレン&雷吉の連携技、爆雷が繰り出され、ガトウルヴァを感電させる、そこから

カガリ「ダークホール」

カガリはダークライ特有の技ダークホールでガトウルーヴァを眠らせる

カガリ「今だ！」

そこからノコタロウがハンマーでガトウルーヴァを叩きつける

ガトウルーヴァはたんこぶができた状態となった

チェスター「俺がしとめる！奥義！てんいじょうはきゅう天威浄破弓！！」

チェスターの秘奥義がガトウルーヴァに炸裂する

アーチェ「いでよ！創世の輝き、ビックバン！！」

アーチェは最強術、ビックバンで一掃させる、しかしまだガトウルーヴァは倒れなかった

ソル「まだ倒れねえのかよ！」

クラウド「今度は俺だ！レールガン超電磁砲！！」

クラウドがレールガン超電磁砲でガトウルーヴァを攻撃した、だがこれでも倒れない、ガトウルーヴァは全員に黒い雲を発生させた

するとみんなが苦しみだす

ドルク「くっ！」

シルム「力が…抜けていく…」

どうやらこの雲は力を吸うようだ、このままではみんなが危ないその時

わあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ
!!?

ドカーン!!
ーン!!

何処からか何かがガトウルヴァの頭上に落ちてきた

落ちてきたのは

ノコタロウ「お前達！」

なんとクロー達だった

ドルク「どうやら助かったようだな」

思わぬ奇跡によって黒い雲の呪縛から解放された

ミゲール「ならそれでも食らえ! 冥空斬翔剣!!!!」
めいくうざんしょうけん

斬りつけて上空に飛ばす

クレス 「よしっ！こっちも！」

クレスもミゲールと同じ技を繰り出す

クレス「負ける……ものかあああああああああああああ
あああああああああああああああああ！」

ガトウルヴァを上空へと飛ばした

「いくヨ！星の紋章！」

デインの左手から星の紋章が浮かぶ

デイン「いくヨ！グランドプロージョン！」

地面から岩と炎の塊が現れガトウルヴァを襲った

アトリ「今度は俺様だ!!! べるぜバジヨールブラスト!!!」

アトリは強力な膝蹴りでガトウルヴァをぶっ飛ばした

「今こそ使える……水の剣技……これが俺の……斬空……水

シエルマルは斬りつけてからさらに背中から翼が生え、水をまとった剣でガトウルヴァを切り裂く

ギルガメス「こっちもブラストバーン！」

ミネラ「行くよ！ 僕の秘奥義いっちゃう♪アクエリアスファイア！」

グラデル「花よ、私達に命の息吹を！グラデーションガーデン！」

ギルガメスのブラストバーン、ミネラの秘奥義が炸裂、そしてグラデルの回復の秘奥義によりみんな回復した

父（魔王）「父さんの拳は痛いぞパンチ！」

ネーミングセンスが長い父（魔王）のパンチでガトウルーヴァは吹っ飛ぶ

ジユク「決めさせてもらうか」

ジユクはリーフブレードを繰り出してガトウルーヴァを斬りつける、素早い動きで斬りつけ、さらに斬りつけるそしてリーフブレードをクロスして斬りつけた

レビィはみんなの周りから草花を出現させ、みんなの傷を癒す

ゼラス「私も行くか：闇へと飲まれるがいい：ゴーストダイン！」

漆黒の闇がガトウルーヴァを襲うが、ガトウルーヴァには闇は効いてないようだった

ゼラス「私の中では無理があったか」

ゼラスは悔しがるが

ディシア「いや！まだだ！行くぞミント！」

ミント「はい！これ以上させません！」

すると時間が止まる

デイシア「これぞ神のなせる技……」

ミント「タイムストップ！」

二人の秘奥義、タイムストップでガトウルーヴァの動きを止めた

デイシア「今こそ時のおさめし私の力……タイムパッション！」

さらに何処からか青いエネルギーが一斉にガトウルーヴァを襲う

パルサ「済むと思うなよゴラァ！亜空連斬！！消し飛びやがれえ！！」

パルサは両腕で亜空切断を剣のようにしてガトウルーヴァを斬りつけた、さらにレイはブレイズキックで動きが止まっているガトウルーヴァを吹っ飛ばした、すると時間の拘束がなくなり動けるようになる。だがグロリアルはドラゴンダイブ、リユラは龍の波動でガトウルーヴァを地面に叩きつけた

ガトウルーヴァはまた黒いモヤモヤになるが

シムーン「もうその手は通じませんよ……月光の光よ……かのものに光、かのものに罰を……ムーンオブライン！」

月の光がみんなを照らし出し、みんなを回復する、だがガトウルーヴァにとってはダメージを与えた

ガトゥルーヴァはすでにボロボロになっていたが最後まで悪あがきを見せようとするが

サーナイト「サイコキネシス！」

チャーム「はっけい！」

ミミロップ「ピヨピヨパンチ！」

チャームズの三人がガトゥルーヴァの動きを封じた

ミミロップ「今よ！」

シルム「いくよ！これがオイラの力！燃える炎は心の力！！炎撃舞えんげきぶ荒拳こうけん！！！」

シルムは素早く連続でパンチとキックの連続攻撃を繰り出す、そこからさらにレウスバーニストを使って連続で炎の弾を連発した。

シルム「これで決めるよ！！鳳凰降下斬ほうおうこうかざん！！！」

炎をまとい、鳳凰の形に生成し、そこから剣を拵んで急降下して斬りつけた

シルム「ドルク！」

ドルク「任せろ！！！」

ドルクは光をまとった

ドルク「俺の本気見せてやるぜ!!」

ドルクが連続で攻撃、ガトウルヴァから炎が出たり風や水など様々な属性の攻撃となりダメージを与える、属性はドルクの攻撃からきた、そう、これこそ連続で攻撃できる秘奥義

ドルク「震天裂空斬光旋風滅碎神罰割殺撃！！」

さらに続けてドルクはトドメがくる

ドルク「俺の歌に刻まれな!! ハードロックメドレー!!」

巨大な音符や音波そして色んな色の音符がガトウルーヴァを襲った

ドカ
ン！！

爆発が起こり煙が立ち込める

するとガトウルヴァは倒れていた

すると石版が光を灯っていた。

そこから次々と文字が現れた

シ
ル
ム
「
ド
ル
ク
」

ドルクは頷いて前に出た

ドルク「炎は熱き力…水は静寂する透き通る力…大地は轟く溢れる力…風は自由を求めし流れる力…今ここに…呪いを解けんことを…」

するとさきほど扉に設置した石版がウヨウヨと光輝く石版に向かって光を放つ…7つの光が一つとなって島全体を包み込んだ

……

光がおさまるとそこは元の場所…砂浜に戻っていた。太陽が昇って光を浴びる

ドルク「どうやら今回は成功だったな」

シルム「そうだね」

お宝は見つけなかったが

ドルク「ん？」

ドルクの足元には緑のペンダントが落ちていた

ドルク「そうでないかもな…」

ドルクはそのペンダントを首につけた

ミミロップ「あっ！」

ミミロップは何かを見つけた

それは水晶のようだった

チャーレム「水晶のようだね」

サーナイト「綺麗ですね…」

彼女達もある意味お宝が手に入った感じだった

依頼63 ガトゥルーヴァ（後書き）

ドルク「なんとか勝てたな」

みんなの絆が闇を打ち砕いたんだよ

シルム「そうだね、みんなが力を合わせればどんな困難をも乗り越えられる…オイラ達はそれでもね」

そう、次回は一部の人達以外別れとなります。

ドルク「誰が別れるんだ？」

それは見てのお楽しみ、次回の依頼64で遠征編も終わりになります。

依頼64 それぞれのお宝と別れ（前書き）

ついに別れの時です。

ドルク「一体誰が」

それは見てからのお楽しみ…ついに遠征編クライマックス！依頼64

ドルク「またな！！」

依頼64 それぞれのお宝と別れ

アレン「ん？これって！？」

カガリ「どうしたアレン？」

アレンは何かを見つけたようだった

アレン「先生！これって」

それは金の塊だった

カガリ「これは金塊のようだな：相当な金額になりそうだぞ！」

アレン「やった！！先生！私達やりましたね！！」

二人は喜ぶ

その様子をクレスは見ていた

クレス「（なんだろう：カガリさんがあの人に見えるような感じがする：あの声もあの人と同じ声だったし）」

カガリが彼の仲間である召喚士と重なって見える感じがクレスに感じた

シルム「これはなんだろう？」

シルムは本を見つけた、それは少し分厚く、赤かった…シルムはその本を読んでみた

シルム「これって!？」

アーチェ「これ呪文書じゃない!？」

なんとそれは呪文書だった

シルム「しかもこれほぼ読めば覚えられる呪文書のようなね、かなりの数の呪文が書いてある」

呪文書は主に一つの書で一つしか術を覚えることはできない…しかしシルムが拾った呪文書はかなりの数の術がかかれていた。

シルム「これでオイラも術が使えるかな…」

シルムは呪文書をぎゅっと掴み、トレジャーバックに入れた

ソウ「僕のは…これはなんでしょうか？」

ソウが見つけたのは五星陣のペンダントだった

ミント「それはミスティシンボルです。呪文詠唱を早めることができるアクセサリですよ」

どうやらこれはアクセサリのように呪文詠唱を早める効果を持っているようだ

ソウ「それじゃあもらっておきます」

ソウはミステイシンボルを首につけた

ドルク「似合ってるぜソウ」

ソウ「ありがとうございます師匠♪」

ミステイシンボルが太陽に反射し、輝く

クレス「これは!？」

クレスは何かを見つけた、それは緑色に輝く剣だった

クレス「まさかエターナルソードがあるなんて」

エターナルソードとは時空の力を持つ剣、特定の者にしかその力を使うことはできないのだが

クレス「なんだか力が発揮していないみたい…」

エターナルソードは少し輝きが弱まっていた。クレスはエターナルソードを持った

再びこの剣を持つことになるなんて…クレスはエターナルソードと一緒にあった鞆にしまった

ミント「これは？」

ミントは不思議なペンダントを見つけた

透き通った透明の宝石は綺麗だった、ミントはそのペンダントを拾って自分の首につけた

リードン「ん？これはグローブに木の実がたくさんだな」

リードンにはボクシングで使うグローブだがかなり新しいようで、さらに木の実が入った袋に木の実がたくさん入っていた。さらにこんなものまで入っていた

リードン「これはグミか？なんだか形が違う感じだな」

グミが入っていた。グミはそれぞれ丸みを帯びた形だった、それぞれ赤や黄色、さらには桃や紫の色取り取りのグミがそろっていた。

リードン「まあこんなお宝悪くねえかもな」

笑顔でリードンは袋を担いだ、持ってみると軽い感じがした。

リードン「成長したんだな俺…」

リードンは重い物を軽く持ち上げることができた…リードンは成長したのだ…努力が実ったのだから

ジュティア「あたしのは…これは水晶とか金塊とかすごいお宝だわ！！」

ジュティアは喜んだ、数え切れないほどの水晶に金塊、そして金貨などの価値にあるお宝を手に入れた

これで孤児院の子達を養えるほどの大金となっただろう…

ジュティア「これで色々立て直すことができるわ…」

ジュティアは嬉しく涙を流す

ドルク「よかったなジュティア」

ドルクが彼女を慰める

ジュティア「ありがとう…あんたのおかげかもね…あんたを見た時は…あたしもあんたが好きだったかもしれない…」

するとドルクは突然ジュティアを抱きしめた

ジュティア「!？」

ジュティアは赤くなった

ドルク「俺も…お前は口悪い感じもあるが悪くはねえぜ…こっちはありがとな…」

ジュティア「べ…べべべ…別に…あんたに感謝された覚えはな…ないわ／／／／」

すでにジュティアの顔がリンゴのように赤くなった

デビー「ご主人はすごいツスね」

そんな様子をデビーは見ていた

デビー「俺もいい物見つけたッス…」

デビーが口に掴んで持っているのは本だった

そこにはこう書かれていた。

『技集』と

そしてデビーの首には剣を模ったペンダントがついていた。

クラウド「金塊が手に入ったな」

レイ「僕もだよ兄さん」

二人は金塊を手に入れていた。どうやら少しでかい感じだった

ソル「こっちはすげえ！」

ソルは黒いペンダントと金塊を手に入れた

ソル「これでチョコサンデーがたっぷり食える！」

ソルがガッツポーズをとる、金塊で大好物のチョコレートサンデーをたっぷりと食いたい感じだ

ギルガメス「俺も金塊のようだな…ここは本当に宝島のようなだが…なぜ呪いが解けてここらへんに宝が…しかも大体の者達が別々にお宝を手に入れている。一体どういうことなんだ？」

ギルガメスは疑問に思っていた。この宝島の呪いが解けた…そして

今砂浜にいた：だがそこにはそれぞれお宝があった

なぜお宝などがこの辺に散らばっていて、みんなのところにあるのか？

ギルガメス「まあお宝つてものは手に入ったからいいか」

ギルガメスは疑問に思いながらもお宝を手に入れたので少し喜ぶ

チェスター「おっ！エルヴンボウじゃねえか！？なぜこんなところに」

アーチェ「あたしはスターブルームじゃん！？」

なんと二人にとっての武器が落ちていた。エルヴンボウはエルフの魔力を込めた矢、スターブルームは星を模った飾りをつけたホウキだ

チェスター「まあ受け取っておくか」

アーチェ「なんか納得できないけどまあいいか」

二人はそれぞれの武器を掴む

ミゲール「おお！俺は金塊と幻のエクスカリバー！！」

ミゲールは目を輝かせエクスカリバーに触れる

ミゲール「これはいい！これで俺は」

クレス「父さん、それ偽者だよ（汗）」

クレスが偽者という

偽者は黄金でないが銅で出来ていた。

シルム「聞いたことあるよ、エクスカリバーには偽者があるんだって、これはあまり期待できないエクスカリパーっていう武器だよ」

ミゲール「なんじやそりゃあああああああああああああ
あああああああああああああああああああああつ
!!!!!!!!!!!!!!」(泣)

偽者武器をもらって嬉しくない感じになったミゲールであった

デイン「オレっちはフェアリングだよ」

アトリ 「俺はなぜかダイヤモンドだ」

デインはフェアリングをアトリはダイヤモンドだった

デインのフェアリングは呪文に使う魔力の消費を半分にして使うことが可能なリングだ、今のデインにはぴったりだろう

アトリ「俺はトレーニングセットにコンパクトにしまえるやつだ」

アトリはトレーニングセットとそれをしまえるコンパクトケース（でかくてもしまえるタイプ）だ

シエルマル「これは…剣？」

シエルマルは青く輝く透き通った双剣を掴んだ

シエルマル「俺もこの剣は何か感じるかも…」

シエルマルは二つの剣を腰にそえた

ミネラ「僕はお菓子だ！」

グラデル「私は花の種と木の実です！」

ミネラはたくさんのお菓子、グラデルは花の種と木の実のセット

父（魔王）「うんしょっと！」

父（魔王）はこれほどまでないほどの金塊だった、ただでかいため
軽々と持ち上げてしまった

ピッケル「結局は金塊で僕は（泣）」

ピッケルも金塊なのだが少ししかなかった

ジュク「俺は剣のようだな」

レビィ「私は杖よ♪」

ゼラス「私は魔術書のようだな」

ジュクは緑の剣、レビィは桃の杖、ゼラスは黒い魔道書を手に入れた

ディシア「これは？」

パルサ「なんか俺たちと同じ感じだなこれ」

ディシアは青いオーブ、パルサは桃色のオーブだった、さらにディシアはタイムシールドと呼ばれた石版、パルサはエアブレードと呼ばれた爪のようなものを手に入れた

ディシア「まさか私達専用の道具が出るとはな」

パルサ「うっしやあ！」

他、グロリアルはマツハスカーフ、リユラはまぼろしのマント、シムーンはみかづきのベールを手に入れた

ノコタロウ「おっ！私はゴールデンハンマーだ！」

ノコタロウは黄金に輝くハンマーを手に入れた

ノコタロウ「叩くのもったいない感じもあるが…これはすばらしい」

もはやうつとりしていた。一方のクロー達のは

クロー「ワシのは木の実はいっぱい」

シード「俺は種いっぱい」

シノ「わいは不思議玉いっぱい」

なぜか木の実と種と不思議玉各種だった

クロー「ワシ等の苦勞はなんだったんだああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああつ――！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！？」

一匹のワニの叫びが島を木霊する

•
•
•
•
•
•

数分後

ドルク「もう行くのか？」

父（魔王）「世話になったドルク君、また会う日まで、ピッケルよ……行くぞ！」

父（魔王）はそのままピッケルを掴んでひとつとびした、なぜかピッケルの叫ぶ声が聞こえたのは気のせいだろう（汗）

クラウド「父（魔王）はすげえな……まあここでお別れだな」

クラウドもお別れとなった

レイ「お世話になりました」

ドルク「ああ、また会えたらまた会おうぜクロウド」

クラウド「ああ！」

二人は握手した、信頼できるからまた会える…仲間がいるからまた会える…

ドルク「いいか、お前は一人じゃねえ…俺もいる…また何かあったら…遊びに来いよ」

クラウド「ありがとな！」

レイ「それではみなさんさようなら！」

クラウドとレイはワープした

アレン「ホントにありがとう！」

カガリ「世話になった」

今度はアレンとカガリの二人だ

ドルク「俺達も楽しかったぜ♪」

シルム「また遊びに来てね」

アレン「うん！絶対にまた会える日を！」

カガリ「元気でな…お前達二人もがんばれ…俺達は離れていても見守っているぞ」

雷吉「さよならじゃけんドルク、シルム」

炎丸「さよならです。ドルク様、シルム様」

アレンとカガリ、そして雷吉と炎丸は黒いワープホールへと消えて行った

ギルガメス「ホントに世話になったな」

シルム「ギルガメスさんありがとうございます」

シルムはギルガメスにお礼を言った

ソル「ドルク：お前のおかげで俺も色々と学ばせてもらったぜ：」

ドルク「ああ、俺もお前に学ばせてもらったかもな」

互いに目を合わせる

ソル「また何処かで会おうな：あとであいつにもシルムの事よろしく言っておくぜ」

シルム「うん、お願いね」

ドルク「今度会った時はまたバトルしような！」

ソルとギルガメスは手を振って魔法陣の中へと入った、魔法陣は光輝きソルとギルガメスを包んで消えていった

ノコタロウ「ホントにお世話になりました」

ノコタロウはおじぎをした

ドルク「何、俺達も探検隊としてのことをしたまでよ」

シルム「ノコタロウさんもお元気で」

ノコタロウは少し涙を流す

ノコタロウ「そう…ですね…」

すぐにハンカチ（火耐性のある）を取り出してゴールデンハンマーを持ったままクロー達に向く

ノコタロウ「さあてお前達を元の世界に戻すぞ」

クロー「あゝやっと戻れる」

しかしクロー達にとってはもはや苦手なアレでの帰還が

ズポッ！

クロー・シード・シノ『うわっ!?!?』

それは大砲だった

クロー「まさか作者!?!?」

ノコタロウ「それじゃあ先にいってらっしゃい♪」

リードン「ああ！ありがとな！ドルク！シルム！」

リードンはパワー系の重りをつけたまま空へと飛んでいった

ドルク「行っちゃったな」

シルム「みんなそれぞれ違うお宝だけど…一番はこの達成感だね」

そう、彼等は手に入れたお宝よりもっといいお宝を手に入れていた。
それは

ドルク「俺達仲間の絆だ」

たとえ離れていても、彼等は繋がっている。どんな時でもみんながいる。みんな世界は違っても心は繋がっている。

ドルク「クレス達はどうするんだ？」

残ったクレス達は

クレス「うーん、エターナルソードが今発揮していない感じだから残るよ」

どうやら残るようだ

色々謎があるのだから

ドルク「それじゃあ俺達も帰るぞ！！」

[illegible]

みんなはバンエルディア号に乗ってトレジャータウンへと戻った

•
•
•
•
•
•

ここは何処かの場所

そこに一匹のポケモンがいた、黒くて正体はわからなかったためシルエットとなっていた

「ここか……ポケモンの世界というのは……」

黒いポケモンが立ち上がる

「この世界の影響でポケモンになった…元凶を…私が…」

そのポケモンは消えていった

依頼64 それぞれのお宝と別れ（後書き）

ドルク「あゝやっと終わったぜ！」

シルム「ホントよかったよ」

コラボしてくださいましたスイツクンさん、クラウドさん、ハボツクさん、Renさん、ノコタロウさん、sibugakiさんどうもありがとうございました！！

ドルク「ミゲール達が残っているが？」

シルム「ソウはまだいるみたいだね」

まあソウ君もそのうちだし、ミゲールさん達を残したのは次の新章にかかわることになるから

ドルク「それに最後の奴は誰だ？」

それは新章に入ってからのお楽しみだよ♪

シルム「不安だけど（汗）」

そんな次回は新章突入です。

依頼65 二人の龍の卒業試験と再会（前書き）

はい！新章突入なのですが

ドルク「ですが？」

今回は再びあの作者さんの登場とさらに卒業試験です。

シルム「ああ、あの二人のね」

その二人とは…依頼65

ドルク「いってこいや！！」

依頼65 二人の龍の卒業試験と再会

遠征から数ヶ月…

ここはいつも平和なトレジャータウン、今日も太陽が照りつける

そしてここには二つのギルドがある

一つは有名なプクリンが収めるギルド、プクリンのギルドがある。
このギルドはあの有名な探検隊を卒業させた有名なギルドなのだ

そしてもう一つのギルド…プクリンのギルドを卒業した二人のチーム…その名はブレイブ…この世界の時と空間を救った探検隊なのだ、そのブレイブのギルドがサメハダ岩にあるギルド…『ブレイブ』

そんなブレイブのメンバーは遠征から帰ってきて色々と調べたりや依頼をこなしたりしていた。そんなこの頃…

…

ギルド1F ギルド食堂

そこにはみんなが集まっていた。

今現在ギルドにいるのは親方であるドダイトスのドルク、副親方であるゴウカザルのシルム、別世界から来て、ドルクの弟子である銀イーブイのソウ、このギルドの弟子になってまだ数ヶ月しか立っていないフタチマルのシエルマル、ドルクの義理の息子、マナフィの

ミネラ、そして弟子達であるクレセリアのシムーン、シェイミのグラデル、ガブリアスのグロリアス、カイリユールのリュラ、ドルクのペットであるイビルジョーのデビー

元お尋ね者ジュカインのジュティア、ディアルガのディシア、パルキアのパルサ、元ドルクのパートナーであるジュカインのジユク、セレビィのレヴィィ、ヨノワールのゼラス、さらにこっちには別世界から来た、ヨーギラスのミゲール、タツベイのアトリ、トゲチックのデイン、ミゲールの息子であり、テイルズ初代主人公であるガバイトのクレス、法術師であるタブンネのミント、クレスの親友であるゾロアークのチェスター、ハーフエルフであるが今ポケモンのエモンガのアーチェの23人だ

今回は何かあるらしい

グロリアス「ついに俺とリュラは卒業試験を受けるんだな」

ドルク「ああ、ここのところお前等もよくやってくれたからそろそろかと思ってな」

どうやらグロリアスとリュラの二人の卒業試験らしい、なので二人に緊張が走る

リュラ「でも僕達は絶対に試験に合格する！」

リュラがめずらしく気合が入っていた。

ドルク「まあ二人とも…がんばれよ」

グロリアス「ああ」

リュラ「はい！」

二人は返事をする

ドルク「では卒業試験の説明をするぞ」

ドルクは卒業試験の説明をした

卒業試験はAランクのお尋ね者バンギラスを捕まえることだ、場所は闇の火口らしい

ちなみにバンギラスはかなりの凶暴らしく、他の探検隊はてこずっているために『ブレイブ』から依頼が来たのだ、ドルク達は色々やる必要があるためできないらしく、今回は二人に依頼を頼んだ

グロリアス「よっしゃあ！なら行こうぜ！」

グロリアスは勢いよく飛び出した

リュラ「ちょっ！？ちょっ！？勝手に行っちゃだめだよ！」

リュラも追いかけるように行く

ドルク「あいつらなら大丈夫だろうな」

するとそこから

????「おい！」

なんとルカリオが入ってきた

ドルク「クラウド！？お前帰ったんじゃないのか？」

なんとクラウドだった…でもなぜここに来たのか？

クラウド「レイは別の方で頼んだ、俺はこっちで色々やりたいことあるからまたよろしくな」

シルム「よろしくクラウドさん」

みんながクラウドを再び歓迎する。

クラウド「そういえばあの二匹のポケモンは何処に行ったんだ？」

クラウドは二匹のポケモンがどうか言った、どうやらさつきグロリアスとリユラとすれ違ったようだ

ドルク「ああ、あいつら二人は卒業試験だ、お尋ね者を捕まえにだな」

クラウド「へえーそうだったんだな」

クラウドは納得した。

ドルク「まあ俺はクレスのエターナルソードとかなど色々遠征の事で疑問になったことを調べていてな、クラウドも手伝ってくれないか？」

クラウド「わかった、俺も手伝うよ」

クラウドも手伝うことに

……

闇の火口

グロリアス「あちいゝ」

リュラ「ここは本当に熱いね」

二人は闇の火口に来ていた。やはりドラゴンタイプでも暑さは感じているようだ

闇の火口は火山が活発な地域、炎タイプのポケモンはマグマなどの影響は受けないが他のタイプだと地形ダメージやマグマにのれば火傷などでダメージを受けてしまうのだ

グロリアス「龍破爪斬^{りゅうはしもうざん}!!」

リュラ「ハートレスサークル!」

グロリアスはドラゴンクローを振りかざして相手を地面に叩きつける、リュラはグロリアスを回復させる、彼女は最近法術……つまり治療術を覚えてきたのだ

ポケモンの技には相手を回復する技もある……しかし問題は自分を回復できても味方を回復する技が少ないのだ、タブンネのように『癒

しの波動』などの技を覚えていれば話は別なのだが、ポケモンの技も色々あるのだ、リュウは回復系…治癒術を覚えるようにはなった、ここまで彼等も遠征から数ヶ月…卒業できるほどの実力はついてきたのだから

グロリアス「いやゝ助かったぜ」

リュウ「ううん、僕もミントさんに法術覚えてなければできなかったしね」

それぞれ教えてくれる者もいる。探検隊はただ探検するだけが仕事じゃない…人を助けることやお尋ね者を捕まえるなど、探検隊はすでに危険と隣り合わせの仕事なのだから

グロリアス「そうだな…さて行こうぜ、バンギラスをぶっ潰しによ！」

リュウ「うん！」

二人は闇の火口を進んでいった

……

闇の火口最深部 奥底

闇の火口の最深部、ここは5年前にドルクとシルム…そしてシムーンがダークライと戦った場所だ

ここは今でも火山が噴いてきたりもあった、そんなところに二人は到着した。さらにそこには一匹のポケモンがいた

全身がトゲの突起を覆っていて、さらに目つきは悪く爪も鋭いポケモンだった。このポケモンこそ今回の標的ターゲットであるバンギラスだ

バンギラス「なんだあゝテメエ等は？」

グロリアス「テメエがお尋ね者のバンギラスだな？」

リュウ「大人しく僕達に投降してください」

二人の龍は構える、だがバンギラスは笑う

バンギラス「ハッハハハハハ！投降だと？やれるもんならやってみな！！」

バンギラスは二人に襲い掛かる

依頼65 二人の龍の卒業試験と再会（後書き）

グロリアス「おい作者！なんでここで終わるんだよ！」

はいはい、次回からバトルなんだから落ち着け

リユラ「たしかにそうだね…それにしてもクラウドさんが来るなんてね」

本人が再び出たいときたから出演したけどね（汗）

ドルク「これは楽しみだぜ♪」

次回は二人の龍が活躍します

依頼66 二人の龍の絆（前書き）

ついにバトルです。

グロリアス「やってやるぜ！」

リュラ「僕達は負けない！」

それでは依頼66

グロリアス「燃えるぜ！」

依頼66 二人の龍の絆

バンギラス「ストーンエッジ！」

バンギラスはストーンエッジを繰り出す。狙いはリユラだ、リユラはドラゴン・飛行タイプ：氷なら大ダメージを受けてしまうがそれだけじゃない、ストーンエッジは岩タイプの大技、当たれば2倍のダメージがリユラにきてしまうのだ

だがストーンエッジははじかれた

なぜならリユラの前にはドラゴンクロード技を相殺した一匹のガブリアス：グロリアスが立っている。

グロリアス「テメエ：何狙ってきてんだよああ？」

グロリアスの目つきが鋭くなった

バンギラス「チッ！ならテメエからやってやる！破壊光線！！」

バンギラスは破壊光線を繰り出す

グロリアス「そんな攻撃当たるかよ！」

グロリアスとそして後ろにいたリユラは破壊光線を避けた、そこからグロリアスはドラゴンクロードバンギラスを攻め、リユラは術を詠唱する。

グロリアス「蒼破刃！」

グロリアスは青い衝撃波を放つ

バンギラス「その程度！」

しかしバンギラスは右腕を使ってはじいた、さすがはAランクのお尋ね者だ

だがそれはただの囮にすぎなかった。グロリアスはさらに爪を構えて連続でバンギラスを切り裂く、だがバンギラスの硬い鎧の体はそう簡単にダメージは通らない

バンギラス「調子に乗るなよ雑魚が！」

太い腕でグロリアスをなぎ払った

グロリアス「ぐわっ!？」

グロリアスは吹っ飛び岩にぶつかる

バンギラスは今度はリュウに迫る、リュウは今詠唱中だ…このままいくとリュウは攻撃を食らってしまう…もはやピンチに陥る

だが

カキーン!

バンギラス「チッ!しぶてえくなく雑魚の癖して」

バンギラスははじかれて体勢が崩された、だがグロリアスは隙を見逃さない

さらにドラゴンダイブで腹に当てる

バンギラス「ぐおっ!？」

バンギラスは吹っ飛ばされ岩に激突

バンギラス「貴様等!!！」

バンギラスは怒り状態になる。

リュラ「真空の刃よ!切り裂け!ウインドスラッシュ!」

真空の刃がバンギラスの動きを止める

グロリアス「龍爪連牙^{りゅうそうれんが}!!！」

さらにグロリアスはドラゴンクローを連続で繰り出してバンギラスにダメージを与える

バンギラス「ぐ…このまますむとおm」

言う途中で地面が揺れてバンギラスはバランスを崩した

リュラ「聖なる槍よ…彼の者を貫け!ホーリーランス!!！」

数個の光の槍がバンギラスの動きを封じた

リユラ「今だよ!!」

グロリアス「これで…終わりだ！！グランドダイブ！！」

グロリアスは砂をまとして真上から急降下した

バンギラス「ぐわあああああああああああああああ
あああああああああああああああああああつ！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？」

バンギラスの周りにクレーターができてバンギラスはグロリアスの技を食らって気絶した。

グロリアス「やったぜ……」

リュラ「うん！」

二人はタツチした

グロリアス「あの時お前のハートレスサークルが間に合わなかったら全滅だったな」

リュウ「うん、でもよかった：ありがとう」

お互い握手してバンギラスを逮捕した

•
•
•
•
•
•

その頃ドルク達は

ドルク「このエターナルソードがなぜ力が弱っているかだな…ディシアの力でどうにかできないか？」

こちらはクレスのエターナルソードの事で考えている。そこでドルクはディシアの時の力でなんとかならないかと考案した

ディシア「ならやってみよう」

ディシアの胸にある金剛玉が光りだす、それと同時にエターナルソードが光だし少しだが輝きが戻ってきた

ディシア「これ以上は限界だな…この剣に時の力を注ぐのは逆に私にも負担がかかる…まだこの剣の力を取り戻すにはまだまだ時間もかかる…もしくは同じ時の力を持つ者かこの剣を作った者でないとだめだな」

どうやらこの剣…エターナルソードには相当な力があるためかディシアの時の力を分けてもディシアには負担をかけてしまう

シルム「この剣…時空の剣だからこれはクレスさん達の世界に行った方がいいかもしれないね」

たしかに、エターナルソードは時空の剣…そうなるとクレス達の世界に行くしかないのだ

クレス「そうかもしれないね…とりあえずもう少し調べてから行った方がいいかもしれないな」

ミント「そうですね…ディシアさんの時の力だけではまだ足りない

感じみたいですし…でも力が少し戻っただけで進展したからよかったと思いますよクレスさん」

ミントのいうとおり、エターナルソードはディシアの時の力も込めているのでなんとか少し力は戻っているようだ

クレス「そうだね」

ミゲール「あゝあ、俺もエターナルソードぐらい使えればな」

ミゲールは羨ましがる

……

一方、こちらは何処かの森

????「感じる…どうやら元凶はあっちだな」

そのポケモンは空を飛んでいた。そしてそのポケモンが見る方向にはトレジャータウンが

????「世界樹の精霊にも影響が出ている…なら…」

そのポケモンは赤と青の小さい球体がまどっている。そしてそのポケモンは…

ダークライだった

……

ドルク「おっ！やったな！」

グロリアス「ありがとな！」

こちらギルド『ブレイブ』ではバンギラスを逮捕した二人の卒業を迎えていた。

シルム「二人とも、よくがんばったね…おめでとう」

シルムは花束を二人に渡す

リュラ「ありがとうねシルム」

二人は嬉しくなる

ジュティア「まあこういうのも悪くないわね」

ドルク「これからも離れていてもがんばれよ」

どうやら二人は卒業してから二人で別の大陸に行くようだ

グロリアス「それじゃあな」

リュラ「お世話になりました！」

こうして二人は卒業して別の大陸へと旅立った

彼と彼女もきつと

立派な探検隊になるだろう

依頼66 二人の龍の絆（後書き）

ついに二人は卒業です。

グロリアス「一時はどうなるかと思っていたけどな」

ドルク「まあよかったぜ、こっちでもがんばれよ」

リュラ「はい！」

ちなみにリュラは♀です。

♂と知っている方もいますが♀ですので

シルム「でも最後のダークライは誰？」

それは後からね、次回はそのダークライと…さらにとある作者さんがポケモン化して登場します！

依頼67 とあるランターンと襲撃（前書き）

ドルク「なんだこのタイトルは？」

今回急展開なことになります。そしてとある作者さんの登場です。

クレス「一体なんだろうね？」

では依頼67

クレス「僕はダオスを倒す！」

寒い…

依頼67 とあるランターンと襲撃

次の朝

ドルク「あゝ今日も平和だな」

シルム「そうだね」

二人はいつものようにランニングをしていた。

グロリアスとリュラの二人のドラゴンポケモンはすでに旅立っていたのだから

シルム「グロリアスとリュラがいない分、がんばらないとね」

ドルク「そうだな」

二人はギルドへと戻った

……

いつものように朝の朝礼が始まった

ドルク「グロリアスとリュラがいない分、今日からみっちりがんばるぞ！」

全員『おおーーーーー！』

全員が元気に声を出す。すると再び警告音が鳴る、入口に一匹のポケモンが入ってきた。

あんこのようか体に頭にはちょうちんのような黄色いものがぶらさがってついている。ライトポケモンのランターンだ、そのランターンはさらに頭に青い『k』と書かれたバンダナをつけていた。

ドルク「ん？依頼人か？」

ドルクがそう言う、このギルドの中には直接依頼を頼む依頼主もいるのだ：それぞれ緊急の時などそういうケースがあるのだ

ランターン「いいえ、僕はこのギルドに入りたくて来たんです。あつ僕はkと申します。4649お願いします。」

と、笑顔でランターン：kは言う

ドルク「そうか入りたいのか：まあいいがそういえばお前何者なんだ？」

ドルクがkというランターンに何かを感じていた。

k「はい、僕は作者でとある作者さんに頼んで来たんです。僕をポケモンにする条件で」

どうやらとある作者によってこちらの世界に来たらしいさらに知っている人も

クラウド「あつ！kさん！」

ミゲール 「kさんまで来たんですか！」

どうやら二人は k の事を知っているらしい

ドルク「知り合いか？」

クラウド「知り合いも何も」

ミゲール「俺達と同じ作者さんだよ」

作者のポケモン化もある意味多い感じが最近はする。

とりあえずkを加えた23人となったブレイブのメンバー

みんなは再び仕事に取り掛かろうとしたその時！

「たっ！大変だ！！」

入口から久しぶりに現れたペラップ事ペラ八が登場した。

[illegible]

と、何処かにいるナレーションにキレツツコミを入れた

ドルク「どうしたペラハ」

ペラハ「ペラップだ!! (怒) それより大変なんだよ! ダークライがトレジャータウンを攻撃しているんだ!! 親方様だけでは対抗で

きない！お前達も早く！」

どうやらかなりやばいことになったようだ

ドルク「つまりマジやばいデンジャーな感じか？」

ペラ八「なんだよそのマジやばいとデンジャーって！！ってかお前はどこぞのギャルが！！（怒）」

と、ドルクにキレツツコミをした。

シルム「何かあったんだ！」

クレス「行こう！」

みんなは急いでトレジャータウンへ

……

トレジャータウン広場

そこには他のポケモン達が倒れていた。さらに店はボロボロで半壊状態と倒壊状態のが多かった

その広場に一匹のダークライはいた。そこにドルク達が駆けつけた

ドルク「みんな！」

すぐさまみんなの手当てをする。ドルクとシルムはダークライの前に

ドルク「お前はダークライ！なぜここにいるんだ！」

ドルクはそう言う

5年前：未来を暗黒に変えてさらにドルクを記憶喪失にした張本人
：それがダークライなのだ

ダークライ「ほう、この姿がダークライというのか…」

ドルク「？」

だがダークライはまるで初めて来たような口ぶりだった

シルム「どうなってるんだ？」

シルムも首をかしげる

ドルク「お前は一体誰なんだ！」

ドルクが叫ぶ

ダークライ「私の名はダオス…」

そのダークライはダオスと名乗った、するとその場にいたクレス達
ファンタジア組とミゲール達がドルク達に駆け寄る

ミゲール「まさか！？」

クレス「ダオスまでポケモンになった…でも僕達が倒したはず」

ドルク「知り合いか？」

クレス達がドルクの質問に頷く、どうやらクレス達はこのダオスというダークライの事を知っているらしい

クレス「こいつは時間の影響を受けないんだ、だけど魔術や僕の持っているエターナルソードで傷つけることができる…でもなぜお前がここに！答えろ！ダオス！！」

クレスは怒鳴るように言う、今のクレスは怒ったような顔をしていた。

ダオス「ほうくまさかお前達もこの世界に来たのだな」

ミント「なぜあなたはここを襲ったのですか？なぜ！」

ミントは悲しい顔でダオスに質問する。

ダオス「それは…」

ダオスがドルクを指す

ダオス「お前達は知らぬが、お前達の世界はすでに人間はポケモンとなり、そしてマナが枯渇しつつあるからだ！」

ドルク「どういうことだ？」

ドルクが質問するが

ダオス「答えるきりはない……貴様は元人間……つまり倒す相手だ……」

ドルク 「!？」

なぜか答えない代わりにドルクが元人間だったということがわかっていたのだ

ドルク「つまり俺が元凶と言いたいのか？」

「ダオス だったらどうする？」

ドルクは構える

ドルク「おめえは見た目で判断して俺を犯人扱いしているってことだな…だが俺が犯人という証拠はねえぞ？」

「だが貴様には死んでもらう」

ダオスは手を集中させて何かを発射しそうだ

クレス「やばい！ドルク！ダオスのダオスレーザーだ！！避ける！！」

クレスは注意をドルクに言うが時すでに遅し

ダオス「食らえ！ダオスレーザー！！」

極太のレーザーがドルクに迫る

ドルク「なら！ エナジーフルバスタアアアアアアアアアア

クレス 「ドルク！ シルム！」

クレスがシルムの腕を掴む

他のブレイブメンバーもそれぞれの腕を掴んで吸い込まれないようにする。だが限界が来て

シルム「もう……」

ドルク「だめだ！」

みんなはみんなの腕を掴んだまま、そのままブラックホールのようなものに入ってしまった

全員『うわああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ！！！！！！！！！！！（きやああ
あああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああつ！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！）』

みんなが吸われたあと：ブラックホールのようなものは閉じられた
隠れていたトレジャータウンのみんなが広場に駆け寄る。そこには
もうドルク達はいなかった

彼等は一切何処に行ってしまったのか！

はたして！

依頼67 とあるランターンと襲撃（後書き）

はい！作者さんのkさんが出演です。

kさん、呼び捨てに言ってますみません、物語上どうかもわからないので（汗）

ドルク「ってか作者！！一体何処に飛ばされんだよ！！」

シルム「しかもファンタジアのラスボスを出しちゃったの！？」

だってファンタジアメンバーいるんだしいじゃん

チェスター「よくねえだろ！」

アーチェ「ってか何処に飛ばされるのよ！」

ミント「一体私達はどうなってしまんですか？」

クレス「嫌な予感がするよ」

次回はとある世界に彼等は行きます。

依頼68 トーティス（前書き）

はい！ついにとある世界に來ます。

ドルク「一体何処の世界だか」

それでは依頼68

ドルク「行くぜ！！」

依頼68 トーティス

……

……お……き……

……起きて！……

……起きてよ！ドルク！

ドルク「ん……」

ドルクが起き上がった

ドルク「ここは……」

そこは何処かの草原だった

他のメンバーも起きている。

k「一体ここは何処なんだろう？」

みんなが辺りを見渡すと……

クレス「ん？あれは！？」

クレスは何か驚いた表情をしていた。なぜなのか？それは

ミント「あれは!？」

ミゲール「トーティス村!？」

ドルク達の近くに村があった、それもそのはずそこはクレス達（アーチェ以外）が住むトーティスと呼ばれた村だったのだ

シルム「トーティス?...まさかここは!？」

クレス「僕達の世界に...」

アトリ「まさか戻ってくるなんてな」

デイン「ボゲール、本当に戻ってきたヨ...でも...」

ミゲール「姿はポケモンのままだ」

ドルクはダオスの言った言葉を思い出してみた。

...

お前達は知らぬが、お前達の世界はすでに人間はポケモンとなり、そしてマナが枯渇しつつあるからだ！

...

ドルク「（つまりこの世界になんらかの影響でクレス達の世界の間はポケモンになったってこと...だがわからねえことばかりだ...な

ぜダオスは俺を狙っているかだ…」

ドルクはわからなかった、なぜダオスはドルクを狙うのかだ

ドルクはクレス達の世界の住人ではない…ましてや彼はシルムの世界の未来から来た元人間だ

だがドルクには一つ心当たりがある…それは

ドルク「（そういえば俺は人間からポケモンになってから魔法とか使えることができるようになった…それに結構特訓してから魔法も思うように使えるようになった…でもそれだけであいつが俺を狙うとは思わないようだな…もしかしたらあいつは誰かの策略…つまり誰かに何か言われて俺を狙ったってことか？」

そう、ドルクは魔法が使えるのだ…ダークライがタイムスリップの時に当時ジュプトルだったジユクを、ドルクがかばって攻撃を受けてしまい…ドルクはポケモンになった…それと同時に彼に魔法が使えるようになった…だが他に魔法を使うポケモンの中にはいる。ジユティアなどもそうだ、シルムはミントに法術を教わって回復の術をある程度使えることはできる。

ドルク「（考えてもしかたないな…）とりあえずここには何も解決しねえからクレスの故郷に行こうぜ」

ドルクの提案でみんなが頷いた、ブレイブ全員はクレスとチェスタ一の故郷であるトーティス村へと向かった

…

チェスター「ま、マジかよ!？」

クレス「町みんなが…」

ミゲール「ポケモンになっちまってる…」

トーティス村に入ったブレイブ全員は目の当たりにした。それはこの村全員がポケモンになっていたのだ

シルム「とりあえずまずはこの村の人達に聞こう」

みんなはトーティス村のみんなに聞いた

……

数分後、みんなが集まった

ドルク「どうだった？」

ジユク「さっぱりだ」

k「どうやらこの村のみなさん全員はポケモンになったことを知らないようだったみたいです」

アーチェ「なんかみんな気づいてないとかみんな姿見ても違和感がなかったみたい」

みんなの情報によるとこの村の人達全員はポケモンになったことに気づいていなく…さらに変わりなく普通にしていた。技は使い方を

知らないためかみんな技は使っていないようだった。さらにみんなはポケモンになった違和感などを感じていなかったのだ、後はこの世界の単位はガルドだけでなく、ポケでも可能らしい

ドルク「そうなる気づいているのは俺達だけってことだな」

どうやらそうらしい

クレス「そうみたいだね…しょうがない…ここは僕の家に行こう、父さんもいいよね？」

クレスは自分の家に行こうとするが

ミゲール「えゝあいつのところに帰るのかゝ俺は嫌だね！」

ミゲールは嫌がる

シエルマル「どうして嫌なんですか？」

シエルマルが質問した

ミゲール「だってあいつがいんだぜ？あいつに殺されるし」

????「誰が殺されるだって？」

ドルク達が振り向く、そこにいたのは一匹のポケモンがいた。透き通るような水色のモミアゲに結晶のような耳のポケモン、このポケモンはしんせつポケモンのグレイシアだ

シルム「あなたは？」

ミゲールの叫びがトーテイスに木霊した。

依頼68 トーティス（後書き）

ドルク「トーティスか…結構いい村だなクレスのとは」

まあクレスの住んでいる村だからね、もちろんチェスターもだけど、なりダンX設定もあるから大体いる人物もかぎりがあるから

シルム「なるほどね」

依頼69 法術師モリスン（前書き）

今回はあのキャラがポケモンになって登場です。

では依頼69

マリア「見てみなさい」

依頼69 法術師モリスン

現在ドルク達はクレスの住んでいる村、トーティスにあるアルベイン道場にいた。クレス達の家は道場になっており、剣の稽古などをおこなっている。もちろんアルベイン道場にいる弟子達もみんなポケモンになっており違和感がないようだ、だが気づいているのはマリアだけのようだ

マリア「どうぞ」

マリアがマーボーカレーをドルクの前に差し出す

ドルク「おっ！うまそうだな♪いただくぜ」

ドルクはすぐさまマーボーカレーを食った、もちろん他のメンバーも食べていた。

シルム「おいしいですよ！」

マリア「おかわりはあるからたくさん食べてね♪」

すぐにドルクはガツガツと食い

ドルク「おかわり！」

おかわりを要求した。マリアはドルクの皿にたくさんマーボーカレーを入れた

クレス「さすがドルクだよ（汗）」

チェスター「あいつの腹の中はどうなっているんだ(汗)」

クレスとチェスターはドルクの異常な食力に咂然と棒読みになっていた。

……

ドルク「あゝ食った食った♪」

ドルクは満足そうになる

シルム「さすがに50回おかわりしすぎだよ(汗)」

シルムは呆れたように言う

マリア「まあドルクちゃんはよく食うのね♪」

これにはさすがのマリアも驚くが、逆に嬉しそうだ

シムーン「とりあえず今後の事を話しましょう」

シムーンがみんなを仕切る、みんなはとりあえず真剣になる

デビー「まずは状況をまとめるッス」

めずらしくデビーが言う

まず話をまとめよう

まずダオスがドルクを狙ってトレジャータウンを襲撃、そしてダオスのダオスレーザーとドルクのエナジーフルバスターによって次元に穴が開きドルク達を吸い込んだ…そして気づいたらクレス達の世界にまで飛ばされた、しかしみんなポケモンになっていた。

シムーン「以上になりますね」

ミネラ「でもこれからどうするのパパ？」

ミネラがドルクに言う

ドルク「そうだな…それにこの世界を知るのにもクレス達以外はこの世界の事なんて知らねえしな」

そう、クレス達はこの世界の事は知っている、しかしドルク達ブレイブのメンバーはクレス達の世界に関しては知らない

マリア「ならまずはモリスンのとこに行きましょうか？」

ドルク「モリスン？誰なんだ？」

モリスンという人物にハテナが頭に浮かぶドルク

マリア「私とそこのボケな夫（ミゲールの事）の親友よ、何か知っ
ていそうなんだよね」

シルム「それじゃあモリスンさんに会ってみようドルク」

ドルク「みんなもいいか？」

みんなは首を縦に振り頷く

クレス「モリスンさんの屋敷なら僕も知ってるから案内するよ」

というわけでドルク達はモリスンのいる屋敷へと向かった

……

トーティスから西に行ったところに一軒の家があった、玄関は2階にあり下には庭園がある。

コンコン

クレス「モリスンさん！クレスです！」

クレスは玄関のドアを叩く、すると

ギィ…

ドアが開くとそこに一匹のポケモンが出てきた

お腹にはマントで隠しているが、少し見えて丸い模様をしていて、熊のようでさらに頭にはターバンを巻いたポケモンがいた。それもそのはず、このポケモンはリングマだったのだ

???? 「ん？君は？」

クレス「クレスです」

クレスは自分がクレスだと答える

????? 「おお、クレス君達ではないか：しかもそれとは別に他のポケモンまで来るとはな」

チェスター 「俺達がポケモンになってもわかるんですか？」

????? 「もちろんだ、私は占い師だからな、それにこんなことになったのも占いで出た」

どうやら彼は占いなどもやっているようだ

ドルク 「とりあえず聞くが？あんたがモリスンか？」

????? 「いかにも、私がモリスンだ元人間のドダイトスの君が来ることも知っているよ」

シルム 「オイラ達が来ることも事前にわかっているんだ！？」

シルムは驚く、姿はリングマでも未来がわかるとは驚くのも無理はない

モリスン 「とりあえずみんな入ってくれ」

とりあえずみんなはモリスンの家へと入った

……

ドルク達はモリスンにこれまでの事を説明した。

モリスンはそれをちゃんと聞く

モリスン「なるほど…大体はわかった…だが原因は私にもわからない」

モリスンでもわからないようだ、ドルク達はがっかりする。

モリスン「だが方法はなくもない」

何か方法があるようだ

ドルク「それはなんだ？」

モリスン「精霊に会ってみればいいと思うが？」

k「精霊？」

精霊：クレス達の世界ではそれぞれ精霊という存在がいるのだ、さらにそれぞれ属性を持っている精霊や属性を持たない精霊もいる。だが精霊にはそれぞれ事情というのもあり、さらに契約するのにはその精霊に合う指輪でなければ仲間にすることはできないのだ

クレス「そうなるとクラスさんかあの双子のなりきり士に会わないといけないかもしれない」

クレスは精霊を操る者などを知っている。それに会うには時限を越えないといけないのだ…つまり『時間転移』をしなければならなのだ

クラウド「で？そのクラスって奴と双子のなりきり士に会わない

と無理ってことだな」

モリスン「うむ、そうだ…」

ミント「過去の時代にいるクラスさんと…100年後の未来にいるディオ君とメルちゃん…となるとトールに行く必要がありますね」

どうやらトールというところに行かないかぎりは会えないようだが

クレス「レアバードは今持っていないし」

チェスター「そういえばレアバードはたしかディオとメルが持っているはずだったような気がするな」

レアバードとは、電気の魔力で空を飛べるものだ、それが必要らしい

ドルク「とりあえずまずはトールに行くか」

まず最初の目的地はトールに決定

モリスン「とりあえずだが、私も同行しよう」

どうやらモリスンも同行するようだ

ドルク「ありがてえ、なんかあんたはポケモンの事詳しいようなんだが？」

モリスン「なんだろうか…前世で何処かの博士をやったような感じがしてね…私にもわからないが」

みんな準備万端だ

ドルク「それじゃあ出発だ！」

ブレイブ一同は北へと進んで行った

依頼69 法術師モリスン（後書き）

クレス「まさかのモリスンさんと母さんが仲間になるなんて（汗）」

まあ腕はたしかだからいいとは思うし

ドルク「そうだな、マーボーカレーうまかったしよ」

シルム「それに前世が博士って（汗）」

モリスンさんとオーキド博士の中の人と同じだからそうしたんだよ、リングマもアニメで中の人と同じだからモリスンさんはリングマなんだよ

ドルク「そうなのか」

次回は北にあるベネツィアへ！

依頼70 ベネツィア市へ（前書き）

ドルク「ファンタジアの世界はいいな」

シルム「でも他はどうなんだろうね？」

どうなんだろうね…そしてついに70話突入だよ！そんな依頼70

シルム「どうぞ！」

依頼70 ベネツィア市へ

ドルク達はまず北にあるユークリッドの都へと向かった、魔物もいるがそこはドルク達ブレイブ、ほとんどの敵を一掃してしまった

何もなくなんとかユークリッドへとついた

ユークリッドの都は綺麗な町でかなりのものだった

ドルク「ここがユークリッドか」

だがユークリッドでもこの町の人間はポケモンになっていた。

シルム「ここもポケモンになってる人達ばかりみたいだね」

ソウ「情報収集しましょう」

まずは情報収集をした

……

ユークリッドの宿でみんなが集まった

ドルク「情報はあったか？」

みんなは首を横に振る、どうやら収穫はなかったようだ

ドルク「ここでもだめか」

アーチェ「でもなんか疑問に思わない？」

突然アーチェは口に出す

アーチェ「あたし達以外はみんな違和感を感じなかったし気づかなかったのはおかしくない？」

たしかに、トーテイスでもそうだがユークリッドもトーテイスと同じようにポケモンになったことに気づかない人達ばかりだった、なぜこんなに知らない人達が多いのかだ

シムーン「たしかにそうですね…この世界の元人間の者達はみんな知らないだけでなく、違和感まで感じなかったなんて…これはあきらかにおかしいですね」

モリスン「うむ、たしかに…」

みんな頭にハテナが浮かぶ

シルム「とりあえずここで休んで明日ベネツィアに行こう」

みんな頷きそれぞれの部屋で休んだ

…

次の朝

ブレイブ一行はユークリッドからさらに北にあるベネツィアへと向かう

ドルク「それにしてもここの魔物は一瞬で倒しちまうな」

ドルクは物足りないような気持ちでそう言う

クレス「まあそれでも僕達は目的地まで行かないといけないし」

それでも世界を救わないといけないのだ…なぜクレス達の世界の人間はポケモンになったのか？ドルクが狙われた理由とは？

……

シルム「ここがベネツィアだね」

ブレイブ一行は目的地のベネツィアに到着した。

ベネツィアはほぼ海がある町で、川へ移動することもある町だ…もちろんここにも

ミネラ「みんなポケモンになってる」

そう、ここの人間のほとんどがポケモンへとなっている。

モリスン「まずは船からツールまで行こう」

とりあえずツール行きの船を探す

数分後

????? 「いらっしやい！ツール行きの船はないがそこまで送っていくよ」

モリスン「ありがたい」

この船の船長であろうポケモンを見つけて何とか船でツールまで行けるようだ、船長はサメのようなポケモン、サメハダーだ

ドルク「で？ここまでいくぐらいかかる？」

ドルクはここまでいくらかかるかを聞く

船長「全員でいうと10750ガルドもしくは10750ポケだな」

単位もここではガルドかポケになっている。ポケモンになった影響で最近ポケを使うこともできるようだ

ドルク「とりあえずこれで足りるか？」

ドルクは麻の袋に入っているポケを差し出す

船長「おお！こいつはすげえな、よし乗ってきな！」

ドルク達の船旅が始まる

依頼70 ベネツィア市へ（後書き）

シルム「やっぱりほとんどポケモンになってる人が多いみたいだね」

そして次回は船旅&時間転移です。

シルム「なんだかワクワクしちやったよ♪」

ドルク「シルムの探検魂に火がついたな」

依頼71 トールのマザーコンピューターシステム・オズくそれぞれの歩みく

ついにトールに来ます

ドルク「おっ！ついにか」

シルム「なんだかオイラ、ワクワクしてきたよ♪」

シルムにはワクワクするようなものがいっぱいだよ

シルム「うわぁくこれはいいね♪」

それじゃあ依頼71

シルム「行くぜ！」

モリスン「（まあそのうちわかるだろう…未来の事が占いではわからない感じになっている。ドルク達が来るのはわかっているがその先がな…）」

どうやらモリスンの占いはここまでのようだった

ミネラ「気持ちいい♪」

ミネラは潮風にあたる、ミネラはマナフィなので海が自分の故郷のようだ…5年前、彼は卵から孵ってドルクとシルムに出会った、でもミネラはまだ幼く病気になってしまったが…ドルクとシルムが万能な薬をもってきたため熱は治った…一時ミネラは海で生活し…そして帰ってきた。今はブレイブのメンバーでドルクを義理の父として尊敬している。

ミネラ「（こうして僕がいるのはパパとシルムのおかげ…なんだか僕にとっても思い出になったかも…）」

そんなミネラだった

……

ジュティア「……」

ジュティアは一人海を眺めていた。そこに

ドルク「どうした？孤児院の子達がいなくて寂しいのか？」

ドルクがジュティアに話しかける

ジュティア「まあ…ね…みんな無事だといいいのだけど…」

するとドルクがジュティアの肩を軽く叩く

ドルク「あいつらならきつと大丈夫だ、プクリン親方もいることだしあっちに任せるしかないしな」

ジュティア「そうね…大丈夫よね…ありがとう…」

ジュティアはそう言い甲板から部屋へと戻った

ドルク「(あいつも色々と心配があるんだな…俺がなんとかできればいいけどな…)」

ドルクはそう思っていた。

ソウ「師匠、そろそろ部屋に戻りましょう」

ソウがドルクに声をかけてきた

ドルク「ああ、ありがとな…すぐ行く」

ドルクは部屋へと戻った

……

何事もなかったのなんとかトールまでたどり着いた

ドルク「ここがトールか」

ツールは古代の技術や現代の技術が混ざり合ったようなところだった、ここには機械や技術も進歩した封印された場所だ、ここに時空転移できる装置があるらしい

シルム「それにしてもすごい！まるで遺跡だよ！」

シルムの目がキラキラする

k「神秘的だね、すごいね☆」

ミネラ「すごい♪」

みんなツールを見て探検心がくすぐる

マリア「まさかこんなところがあるなんて知らなかったわ」

クレス「そりゃそうだよ（汗）」

まあクレス達は行ったことあるのでわかるだろう

……

シルム「これは？」

ドルク達はそれぞれ部屋にカギをかけている部屋がいくつもある部屋にきた、入口はすでに閉じてしまっている。

クレス「ここの部屋はランダムでコモン・キーというのが必要なんだ、ここの宝箱のどれかにあるんだ」

ドルク「めんどくせえ〜な〜こりゃ」

そう、部屋はそれぞれランダムとなっていて、入口に戻されるかもしれない。別々の部屋かもしれない。もしくはマザーコンピュータールームのどれかになる。とりあえずそれぞれ宝箱を開けてコモン・キーを見つけてカギに合う部屋を選ぶ

……

数時間後

ドルク「はあはあ…こりゃ結構部屋が多くて疲れるな」

クレス「僕達もそうだったよ（汗）ホントにこの仕組みには苦労するよ（汗）」

数時間たっても部屋は見つからない

シルム「これかな？」

シルムはコモン・キーを使った、すると扉が開いた。果たして正解なのか

シルム「ん？ここって!？」

シルムは見た、ほぼ機械があり、その中心には人数分転移できるような装置があった

シルム「見つけた！」

シルムの声に反応してみんなが駆けつける

……

マザーコンピュータールーム

そこには転移機械があった、龍の石像が4つもおいてあり、緑のよ
うな機械が設置してあった

シルム「すごい!？」

すると声が聞こえる

『メインシステム起動、バイオロムチェック、システムは自己管理
モードに入りました』

すると何か顔のようなホログラムが現れた

シルム「うわっ!？」

ドルク「こいつは一体？」

???? 『マザーコンピュータールームへようこそ私はツールシテ
ィの全機能をサポートするマザーコンピューターシステム・オズ、使
用目的を選択してください』

このホログラムはこのツールの全機能をサポートするマザーコンピ
ューターシステム・オズと言うらしい

ドルク「驚いたな、まさかこんなのがあったなんてな」

デイシア「私の時の力とは違う感じだな」

デイシアも驚く、ちなみにここではデイシアの時の力やレビィの時渡りで時間転移はできるのだがあいにく何かの障壁があってかそれができないようだ

ジユク「ここから時間転移ができるんだな」

クレス「そう、僕達も時間転移したんだ」

クレス達ファンタジアチーム（ミゲール・マリア・モリスン以外）はすでに経験済みだ

みんなが行こうとした時

デイシア「ちょっと待ってくれないか？」

突然デイシアが待ったをかけた

ドルク「どうしたんだ？」

デイシア「私はここで残ろうと思うのだがいいか？」

なんとデイシアはここに残ると言った

ドルク「どうということなんだ？」

デイシアは説明した

ディシア「この世界がこうなっているだけでなく：時間も何かうずうずと嫌な予感がしている。それに気になることもある。なので私はここに残って調べた方がいいと思うのだ、大丈夫だ、私も後から追いつく」

すると

ドルク「わかった、こっちは頼んだぜ」

ディシア「かたじけない」

すると

パルサ「なら俺も手伝ったほうがいいと思うぜ」

グラデル「一人よりも多く手伝ったほうが私はいと思います」

デビー「なら俺も手伝うッス」

ゼラス「なら私もディシア様やみんなをお守りした方がいいと思う、なので私も残る」

パルサ、グラデル、デビー、ゼラスが手をあげる

ドルク「わかった、なら残った方は原因など色々調べてくれ」

ディシア「こちらも任せたぞ」

どうやらここからディシア達5人と別れての旅となる

……

オズ『音声認識、タイムワープ・デバイスドライバー起動、反重力エネルギーチェック』

機械の音が流れる

オズ『時間転移に要するエネルギーの蓄積確認…転移相対年数を述べよ』

するとクレスは答える

クレス「今から103年前のユークリッド村へ！」

クレスはそういう、それに答えオズのホログラムは消えた

オズ『音声認識、時間転移先空間座標、安全条件クリアメインプロセスを開始します。乗員は所定の位置に移動してください』

ドルク「ディシア、こっちは頼んだぜ！」

ディシア「ああ、私もかならず追いつく、待っていてくれ」

ドルク達は時間転移の装置のそばへ

オズ『乗員を確認しました。転移空間を隔離します……空間の隔離を完了しました。界面を現在の時間から切断します』

するとドルク達の周りから電気が発生し、ドルク達を包む

オズ『反物質エネルギー解放……ワームホール発生、ベビーユニバース確認タイムワープオペレーションシステムⅡオールグリーンタイムワープ・スタート』

するとドルク達は消えて行った

デイシア「行ったようだな」

オズ『プロセス終了を確認しました』

どうやらドルク達は時間転移をしたようだ

パルサ「さて、ここからどうするんだ？」

パルサが質問した

ゼラス「デイシア様は何か案があるのですか？」

するとデイシアは答えた

デイシア「ああ、色々ところこの事やクレスという青年のエターナルソード：そしてダオスとポケモンがこの世界にあったのかなど色々調べなければならぬ、もちろんオズの力も借りる、すでにクレス達にはトール市長の代理を私達にも許可してもらった：ドルク達には別々の調べる必要がある。私達はドルク達をサポートする。みんな、いいか」

パルサ「ああ！兄貴のために俺はやる！」

グラデル「今私達にできることをやりましょう」

デビー「俺もッス！」

ゼラス「なら私も全力でやりましょう」

四人は承諾した。

ディシア「ありがとう…それでは私達も動くぞ」

全員『おおーーーーー!!』

ディシア達はそれぞれ調べにトールの古文書などを手当たり次第に探った

それぞれの歩む道とそれぞれの事を

依頼71 トールのマザーコンピューターシステム・オズ／それぞれの歩み／

科学力はすごいもんだね

シルム「すごいよ！ クレスさん達の世界！ こんな遺跡みたいなのがあったなんてオイラ驚いたよ！」

クレス「気に入ってるみたいだね」

シルム「だってトールってすごいもん！ 科学技術もすごいしオイラすごくワクワクだよ♪」

さて、今回は新たな仲間の登場でクレス達との再会になります。

依頼72 精霊術師クラス（前書き）

はい！今回はあの人が登場です。

ドルク「ついにだな」

そんな依頼72

ドルク「行くぜ！」

依頼72 精霊術師クラス

シュン！

ドルク「ここは？」

ミント「どうやらユークリッドの村に時空転移できましたね」

ここは過去の世界、アセリア暦4203年：AC4203

モリスン「驚いたな、本当に時間転移できるとはな」

モリスンは驚いていた。それもそのはず彼は時空転移の研究をしているがまだ自分の時空転移には未熟なのだ

ミゲール「俺のあれでもいけるとは思えるけどな」

と、ミゲールは少しふてくされる

マリア「時間転移なんてすごいわね♪」

マリアも時間転移で喜ぶ

ジュティア「ここもやっぱりポケモンになってるのもいるわね」

過去でもここもポケモンになる影響が出ていた。過去でもやはり影響は大きい：つまり時空を越えても未来などもきつと同じだろうとドルク達は思った

ドルク「とりあえず、クラスって奴のところに行こうぜ」

みんなは頷いた

……

ドルク達は坂を登った、坂を登りきったところに大きな家があった

ドルク「ここか？」

クレス「うん、ここがクラスさんの家だよ…いるかな？」

とりあえずドルク達はクラスの家に入った

ガチャツ！

クレス「ごめんください！」

クレスが声をかける…すると奥から誰かが来た…それは一匹のポケモンだった

魔女がかぶる紫の帽子に布のような体…そして口はギザギザしたような赤い口に首には赤い宝石のようなものが埋め込まれてるポケモン、マジカルポケモンのムウマージだ

???? 「誰なんだ？」

声からして男のようだった

クレス「あっそうか…僕はクレスです」

するとムウマージは反応して

ムウマージ「クレス！？クレスなのか！？」

クレス「はい…ということはクラースさんですか？」

そのムウマージは「ああ」と頷いた

このムウマージこそ、クレス達の仲間で時空戦士の一人、クラース・F・レスターなのだ

……

クレスはこれまでの経緯などをクラースに話した、今この世界が狂い始めたことなど色々と

クラース「なるほど…つまり再び私の力を貸してほしいってことだな？」

ドルク「ああ、だからあんたの力を貸してほしいんだ…いいか？」

クラースは思い悩んだように頷く…数分後

クラース「よし！いいだろう…ちょうど私もなぜこのような姿になったのか…それに私とミラルダ以外はみんなポケモンという姿になったことは知らないらしい…どうやら記憶か何かが村のみんなに影響したのだろうと私は思う…それにドルクと言ったか？なぜかわからないがものすごい魔力を感じるのだが？」

クラスはドルクを見て、ドルクにはものすごい魔力があると感じていた。

ドルク「それはわからねえが俺もタイムスリップの事故とかから魔力が出てきたのは」

クラス「うむ…わからないことばかりだな…」

クラスもドルクの事で頭をかしげる

ミント「それよりクラスさん…私達、精霊に力を貸してもらいたくて…それで契約の指輪とかはどうしていますか？」

契約の指輪とは、精霊と契約するために必要な物で…それぞれの指輪によって召喚できる精霊は違う…なのでどの指輪がどの精霊に適合するかも重要になる。

クラス「今のところ持っているのはガーネット、アクアマリン、オパールにルビーだ」

クラスは契約の指輪を見せた、ガーネットは赤く光輝き、アクアマリンは水のように透き通った輝き、オパールは緑色に輝き、ルビーは土色に輝く

ジュティア「で？最初は何処の精霊から契約するのかしら？」

そう、最初は何処の精霊から契約するのかだ

クラス「ここからだと言われない風精霊、シルフの方がいいだろう」

北東にある溪谷…それがローンヴァレイらしい

チェスター「なあ？ディオとメルとかどうするんだ？」

ドルク「とりあえずは4大精霊と契約してからの方がいいんじゃないか
えか」

シムーン「それもそうですね、その方がいいとは思いますが」

モリスン「うむ…それにどっちみち精霊とも話さないといけないか
らな」

ミゲール「それじゃあ俺はここで酒でも」

マリア「飲むんじゃないやねえよボケ！！（怒）」

再びマリアの肘打ちがミゲールに炸裂した

クラス「（汗）」

みんなが哑然とする。

とりあえずみんなは先に精霊と契約するに賛成した。

クラス「決まりだな…ちょっと待ってくれ」

クラスは席をはずした

それから数時間後

クラス「お待たせ、それじゃあ行くぞ」

ドルク達はクラスの家を後にした

家の机にはこう書かれていた。

ミラルダへ

私は再びクラス達と旅に出る。今回はクラス達が新たな仲間を連れてきたらしい…また留守番ってことになるがよろしく頼む…終わったら帰る…すまない

クラス・F・レスター

依頼72 精霊術師クラス（後書き）

クラス「いや、私がムウマージとはなく」

でも似合ってますよ

クラス「まあ私もポケモン技が使えるってことか？」

使えるのは使えます

ドルク「ポケモンになったなら使えるはずだぜ？」

クラス「なら次回あたりで使えれば」

使えるかどうかはわからないけど

クラス「これじゃあ私がポケモンになった意味がないじゃないか
（汗）」

依頼73 絆！VSシルフ（前書き）

さて、いきなり精霊戦です。

ドルク「一体どういう奴と戦えるかだな」

そしてさらに今回は少し重要なことが出てきます。それでは依頼73

ドルク「吹き飛ばせ!!」

依頼73 絆！VSシルフ

ローンヴァレイ

風が吹き付ける谷だ

ここは風が吹いてきて吹き飛ばされそうだ

ドルク「風が強いな」

クラス「ここは風が強いんだ：まあドルクみたいなのは吹き飛ばされる心配ないかもしれないな」

苦笑するクラス、だが油断はできない：風が強いためアーチェが飛んでも逆に飛ばされるのだから

k「にしてもここに精霊がいるんですね」

クラス「うん、ここに精霊はいるよ」

クラウド「なんか風に混じって何か感じるな」

クラウドは早速波動で感知した。

シルム「それじゃあ行こう」

ドルク達はローンヴァレイの奥へと進んで行った

……

ローンヴァレイは風が強く吹き続ける、それほど強い風だがドルク達が吹き飛ぶほどではないので吹き飛ばされないようしつかりとみんなは手をつないでいる。

ミント「あいかわらずローンヴァレイは風が吹いていますね」

クラス「ああ、それにポケモンでもここまで苦労するなんてな……」

クラスは少し疲れ気味だがまだまだいけるようだ

ドルク「クラスも疲れているなら休憩したほうがいいんじゃないか？」

ドルクは声をかけるが

クラス「いや、ここからもう少しだから大丈夫だ……何私も最近あまり運動していなかったこともあるからちよいどいいいな」

クラスはまだ大丈夫のようだ

シルム「とりあえず無理なら少し休憩してくださいね」

シルムがそうクラスに告げる

……

ローンヴァレイの谷の最奥部、一本の枯れた木が立ってる場所だ

シルム「ここに風の精霊がいるんですか？」

クラス「ああ…」

すると何処からか声が聞こえた

「誰ですか？」

それは美しい女性の声だった、枯れた木の前から長い髪の女性が現れた

ドルク「!？」

ドルク達（クレス・ミント・アーチェ・チェスター・クラス以外）は驚く

モリスン「これが精霊…まさか目の前で姿を見せるとは」

ミゲール「これが精霊なのか」

モリスンやミゲールも驚く

「私の名は風の精霊シルフ…それとお久しぶりですねクラス」

クラス「ああ、久しぶりだ…それより…」

クラスが言う前にシルフは言った

シルフ「この世界に起こっている異常ですね…それはわかっています」

ドルク「それが俺に原因があるかわからねえんだ！風の精霊シルフ！何か知っているなら教えてくれ！」

ドルクがシルフに頼む

シルフ「ならまずは私達と戦ってください」

シルフは戦えと言ってきた

ドルク「いいぜ：精霊の実力ってものもみてえしな」

シルム「やるしかないね」

ドルク達が構えるが

k「あれ？私達って？それってどういうことですか？」

kは疑問にもっていた。シルフは今一人なのに私達というのはどういうことなのか

シルフ「ああ、そうでした…」

すると何処からか同じシルフ：しかも体が赤いのが出てきた。

シルフ1「これならわかりますよね？」

シルフが言う私達というのはシルフは一人ではなく：二人や三人ぐらいいるのだ

ドルク「二人相手でも行くぜ！」

ドルク達は構えた

……

ドルク「エナジーバスター！！」

ドルクのエナジーバスターが青い方のシルフに攻撃する。だが赤いシルフはその間術を詠唱していた。

シルム「させない！ヒートパレット！」

シルムはレウスバーニストを使ってもう一方のシルフの術詠唱を止める

シルフ1「（中々の実力ですね…ブレイブのリーダードルク…あなたは気づいていない…あなたの正体を）」

シルフ1はエナジーバスターを避けて、攻撃していく

ドルク「守る！」

ドルクは守るで防いだ、そこからエナジーボールを繰り出す。エナジーボールがシルフ1にあたる

ちなみにメンバーはドルクとシルムの二人だけ、なぜかというところ…

……

バトル数分前

シルフ1「実はですが今回そのドダイトスとゴウカザルの二人で戦ってもらいます」

クレス「つまり僕達は見ているってことだね」

アーチエ「えゝなんでドルクとシルムなのよ」

「ぶーっ」と頬を膨らまし、機嫌悪くするアーチエ

シルフ1「それでは行きますよ」

シルフ1は構えた

※ちなみに青い方がシルフ1で赤い方がシルフ2とします。

……

相手は精霊…油断はできない

ドルク「だがそれでも俺達は負けねえ！！ストーンエッジ！」

ドルクは少しダメージを受けた状態だがまだまだ行けるようだ、シルフに向かってストーンエッジを繰り出した。

シルム「虎牙破斬^{こがはぎん}！！」

シルムは素早く上下2段の攻撃でシルフ2を真下に落とす、そこからさらに蹴りを2発繰り出す、この技は飛燕連脚^{ひえんれんきゃく}という技だ、実は

シルムはクレスに技を教わっているため大体の技はマスターしている。そのため技も覚えがよく、クレスが使う技も習得したのだ

だがシルフも術で応戦する。

ドルク「シルム！こっちはどうだ！」

シルム「さすが風の精霊ってとこだよ…オイラ達には苦戦するね」
へへとシルムは苦笑する。実際はシルムもボロボロで少し血が出ているようだった

ドルク「だが俺達の絆を見せてやろうぜ！」

シルム「うん！」

二人は互いに目を合わせてから素早く移動した。ドルクはロックカ
ットで素早さをあげていたので素早く行動することはできる。

お互いがそれぞれの技を繰り出す

ドルク「エナジーボール！」

ドルクはエナジーボールをシルムに向かって打つ

シルフ1「（一体どういうことでしょう？）」

シルフ2「（これではあのゴウカザルは！）」

だがシルフ達の予想が覆された、それはシルムがエナジーバスター

を蹴ったのだ

シルム「連携技！エナジーアトミック！！」

蹴られたエナジーボールは炎に包まれ、シルフ1にあたった、さらに爆発が起こりシルフ2を巻き込んだ

煙が収まると二人のシルフは倒れていた。

ドルク「おっしやあ！！」

シルム「やったあ！！」

二人はハイタッチする

クレス「すごいよ！」

ミント「さすがです」

クラウド「それでこそドルクだな♪」

k「すごい！☆」

モリスン「なるほど…これほどの強さを持つてるとはな」

ミゲール「ガタガタブルブル」

マリア「震えるなんて情けないわよあなた」

ミネラ「パパとシルムはすごいよ！」

シムーン「さすがです」

ソウ「さすが師匠！」

シエルマル「さすがですよ」

みんなが喜ぶ

クラス「（この二人の絆：あなどれないほどだな）」

クラスはそんな二人を見る、これほどまでにやれるのは二人の絆があるからだ

シルフ「では契約ですが：実は契約の指輪をそのドダイトス：ドルクに渡してくれますか？」

クラス「何か意味があるのか：わかった」

クラスはドルクにシルフとの契約の指輪、オパールを渡した

ドルク「それで俺に渡してどうなんだ？」

シルフ「はい：今に分かります」

するとシルフの周りに三角の契約陣が現れ、シルフは消えた

クラス「契約の言葉を言わずにか！？」

そう、契約には誓いの言葉という契約の言葉を言わなければ契約は

できない…だがドルクに指輪を渡したただけで契約できるのだった

シルフ「実は少し話しがあります…ドダイトス…いやドルクには精霊の力を使うことが可能なのです」

何処からかシルフの声が聞こえる

シルム「それって…どういうこと？」

シルムも疑問に思っていた。

シルフ「まずは残りの4大精霊…私だけでなく…他の3人の精霊に会ってください…そこでドルクの事についてお話ししましょう」

ドルク「まさか俺に何かあるのか？」

ドルクは誰もいないこの場所で話す

シルフ『はい…今はまだ話せませんが…とりあえず先にですがあなたの仲間に私の力を少し分けます…私を召喚してください』

シルフはドルクに召喚の命令をした

ドルク「でもどうやってだ？」

シルフ『私の名前を言えば召喚できますよ』

ドルクは早速シルフの名前を言った…すると三角の契約陣が現れ、そこからシルフが現れた…だがシルフの姿が変わっていた。モコモコした綿のような綿毛につぶらな瞳をしていた。さらに耳にはカー

ルした緑の耳がついている。かぜかくれポケモンのエルフーンだ
クラス「姿がポケモンになってる！？一体これは！？」

シルフ「実はポケモンになるのはあなた達だけでなく…私達精霊も
契約すると何らかの影響でポケモンになるのです。とりあえずまず
は私の力ですが…そのジュカインさん…男の方の」

指名したのはジュクだった

ジュク「俺か？」

シルフ「はい…それでは…」

シルフは目を瞑り、意識を集中した…するとジュクの体が緑の光に
包まれた…数分後に光は収まり…シルフは再び契約の指輪へと戻った

クレス「どうだい？」

ジュク「なんだか力がわいてきたような感じだ…」

レヴィ「でも一体どうなっているのかしら…」

一体クレス達の世界に何が起きているのか…

ドルク「次に行こうぜ」

k「次は何処に行けばいいんですか？」

すると再びシルフの声が

シルフ『次は精霊の洞窟にいるノームに会ってください』

次の目的地は精霊の洞窟のようだ

モリスン「ここからだと何処になるんだ？」

クラス「ここから南西にいけば」

どうやら南西に行けばノームがいるようだ

ドルク「(俺の正体…俺は一体…)」

シルム「ドルク？どうしたの？」

シルムが声をかける

ドルク「いや、なんでもねえ」

しかし

シルム「ドルクの正体とか気になってるの？」

ドルクは足を止める

シルム「でもオイラはドルクがどんなのでもドルクはドルクだよ」

ドルク「ありがとな…相棒」

ドルクは再び足を動かした

彼等は次の精霊がいるダンジョンへ！

依頼73 絆！VSシルフ（後書き）

シルム「ドルクの正体…元人間だけじゃないの？」

そう、それは後に明かしていくよ

ドルク「なんだか違和感ねえな」

まあ元人間だからだから違和感というのがないんじゃない？

ドルク「たしかにな」

依頼74 精霊の洞窟（前書き）

今回、色々ありましてなんとか更新できるようになりました。

ミゲールさん本人は続けてほしいという事でこうして更新することができました。

色々ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

それでは依頼74をどうぞ

依頼74 精霊の洞窟

ドルク達は南西を歩き…精霊の洞窟へとたどりついた
だがそこは

クレス「これは!？」

チェスター「どうなってやがるんだ!？」

ドルク達は驚いていた。なぜかというところは…

シルム「不思議のダンジョンになってる!？」

そう、精霊の洞窟が不思議のダンジョンになっていた。

クラス「不思議のダンジョンというのは一体？」

シルムが説明した

シルム「不思議のダンジョンは入るたびに地形が変わって落ちている道具も変わるんです。でも途中で倒れてしまうとダンジョンの入口に戻されてさらにお金と道具が半分なくなるんです。それがこの不思議のダンジョンなんです」

クラス「これは気をつけないとな」

ドルク「大丈夫だ、俺達の世界では不思議のダンジョンはあるんで

な」

もちろんクレス達もだ

k「油断できないですね…この先」

kもなんだか何かを感じていた。

ドルク「とりあえず進もうぜ」

ドルク達は先へと進んだ

……

ドルク「それにしてもここは広い感じもあるな」

シルム「でも敵の中には小さい魔物がいるみたい…」

ドルク達は先へと進んでいるのだが、魔物も強いだけでなく…ドルク達の攻撃が通じない魔物までいるのだった…それは

クレス「たしかにね…クレイアイドルはトラクタービームでないと倒せない魔物だからね」

どうやらそのクレイアイドルという小さい魔物に苦戦しているのだが

アーチェ「トラクタービーム!」

アーチェが重力の術であるトラクタービームで倒した、どうやら効く術もあるらしい

ドルク「まあ俺もトラクタービームは覚えてる…このぐらいでヘコたれないぜ」

ドルクもそう言ってトラクタービームを繰り出した。

…

ドルク達はなんとか最深部までたどり着いた、そしてドルク達の前には一匹のまるでモグラ叩きで見るような姿をしたものがいた

????? 「侵入者なのら」

そのものは口調が特殊だった

ドルク「お前がノームか？」

????? 「そうなのら…だけど侵入者は倒すのら」

と、ノームが襲い掛かってくる

クラス「どうやら私達を侵入者だと思っているらしい、私の話を聞かないようだな」

モリスン「ここの精霊は聞く者と聞かない者がいるもんだな」

精霊にも色々と性格的な者もいる。住処を荒らされると勘違いして襲い掛かる者などだ

チェスター「そんなこと言ってる場合じゃないぜ！来る！」

ノームはミサイルみたいに突撃してきた！ドルク達のところで爆発した。

依頼74 精霊の洞窟（後書き）

ドルク「あいつ精霊なのにモグラ叩きみたいな奴だな」

精霊はそれぞれ姿が違うんだよ（汗）ファンタジアノームはモグラ叩きでよくみるようなのだけど：ム〇ーミ〇のあれに近いかな

シルム「それよりオイラ達ノームの攻撃受けちゃったけど大丈夫なの（汗）」

次回でわかるよ

依頼75 VS ノーム（前書き）

さて！ 前回の話でノームの攻撃を食らってしまったドルク達！ 果たして無事なのか！？

依頼75 VS ノーム

爆発によってドルク達はどうなったのだろうか？

ドルク「あぶねえ」

ドルクは咄嗟にロックフェンスで、他のみんなはそれぞれの武器や守るなどで防いだのだ

クラース「にしてもさすがはポケモンだな…私は攻撃が効かないよ
うだ」

クラースはムウマージでゴーストタイプのためかあまり効いていなかった、それもそのはず…ゴーストタイプのポケモンはノーマルタイプには効果がないのだから

クラース「（ためしてみるか…）シャドーボール！」

クラースは黒い塊をノームに飛ばした、ノームは少しひるんだような感じだった

クラース「どうやら技を使う感覚さえ覚えれば技は使えそうだな」

元々クラースの戦い方は精霊を使った召喚術での戦いだった…しかし彼には本を武器に通常攻撃しかなく、召喚術以外の攻撃技と術がなかったのだった…しかしポケモンになった今、ポケモンの技は使えるのだ…なので彼にとってはメリットになる。

クレス「クラースさんは今まで僕達と旅していて本で攻撃していた

からよかつた」

しかし世界を救うと元の姿に戻るということも考えてほしいが…ポケモンだけの世界にいる時なら話は別だ

ドルク「よしっ！ひるんだ今だ！エナジーバスター！！」

ノーム「うわあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」
「」

ノームはエナジーバスターをモロ食らったが

ノーム「まだ……まだ僕は倒れないのらく！」

再びミサイルになって複数のノーム達のミサイルがドルク達に襲い掛かる

ドルク「ウッドハンマー！」

シルム「守護方陣！」

ドルクはウッドハンマーで打ち返し、シルムは奥義である守護方陣を繰り出す。守護方陣はそれぞれ使う者や世界によって効果が異なる、しかしシルムの守護方陣はバリアで防いでさらに自分の体力を回復する奥義だ

シルム「オイラの守護方陣はそう簡単には敗れない！」

クレス「僕がノームの動きを封じるよ！秋沙雨！」

連続の突きがノームを襲う

ミゲール「俺も！秋S」

マリア「ブレスト！！」

ミゲールも秋沙雨をやるうとしたがマリアがブレスト（肘打ち）でノームを攻撃した

ミゲール「俺の活躍（泣）」

ミゲールは涙目で見るしかなかった

ドルク「これで行くぜ！オメガリミット！…ウッドハンマー！」

ドルクはウッドハンマーで一撃をノームに食らわせ…そして奥義を発動した

ドルク「響け！燃え上がる俺のシャウトを！！イグニクスシャウト！！」

赤い音符が大量にノームを襲い、ダメージを与えた

ノーム「やられたのら」

ノームはやられて降参した。

ドルク「それじゃあ契約しねえとな」

ドルクはルビーの指輪を取り出す

ドルク「我今土の精霊の願い奉る…指輪の契約のもと、我に精霊を
従わせたまえ…我が名はドルク」

ノームは光だし、そのまま指輪に吸い込まれた

ノーム『契約ありがとうなのらくそれじゃあ一人僕の力を与えるよ
…それじゃあそのピンクの子に力を与えるのらく』

レビィ「私!？」

今度はレビィのようだ

ドルクはとりあえず召喚した、召喚したノームの姿はモグラのよう
なポケモン、モグリューだ

こうしてノームの力はレビィに、そしてノームとの契約を成功させた

ドルク「次は何処にするんだ？」

クラス「なら船で浸食洞に行こう、そこには水の精霊ウンティ
ーネがいる。そして熱砂の洞窟にいる火の精霊、イフリートと契約す
れば4大精霊と契約は成立となる」

シルム「ドルクの正体…色々気になるけど、精霊は知っているのか
な？」

すると何処からか声が

シルフ『はい、それは残りの二人の精霊との契約をしてから話しましょう』

ノーム『ドルクにはとある力があるのらく』

ノームはドルクのとある力しか教えてもらえなかった

段々とドルクには見えない何かが…今刻々と知っていく

依頼75 VS ノーム（後書き）

クラス「爆発も結構なものだな…それにしてもポケモンは奥深いな」

まあそれぞれの特徴があるんですよ

クラス「こりゃ色々調べないとな」

ドルク「次回は浸食洞へ行くぜ！」

依頼76 浸食洞と3匹のポケモン（前書き）

さて、ついに浸食洞です。

ドルク「ついにだな」

そして少しですがとある3匹が登場します。では依頼76

ドルク「切り抜けろ!!」

依頼76 浸食洞と3匹のポケモン

ドルク達はベネツィアで船に乗り浸食洞へ

そして何事もなかったかのように浸食洞へと到着したがまたしても

ドルク「ここも不思議なダンジョン化しているな」

なんとここも不思議のダンジョンと化した

モリスン「うむ、どうやらここにも影響が出ているようだな…この先不思議のダンジョンがいくつか出来るって可能性もなくはないな」

モリスンは冷静に分析する

マリア「なんでもいいけど行きましょう。次の精霊もここにいるのですから」

マリアの一言でみんなは頷いて先へ進んで行った

そんな浸食洞の入口を数分後さらに他の者が、それは3匹のポケモンだった

一匹は半分がクリーム色の体毛、背中からの半分は黒い色の体毛で背中には火が吹いているポケモン、一匹は両耳がヒレに青い体色で四足のポケモン、もう一匹はライオンのように目が鋭いポケモンだ

順番からバクフーン、ラグラージ、レントラーだ

バクフーン「うわぁ～すげえ～ここ迷路のような感じになってるぞ」

バクフーンはもの珍しく洞窟の中を見ていた

ラグラージ「それにしてもここは何処なんだろう?」

のんきそうに少年声で言うラグラージ

レントラー「この先気配がする…どうする?」

レントラーは冷静に言う

バクフーン「そりゃあいくつきゃないだろ♪」

ニカツとバクフーンが笑う

ラグラージ「そうだね、それじゃあ中に入ろう」

3匹は中へと入っていった

依頼76 浸食洞と3匹のポケモン（後書き）

今回の登場した3匹のポケモンはコラボキャラです。

そして次回ぐらいで明らかになります。

依頼77 VS ウンディーネ ～思わぬ助っ人～（前書き）

ウンディーネ戦です。今回は前回登場したあの3匹の事がわかります

ドルク「それじゃあ依頼77」

バクフーン「行くぜ!!」

依頼 77 VS ウンディーネ ～ 思わぬ助っ人～

ドルク達は浸食洞の最深部へと到着した。そこは水が抜かれていた。そこには穴が開いていて、さらに奥にはレバーが二つあった

シルム「これは？レバーで引けってことかな？」

クレス「それなら水を出しておけばいいんだ、レバーを引こう」

クレスに言われるまま二つのレバーを引いた、するとゴゴゴと水がドルク達を通った通路にたまつた。すると何処からか声が聞こえた

ドルク「誰だ！」

すると水に埋まった穴から大きな青い剣を持った女性が現れた

ミゲール「おおっ！ 綺麗なお姉さんだ！！ ぜひ俺も」

「ナンパしてんじやねえ!!」
（黒激怒）

ミゲール「あんぎゃあああああああああああああ
あああああああああああああああああつ！！
……………？」

マリアのブレストでミゲールは再び気絶した

k 「あなたは？」

????? 「また貴様等か：それに見たことない奴等がいる：二度ならず三度までも、だがわらわの眠りを妨げたことを後悔するがいい！！わらわは命令されるのと眠りを妨げられるのが一番嫌いなのじや！」

その女性はいきなり襲い掛かってきた

ドルク「うわっ！？いきなり襲い掛かってきやがった！？」

クラース「こいつがウンディーネだ、だが彼女も説得が聞かないようだ」

シルム「これはなんとかしないと、ショット！」

シルムはレウスバーニングでウンディーネを狙うが

ウンディーネ「わらわにその程度の攻撃が効かぬ！」

ウンディーネは持っている剣でシルムの弾を斬りつけた、弾は水に沈んで消えた

シルム「水！？」

ウンディーネ「なら貴様からだ！！アイスニードル！」

ウンディーネは呪文の詠唱が早く、アイスニードルをシルムに向かって発射する

シルム「！？」

シルムは咄嗟に防御して目を閉じた：しかし痛みはなかった

シルムは目を開けた：するとそこには

ドルク「くっ！」

ドルクだった、ドルクがシルムをかばってアイスニードルを受けたのだ

シルム「ドルク！？」

シルムはドルクに駆け寄る

ウンディーネ「ほう、仲間をかばうとは：だがこれを食らうがいい
アクアストライク」

ウンディーネの剣が弓に変形し、水の矢が二人に迫ろうとした、その時

k「10万ボルト！！」

kの10万ボルトが水の矢を消滅させた

k「大丈夫二人とも？」

シルム「オイラは大丈夫です。それよりドルクの治療しないと！」

ミント「なら私も」

シルムとミントは回復術でドルクを治療する。

k「ならその間僕が」

クラス「たしかにkはランターンだったな」

モリスン「ウンディーネは水なら雷が有効だな」

たしかに、アクアストライクを打ち消したのだから水は電気を通すはずだ

ウンディーネ「ならそなたからだ！避けてはならぬぞ！」

再び剣を弓に変形させて水の矢を数発放つ、しかしk自体には効いていなかった

ウンディーネ「なぜじゃ！？わらわの攻撃が通っていない！？」

ウンディーネは驚いた表情を見せる

k「僕の技、ステルスバリアでああなたの攻撃を無効にしたんですよ」

そう、kの周りには見えないバリアがある。そのため攻撃が通らなかったのだ

ウンディーネ「調子に乗る出ない！アイストーネード！」

今度は氷の竜巻がkを襲う

パキパキとバリアの周りが氷始める

k「しまった!?!」

クレス「ここは僕も加勢するよ!」

クラス「待て! クレス、お前は今ガバイドの姿だろ! 今行けば凍ってしまう!」

そう、クレスは今ガバイドの姿だ、ドラゴンと地面のため4倍のダメージを受ければクレスも倒れてしまう

アーチェ「ここはあたしの魔術で!」

アーチェはサンダーブレードを詠唱するが

ウンディーネ「遅い!」

アーチェ「きゃっ!?!」

ウンディーネが攻撃してアーチェの詠唱が失敗してしまった

ウンディーネ「これで終わりにしてやろう!」

ウンディーネは再び詠唱をする。呪文が発動されればおしまいだ! だがその時!

????? 「フレイズスパア!」

何処からか火炎放射が槍状に現れてウンディーネにダメージを与えた

ウンディーネ「うっ！」

ウンディーネの詠唱が失敗した

????? 「ふう〜来てみれば危ないところだったな〜」

来たのは一匹のバクフーンだった

すると今度は

????? 「!?!? 猿！」

一匹のレントラーがシルムを威嚇しようとする

????? 「落ち着いてヴォル！今はそんなことしてる場合じゃないよ！助けるよ！」

一匹のラグラージがヴォルという名のレントラーを落ち着かせる

k 「あなた達は？」

バクフーン「おお！そうだった、俺はバクフーンのレオだ、よろしくな！」

元気いっぱいバクフーン、レオは自己紹介する

ヴォル「僕はレントラーのヴォル：助けてやる」

ヴォルはウンディーネを睨む

アクア「僕はラグラージのアクア、ここは僕達も加勢するよ」

アクアと呼ばれたラグラージも構えた

ウンディーネ「フン！3匹増えようがわらわの優勢には変わりはない」

ウンディーネは余裕の表情をする

レオ「それはどうかな！」

ウンディーネ「!？」

なんとウンディーネの目の前にレオが迫ってきたのだ

ウンディーネ「(いつの間にわらわの前に!?)」

だがそれでも

ウンディーネ「だがわらわの前に立っていることを後悔するな、アクアキャノン！」

ウンディーネは水の砲弾を放つ、極太のレーザーのように水がレオに襲うが

シュン！

ウンディーネ「何っ!？」

なんと素早くレオは避けたのだ

ヴォル「余所見してる場合か？ エレキローブ！」

そこにヴォルがじゅうでんから物理攻撃の技でウンディーネに攻撃した

ウンディーネ「くっ！体が…しびれて…」

ウンディーネは体がしびれて動けなくなった

ヴォル「エレキローブは相手をしびれさせる効果もある」

アクア「今だよ！」

k 「僕も本気出すよ☆」

kの体が黄色く光った

k「見せてあげるよ☆僕の本気をね！月光の光よ…その光を解き放て！サテライトビーム！」

すると月が出て、月からレーザー光線が出て、そこからkのちょうちんの部分に当たり、そこから極太のレーザーがウンディーネを襲った

ウンディーネ「ぐあああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 ああああああつ！！！！！！！！！！？」

ウンディーネはkのサテライトレーザにより倒れた

k「やった☆！」

ドルク「ふう〜一時はどうなることかと思っただぜ」

ドルクはすぐに回復して復活

シルム「ありがとう、おかげで助かったよ」

シルムがお礼を言う

レオ「いや〜俺達もここが何処なのか迷ってな〜それに困った時はお互い様だよ」

アクア「そうだよ、僕やレオ、ヴォルもだよ」

ヴォル「……」

しかしヴォルはシルムを睨む

シルム「あれ？なんだかオイラを睨んでいるような（汗）」

シルムはタジタジする

アクア「あっごめんね、彼女はちょっと君みたいな猿系のポケモンには執念があってね」

ドルク「そうか…まあ助けに来てくれてありがとな」

ドルクもお礼をする

ウンディーネ「ゆ、許してたもれ……」

ウンディーネは負けてしまい、ボロボロだ

ドルク「とりあえずウンディーネ、俺達の力を貸してくれ！」

ウンディーネ「いいだろう…ではアクアマリンの指輪を」

こうしてウンディーネを契約し、ウンディーネを召喚したときにはウンディーネはポケモンに変わっていた。

シェルマルの進化系でフタチマルから進化するポケモン、ダイケンキになっていた。

ウンディーネ「それではわらわの力を与えよう…そこのフタチマルとマナフィと♀のジュカインよ」

指名したのはシェルマルとミネラとジュティアだ

シェルマル「俺か…でもウンディーネの力を使いこなせるかな」

シェルマルは不安になるが

ミネラ「でも使いこなせるようにがんばろう♪」

ミネラは笑顔で言う

シェルマル「そうだね」

シエルマルは納得する

ジュティア「まあ元々あたしにも水の力あるけどね」

ウンディーネ「ではいくぞ」

ウンディーネの力がシエルマルとミネラとジュティアに注ぎ込まれる、こうして三人はウンディーネの水の力を得た

……

一行は浸食洞を出た

ドルク「これで後はイフリートを残すのみだな」

シルム「そうだね」

残る精霊は後一人、すると

レオ「なあどうせこのまま行ってもラチがあかなそうだしドルク達ブレイブのメンバーに入れてくれないか？」

アクア「たしかにそうだね、ドルク達についていけば僕達の世界に戻れるかもしれないし」

しかし二人は納得しているが一人納得していない者が

ヴォル「ボクはあんな猿と一緒になのは嫌だ」

彼女はシルムがいることが気に入らないようだった

レオ「あのな〜ヴォル、たしかにシルムは猿かもしれないけど、優しいし襲ったりしないだろ」

アクア「そうだよ、それじゃあシルムとかに失礼だよ？このまま僕達だけだとまた迷ったりもしちゃうからそう言わないで」

二人がヴォルを説得する。

ヴォル「わかったよ…」

彼女はしぶしぶと承諾する。

レオ「というわけでよろしくな」

アクア「ヴォルの事は気にしないでシルム、ちょっと事情があつてね」

シルム「うん、わかった」

ドルク「それじゃあ改めてよろしくな」

こうしてドルク達ブレイブに3匹が仲間になった

モリスン「それにしてもkよ、すごい技だな」

k「うん、僕はこれでも強いからね」

今回はkの活躍により、なんとかあったが最後の精霊はフレイラントというところにあるのだ…油断はできない

アーチェ「あゝあ、あたしも活躍したかったな」

チェスター「そりゃ俺もだ」

ミント「でもなんとかってよかったです」

クレス「でも油断はできないよ」

そして彼等は、最後の精霊の場所へ！

依頼77 VS ウンディーネ〜思わぬ助っ人〜（後書き）

はい！パルポンさん作『パルとポケモン達』からバクフーンのレオ、ラグラージのアクア君、レントラーのヴォルの3匹が来てくれました！

レオ「来たぜ！」

アクア「よろしくお願いします」

ヴォル「よろしく」

パルポンさんから出演してほしいということで3匹に来てもらいましたがどうですか？

レオ「俺達の出演ありがとうございます」

アクア「それにしても僕達元の世界に戻るか」

大丈夫、そこはどうするかも考えておくよ

ヴォル「……」

アクア「どうしたのヴォル、黙ってて？」

ヴォル「なんで猿がいるのかボクには理解できない」

あゝ次回は彼女、ヴォルの過去や後は色々なんだけど？

ヴォル「（怒）」

アクア「落ち着いてよ！？でもシルムがいるんじゃないとだめだと思うし」

これじゃ俺がゴウカザル好きだからということもあるからヴォルにはなれておいた方がいいかも、誰だって過去に色々あるんだし

ヴォル「……」

アクア「収まってくれたよ（汗）」

レオ「すみません、いつもこうなんで」

気にしないで、さて、次回もお楽しみに

依頼78 過去と夜（前書き）

今回はヴォルちゃんの過去…そしてシルムの話です。

シルムの出番多いです（汗）では依頼78

シルム「行くよ！」

依頼78 過去と夜

ブレイブ一行のみんなは一度ベネツィアに戻り、そこから再び船でアルヴァニスタへと向かった、アルヴァニスタについた一行はここで買い物をして荷物をまとめて再び出発、途中で日が沈んでいた。

クラス「今晚は野宿だな」

ドルク「とりあえずテントでも張って準備でもするか」

みんなは準備をした。

ヴォル「……」

彼女：ヴォルは納得できない表情をしていた。これほどまでにイライラしているのはシルムだった。だがシルムはなんも彼女を恨むことはやってはいないのだ：だが彼女は最初シルムに会ってから妙に睨みつけている。ドルク達以外は睨みつかれることはなかった：だがなぜシルムなのかだ？

彼女がこれほどまでにシルムを睨む理由は？そんな中シルムが彼女に声をかける

シルム「どうしたの？オイラ何か悪いことした？」

しかし彼女は無視をした

シルム「あ…」

シルムは何も声をかけることができなかった

そこにアクアが駆けつける

アクア「彼女、ちょっと過去に色々あってね…少し時間があつたら話すよ」

さらにそこにドルクも来た

ドルク「たしかにな、あいつなんかシルムに恨みでもある感じの目だぜ」

アクア「うん、でもちょうどいいから後で話すよ、なんで彼女はそうなったのか」

そういうとアクアは元の作業に戻る

ドルク「シルム、まずはこっちの作業してからにしような…気になるが気持ちをきりかえねえと大変だぜ？」

シルム「うん…わかったよ」

シルムは少し暗くなりながらも作業に移る

…

なんとかテントの準備を完了したドルク達、そろそろ夕食の時だろう

ドルク「今回は俺とシルムが作るぜ」

クラウド「ドルクって料理できるのか？」

シルム「うん、オイラも料理とかできるからクラウドさんとか手伝ってもらっていいかな？」

どうやらドルクとシルムが作るらしい、はたして二人が作る料理とは？

数時間後

ドルク「できたぜ」

シルム「お待ちどうさま」

ドルクが作ったのはカレーライス、シルムは麻婆豆腐だ…つまり今夜は

ドルク「俺とシルムの特製マールボーカレーだ！」

シルム「たくさん食べてね」

クレス「わあゝすごいよ二人とも！」

レオ「おっ！うまそうゝ早くくいてえゝ」

レオは待ちきれないほど食べたいようだった、みんなはそれぞれ自分の分を分けて座った

全員『いただきます！』

全員は二人のマーボーカレーを食べた、お味の方は

クラス「これは!？」

チェスター「ホントにあいつらが作ったのかというほどうめえ！」

クラス「二つの辛さのハーモニーが引き立てているよ」

マリア「すごいわね二人とも」

アトリ「二人して料理うまかったなんてな」

デイン「すごいヨ！」

レオ「うめえ、おかわりほしいぜ！」

シルム「おかわりはたくさんあるから遠慮しないでね」

ドルク「かなりの分作ったからなくおかわりもたくさんあるぜ♪」

ドルクだとかかなり食うためかなりの量は作ったようだ

アクア「すごいよ、この味は♪ヴォルも食べなよ」

ヴォル「いらん」

ヴォルは断るが

レオ「シルムが作ったのだからってそんなに警戒するなよ」(汗)

アクア「食べないと次の場所とかでバテちゃうよ…だからねえ…」

二人はヴォルを説得する。

ヴォル「…わかったよ…」

ヴォルはしかたなく食べることに…

数分後、みんなは夕食を食べ終えた

……

夜

ヴォル「……」

彼女は一人、二つの月を見ていた。なぜ月が二つなのかというと、クレス達の世界には月が二つもあるからだ

ヴォル「……」

彼女の目には涙が出ていた。

自分の過去を思い出して

……

別の場所ではドルクとシルムがアクアとレオの元にいた。さらにクレスとミントもだ

シルム「ねえ、どうしてヴォルはオイラのような猿系のポケモンには攻撃的になったりとかしてるの？さっきの夕食の事だって、なんか」

たしかにシルムの料理、ドルクも含めるがなぜ彼女はそんな態度になったのかだ

アクア「そうだね…色々と警戒心が強いんだ…過去に辛いことが」

ドルク「辛い事？」

アクアは頷いて話をした

…

ヴォルは過去に他のトレーナーに捨てられた、その時の彼女は進化前のルクシオだった。

冷静な彼女にとっては捨てられるってことはそのトレーナー自体は見捨てたってことだ…そしてその捨てたトレーナーは彼女にこう言った

「お前は身軽なサル以下の奴だ！俺はそんな奴が嫌いなんだよ！」

アクア「これは僕のトレーナーから聞いた話なんだ…その言葉で警戒心が強くなって、さらに猿系のポケモンには攻撃的になって…」

ドルク「それでシルムには攻撃的なんだな…俺は元人間だがそこまですで過去を引きずっては何もかわらねえよ…」

ドルクは冷静に言う

シルム「でも…たとえ過去でも辛い気持ちはわかるよ…」

シルムは自分の事をレオとアクアに話す

シルム「オイラはドルクに会う前は臆病で意気地なしかった…でもドルクと一緒に探検したりと自分に勇気をもつことができたんだ」

クレス「そうなんだ…」

ミント「シルムさんにもそんなことがあったんですね…でも…どうしたらヴォルさんが変われるのでしょうか…心配です」

過去はたしかに辛いこともある。でも

ドルク「過去にこだわってはいは…あいつは変わらないと思うぜ？」

レオ「たしかにドルクの言うとおりかもなく」

アクア「僕のトレーナーでも慣れるのに大変だったから」

変われるのか…だが彼女の気持ちは心に闇を抱えたままだ、シルムが立ち上がる

シルム「オイラ、彼女に話してくるよ」

アクア「えっ！？でもシルムを攻撃するかもしれないんだよ！」

シルム「わかってるよ…でもこのまま変われなければ一生オイラを憎むかもしれないんだよ…ならたえぶつかってもオイラに慣れさせる！」

そう言ってシルムはヴォルのところへ

アクア「ドルク…いいの？」

ドルク「どっちみち喧嘩になったら大変な事になる。そうなると大変だからな…なら俺達も行ってみるか…もし攻撃したら俺達が止めよう」

レオ「なるほどなくたしかに、なら行こう」

アクア「うん、僕も行くよ…ヴォルのストッパーは必要だからね」

ドルク、レオ、アクアはシルムを追いかけた

クレス「ミント、僕達も！」

ミント「はい！」

クレスとミントも三人を追いかける

…

ヴォル「なんで思い出すんだろう…頭から離れられないな…」

ヴォルはまだ月を見ていた。すると

????「ヴォル！」

ヴォルは振り向いた、そこにいたのは

シルム「はあはあ、なんとか見つけた」

だがヴォルは

ヴォル「なぜ来た！ボクはお前が嫌いなのに…」

シルム「待って！話をk」

ヴォル「来るな！」

シルムは近づくがヴォルは少し後ずさる

ヴォル「来るならお前を倒す！」

シルム「待って！過去にあったことは話聞してるけどその気持ちはわかるよ…でも過去は過去なんだよ？オイラだって…最初は臆病で意気地なしだった…だからその気持ち…わかるよ…」

シルムはヴォルに警戒されながらも話をする。

シルム「みんな優しいよ…それにオイラはヴォルが過去を断ち切ることを信じてるよ」

ヴォル「うるさい…！」

ヴォルはいきなりシルムに攻撃をしかけてきた

シルム「わっ！？待って！そこまで攻撃」

ヴォル「うるさいうるさいうるさい！！」

ヴォルは爪で攻撃する

シルム「くっ！（爪がまるで幻に見える感じで痛い）」

シルムはダメージを受けてしまった。

ヴォル「僕にかかわるな！！」

ヴォルはスパークでシルムに突撃する。

シルム「うわっ！？」

シルムはスパークを受けてしまった。

ヴォル「僕が過去の事がどうだろうとお前に関係ない！！僕は嫌なんだよ！身軽なサル以下…猿系のお前なんか嫌いだ！！」

さらにヴォルはシルムに攻撃を仕掛ける、だが

がしっ！

シルムがヴォルを両手で防ぐように構えた

ガブッ！

だがヴォルはシルムの右手を噛んだ

シルム「うっ！」

シルムは噛まれた右手を左手で抑える

だがヴォルは容赦なくシルムに攻撃する。

シルム「がっ！くっ！うっ！」

だがシルムは攻撃を受けても技を使っていない…

だがヴォルはこれでもかとシルムを攻撃する。

…

ヴォル「はあ…はあ…」

ヴォルは疲れた表情をする。目の前にはシルムが倒れていた。シルムはすでにボロボロだった

ヴォル「もう…僕に…」

だが

シルム「だ…だめ…だよ…」

ヴォル「!？」

シルムはボロボロになりながらも立つ

シルム「かかわるなって…言われても…仲間…なんだから…」

ヴォル「くっ！」

だがヴォルはシルムに攻撃する

シルム「うっ！」

シルムはしりもちをついて倒れる

ヴォル「お前なんて仲間でもなんでもない！！言っただろう！僕はお前みたいな猿は嫌いだ！！」

だが

シルム「それでも…慣れるまで…：オイラは…何度でも受け止めるよ！たとえ過去が辛くても…オイラは受け止める！！」

ヴォル「！？…お前みたいな奴には慣れない…慣れないんだ！！」

だがヴォルはそれでもシルムを攻撃する

シルム「うわああああああああっ！！？」

シルムは吹き飛ばされた

シルム「くっ！」

シルムは立ち上がろうとするが力が出ない

ヴォル「これで…トドメだ!!」

ヴォルはスパークでトドメを刺そうとする。

シルム「う…」

だがシルムは立つ、もうシルムの体力も限界に近い…

ヴォル「お前の言葉なんて…僕は認めない!!これで!!」

ヴォルが電気を纏いながら突進してくる。

だが

????「ロックフェンス!!」

ヴォル「なっ!?!」

ヴォルの目の前から岩の壁が発生してヴォルは吹っ飛ばされた

ヴォル「くっ!」

シルム「ド…ドル…ク…」

シルムの目の前にはドルクが立っていた。

ドルク「もうやめろ!!猿系のポケモンが憎い感じもあるがやりすぎだ!!」

ドルクはヴォルに一喝する。

ヴォル「邪魔をするな！！ならお前も！」

アクア「もうやめてヴォル！！」

そこにアクアが止める

レオ「これ以上やったらシルムが死んじゃうだろ！」

さらにレオも一喝する。

ヴォル「レオ…アクア…」

アクア「シルムだって、ヴォルの事思っていたんだよ！たしかに過去の事は辛いけど、でも今を考えないと何も変わらないよ！もうやめて！これ以上シルムに手を出しちゃだめだよ！」

アクアはヴォルを説得する。

ヴォル「……」

ヴォルは黙ってしまった。

シルム「ごめん…みんな…」

バタツ！

ドルク「シルム！」

クレス「ドルク！」

そこにクレスとミントが駆け寄る

ミント「急いでシルムさんを運んで治療しましょう！みなさんも手伝ってください！」

ドルク達は急いでシルムをテントへと運んだ

……

シルム「……」

シルムは包帯や湿布を張っていて、ただいま落ち着いて寝ているようだ

ドルク「とりあえずは安静にした方がいいな」

ミント「そうですね、それにしてもこれほどまでシルムさんみたいな猿系のポケモンに……」

ミントは暗くなる

アクア「ごめンドルク、ヴォルも謝って」

ヴォル「…すまない…」

二人は頭を下げる

レオ「俺もごめんな…」

レオも頭を下げた

ドルク「いや、ここまでトラウマだったなんて思わなかった…だけ
どヴォル…たとえ嫌いって思っても過去は過去だ…俺も今度本気で
シルムにやったら…俺も本気だからな」

ドルクがヴォルを睨む

アクア「ホントにごめんね…」

クレス「でもヴォルのトラウマは異常な感じもあるね」

ミント「はい…とりあえずは休みましょう。他のみなさんも寝てい
ますし」

ドルク「そうだな…それじゃあ寝るぞ」

ドルク達は寝た

……

次の朝

シルム「う…う…ん…」

シルムは何とか起きた

シルム「あれ？ここは…っっていたっ」

シルムは痛んだ腕を押さえる

ドルク「目え覚めたか？」

シルム「ドルク」

ドルクがテントの中に入ってくる

ドルク「とりあえずミントの法術である程度はなんとかなったからもう少ししたら治るだろう」

シルム「そうか…わかったよ」

シルムは頷いた

…

マリア「シルムちゃん大丈夫？」

シルム「はい、おかげさまで」

シルムは数時間後、なんとか完治した。

するとヴォルがシルムに近づく

シルム「ヴォル…」

ヴォル「…め…ん…」

シルム「え？」

よく聞こえないが彼女は

ヴォル「ごめ…ん…」

シルム「!」

シルムは笑顔になる

シルム「うん!」

シルムは元気よく返事をする

ヴォル「か、勘違いするな!…まだお前の事…認めたわけじゃないからな!」

と、咄嗟にツンデレのように言うヴォル

レオ「素直じゃねえな〜♪」

ニカッとレオは笑う

ヴォル「う、うるさい!」

ミゲール「それじゃあ俺と一緒にデートでも」

マリア「死ねや!!クソミゲール!!（黒激怒）」

マリアのブレストにより吹っ飛ばされた一匹のヨーギラス（汗）

ドルク「それじゃあ出発するぞ！」

ドルク達はフレアランドへと向かった

依頼78 過去と夜（後書き）

過去のトラウマって怖いね…

ドルク「そうだな、作者もこれ書くの嫌だったか？」

いや…できるだけ書いたけど酷い感じだったかもしれない（汗）パ
ルポンさん酷かったらすみません（汗）

シルム「まあなんとかあったからいいけど慣れるまで時間かかるか
も」

次回はついにイフリート戦です。

ドルク「もうかよ」

依頼79 VSイフリート〜灼熱の戦いとドルクの正体〜（前書き）

ついにドルクの正体&イフリート戦です。

まあちよつとぐだぐだになってしまいましたが（汗）

ドルク「ついにだな」

では依頼79

ドルク「のってるか!!」

依頼79 VSイフリート〜灼熱の戦いとドルクの正体〜

ドルク達ブレイブはフレイランドへと到着して、イフリートがいる
熱砂ねっさの洞窟へと入っていった

シエルマル「ここは不思議のダンジョン化していませんね」

クラス「どうやら不思議のダンジョンの影響がなくてよかった、
とりあえずまずはここにあるソーサリーリングを探そう」

シルム「ソーサリーリング？」

ソーサリーリングという単語でクラス達以外は首をかしげた

クラス達はソーサリーリングというのを説明した。

ソーサリーリングは炎を出して遠くの的を狙ったりするリングで魔法のアイテムだ：もちろん人に向けてはいけないのでよいこはまねしないように

アーチェ「まずはソーサリーリングね」

ドルク達はこの洞窟の地下へ

……

敵もかなり強い魔物が多い、そのほとんどが炎のためか

シエルマル「アクアエッジ！」

シエルマルは水の術、アクアエッジを放つ、同時にミネラもだった

ミネラ「アイストルネード！」

ミネラは氷の塊を竜巻に合わせた術魔物を倒していく

ジユク「切り裂け、風の刃！エアスラスト！」

ジユクは魔物の周囲に風の刃を発生させて魔物を切り裂く、魔物は切り刻まれて血を流す

レビィ「大地の力を今ここに、グランドダッシャー！」

大地の破壊のエネルギーが魔物を襲い飲み込んでいった

シエルマル「まさか精霊の力で術が使えるなんて」

シルム「オイラは回復術と少しだけど炎の術は使えるけどね」

レビィ「それぞれの属性でそうだったってことね」

ジユク「だが属性でも俺達のタイプとは一致しないものもあるな…」

ジユクの言うとおり、タイプの的には適合していないのがある、ジユクは風属性：タイプなら飛行タイプなら適合はしそうなのだ、だがシルフはジユクに風属性の力を与えた：レビィは草・エスパーで地属性の力をもつが、草は元は大地から生まれたものだ、それでレビィには地属性の…ノームの力が使えるだろう

k「精霊もすごいってことですね」

kはそう言いながら10万ボルトで魔物を倒す

ドルク「とりあえず…宝箱だ」

ドルクは宝箱を見つけた…中には指輪みたいなのがあった」

クラス「これがソーサリーリングだ」

どうやらこれがソーサリーリングのようだ

なんとか手に入ったドルク達はこの後ソーサリーリングを使って行けなかった扉をソーサリーリングでその鍵となる的を撃って扉を開けた

…

なんとか最深部までたどり着いたドルク達、途中溶岩のカギを見つけて最深部の扉を開けて、ソーサリーリングで柱を倒して道をあけた…そして奥には体を炎で纏った上半身だけの魔人の姿がいた

ドルク「お前がイフリートか？」

ドルクはその炎の魔人に言う

イフリート「左様、しかも久しい者までいるな…わしに何か用か？
強き大樹の者よ」

ドルク「俺達に力を貸してほしいんだ、今この世界がポケモンにな
っていてそれぞれの精霊の力を貸しにここまで来たんだ！」

イフリート「わしに力を貸してほしいという覚悟があるのなら、力
ずくで従わせるがよい！」

イフリートは構える、どうやら戦って勝つしか方法はないようだ

ドルク「なら行かせてもらうぜ！」

ドルクは構えた

イフリート「ほう：草タイプを持っているがわしが有利だぞ？それ
でも覚悟あるならそれを受け入れよう：骨の髄まで溶かしつくすわ
しの炎を恐れるのならばな！ゆくぞ！」

イフリートは自分の右手から炎をためて放った

ドルク「ロックカット！」

ドルクはロックカットで素早さをあげて避けた

イフリート「ほう、わしの炎を避けるとはな」

シェルマル「僕達を」

ジュク「忘れるな！」

シェルマルはアクアエッジ、ジュクはエアスラストでイフリートを
攻撃

イフリート「ぐわっ！中々やるな〜だがわしはまだ倒れん、本気を
出すとしよう…火球の塵とかせ！」

横から火球が数発も放たれる

ジユク「ぐわっ！？」

シエルマル「くっ！」

ジユクは食らってしまい後退、シエルマルはホタチでガードした

シエルマル「くっ！あ、熱い！」

だがホタチは熱くなっていた。

レビィ「ジユクさん、とりあえず回復しますね…ファーストエイド
！」

レビィはジユクを治療していた。

ジユク「すまない、油断した」

ミゲール「ここは俺が！！」

ミゲールは行くが

イフリート「フン！弱き者に勝てるわしではない、塵とかせ！」

再び火球が数発も放たれる

ミゲール「ぎゃあああああああああああ！あちいいいいいいいいいいいいいい！！」

ミゲールは火ダルマとなった

マリア「何やっとなじゃポケェ！！（怒）冷凍ビーム！！」

カキーン！

ミゲールは氷状態になった

クレス「父さん（汗）」

アトリ「あのクソ親父（怒）」

みんな啞然とした

レオ「ここは俺が行くぜ！」

今度はレオが行く

アクア「炎なら…水だけど…レオ！ここはなるべく炎技は使わないで」

レオ「わかった！」

たしかにレオは炎タイプの技を持っている。

イフリート「フハハハ！同じ炎でわしに挑むか？だがわしに炎は吸

収されるぞ？」

精霊でも同じ属性で回復することもあるのだ

ドルク「だが俺も忘れるなよ！ストーンエッジ！」

ドルクはストーンエッジでイフリートにダメージを与えた

イフリート「ぐわっ！？」

レオ「つばめがえし！」

レオは素早くつばめがえしを繰り出した

イフリート「くっ！」

だがドルクも負けてられない

ドルク「草タイプ舐めんなよ！！オメガリミット！」

ドルクの体が光を纏う

ドルク「行くぜ！貫く魂のロック！刻め俺のソウルビートを！！ブレイブロックシャウト！！」

色んな色の音符と岩の音符がイフリートを襲った

イフリート「ぐわあああああああああああああああああああああ
あああああっ！！！！！！！！」

イフリートは倒れた

……

イフリート「フハハ！ 貴様らの戦い楽しかったぞ！ よかろう、わしの力を貸そう、契約のための指輪を示せ」

ドルクがガーネットの指輪を取り出す

ドルク「我今炎の精に願ひ奉る…指輪の契約のもと、我に精霊を従わせたまえ…我が名はドルク」

イフリートは光だし、ガーネットの指輪に

ドルク「今度は誰が力をもらうかな…出て来い！」

ドルクはイフリートを召喚した。イフリートの姿は豚のようで顎が炎で燃えているポケモンだった、おおひぶたポケモンのエンブオーだ

イフリート「ではそのゴウカザルに与えよう」

指名したのはシルムだ

シルム「オイラ？ でも炎の術はある程度は」

イフリート「だが上級の炎系の術は覚えておらんようだな」

どうやらシルムはある程度の炎系の術は覚えているようだ

シルム「うん、オイラはまだ上級術を覚えていないんだ…呪文書に

は中級までの術しか書いていなかったから」

イフリート「ならわしの力をもらうがいい」

イフリートの力がシルムに流れ出す

シルム「なんだろう…燃えるような感じがした！」

シルムはイフリートの力をもらった、これで4大精霊をドルク達は集めた

ドルク「これで4大精霊はそろったな」

だがまだ感心なところを聞いていない

ドルク「なあイフリート、なぜ俺には精霊の力を使うことが可能とシルフは言っていた。何か知っているか？」

イフリート「そうか…なるほど…では話をしよう…貴様が何者なのかを…」

するとイフリートは信じられない言葉を言う

イフリート「貴様は世界樹自体…そしてディセンダーだ」

ドルク「ディセンダー？それに世界樹自体ってどういうことだ？」

シルム「えっ？でも世界樹って人に化けるものだったっけ？」

クレス「いや、そんなはずないよ…でもなんでドルクが世界樹自体

でディセNDERなんだろう？」

その疑問にイフリートは答えた

イフリート「ディセNDERとは世界に危機が訪れた時…世界樹から舞い降りる者だ…だがドルク自体は特殊だ…なぜ世界樹自体なのかだが…まずはそこから話そう」

イフリートは語る

…

ポケモンの世界には世界樹の存在があったのだ…だがしかし世界樹は突如として消えたのだ…なぜそうなったのかわからなかった…だが…

未来世界で一人の人間が現れた…そしてその人間は記憶はなかったのだ

ジユク「まさか！？あの時！？」

ジユクは何かを思い出した。

シエルマル「ジユクさんは何か知っているんですか？」

ジユク「ああ、実はドルクと会った時…あいつは光に包まれて舞い降りてきたんだ…赤ん坊の姿で」

ソウ「師匠が！？」

ドルク「信じられねえ…」

イフリート「だがそれは事実…そしてダークライというポケモンがタイムスリップ事故を起こし、ドルクはジュクをかばった…そしてそれが世界樹の…いや世界樹自体と同調した、そしてポケモンの姿がナエトルだったのは…世界樹自体の力がドルクの中に入り込み…そしてダークライの攻撃を受け、世界樹の意思でナエトルになったのだ…」

ドルクが世界樹自身…世界樹はマナの動力源でもある…なのでドルクは魔術を使うことができるのだ

ドルク「だがなぜイフリートや4大精霊は知っているんだ？」

そう、別世界なので矛盾しているのだ

イフリート「それは…4大精霊を統治しているマクスウェルから伝えられたのだ」

クラス「マクスウェル！？たしかにマクスウェルなら世界を見ているなら有り得るだろう」

マクスウェル…それは4大精霊を統治している精霊だ

ドルク「ならマクスウェルに会いに行こうぜ！このままくずくずしちゃいられねえ…」

ドルクは元気出して言う

イフリート「ならこの宝箱を開けるがいい」

イフリートの後ろには青い宝箱があった

イフリート「それにはマクスウェルと契約するための指輪、ターコイズが眠っている」

するとイフリートは消えた

早速中身を見てみると契約の指輪だった

シルム「ドルク…」

シルムがドルクに声をかける

シルム「オイラ…ドルクが世界樹自体でも頼れるパートナーだよ」

ドルク「ありがとなシルム…なんだか俺も吹っ切れたぜ」

たとえば姿がどうだろうと…

自分は自分なのだから

レオ「でも世界樹自体でも頼りにしてるぜ♪」

クレス「でも不思議だね…まだドルクが世界樹自体なのは違和感あるけど」

ミント「でもドルクさんはドルクさんですし」

シムーン「そうですね…」

依頼79 VSイフリート灼熱の戦いとドルクの正体（後書き）

ドルク「俺がディセNDERって作者もディセNDERじゃ？」

まあそうだけどフリーだからね

シルム「でも世界樹自体ってすごい大胆だね（汗）」

それはマクスウェルに会わないとね、マクスウェルは星の監視もしてるからポケモンの世界も見ていたってところかな

ドルク「だがマクスウェルって何処にいるんだ？」

次回でね（汗）

依頼80 モーリア坑道の不思議のダンジョン（前書き）

はい！ついにモーリア坑道です。

ただゲームとは違い、このモーリア坑道も変わっています。

なぜなのかは見てからのお楽しみです。それでは依頼80

ドルク「行くぜ！」

依頼80 モーリア坑道の不思議のダンジョン

ドルク達はフレアランドから一度船でアルヴァニスタのに戻り、そこからアルヴァニスタからモーリア坑道というマクスウェルがいる洞窟に入る許可証をもらい、フレアランドに行く港の近くにあるモーリア坑道にドルク達は向かった

……

モーリア坑道

ドルク達はアルヴァニスタの許可証をアルヴァニスタ兵士（ポケモンになっている）に見せて入った、ドルク達は1階の仕掛けをなんとか解いたが、2階は…

モリスン「ここも不思議のダンジョンのようだ」

2階からは不思議のダンジョンになっていた。

レオ「ここも魔物だけじゃねえみたいだぜ」

そう、ここには魔物だけでなく…ポケモンの姿も見られた

クラス「どうやらこのポケモン達は襲ってくる感じのようだ」

ドルク「色々と影響してポケモンも出てきて暴れているってことだな」

どうやらポケモンまでもこの世界に来て暴れているようだ

出てくるのは岩タイプのポケモンとかがここは多いようだ

ドルク「どっちみちマクスウェルって奴のどこにいかねえといけねえからな!! エナジーバスター!!」

ドルクはエナジーバスターで敵ポケモンと魔物を倒していく

ジュティア「やるしかないわね! アイストルネード!」

シエルマル「アクアエッジ!」

シルム「エクスプロード!!」

それぞれ技や術で次々と倒していく。

ヴォル「くっ!」

ヴォルは一匹のポケモンに苦戦していた。岩・地面タイプのイワークだ

ヴォルは電気タイプのため地面タイプ対策の技がない

ヴォル「やばい…」

すでに彼女の息がやばくなっていた。その時

シルム「飛燕連脚!」

シルムが飛燕連脚でイワークを倒した

シルム「大丈夫！」

シルムは声をかけるが

ヴォル「フン！ 助けてくれなんて一言も…」

ヴォルはそんなシルムを無視した。まだ慣れないこともあって過去とも決別できないでいるヴォル

アクア「ヴォルも変わればいいけど…」

アクアはハイドロポンプで魔物を倒していく

ドルク「グランドダッシャー！」

ドルクがグランドダッシャーで魔物と敵ポケモンを一掃、敵ポケモンは気絶、魔物はやられて粒子となって消えた

……

なんとか地下10階まで来たドルク達、目の前には石版があった、その石版の前に一人の黒いローブの老人がいた。

???? 「ん？ おぬしらは？」

クラス「久しぶりですマクスウェル」

クラスは目の前の老人…マクスウェルに言う

マクスウェル「ほほう、久しいのゝ話は聞いておるぞ」

どうやらマクスウェルはドルク達がここに来ることを知っているらしい

シルム「えっ！？　どうしてオイラ達が来ることがわかったんですか？」

マクスウェル「わしは4大精霊を統治する精霊じゃ、4大精霊のものの達がここに来るのを知らせてくれたのじゃ」

どうやら精霊が連絡をくれたようだ

ドルク「それよりじいさん！」

マクスウェル「ほほうゝじいさんか…まあわしはじいさんだがなんじゃ？」

ドルクが言う

ドルク「俺がディセンドーで世界樹自体ってことだ、あんたなら知っているみたいでな」

マクスウェル「なるほどな…まずはお前さんの詳しいことなどやなぜそれを知ったのかを詳しく話そう」

マクスウェルは語りだした。

依頼80 モーリア坑道の不思議のダンジョン（後書き）

ドルク「あのじいさんがマクスウェルかく知っているのか？」

まあ4大精霊を束ねる精霊だからね…次回はそんな真実を語っていきます。

依頼81 真実と新たな仲間（前書き）

今回は色々と真実がわかります。

そしてさらになりダンXから四人が参加です。

ドルク「誰だよ」

それは見てからだよ、では依頼81

ドルク「俺は俺だ!!」

依頼 81 真実と新たな仲間

マクスウェル「わしは別の世界の方を見てみた、他の世界を見た
…」

それぞれわしと同じ者も多く、世界樹がある世界やない世界もある。
しかしわしはとある世界を見た…それがお前さん達ポケモンが住ん
でいる世界なのじゃ

だがこの世界の未来は暗い未来じゃった…それはダークライという
ポケモンの仕業じゃった…わしはなんとかできないかと考えた…そ
こで世界樹のディセンダーの力を借りようとわしはポケモンだけの
世界に世界樹の精霊マーテルにポケモンだけの世界に世界樹を生み
出した…じゃが世界樹は枯れてしまったのじゃ

ディセンダーは生まれたのじゃが…消えることはなかったのじゃ

ドルク「つまりそのディセンダーというのは俺ってことなんだな？」

マクスウェル「その通りじゃ」

そしてディセンダーであるドルクは成長していき、時空の叫びとい
う能力を身に着けた…そしてお前さんは未来から過去に行ったのじ
ゃが

ドルク「そこでダークライの攻撃が来た」

ジユク「タイムスリップの事故だな」

マクスウェル「そうじゃ」

そしてお前さんは相棒である今のジユクという者をかばった…そしてお前さんはその攻撃で致命的にダメージを負ってしまったのじゃ…お前さんはその時にはもうだめになる感じじゃったのじゃ

ドルク「つまり俺は…死んでいたってことか？」

マクスウェル「そうじゃ…しかし」

世界樹の意思がお前さんの体に流れ込み、お前さんは世界樹と同調したのじゃ…そしてお前さんの姿がポケモンになり海岸に倒れた、記憶は失ってしまったじゃがの…

シルム「それでオイラはドルクに会った」

マクスウェル「ディセンダーは最初に世界におりた時には記憶がないんじゃ…お前さんは二度も記憶を失ってしまったのじゃ」

ドルク「そうか…だから俺には」

ジユク「ドルク…」

ジユクは心配そうにドルクを見る

ジユク「俺もその時にはなぜ赤ん坊が空から来たのかわからなかったのか…ようやく理解できたな」

アクア「それでドルクは」

ドルクはポケモン世界の世界樹に生まれたディセンダー

マクスウェル「世界樹が枯れた時はわしもその時はディセンダーであるお前さんは生きることではできなかったのじゃが…世界樹と同調したおかげでお前さんはこうして生きているのじゃ」

ドルク「俺が…」

ドルクは驚きを隠せなかった

シルム「でももしそうしなかったら…オイラはドルクと会っていなかったんだな…」

そう、ドルクがもし世界樹と同調して一体化していなかったら…ドルクの存在はなくなっていたのだ

マクスウェル「じゃが世界が救われたことはわしも安心した、さてとお前さんはこの世界がポケモンだけという原因がわかってないんじゃない？」

ドルク「ああ、何か知っているのか？」

クレス「もしかしてダオスが？」

しかしマクスウェルは首を横に振った

マクスウェル「お前さん達には知らぬと思っているが…ダオスはマ―テルが大いなる実として捧げられたのじゃ」

クレス「えっ!?!じゃああのダオスは一体!?!」

そこに

????? 「残留思念だよ…ダオスのね…」

ドルク達の後ろから一匹のポケモンが出てきた。

それはミミロップだった

????? 「クレスさん!」

????? 「みなさん!」

そこに二匹のポケモンがいた

二匹とも赤いレンズの目に黄緑の両翼、尻尾はしましまで尻尾の先端にはダイヤの形をしたものがくっついている。せいいいポケモンのフライゴンというポケモンだ

ドルク「誰だ?」

ミミロップ「あたしは Rondoline、ロディって呼んでね」

フライゴン1「俺はディオ」

フライゴン2「私はメルです」

クレス「ロディ!?!」

クラス「それにディオとメルまで!？」

クラス達は驚いていた。

ミゲール「知り合いなのかクラス？」

ミゲールはクラスに話す

クラス「ロディは何度も知り合ったんだ、ディオとメルも手伝ってくれたなりきり士なんだ」

クラス「ロディはエクリプスの者なんだ」

ロディ「まあちょっとこの姿とかのことでディオ君とメルちゃんと一緒に来たのよ」

ロディはそう説明する。彼女の服は露出している服で冬だったら寒そうな服装だ、だがこの男が黙ってるわけがなかった

ミゲール「おお!まさかクラスと知り合いとは!!ロディさん初めまして、クラスの父のミゲールとm」

マリア「テメエはいい加減にしやがれクソミゲール!!(黒激怒)」

ミゲール「あんぎゃあああああああああああああああああ
あああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

お約束のブレストによってミゲールは気絶した

そこに

????? 「クルール！」

さらにそこから一匹のポケモンが出てきた。

つぶらな瞳に周りが綿のポケモン、わたたまポケモンのモンメンという

メル「あっ！クルール！」

クルールと呼ばれたモンメンはくるくると回る

……

クレス「じゃあドルクを襲ったダオスは残留思念で…ドルク自体が世界樹だから大いなる実りをとるためにか…」

ロンドリーネ「ええ、私や双子ちゃんは独自に調査したの…でも結局わからなかったからクレス達のとこに来たのよ」

どうやらロンドリーネ…ロディはディオとメルと共に調査していた。だがそれでもポケモン化の原因はわからないままだ

マクスウェル「まあこれからわしが話す…なぜポケモン化した原因なのじゃが…ドルク…お前さんの世界に…デリス・カーラーンが現れたのじゃ」

ドルク「デリス・カーラーン？」

デリス・カーラインとは、母なる大地であり：聖地という場所だ

それぞれの世界でもデリス・カーラインは異なる

マクスウェル「デリス・カーラインがなぜ現れたのかはわからぬが
：実は世界が今消滅という危機に陥っているのじゃ」

シルム「えっ!？」

世界の消滅：それはどういうことなのか

マクスウェル「デリス・カーラインはそれぞれの世界とは別の大地
じゃ：じゃが時に邪悪な感じにもなるのじゃ：そして今の世界はす
でにデリス・カーラインと一緒に鎖が打ち込まれたのじゃ：このま
まなんとかしないかぎりは無理じゃ」

クラス「何か方法があればいいんだが」

それぞれの世界にドルク達の世界に鎖が打ち込まれ：それがどんど
ん近づいて一つとなり消滅しようとしているのだ

マクスウェル「方法なんじゃが：デリス・カーラインには結界があ
って入れないのじゃ：なのでそれぞれの世界から大いなる実りを手
に入れなければならんのじゃ」

だが大いなる実りを手にいれる方法：それがあればいいのだが

ドルク「だが大いなる実りを手に入れるにはどうしたらいいんだ？」

マクスウェル「そうじゃのう：お前さんがある程度何かによってそ

の世界の大いなる実りを手に入れることはできるはずじゃ…」

そこに

ピルルルル！

何処からか何かが聞こえる

ドルク「探検隊バッジからだ」

探検隊バッジが鳴る、実はそれぞれ連絡できるように探検隊バッジに連絡機能を追加したのだ…その連絡は

ドルク「もしもし」

デイシア『ドルクか、今何処にいる？』

デイシアからだ、探検隊バッジからデイシアの声が聞こえる

ドルク「今モーリア坑道にいるんだが」

デイシア『こっちもなんとかわかったことがある。一度現代のトールに戻ってきてくれ』

どうやらこっちでも何かわかったらしい

ドルク「わかった！そっちに向かう！」

ドルクは探検隊バッジを押して通話をきった

シルム「トールに行こう」

行こうとしたその時

ロンドリーネ「待って、なら私のペンダントで」

ロディが取り出したのは古びたペンダントだ

ディオ「真・デリス・エリュシオンっていうんだ、それで俺達は時間を移動したんだ」

どうやらロディのペンダントには時間転移能力があるらしい

ロンドリーネ「ついでにすすちゃんもクレス達のいる時代に送っておいたから」

クレス「すすちゃんも来ていたんだ!？」

すすというのはクレス達の仲間の一人で時空戦士の一人である。

ロンドリーネ「まあディシアというディアルガには会って事情は聞いているわ、今すすちゃんと調べものの作業していると思うわ」

ジュティア「助かるわ、一度戻った方がいいわね」

これでドルク達はトールに行かなくてもロディの指輪で時間転移ができるのだ

マクスウェル「ならわしも行こう、ターコイズの指輪で契約をしてくれ」

マクスウェルは契約をしたいらしい

ドルク「ああ、じいさんよろしくな！」

ドルクはマクスウェルと契約した。

ちなみにマクスウェルは伝説のポケモンであるミュウの姿となっている。

ドルク「それじゃあロディ、頼んだぜ！」

ロディ「わかったわ！」

ロディのペンダントが光り…みんなを包んで消えていった

依頼81 真実と新たな仲間（後書き）

シルム「もしドルクが世界樹の力を与えていなかったら…オイラは会っていなかった…」

まあ思いつきドルクがナエトルだからというからこうしようと思っ
ってね

ドルク「だが真実は見えてきたな」

そしてロンドリーネ、デリオとメルが登場です。ロデイがミミロツ
プなのはロデイには合う感じのポケモンだからですね、デリオとメ
ルはデリオの中の人がポケモンに出いたため、というかトレーナ
ーですが手持ちのポケモンでフライゴンがあったためと服装が同じ
色なので双子はフライゴンにしました。

ジュティア「ようやるわね（汗）」

さて、次回は

ドルク「デシシアから聞かされた方法、そして俺はついに残留思念
のダオスがいるダオス城へと向かった」

シルム「そこに待ち受けるものとは！」

ジュティア「次回！依頼82 ダオス城へ！」

ドルク「次回も冒険の旅へ行くぜ！」

依頼 82 ダオス城へ! (前書き)

ドルク 「ついにだな!」

そしてそろそろファンタジア編も終わりになろうとしています。

それでは依頼 82

レオ 「燃えるぜ!」

依頼82 ダオス城へ！

AC・4306 トール

マザーコンピュータールーム

ドルク達は戻ってきた。

ディシア「戻ったか」

ここに残ったメンバーが迎える、その中には

すず「みなさん来たみたいですね」

一匹のセミのようなポケモンで忍者が来ている装束の服を着ていた。

テッカニンというポケモンで彼女がすず…藤林すずなのだ

クレス「すずちゃんなんだね！久しぶり！」

クレスはすずに挨拶する。

すず「お久しぶりですクレスさん」

すずは頭を下げる、忍者のためか顔は冷静だ

ドルク「で？ディシア、何かあったか？」

ドルクはディシアが何かわかったのかを聞く

デイシア「ああ、どうやらこの世界だけではないようだ…実は別の世界にもポケモンの影響が出ているようだ…原因は私達の世界にあるようだ」

シルム「オイラ達の世界に？」

デイシアが言うには、クレス達の世界だけの影響ではないのだ…さらに原因はドルク達の世界にあるようだ

デイシア「パルサの空間能力で異様な反応が出てきたのだ…」

シルム「それが他の世界に影響しているってことだね」

「そのとおりだ」とデイシアは頷く

デイシア「ここから私達の世界に戻る方法を見つけたのだが…それにはこのトールの時間転移に必要な力が必要なのだ、私とパルサの力で元の世界へ転移できるようにしておく、時間はかかるようだから待ってくれないか？」

時間はかかるようでデイシアとパルサはマザーコンピューターに他の世界の転移の作業をする。

ドルク「その間どうするかだな…」

すると

シュン！

クレス「ダオス!？」

なんとダオスが現れた

ドルク「お前は!？」

ロンドリーネ「ダオス…」

ロディはなぜか暗くなる。

レオ「もしかしてロディはダオスを知っているのか？」

ロディ「まあね…知っているし…知り合っているわ」

ロディはダオスを知っているらしい

ダオス「…ダオス城で待っている。そこで私と戦え…ディセンダー」

再びダオスは消えた

ドルク「ダオス…」

ドルクは何か決断したように

ドルク「あいつの城に乗り込むぞ！」

ドルクはそう言うが

シルム「でも、ダオス城は何処にあるの？」

そうだ、ダオス城が何処にあるのかわからないのだ

ディオ「それなら俺達は知ってるぜ」

ディオはそう言う

メル「この先の時代にあるの：何処も暗黒でデリス・カーラーンのある時代なの」

ドルク「ならそこに行こうぜ！」

ロンドリーネ「ならあたしが送ってあげるよ」

モリスン「なら私はここに残ってディシア達を手伝おう」

モリスンはここに残るようだ

クレス「なら行こう！僕達はダオスをたおす！」

クレスのダジャレみた言葉でみんな寒気を感じた

全員『……』

クレス「アハハ！」

なぜか本人は自分だけ面白がっている。

ドルク「と、とにかく行こうぜ！」

ドルク達はロンドリーネのペンダントでダオス城へ

……

ダオス城

ドルク「でっけえな」

見渡すとまさに城だった、だがガイコツなどの不気味なものまで飾っている。

アクア「ここにダオスが」

ロンドリーネ「正確には残留思念だけだね」

と、ロディが付け足す

ドルク「なら行こうぜ、あいつに会って決着をつけねえとな」

ドルク達は歩き出した

……

ダオス城は不思議のダンジョンになっていた。ほとんどゴーストタイプのポケモンなどが特に多い

ドルク「こりゃあ一苦労するな」

ドルクはエナジーバスターでゴーストを倒すが他のゴーストタイプのポケモンがシャドーボールを放つ、それをドルクはビートフェン

スでシャドーボールを打ち消した

シルム「たしかにそうだね、シャドーバレット！」

シルムは黒い炎の弾を撃って、魔物とゴーストタイプのポケモンを倒した。

クラス「私自身もゴーストタイプだから同じタイプで通用するのだな」

クラスは他のゴーストタイプのポケモンの攻撃を食らってしまい休んでいる。

それでもなんとか先を進むドルク達

……

ダオス城中間地点

ドルク「ここは中間地点か……」

シルム「それにガルーラ像まであるよ……」

どうやら基本的にダオス城も不思議のダンジョンと同じ中間地点は存在していた。

シエルマル「ということはこの先にダオスが待ち構えているみたいですね親方様」

ドルク「ああ、不思議のダンジョンの中間地点あるところボスあり

だな」

レオ「そうなのか？」

レオは首をかしげる

クレス「たしかに中間地点もあるようだね」

クレス達はダンジョンの奥に行ったことないため知らないのだ

ソウ「油断できないですね師匠」

ドルク「だが行くしかねえ！行くぞ！！」

ドルク達は奥へと進んだ

……

ダオス城最深部

ドルク「やっと到着だな」

シエルマル「はあはあ…この城…結構あるんですね…」

みんな疲れた表情をしている。このダオス城は35階もあるのだ、
ほぼ半々で中間地点がある感じだ

ドルク「ゼロの島よりはマシな方だな」

ドルクはもっと深いダンジョンを知っている。深いところもあった

り、かなり登っていくのもあるのだ…

そしてたどり着いた最深部…床は六角形のガラスばりに外は丸い惑星が見えるのだ

そこに

シュン！

ダオスが現れた

ダオス「来たか…」

ダオスは構える

ドルク「ああ、決着つけようぜ」

そこに

ディオ「俺も行くよ！なりきり！クロスシフト！！」

ディオは黄金剣士のコスチュームを着た、黄金に輝く鎧に兜をつけている。

メルは魔女の帽子をかぶってホウキに乗っている。ハイウィッチのコスチュームで戦う

シルム「オイラも！」

シルムは構えた

ダオス「面白い…なら来い！」

今ここにダオスとの壮絶な戦いが始まろうとしている！

依頼82 ダオス城へ！（後書き）

ドルク「ついにダオスとの戦いが始まった！」

クレス「ドルク達とダオスの戦いが今ぶつかる！僕達はダオスをた
おす！！！」

シルム「次回！『激突！そして…』」

ドルク「テメエ等のハートに刻んどきな！！！」

依頼 83 激突!そして…(前書き)

ついにダオス戦です。

クレス「ダオス!覚悟!」

いや、今回はドルクとシルムが!!では依頼83

クレス「ダオスを倒す!」

依頼83 激突!そして…

ダオス「テトラアサルト!」

ダオスは連続で蹴りやパンチをかます

ドルク「ぐっ!ううっ!」

ドルクは構えて防御する。

ドルク「こりゃあかなりのもんだな…だがその程度で俺は倒れないぜ!」

ドルクはテトラアサルトを耐えた、そこから反撃のエナジーバスターでダオスから離れる

ダオス「ぐおっ!?!」

ダオスは至近距離からのエナジーバスターを避けきれずにダメージを受けた

ダオス「ここまでやるとはな…」

ダオスはドルク達から離れる

クレス「ドルク…」

クレスはドルク達が戦ってるのを見ていた。

ディオ「双牙！」

ディオは斬り下ろしかあら斬り上げの特技、双牙斬でダオスを打ち上げる

シルムはそこからヒートバレットでダオスにダメージを与える

メル「インディグネーション！！」

メルはインディグネーションでダオスにダメージを与えた、爆発が起こり、黒い煙に包まれる

ドルク「やったか？」

ドルク達は煙がおさまるのを待った…煙がおさまると

ドルク「まだ倒れねえか」

ダオスは若干ボロボロだがまだ倒れなかった

ダオス「中々やるな…ならこれでも食らうがいい！スーパーダオスレーザー！！」

ダオスの背後から巨大な魔法陣が現れ、そこからレーザーが放たれる

ディオ「うわっ！？」

シルム「くっ！？」

メル「きゃっ!?!」

ドルク「ぐわっ!?!」

四人はスーパーダオスレーザーを食らってしまい倒れてしまう。

ダオス「どうした?この程度なのか?」

ダオスはドルク達を見る

ドルク「誰が…倒れるかよ…」

ドルクはボロボロになりながらも立った

シルム「そうだ…ここで…あきらめるわけには…いかないんだ!」

シルムも苦しい表情をしながら立つ、ディオとメルもなんとか立った

ディオ「それでも俺達は!」

メル「負けない!」

四人はダオスを見る…四人の目はまだ希望を失っていない感じの目だ

ダオス「ほうくならもう一度食らうがいい!」

ダオスは再びスーパーダオスレーザーを繰り出そうとしている。

ドルク「だが秘奥義でも俺達の絆は貫けない!!どんな事があってもだ!!」
うおおおおおおおおおおおおおおおおおお

ダオスはドルクを睨む

ダオス「ならこれならどうだ…はあああああああああああ
あああああああつ!!」

するとダオスの背中から天使の羽が現れる

シルム「これは!？」

ディオ「本気になってきた!? 気をつけろ!」

メル「ここからが本番みたい…ドルクさん! シルムさん!」

シルム「でもオイラ達はここであきらめないよ!」

ドルク「そうだ! それでも俺は! お前を倒すぜ! ダオス!!」

ドルクはエナジーバスターを繰り出す、しかし天使と化したダーク
ライのダオスは別のレーザーでエナジーバスターを打ち消していく、
さらにダオスラッシュという大技で蹴散らそうとダオスはドルク
に襲い掛かる

しかし

カキーン!

シルムがバーニストベルジュで防ぐ

シルム「ドルクはやらせはしない!」

ダオス「なら貴様からだ！」

ダオスは至近距離からダオスレーザーを発射しようとしている。だがシルムは

シルム「オイラはあきらめないよ！それでもドルクを守る！」

シルムの体が炎をまとった

シルム「えっ？」

それはダオスをも巻き込むかたちとなる

ダオス「何っ!？」

ダオスは咄嗟にダオスレーザーを中断して後退した。

シルム「これは…力が…みなぎる…」

シルムには力を感じていた。

ドルク「シルム！」

シルム「ドルク！」

二人は手をつなぐ…二人の力が増していく

クレス「これは!？」

クレス達も感じていた。二人の力に

チェスター「なんかすごいことになっていってるぞ!？」

アーチェ「一体どうなってるのよ!？」

二人は互いを見つめる

ドルク「行くぜ!シルム!」

シルム「うん!」

二人は素早く移動する。

ダオス「(なんだ…力や魔力が上がっている…一体…)」

ダオスは二人の様子を見る、二人の力と魔力が上がっているのだ

シルム「行くよ!セイントバレット!」

シルムはレウスバーニストで光弾を連発する

ダオス「フン!」

ダオスはそれを軽く避ける、しかし

シルム「まだまだ!」

ダオス「!？」

いつの間にかシルムはダオスの懷に

シルム「龍炎斬！」

シルムのバーニスベルジュが炎の龍を纏いダオスを切り裂く

ダオス「ぐおっ!？」

ダオスは落ちていく、そこからドルクが追撃をしようとする。

ドルク「ギガントウッドハンマー!!」

ドルクの強化ウッドハンマーがダオスに炸裂し、ダオスは真下に叩きつけられた

ボロボロになりながらもダオスは立つ、ダークライの姿で白い翼を生やした奴はドルクとシルムを睨む

ダオス「くっ!ならダークホール!」

ダオスは初めてポケモンの技を使った、黒いボールは数個もドルクとシルムに向かう

ディオ「やべえ!」

メル「ドルクさん!シルムさん!」

双子が叫ぶ、しかし黒いボールはドルクとシルムに当たらなかった
：いや：消されたと言った方がいいだろう、黒いボールはドルクとシルムの何かによって防がれたのだ

ダオス「馬鹿な!？」

ドルク「そろそろトドメと行こうか！」

シルム「行くよ！」

ドルクは黄金の光を纏い、シルムは炎のオーラを纏う

シルム「いくよ!これがオイラの力!燃える炎は心の力!炎劇舞荒拳!！」

シルムの神速の連続攻撃が繰り出す、殴ったり蹴ったりと素早い動きで叩き出す

ダオス「ぐおっ!?!がっ!?!ぐっ!?!」

ダオスも連続攻撃で太刀打ちできない、さらにシルムは炎を纏い、鳳凰を生成する。剣を掴んで急降下した。

シルム「これで決めるよ!鳳凰降下斬!！」

鳳凰を纏ったシルムが急降下してダオスを吹っ飛ばした、そこからドルクが構えた

ドルク「行くぜ!貫く魂のロック!刻め!俺のソウルビート!!!ブレイクロックシャウト!!!」

色んな色の音符と岩でできた音符がダオスに襲い掛かってきた

ダオス「ぐわあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああつ!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ダオスは倒れた

するとダオスの翼は消えて、普通のダークライへと戻った

ダオス「さすがだ…」

ダオスは立ち上がる、するとドルク達の目の前から一つの光が現れた、出てきたのは光を纏った実だった…まるで花のような形をしていた。

ドルク「これは一体…」

????「それは大いなる実です」

何処からか声が聞こえた

ドルク「誰だ！」

ディオ「この声!?!」

するとダオスの横から光が包まれ、一匹のポケモンが現れた

針のような細い黄色の足に虫が食べた後をした葉っぱのような両腕、丸い小さい黄色の輪郭の顔をしたポケモンだ、子育てポケモンのハハコモリだ、さらにそのハハコモリには翼がついていた。

ドルク「お前は！」

ハハコモリ「私はノルン…あなたが来るのを待っていました」

シルム「ドルクを？」

ノルンと呼ばれたハハコモリは頷いた

ノルン「この世界だけでなく…別の世界も同じ現象になってること…そして世界を救うために来たあなたを私は待っていたのです」

ノルンの美しい声が響く

ミゲール「おお！なんという美人n」

ドゴーン！！

ミゲール「ピクピク」

ミゲールは鼻血を出しながら気絶した。

マリア「あなた（黒）ナンパはしないっていったでしょ？（黒怒）」

マリアは満面の笑みでミゲールを見る…いや笑顔が怖いですよマリアさん（汗）

ドルク「ということは何か知っているのか？」

ドルクの問いにノルンは頷いた。

ノルン「はい、そしてこの大いなる実りはマナが溢れています。受け取ってください：ディセンダー：ドルクよ」

大いなる実りはドルクの体にスッと入った

ドルク「大いなる実りか：」

ドルクは安心したようになる。

ディオ「でもなんでノルンがいんだよ？」

メル「たしかあなたは罪をした者を裁くんでしたよね？前に私達みたいに魔科学兵器を使ったことで私達を裁くつもりだったんじゃないですか？」

ディオとメルは前にノルンに裁かれそうだったことあった：彼らには魔科学兵器を使った罪を：二人は背負っている。

ノルン「実は私も別の世界からポケモン化現象の事を調べていたんです」

クラス「なんだって！？」

みんなは驚く

ノルン「そして調べたら他の世界にも同じ現象が起こっているんです。原因はまだわからないままでしたが：ドルク：あなたの世界がポケモン化の発信源になっているんです」

ドルク「なんだと！？」

ジュティア「じゃあ急いであたし達の世界に行きましょう！」

しかし

ダオス「待て…」

突然ダオスが止める

ドルク「なんだよおい」

ダオス「慌てるな…まだ本当の破滅は起きていない」

シルム「どういうこと？」

ダオスは語った

ダオス「今はまだ大丈夫だが…そのうちその影響が出てくる」

どうやらまだ破滅は起きないようだ

クレス「……」

クレスは黙る

ダオス「とりあえずは私も情報を集める…さらばだ」

ダオスは消えた

ロンドリーネ「ダオス…」

クレス「ダオスはなぜその事を…」

クレスは納得できない表情をする。

ドルク「とりあえずどうする？」

ディオ「なら俺達の家に行こうぜ」

ディオが自分達の家に行こうと提案する。

メル「そこでこれからの事考えましょう」

ジュティア「そうね…たしかにここで慌ててちゃ何もできないわ」

ドルク達は結局ディオとメルの家、エトスハウスへとロディのペンダントで時間転移をした。

ノルン「あなたが世界を救うことを…見守りますよ…ドルク」

ノルンはそう言うと言えた

依頼83 激突!そして…(後書き)

ディオ「まさかノルンまで来るなんてな」

まあなりダンXも入ってるからねゝそれにディオはポケモン出てるから

ディオ「あれ?出ていたの俺?」

出てたよ…さて、次回はついに!

依頼 84 俺達の世界へ! (前書き)

ついにドルク達に世界へと

ドルク「これでなんとかなるが一体」

まあまずは依頼 84

ドルク「始めるぜ」

依頼84 俺達の世界へ！

ドルク達はアセリア暦4408年にあるとある家へと向かった

AC・4408 エトスハウス

ディオ「ここが俺達が住む家、エトスハウスだ」

ドルク「しっかりとした木の家だな」

エトスハウスは1階しかない木でできた家だ

メル「それじゃあ入みましょう」

ドルク達はエトスハウスへと入った

……

メル「ただいま！」

????? 「おかえり〜二人とも！」

玄関から目の前にある扉から一匹のポケモンが出てきた。緑の膜に包まれていて。中に赤ちゃんが入っているポケモン、増幅ポケモンのランクルスだ

ディオ「帰ったぜ！エトス」

ディオはエトスというランクルスに言う

エトス「ん？それにお客さんもいるね、いらっしやい、僕はエトスっていうんだ、よろしくね」

エトスは挨拶する。ランクルスにはない4枚の薄い羽が目立つ

……

ドルク達はこれまでの事をエトスに説明する。幸いエトスハウスにいるのはドルク達だけで他に預かっている子供達もいるのだが今は遊びに行っていない

エトス「なるほどね：でもポケモン化がなぜ起こったのかわからないね」

たしかにノルンが調べても原因はドルク達の世界にあって、そもその原因がなんなのかがわからないのだ

ジュティア「それにしても子育て大変ね」

エトス「そうかな、僕もなれちゃって」

ジュティアはエトスが親がいない子供を面倒みてるのを共感していた。ジュティアも孤児院の子供達のことを心配している。

ドルク「とにかく問題は俺達の世界へはどう行くかなんだよね」

どうドルク達の世界へ戻るかだ、すると探検隊バッジが鳴る。ドルクは探検隊バッジを取り出す

ドルク「もしもし」

デイシア『ドルクか、今からツールに来てくれ!』

デイシアからだ、本人はツールに来てくれと電話してきたのだ

シエルマル「とりあえずツールに行きましょう。ロデイさん、頼めますか?」

ロンドリーネ「わかってるわ、とりあえず行くわよ」

ディオ「それじゃあ俺も行くぜ」

メル「そうだね、私達も行くからエトは留守番お願いね」

エトス「うん、気をつけてね二人とも」

エトスは心配そうに言うが

ディオ「大丈夫だって!俺達はこれでもつええし」

メル「とりあえずお願いね」

エトス「うん、いってらっしゃい」

エトスに別れを告げてロデイのペンダントでツールへ

……

ディシア「みんな集まったな……実はこのツール自体には時間転移のためのエネルギーが十分ある……そこで私の力の力とパルサの空間の力を使って私達の世界へとワープさせる」

「かなり集中するかもしれないねえが任せてくださいい兄貴！」

パルサは気合を入れる

ドルク「頼んだぜ」

ディシア「それじゃ、始めるぞ……パルサ、空間の力を頼む！」

[illegible]

二人の力が重なる……これだけの力だと膨大だ

「グニャグニャ」

「くつ！」

二人はそれでも力を出すがつい表情になる。

ドルク「がんばってくれ！」

シルム 「がんばれ！」

シエルマル「絶対にできます！」

ジュティア「伝説のポケモンだからしっかりしなさい！」

みんなが応援する。

ディシア「（皆が期待している。私は今まで星の停止によって闇に捕らわれてしまった…だが私はこの罪を償うためにブレイブに入った…私はそれでも…!）」

ディシアの時の出力が上がる…するとツールが揺れた、外ではツールは光に包まれ…消えた

全員『うわあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああっ!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

はたしてみんなは無事元の世界へ戻れるのか！

依頼84 俺達の世界へ！（後書き）

ドルク「ついに俺達の世界へ帰ってきた俺達」

シエルマル「だが俺達に待っていたのはトレジャータウンにある黒い世界樹だった」

レオ「次回依頼85『黒い世界樹』」

アクア「見てね」

依頼85 黒い世界樹（前書き）

ついに帰還です。

ドルク「俺達の世界はどうなっているんだ？」

それは見てからのお楽しみ、では依頼85

ドルク「行くぜ！」

依頼85 黒い世界樹

ドルク「う…う…ん…」

ドルク達はマザーコンピュータールームで倒れていた。

ドルク「シルム！みんな！」

ドルクがみんなを起こす

シルム「ドルク…ここは？」

シエルマル「俺達は元の世界に戻れたのでしょうか？」

ジュティア「その前にディアとパルサが！」

ジュティアが倒れているディアとパルサを指す

ミネラ「ディアさん！パルサ兄！」

ドルク達は倒れているディアとパルサに駆け寄る

パルサ「へへっ…力を使いすぎちゃったな…」

ディア「これで…元の世界に…戻れたはずだ…」

二人は力を使ったためフラフラしていた。

ドルク「とりあえず外に出ようぜ」

ドルク達は外へ出た

……

ドルク「ふう〜どうやら海岸の近くにワープできてよかったぜ」

外に出たドルク達、ここは海岸、ドルクとシルムが出会った海岸なのだ、トレジャータウンは少しボロボロになってるが復興している様子が伺える

ミネラ「やっと帰ってきたよ、急いでギルドに戻ろう」

シムーン「ここにいても始まりませんしね」

ドルク達が移動しようとしたその時

????「ドルクさん！シルムさん！」

海岸から一匹のポケモンが現れた、背中には硬い薄紫の甲羅、まるで小さな島のようなポケモン、ラプラスだ…このラプラスは5年前にドルク達を幻の大地まで送ったポケモンだ

シルム「ラプラス！」

シルムはそのポケモンの名を呼んだ

ディシア「ラプラス…か…」

ラプラス「大丈夫ですかディシア様」

ラプラスは心配な顔でディシアを見る

ディシア「何、私も力を使いすぎた…しばらくは休もうと思う」

ラプラス「そうですね…それより大変です。正面を見てください」

ドルク「一体どうしたっていうんだ？」

ドルク達は正面を見た

クレス「あれは!？」

ミント「世界樹…」

マリア「だけど黒いみたい…」

そう、樹が生えていた。世界樹という名の樹を、だが世界樹は黒かった…その世界樹の周りには紫に染まった雲が上空に包んでいた。

ラプラス「ドルクさん達がダークライと戦って消えた後、この黒い樹が生えたんです。そしたら異変が起きました」

アクア「異変? 一体？」

その異変とは

ラプラス「他の不思議のダンジョンでもポケモン達が凶暴化し、さらにポケモンとは異型のものまで現れたんです」

シルム「それって!？」

ドルク達が思う事は一つ：

魔物までこの世界に來たということだ

ラプラス「僕も調査しましたが、どうやらあの黒い樹には恐ろしい感じがしたんです。しかも結界みたいなのが張ってあって近づけることができないんです」

黒い世界樹は黒い禍々しかった、世界樹とは対をなしている感じだ

ドルク「どうすりゃあいいんだ」

その時、ドルクの体が光る

そこから大いなる実りが光だし、レーザーを黒い世界樹に発射する。黒い世界樹は少しだが色が薄くなっていた。

ドルク「これはどうなっていやがるんだ…」

ヴォル「これって…」

ドルク達は驚く

ノルン『これがすべての原因です。そして大いなる実りをすべて集まれば黒い世界樹をなんとかできます』

何処からかノルンの声が聞こえる

ドルク「つまり他に大いなる実りがあるってことか？」

ドルクは何処からか声がするノルンに声をかける

ノルン『はい、大いなる実りはそれぞれの世界にあります。なので次の世界に行くための魔法陣をすでに用意しています。準備ができたらトールのマザーコンピュータールームに』

するとノルンの声がそこで途切れる

ドルク「とりあえずディシアとパルサをギルドに運ぶぞ！」

ドルク達はギルド『ブレイブ』へ

……

ドルク「どうだシムーン？」

シムーン「ディシアさんとパルサさんに命の別状はないです。とりあえずは安静にしていればなんとかありますね」

ドルク「そうか」

ディシアとパルサはなんとか安静で今自分達の部屋で休んでいる。

クレス「でも問題は大きいなる実りが別の世界にあるってことだね」

そう、この世界の黒い世界樹が原因でダンジョンのポケモン達は凶暴になり、さらに魔物までも現れたのだ

ドルク「そうなる」と別の世界に行くには誰が残るしかないかもしれないな…そこでだが…ソウ、お前は自分自身の世界に帰った方がいい、それにこっちにも影響しているはずだ」

ソウ「そんな！師匠！？僕は師匠と！」

しかし

ドルク「だめだ！たしかに一緒だと助かるが、お前の世界が魔物たちなどで大変なことになったらどうするんだ！そうになったらお前の住む場所がなくなるだろ！」

たしかにドルクの言うとおりだ、そうなる手遅れになる可能性がある。

ソウ「わかりました…師匠…また会えたら…」

ソウの目に涙が浮かぶ

ドルク「ああ、またいつか会おうな」

ソウ「はい！それじゃあ師匠！さようなら！」

ソウは泣きながら去って行った

ドルク「ソウ…元気だな…」

ドルクはそんな弟子を見送った

……

ドルク「他はどうするかだな」

クレス「僕達の世界は大丈夫のようだし僕達はいいい？」

クレス達の世界は大いなる実りを手に入れているため大丈夫だが

ドルク「たしかにそうだな、ここは誰かここに残っていつでも行けるようにするしかないな」

シルム「そうだね、どうする？」

シルムはドルクに問う

ドルク「ならシムーン、ミネラ、グラデル、ゼラスとかは残ってくれるか？」

シムーン「たしかにそうですね、わかりました」

ミネラ「でもパパ」

ミネラは納得できない表情だ

ドルク「大丈夫だ、ミネラはここでジュティアの子供達を守ってくれないか？」

するとミネラは

ミネラ「わかったよ、僕はここを守るよ」

ドルク「よし、いい子だ」

ドルクはミネラの頭を撫でる

ジユティア「子供達も無事みたいだけどプクリンのギルドのメンバーが見てくれて感謝してるわ」

そう、ドルク達がクレス達の世界に行ってる間、プクリンのギルドのメンバーが面倒を見てくれたのだ

ドルク「デビーはここに残って守ってくれ」

デビー「わかったッス」

ジユク「それじゃあ俺とレビィ」

シエルマル「精霊に力をもらった俺達もですね」

そう、ジユク、レビィ、シエルマルは精霊の力をもらっているため魔術を使うことができるのだ

そうになると

ドルク「マリアは無理して行かなくてもいいんだが？」

クレス達の方はマリアがまだ病気などもあってマリアは残った方がいいと言うがマリア自身は「大丈夫よ」という

シルム「でもマリアさん」

だがそれでも

マリア「それでも行くわ、だってミゲールがまた何かやらかしそうだし」

たしかにそれもそうだが

ドルク「しゃーねえな、それじゃあ無理があるなら休んでてくれ、いいな？」

マリア「わかったわドルクちゃん」

マリアはそれを承諾した。

クラス「ここは私も残ろう」

モリスン「なら私も残ろう、ここで色々と方法をクラス殿と一緒に調べる」

モリスンもクラスと共に残るようだ

ディオ「なら俺もここに残る！」

メル「そうだね、いつ何処で起こるかわからないし」

ロンドリーネ「あたしも残るよ、ダオスも調べている感じがするし」

ディオ、メル、ロデイが残ることになった

レオ「俺も行くぜ！」

アクア「僕達の世界がそうになったら嫌だから」

ヴォル「私も…」

レオ達も行くようだ

k「僕も行きます！」

クラウド「俺も行く！」

kとクラウドも行くようだ

ドルク「決まりだな、それじゃあ休んで明日行くぞ」

……

次の朝

マザーコンピューターの前にはドルク達がいた、その転送装置の地面には魔法陣が敷かれていた。

クラース「何かあったら連絡する」

モリスン「探検隊バッジにはいつでもここに帰れるように夜、クラース殿と改造しておいた」

クラースとモリスンは探検隊バッジをみんなに渡す

ドルク「ああ、それじゃあ頼んだぜ」

シムーン「行ってらっしゃい…ドルクさん」

ミネラ「パパ…無事に帰ってきてね」

ミネラは涙を流す

ドルク「ああ、かならず戻ってくる、頼んだぜみんな！」

ジユク「ゼラス、頼んだぞ」

ゼラス「フン！行ってくるがいい」

ゼラスはそっぽを向く

ドルク「行くぞ！」

ドルク達は探検隊バッジを上に掲げた、すると魔法陣がそれに反応してドルク達を包み込む…そしてドルク達は消えた

ミネラ「パパ…」

ロンドリーネ「大丈夫よミネラちゃん、きっとドルクは帰ってくるわ、それでも大いなる実りが手に入ったらまたここに戻るわよ」

ミネラ「ロディさん…」

ドルク達は次の世界へ！

はたしてこの先、何が待ち構えているのだろうか！

依頼85 黒い世界樹（後書き）

さて、次回は新章突入です。

ドルク「次は何処の世界なんだろうか…」

それは彼にかかわる重要なことになります。

ドルク「誰だ？」

コラボキャラの誰かだよ、次回でわかるよ

追記…守り人さんコラボありがとうございました！

依頼 86 運命く絆とレオの真実く（前書き）

ついに新章突入です。

今回からはデステイニー2編というか少しですがデステイニーも加えて、名づけて『運命の冒険くデステイニー・デステイニー2編』をお送りします。

そして今回はレオ君の事がわかります。

それでは依頼 86

レオ「燃えるぜ!!」

依頼86 運命く絆とレオの真実く

ドルク達は次の世界へと旅立った、そして

シュン！

何処かへとたどりついた

ドルク「ここは？」

シルム「うわっ！下は空だよ！？」

みんなが下を向くとそこは一面空だった…しかし地上はなぜか荒れているようだった…だが町は3つしかなく…それぞれカプセルに包まれていたのだ

クレス「一体ここは？」

チェスター「わかんねえな…しかもなんで空の上にいるんだよ」

アーチェ「ねえ？あれ何なの？」

アーチェが指指した方を見ると…黒い何かに包まれていて、さらにオレンジの剣のようなものがついていた

レオ「(まさか!?!ここは!?!?)」

アクア「どうしたのレオ？」

ヴォル「なんか落ち着かないようだが？」

レオは慌てた

レオ「い、いやなんでもないよ…それより中に入ろうぜ」

レオは歩き出す

ドルク「あいつ一体どうしたんだ？」

レオ「（なぜダイクロフトがここにあるんだ？たしか俺達は…）」

レオはダイクロフトという謎の施設を見る、だが一体彼は何を知っているのだろうか…

…

中に入ると奥に続く道があった…ドルク達が歩いていった…するとそこで声が聞こえた

なにやら女性の声や少年の声…さらには青年の声や少女の声まで聞こえていた。

シルム「誰か話しているのかな？」

ドルク「隠れて見て見ようぜ」

ドルク達は慎重に進んで話している場所の近くに着いたら隠れた

目の前には王座みたいなものがあり、一匹のポケモンがいた…8つ

に分かれた黒い突起に白いローブを着ており、さらに白い信者がかぶる帽子をかぶっていた。このポケモンはてんたいポケモンのゴチルゼルというポケモンだ：そのゴチルゼルの目の前には5匹のポケモンがいた。

一匹はレオの姿であるバクフーンの進化前のポケモン、マグマラシ：しかも剣を持っていた。

一匹は頭に赤い花を二つ飾っていて、葉っぱのスカートをはいいてピンクのローブを着たポケモン、クレイハナ：杖を持っていた。

一匹はワニのようなポケモンでへそが出て白い服を着ているオーダイルというポケモン、重たい斧を持っている。

一匹は剣を両方持っていて、頭には長い葉っぱに細い身体をして、さらに仮面をかぶったポケモン：ジュプトルだ、しかしなぜジュプトルが仮面をつけているのかわからない：

そしてもう一匹は細い手足でスツキリとしたスタイルの狐獣人のように弓を持っているポケモンだった：ぶじゅつポケモンのコジョンだ

なにやら話しているようだ：それも対峙するような：そんな感じだ
マグマラシ「世界がこんな風になっちゃったのは……お前の仕事なんだな！？」

マグマラシの少年はゴチルゼルに訴えかける、しかしゴチルゼルは態度を変えずに言う

ゴチルゼル「世界を作り変えたのはたしかに私だ、だが…それを望んだのは他ならぬお前達人間だ」

ドルク「(なんだと!?)」

隠れていたドルクもゴチルゼルの言葉に驚く

シルム「(つまりあんな風になったのは…すべてこのゴチルゼルのせいってこと!?)でも普通のポケモンでこういうことできるのかな?)」

シルムは疑問に思った

ドルク達はとりあえず落ち着いて彼らの話を隠れて聞く

ゴチルゼル「悩みや苦しみが無い世界、幸福だけがある、そんな世界を…」

オーダイル「レンズなしでは生きられないこんな世界が幸福だと!? そんな馬鹿な話あるか!」

斧を持ったオーダイルの青年は怒りを込めてゴチルゼルに言う、彼らはすでにこのゴチルゼルに対しての怒りが込められている。

レオ「(レンズだって!?)それにこの世界は俺の…)」

レオはらしくない感じで冷や汗が出る。

ゴチルゼル「今はまだ、^{かとき}過渡期にすぎない…神がより完全な形で降臨を果たした時…完全な世界、完全な幸福が^{げんしゅつ}現出するのだ」

マグマラシ「完全な形…？」

クレス「（どういふことなんだ？）」

彼女が言う完全な形…それに完全な幸福

マリア「（なんだか幸福に思えないわ…何か苦しい感じが…）」

マリアは病気なのだがなぜか身震いがした。

さらに話は続け、ゴチルゼルはここで本来なら早い段階で神は完全に降臨すると言った…そして彼女は神の使いだったことを…

ドルク「（なんかあのゴチルゼル…とんでもねえこと企んでやがるな…）」

ドルク達は何かこのゴチルゼルがとてつもない企みをしていることを感じていた。

この世界が神を信仰していることが…

だがゴチルゼルは話を続ける

ゴチルゼル「このままでは、完全なる神も完全なる世界もままならない…そう考えた私は、レンジを集め…神の力を高めることを、思いついた。しかし、その計画もお前達によって阻まれてしまった…私に残された道はさらなる過去にさかのぼってすべての民が神を崇める世界に変えること。結果は見ての通りだ、神への信仰を宿したレンズもこうして大量に集めることができた」

ドルク達はこのゴチルゼルは敵というのは判断した。とりあえずはまだ隠れたまま話を聞く

ジュプトル「そのために天地戦争を利用したわけか、バルバトスを送りこんで天地戦争の結果を逆転させ地上を荒廃させる。そこに、救世主が登場し救いの手を差し伸べる…救世主は、神の恩恵と称して人々の信仰を一身に集める…か、とんだ三文芝居だな」

仮面を被ったジュプトルは冷静に言う

レオ「（天地戦争！？それにバルバトス！？）」

レオは何か知っているような感じで慌てていた。一体彼は？

するとそのゴチルゼルが仮面のジュプトルを見て言う

ゴチルゼル「せっかく舞台に上げたというのに…脚本通りに動かない役者に何も言われたくはないな」

ジュプトル「……………」

仮面のジュプトルは黙ってしまう、すると今度はキレイハナの少女が言う

キレイハナ「こんなやり方は間違ってる！歴史を歪め、過去を変えてまでそしてポケモンの姿に変えてまで人は幸せになろうとは思わない！」

キレイハナの少女が訴えかける

すず「（どういふことなんでしょう？　つまりあのゴチルゼルが歴史だけでなく…ポケモンに姿を変えたということ…何か禍々しい感じがします）」

すずは禍々しいのをゴチルゼルに感じた

ゴチルゼル「……リアラ、お前は、まだわからないのか？　どんな綺麗事を口にしたところで消してしまいたいほど辛い過去が誰にでもある。たとえばそう、そこにいるジューダス……いや、リオンⅡマグナスのように」

この言葉にみんなが驚く

レオ「（リオン！？）」

オーダイル「リオンⅡマグナス！？」

コジョンド「神の眼をめぐる騒乱でスタン達四英雄を裏切ったっていう、あの！？」

ドルク「（リオンⅡマグナス…あの仮面の男…ジューダスと呼ばれていたみてえだが…本当の名はリオンⅡマグナスということか…でもなぜなんだ？）」

ドルク達もこれには疑問をもってしまった、ドルク達は神の眼をめぐる騒乱や天地戦争の事を知らないためか戸惑う、だがこの事を知っている人物は一人だけだった

レオ「（まさか！？　リオンが生きてるなんて！？　俺と同じ！？）」

レオだった、彼は一体何を知っているのだろうか：

話をマグマラシ達に戻そう

ゴチルゼル「そう、無念を残して死んだ彼に機械を与えたのだ」

マグマラシ「デタラメを言うなッ！」

マグマラシの少年はゴチルゼルに、向かって叫ぶ

ゴチルゼル「でたらめかどうかは本人に聞けばわかること……」

マグマラシ達がジュプトル：ジューダスに視線を向ける、しかしジューダスは黙っている。

マグマラシ「なんで黙ってるんだ！？僕はリオンなんかじゃないってそう言ってやれよ、ジューダス！」

しかしジューダスは仮面を脱いで

ジューダス「そうだ、僕はリオン：リオンⅡマグナスだ」

隠れているドルク達とマグマラシ達は驚く

マグマラシ「そ、そんな、どうして…！」

ゴチルゼルは目の前のものに振り向き何かをやる

マグマラシ「しまった！」

ゴチルゼル「神よ！大いなる御魂^{みたま}をここに…！」

光が輝きみんな何処かへと消えた

…

ドルク「う…ここは…」

ドルクが目を覚ました。だがドルクとリアラと呼ばれたキレイハナ
しいなかった

リアラ「うつ、うつ……」

リアラもなんとか立ち上がる

リアラ「あなたは？」

ドルク「あ…すまねえ…実はお前等の事仲間と一緒に聞いていたんだ、話を…俺はドダイトスのドルクだ」

ドルクはリアラに自己紹介する。

リアラ「私はリアラ…姿はキレイハナだけど本当は私は聖女…もう一人そこに浮かんでいるエルレインと一緒にの聖女なの」

彼女の表情は暗かった

ドルク「エルレイン…」

リアラ「それよりこれは…！」

辺りはカプセルのようなものがあり、そこに何人かのポケモンが眠っている。そして目の前には大きなダイヤモンドのようなものが

エルレイン「ようやく目覚めたな…しかも隠れて見ていた不屈き者まで来るとはな…どうだ、新しい世界の感想は？」

リアラ「エルレイン！あなた、一体何を…！？」

エルレインは口を開く

エルレイン「案ずるな、彼らはフォルトウナの力でただ夢を見ているだけだ」

リアラ「夢…？」

ドルク「どういうことだ？」

だがフォルトウナとはなんなのかもドルクはわからない…それに他のみんなの姿はない…一体？

エルレイン「現実では不可能なことも夢の中ではなにもかもし通りになる。痛みも苦しみも、感じることはない…これこそが、神が望み…そして、人々が望んだ完全なる幸福…」

リアラ「そんなの、まやかしに過ぎないわ！夢の中で幸せになることにどんな意味があるというの…！」

ドルク「俺達の仲間をそうしてお前は何が目的なんだ！」

ドルクが怒りが爆発し叫ぶ

エルレイン「目的と意味はある。なぜなら彼らは、永遠に夢から覚めないのでから」

ドルク「なんだと!?!」

ドルクは驚く

エルレイン「覚めない夢は現実と同じ、そして永遠の夢の中では幸せも、また永遠…これこそがすべての民を幸福へと導く唯一にして絶対の法」

ドルク「ふざけるな!?!」

ドルクが怒鳴る

ドルク「何が幸せで何が幸福だ!?! テメエはそんな風にして歴史を変えようとしやがったのか!?! ふざけるんじゃないねえ!?!」

リアラ「ドルク…そうドルクの言うとおりよ! そんなの絶対間違ってる!」

ドルク「シルム達を何処へやった!?! 言え!?!」

ドルクの怒りが頂点へと達する、仲間をこのようにさせたことへの彼の怒りだ

リアラ「カイル達は何処!?! 一体、みんなを何処へやったの!?!」

エルレイン「彼らもまた永遠の夢を見ている。もうお前達の声も届かない…」

リアラ「そんな…!」

リアラはショックを受ける

エルレイン「お前達の声に伝えてくれる者は、もう誰もいない…リアラ、お前の役目は終わったのだ」

リアラ「終わってなんかない!」

ドルク「そうだ!! テメエみたいな奴に神の好き勝手させるかあ!!」

二人は必死に叫んだ

リアラ「カイルは必ず私の声に応えてくれるわ! だから…!」

エルレイン「無駄な足掻きはよせ、彼らの精神世界に入ったところで目覚めさせることなどできはしない、永遠の幸福を捨てられる人間…いや今はポケモンなどいいない…人ははかなく弱い、だからこそ彼らには神と神の救いが必要なのだ」

しかし

ドルク「勝手に決めんじゃねえ!! 俺達の絆…ブレイブの絆を舐めんじゃねえ!! テメエのような奴にシルム達が負けるはずはねえ!!」

リアラ「ええ、私は信じてるわ…人間…いやポケモンの強さを…
カイル達を！」

二人は勇気を出して言う

エルレイン「仮に目覚めさせたとしても、お前達に待っているのは
悲劇だけ…それなのになぜお前達は自らを苦しめてまで進もうとす
る？」

するとドルクは高々と立ち

ドルク「聞きてえか？その苦しみがあつてこそ俺達は進めることが
できるんだ！テメエの作った世界を空から見た時…逆に俺はこの世
界の事で色々苦しんだ…だがな！！テメエの都合いいようなこ
とで余計な事されることが一番腹が立つんだよ！！」

続けてリアラも

リアラ「私もこの世界を見て思ったわ…もしこれが、人々の望む幸
福なら私の役目は終わり、使命からも解放される…そうすればカイ
ルと、いつまでもいられると…でもそれは間違いだった…たとえど
んな結末が待ってようと、歩んでいく過程にこそ、人の幸せはあ
る…あの人はそう言ったのだから私も、カイルと共に歩むわ…」

ドルク「たとえどんな結末が待ってようと…俺はシルムと一緒に
いてえ…あいつが俺の相棒だからだ！」

リアラ「私はカイルと一緒にいたいから…カイルを愛しているか
ら！」

ドルクは光に包まれ消え、同時にリアラも自分のペンダントの光に包まれ消えて行った

……

ドルク「ここは？プクリンのギルドだな」

ドルクはプクリンのギルドにいた、だがここはセピア色に染まっていた。

ドルク「ん？あれは？」

プクリンのギルドの前にはシルムがいた。ただ怖くて一步前に出ないでいた。

ドルク「（シルムの記憶かここは…あいつ怖がっていたな…これがあいつの夢なのか…）」

シルム（ヒコザル）「ああ…やっぱりだめだ…オイラには探検隊向いてないのかな…もう一度戻ってきたけど…やっぱり…」

シルムはうまく一步を踏み出せずネガティブになる。そこにドルクがヒコザルになったシルムに声をかける

ドルク「シルム！」

シルムが振り向く

シルム「君は？誰？」

シルムはドルクの事をわからないようだ」

ドルク「（やっぱ夢だから俺の事）目を覚ませシルム！お前は臆病でいくじなしじゃねえ！」

シルム「何言ってるの？オイラは臆病でいくじなしなんだよ！オイラ探検隊にはなりたい…でも怖いんだよ！！この穴だって、足跡を見るみたいで怖い！オイラには探検隊は！」

するとドルクが叫ぶ！

ドルク「違う！お前はゆうかんで臆病でいくじなしじゃねえ！！俺という大切なパートナーがいるじゃねえか！！」

シルム「パー…ト…ナー…？」

突然シルムは頭を抑える

シルム「うっ！…頭が！頭が痛いよ！！」

ドルク「痛くても辛いのはわかるでもがんばれ！！お前は俺の最高のパートナーなんだ！！」

ドルクの叫びでシルムは立ち上がる

ドルク「思い出すんだ！！俺と一緒に探検したあの事…そして世界を救って俺と再会したことを！！」

シルム「オイ…ラ…そうだ…オイラは…」

二人に光が包み込んだ…光が収まるとシルムはゴウカザルに戻って倒れていた。

ドルク「シルム…」

シルム「これは…夢なんだね…温かくて心地いい…でも…もうオイラは…迷わないよ…だって…オイラにはドルクという最高のパートナーがいるんだから…」

光が包み込む、そこからさらにシエルマル、ジュク、レビィ、ジュティアもいた。

シエルマル「ここは…?」

ジュク「ドルク…シルム…あれは夢だったんだな」

レビィ「危うく夢の中を永遠にさまよるところだったわ…」

ジュティア「そうね…」

なんとか無事のようにだ

シルム「でもドルクは平気のようだね」

ジュク「もしかするとディセンダーの力と世界樹の力が働いているってことか…」

ジュクはそう応えた

ドルク「たしかにそうかもな…それじゃあ他の奴等の目を覚まさせようぜ」

ドルク達は光に包まれた

…

次についたのは

ドルク「ここは何処だ？」

レヴィ「田舎のようね…一体誰の記憶なのかしら？」

ドルク達は誰の記憶か疑問に思っている。ここも同じようにセピア色に染まっていた。

とりあえず進んでみることに…

彼らとはある場所についた、そこは孤児院だった

ドルク「!？」

ドルク達は見た、それは長い髪をした男が長髪で顔がごつい男に斧で殺されたところだった、さらにそこには二人の少年と短髪の女性もいた、さらにそのごつい男は女性にも斧を振って斬りつけてしまった。その少年は父親である男に駆け寄り男を揺するが…反応がなく少年は泣いてしまった。

ドルク「これって一体？」

ジュティア「酷いわ…」

すると場面が急に暗くなった…ドルク達の目の前にはさっきの男…セピア色ではつきりしなかったが黄色の長髪の男だった…すると彼に変化が現れた…彼の身体はポケモンの姿へと変わっていったのだ…もふもふとした白い体色…背中も黒い体色をしていた。それがドルク達が知っている人物だった

シルム「ドルク！あれって…」

ドルク「レオだよな？あいつ…元人間だったのか…」

シエルマル「しかもあのジューダスという人と同じ生き返ったみたいですよ」

どうやらこれはレオの記憶らしい

ドルクはレオの元へ駆け寄る

ドルク「おいレオ！レオ！」

ドルクはレオを起こすが起きない

ジユク「起きないようだな…どうすれば」

するとシルムは何かを思い出す。

シルム「そうだ！アクアから聞いたらフライパンとおたまを叩けば起こせるみたいなんだって」

シエルマル「たしか『死者の目覚め』でしたよね？」

そう、レオはそれでなければ起きないのだ

シルム「ならやってみるよ…ちょうど用意していたんだ」

シルムはトレジャーバックからおたまとフライパンを取り出した

シルム「みんな！耳をふさいで！」

ドルク達は耳をふさいだ

シルム「行くよ！死者の目覚め！！」

ガンガンガンガン！と周りにおたまとフライパンが鳴る音が響いた、すると

レオ「うおわあああ！？」

ドルク「起きろよねぼすけ野郎」

ドルクがレオの前に立つ

レオ「あ、おはよ～」

まだ眠たそうに目をこするレオ

シルム「レオ、さっきの黄色の長髪の男の人…あれってレオだよね？」

シルムが質問すると

レオ「ああそうだ…そうか…じゃあもう話すか…」

レオは話した

レオ「俺…本当は人間だったんだ…そして俺の本当の名前は…スタン・エルロン…」

ドルク「そういえばスタン達四英雄とか言っていたな」

シルム「まさかレオって!?!」

そう、レオはスタンそのものだった

ジユク「なるほどな…だから声も同じ感じでさらにアクア達がこのおたまとフライパンで起きるというのが似ていたみたいだな」

レビィ「でもどうして?」

レビィの質問にレオ…スタンが答える

レオ（スタン）「俺はあの時バルバトスに殺された…ロニを身代わりにされて俺は死んだ…でもその時俺はバクフーンになっていたんだ…知らない俺をとあるトレーナーに拾われてポケモンの姿で俺はアクア達には俺がスタンだと話さなかったんだ…しかもここは俺の世界だった…でもまさか俺の世界に来るなんてな…俺も正直驚いた」

レオ（スタン）はたんと話をした

レオ（スタン） 「正直死んだ実感がなかった…でもポケモンとしての生活は悪くなかった…俺もこのままでいいと思っていた。でも夢は夢…現実じゃないんだと」

ドルク 「レオ…」

ドルク達の場に重い空気が流れる

ドルク 「だからあのジューダスと言うジュプトルがリオンだとわかって落ち着かなかったんだな…」

レオ（スタン） 「ああ、でもリオンを攻めないでやってくれないか…本当はあいつ…マリアンさんというお姉さんを人質に取られてしまつて裏切ったわけじゃないんだ…だから…リオンを信じてくれないか？」

レオはそう言う

ドルク 「……わかった…お前がそういうならいいぜ…きっと何か理由があつたんだろうな…ジューダスという奴には」

レオ（スタン） 「ありがとうなドルク…」

レオはドルクに感謝した。

レオ（スタン） 「あつ、それと俺がスタンだというのは内緒にしてくれないか？時が来たら話そうと思うんだ」

するとみんなは

ドルク「ああ、そうしておく」

シルム「レオは四英雄のスタンでもオイラは仲間だと信じてるよ」

シエルマル「そうですよ！レオさんはそれでも優しいから」

ジユク「その時にはみんなにちゃんと話せるようにな」

レビィ「無理しないでね」

ジユティア「みんなあんたの事信じているのよ」

レオ（スタン）「ありがとう…みんな…」

レオはドルク達に感謝し

レオ（スタン）「そんじゃ行こうぜ！他のみんなを目覚めさせるために！」

ドルク達は光に包み込んだ

依頼86 運命と絆とレオの真実（後書き）

ドルク「あいつがそうだったのか…」

本人から秘密を打ちかけると来たからどうしようかと思って、デスティニーとデスティニー2あたりで秘密を打ち明けようところで書いたんだ…まあみんなのバレるのは先の事になるけど

シルム「でもオイラ達にはいいの？」

まあ少し知ったほうがいいと思ってね、ちなみにドルクはエルレインの中には通用しません、なぜならディセンダーの力+世界樹自体の力によって永遠の夢を見れません

ジユク「だが他のみんなを助けられないとな」

うん、次回は他の仲間を助けに行きます。

依頼87 運命くどんなに辛い過去があってもく（前書き）

ドルク「にしてもレオ、お前寝すぎだろ」

レオ「いやゝすごく眠かったし」

シルム「ホントにスタンそのものなんだね（汗）」

レオ「とりあえずやろうぜタイトルコール、それでは依頼87!」

ドルク・レオ『燃えるぜ!!』

依頼87 運命くどんなに辛い過去があってもく

前回、ドルクはシルム、シエルマル、ジュク、レビィを目覚めさせ
：さらにレオが四英雄の一人であるスタン・エルロンだと知った、
彼はバルバトスという者に殺されて死んでしまったがバクフーンへ
と転生し生きていた。レオ（スタン）を『死者の目覚め』で目覚め
させ、ドルク達は他のメンバーの夢の中へ

……

ドルク「ここは…」

ドルク達が次に来た夢の中は…なぜか暗かった

シルム「ここは誰の夢の中なんだろう？」

するとレオが

レオ（スタン）「おい！あれて！？」

ドルク達が視線を変えると…そこには一匹のルクシオとトレーナー
がいた。

ドルク「ルクシオ…これってヴォルの夢の中か」

ヴォルはレントラー…つまりその進化前の事だ

するとそのトレーナーはヴォルにこう言ったのだ

トレーナー「よしヴォル、今度は何処に遊びに行こうか？」

ヴォルは嬉しそうな笑顔になる。

ドルク「あいつ…」

シルム「オイラが行くよ」

シルムが行く

レオ（スタン）「またやられなければいいんだけど…」

レオはそんなシルムを心配する。彼女は猿系のポケモンが嫌いなのだ…それでもシルムは彼女に近づく

シルム「ヴォル！」

ヴォルがシルムに向く

ヴォル「誰？」

ヴォルは首をかしげる

シルム「そうか…やっぱり記憶を封じられているんだ…お願いヴォル！目を覚まして！この人間は君をサル以下と言ったんだよ！この言葉をかけていたの！」

ヴォル「嘘だ！そんなはずはない！僕のご主人は！」

シルム「違うよ…君はオイラみたいな猿系のポケモンが嫌いで、過去に『お前は身軽なサル以下の奴だ！俺はそんな奴が嫌いなんだよ！』と…でも辛いのはわかるよ！でも過去を断ち切らないと何も変わらない！思い出して！ヴォル！！」

するとヴォルは

ヴォル「う…！」

突然頭を抑え始めた

ヴォル「頭が…僕は……」

すると光が包み込んだ

シルムの目の前にはレントラーであるヴォルが倒れていた。

ヴォル「そうだ…これは夢なんだ…僕はお前が嫌いだ…でも…僕は少し…認めるよ…ありがとう…シ…ル…ム……」

ヴォルは気絶した。

シルム「ヴォル!？」

レオ「大丈夫だ、気絶しているだけだ…ここまでフォルトウナの力が広がっていたんだな…」

ドルク「とりあえずレオ、ヴォルを抱えてくれないか？」

ドルクがレオに言う

レオ「…わかった…ヴォルは俺が運ぶ」

レオはヴォルを抱えた

さらに今度はアクアも倒れていた。

レオ「アクア！」

レオはヴォルを抱えたままアクアに駆け寄る

アクア「ここは…？」

レオ「お前は夢を見ていたんだ…大丈夫か？」

レオは心配そうにアクアに声をかける

アクア「うん、僕はもう大丈夫だよ…それよりヴォル…」

レオ「今は気絶している。大丈夫だ」

アクアは安堵の表情をする。

ドルク「それじゃあ次行こうぜ」

ドルク達は光に包み込んだ

…

ドルク「ここは…トーティスか…」

ドルク達がついたのはセピア色に染まったトーティス

そこに一人の少年がいた、赤いハチマキを頭に巻いていて短髪だった

ドルク「考えると…」

レオ「クレスの夢の中だな」

そう、クレスの夢の中だ…ドルクは幼いクレスに声をかける

ドルク「クレス！」

クレス「君は…誰？」

幼い声でクレスと言う

ドルク「目を覚ませクレス！お前はそれでも剣士か！旅をしたことや…ミゲールの事…そして俺達の事を思い出してくれ！」

クレス「思い…だ…す…？」

するとクレスは頭を抑えた

クレス「うっ！頭が！頭が痛いよ！」

ドルク「辛くても思い出せ！俺もいる！みんながいる！だから夢から覚ましてくれ！！クレス！！！」

クレス「み…ん…な…そうだ…僕は……」

光が包まれていった…光が収まるとクレスが倒れていた。

ドルク「クレス！」

ドルク達がクレスに駆け寄る

クレス「そうか…これは…夢なんだ…心地よく…平和な…」

さらに今度はミゲール、アトリ、デイン、マリア、ミント、チェスター、アーチェ、さすが倒れていた。

クレス達は目を覚まし、なんとか夢から覚めた

ミゲール「綺麗なお姉さんの夢が…（泣）」

マリア・アトリ『いい加減にしろやクソボケミゲール—（親父）！』

マリア&アトリの怒りの攻撃でミゲールは夢の中へ

クレス「いやいや違うから!？」

ミント「夢がこんなに心地いいなんて…」

チェスター「俺達にあんな幸せな夢を見させるなんてな」

アーチェ「あたし達を舐めないでほしいわ!（怒）」

これでなんとか全員がそろったようだ

ドルク「それじゃありアラ達と合流しようぜ！」

みんなは頷いて光に包まれた

依頼87 運命くどんなに辛い過去があってもく（後書き）

運命は厳しいものです。どうしてもこういう風になるのか…

ドルク「時にそうだよな…それに過去ばかりを見ていては未来はねえしな」

シルム「うん、ヴォルみたいに辛い過去はあるから…」

次回はジューダス：リオンⅡマグナスの夢の中です。

※ちなみに物語上デステイニー2中盤あたりから新章はそうなっています。

依頼 88 リオンⅡ マグナス

ドルク達は次なる夢へ……

今度は

少年の姿の人間がいた

ドルク「考えるとkだな」

ドルクはkに声をかけた

kも何とか夢から覚めさせさらにクラウドもいてなんとか二人を夢から覚ました。ドルク達は次なる夢へ……

次の夢に着いた時にはリアラだけでなく……マグマラシの少年達までいた

リアラ「ドルク！」

ドルク「リアラの方もほぼ夢から解放できたな」

とりあえず合流したドルク達は互いに自己紹介する。

マグマラシ「俺はカイルⅡ デュナミスっていうんだ、よろしく」

マグマラシの少年、カイルが言う、カイルは四英雄であるスタンとルーティの息子である。

※ちなみにレオがスタンだということは、ドルク・シルム・シエルマル・ジユク・レビィ以外は知らない

オーダイル「ロニⅡデュナミスだ、よろしくな！」

オーダイルの青年、ロニが言う

コジョンド「ナナリーⅡフレッチ、よろしく」

コジョンドの女性、ナナリーが言う

ドルク「そういえばここは何処なんだ？」

見たところドルク達は洞窟にいた、もちろんセピア色に染まっている。

カイル「最後は、ジューダスの記憶か…」

ロニ「正確にはリオンⅡマグナスの記憶ということになるがな」

そう、ここはジューダス：リオンⅡマグナスの記憶だ

ドルクは小声でレオに言う

ドルク「（なあレオ、ここは何処か覚えているのか？）」

レオ「（たしか海底洞窟で俺達h）」

ナナリー「ちょっと、誰か来るよ！」

ドルク達はジューダスがいるところに視線を向ける、すると光が包まれてセピア色に染まった洞窟は元の自然の色に染まった、さらにそこには一人の青年がいた。黒い短髪に青い騎士の服：両手には剣を握っていた。

そう、この青年はリオンⅡマグナス：ジューダスである彼の姿

岩の階段を降りたりオンは構える、そこにスタン達四人が来た

スタン「なんのまねだリオン！？」

リオン「見てのとおりだ、ここから先へ進みたければ僕を倒してからにするがいい」

マントが風もなくなびく、さらにレオの夢でも登場した黒い短髪の女性：ルーティⅡカトレットが怒鳴る

ルーティ「なに言ってるのよあんた！今が非常時だってことぐらいわかってんでしょ！？」

だがリオンはひるまずに言う

リオン「そんなことは関係ない、僕は与えられた役割を果たすただお前達を殺すというな」

スタンとルーティの後ろにいる長髪の男性、ウッドロウⅡケルヴィンが必死にリオンに説得する。

ウッドロウ「目を覚ますんだリオン君！君はヒューゴに利用されて

いるだけだ!」

だがリオンは表情を変えず

リオン「そのとおりだ、僕はヒューゴにとって使い捨ての駒のひとつに過ぎない」

彼はそう認めてしまう。自分が使い捨ての駒だということを、さらにウッドロウの後ろにいる女性：フィリアⅡフィリスが言う

フィリア「そんな：!そこまでわかっていてどうして：?」

そう、リオンはヒューゴに利用されているのはわかっているはずだ：だがリオンにも理由というのがある

リオン「僕には守るべき者がある、それだけのことだ」

そう言いリオンはスタン達に向く

リオン「覚悟はいいか!いくぞッ、スタン!」

リオンはスタン達に迫ってくる。

レオ「(あの時俺は：リオンと戦ってしまった：リオンの守るべき者：知ったのはその後だった：)」

……

スタンとリオンのソーディアンが火花を散らす、スタンはそこからリオンを斬りつけた

リオン「…がはっ！」

リオンは斬られてひざまついてしまった、斬りつけた跡には血が流れていた。

スタン「…リオン、なんで…」

スタンは心配そうにリオンに声をかける

リオン「スタン…」

ゴゴゴゴゴ

スタン「な、なんだっ!？」

何処からか音が聞こえる。それは水が流れる音だった

リオン「…終末の時計は…動き…出した…もう…誰にも…止められ…ない…」

ウッドロウ「この音は…!?まさか、水が流れ込んできているのか!?!?まずいぞ…早く逃げないと!」

だが

フィリア「でも、リオンさんが!」

ルーティ「ダメ!間に合わない!」

水の流れる音が響く……

リオooooooooooooン!!!!!!!!!!!!!!

スタンの必死の叫び声が洞窟中に響いた……

再びセピア色に染まった海底洞窟でリオン……ジューダスは倒れていた。そこにエルレインが浮いたまま現れた。

エルレイン「愚かな……なぜお前はなおも傷つこうとする？　ただ一言『未来を変えたい』そう言えば、この苦しみから逃れられるというのに、卑劣な裏切り者ではなく人々の記憶に永くとどまる英雄として称えられるのだぞ？　お前の愛する者も手に入れることができるのだぞ？　愛と名誉……その両方を目の前にしてお前はなぜ、それを拒む？」

ジューダス「…なぜ?…フツ、貴様は…何も…わかっていない、僕は…この結末を…覚悟していた…マリ안의…命こそ…僕の、すべて…そのため…なら…どんな…ののしりも…甘んじて、受ける」

リオン自体である彼は覚悟していた。たとえ自分の命に代えても……守るべき者を守り……どんなことでも受け入れるという覚悟を……

エルレイン「だから願えと言っているのだ、お前の望む未来を名誉と愛、両方を手に入れる未来を」

だがジュダスは不定する

ジューダス「…そんな、もの…欲しく…ない…貴様の作り出す…
まやかしの、愛や…名誉など……なんの、意味もない…」

そう…夢などで作り出す愛と名誉…そんなものは愛でも名誉でもない…愛や名誉は誰かに認められるか…他の大勢の者に認められてこそのものだ…

エルレイン「…この悪夢を永遠に繰り返すと言うのだな？ リオンⅡ
マグナス」

ジューダス「…フツ、だから…貴様は……何も、わかって…ない
…僕は…僕は、リオンでは…ない」

ジューダスは一息おいて…

ジューダス「…僕は…ジューダスだ…！」

そう…彼はリオンとしてではなく…ジューダスとしてだ…

エルレイン「…ならば、望み通り永遠の悪夢を…」

そこへカイルとドルクが駆けつける

カイル「やめろッ！」

ドルク「それ以上苦しめるんじゃない！」

エルレイン「…！」

その後からシルム達が駆けつける

カイル「これ以上好き勝手にはさせないぞ！」

ドルク「永遠の悪夢を見せるなんて卑怯じゃねえのかおい！」

二人が必死にエルレインに言う、しかし本人は困惑していた。

エルレイン「わからない：なぜお前達はその男をかばい立てする？
その男：リオンは私利私欲のために仲間を捨てた裏切り者なのだぞ
？」

しかしみんなは不定した

ロニ「リオン？そんな奴の事は知らねえな」

ナナリー「あたし達は、ただ仲間を助けるだけさ、ジューダスって
いう大切な仲間をね！」

シルム「私利私欲でもない：本当は守りたかったんだ！守りたい者
のために！そんな事を言う資格なんてない！」

シエルマル「そうだ！たとえそうでもみんな仲間だ！」

ジユク「お前がそう言うが関係ない」

レビィ「会ってる時点でもう仲間みたいなものよ」

ジュティア「みんながみんな大事なのよ！」

レオ「そうだ！俺達は助けに来た！大事な仲間を！」

ヴォル「僕は認めたわけじゃない…でも信じていることができるもの…それが仲間だ！」

アクア「そうだよ！僕は仲間なんだ！」

クレス「そうだ！みんなそれぞれ違いはあるけど夢でかなえるほど甘くないよ！」

ミゲール「俺達は俺達の明日があるんだ！」

アトリ「おめえの夢など見たくもねえんだ！！」

デイン「おれっち達は苦しんでも幸福を手にいれるヨ！」

マリア「それでも私達は進む道がある！」

ミント「あなたがどうだろうとしても道はずすわけにはいきません」

チェスター「永遠の夢なんてごめんだ！」

アーチェ「そんな夢なんていないわ！」

すず「こんなものが幸福でもなんでもありません！」

k「そうだ！僕達は！」

クラウド「夢ごときで惑わすほど甘くない！絆があるからいるんだ！」

ジューダス「お前達…」

彼等はジューダスをかばう…彼等にとっては仲間なのだから…

エルレイン「その男はお前達をいつ裏切るのかわからないのだぞ？
すべてを知った今でもなおそのような者を信じられると言うのか？」

だがみんなの答えは一つだ

カイル「知ってるとか、知らないとか、関係ない！俺はジューダスを信じてる！今までもそうだった！そして、これからだ！」

ジューダス「カイル…」

そしてさらにドルクも

ドルク「その時はその時だ…だがよ…最後に信じる奴は…裏切るなんてねえよ…それはみんなを信頼している証だ」

ジューダス「知らない奴なのに…そこまで…」

カイルとドルクがジューダスに近寄る

ドルク「立てるか？」

ジューダス「ああ…」

ジューダスはカイルとドルクに支えながら立った

カイル「さあ、戻ろうジューダス！俺達の世界へ！」

リアラ「そして続けましょう。私達の歴史を…」

ジューダス「…ああ！」

ジューダスは決心する。

ジュティア「みんな一緒よ」

シルム「うん！行こう！」

リアラのペンダントとドルクが光だし、みんなを包み込んだ

依頼88 リオンⅡマグナス（後書き）

ドルク「あいつは超えられるな」

どうして？

ドルク「辛くても自分の信念があるからな」

ジューダス「そうか…」

レオ「リオン…」

さて次回は1000年前に転送…前です

ジューダス「なぜ前なんだ（汗）」

依頼89 1000年前へ! (前書き)

ドルク「連続か」

色々とドルク達のセリフ何処から出したらいいのかなど色々だしね
(汗)

シルム「さて、ついにだね」

そう、では依頼89

レオ「行くぜ!」

依頼89 1000年前へ！

エルレイン「……」

ドルク達は戻ってきた。ここはドルクとリアラが最初に会った場所だ

ロニ「克服してきたぜ、忌まわしい過去とやらをな」

エルレイン「わからない…なぜ、自ら苦しい道を選ぶのだ？神の力でまどろんでいればあらゆる望みが叶うというのに」

エルレインはわからなかった…なぜ彼等は苦しい道を選ぶのかを

ナナリー「そんなので叶った望みに一体、どんな価値があるっていうんだい？」

ジュティア「価値なんてありはしないわ！」

ナナリー「自分の手で掴んでこそ価値があるものさ！」

そう、望みは…自分で叶うものだ、ジュティアとナナリーは子供を育てている経験がある。自分で叶えるように…

ジューダス「いつも正しい道を選ぶはしない以上誰にだって辛い過去や悲しい思い出はある。でも、取り返しのない過ちも数え切れないほどの後悔も、そのすべてが僕等の生きた証なんだ…それを不定することは誰にもできない…いや…させはしない！」

ヴォル「嫌いな奴でも受け入れてくれる奴だっている。嫌いな奴はすべて悪いってわけでもない…僕等は…同じ生き物だから」

レオ「俺達の進む道はここにあるんだ！みんなが進み…その道が！たとえ辛くても最後はがんばって勝ち取る未来がある！」

それぞれが辛い過去をもっている。それでも突き進む未来はみんな違う…どんなに辛くても…悲しくても…怒っても…実ればそれは…望みが叶うのだ

エルレイン「お前達はそうかもしれん、だが…彼等は違う…人々はみな、苦しみからの解放を望んだ…自らの欲望が、叶えられることを望んだのだ」

リアラ「いいえ、人々はただ忘れてるだけよ、偽りの幸福の無意味さを…そして、歴史という人の営みの中にこそ本当の幸福があることを、そのことにいつか、必ず気づくわ！カイル達のように」

苦しみがあるからこそ…人はいる…死んだものもいるが…苦しみを解放しても…逆に悲しさを増やすものだ…偽りの幸福は…彼等にとって…人類（今はポケモンだけの存在だが）にとっての無意味なのだから…

カイル「そうだ、俺達は気づいたんだリアラのおかげで…」

リアラ「カイル…」

ドルク「俺達には…ここがある」

ドルクは胸をドンと叩く

ドルク「生きるという幸せをな！」

シルム「夢でも永遠に生きるのは幸せなんかじゃない…今ある人生を生きることが幸福だよ」

カイル「だから、俺達はお前に奪われた歴史を取り返す！そして、俺達の本当の幸せを取り戻す！絶対に！」

本当の幸福…偽りでもない…本物の幸福…それぞれが違う思いでも…今いる自分達の今を生きる…みんなは頷いた

エルレイン「…無駄なあがきは、よすがいいお前達が、どう思おうと何一つ変えられはしない」

しかしリアラは首を振り言う

リアラ「いいえ、変えられるわ…人の思いの力は、なんだってできる、だから…！今から時間移動をするわ、時代は…天地戦争の頃」

ロニ「歴史を元に戻そうってわけか…！」

ナナリー「やってやろうじゃないか！」

ジューダス「望むところだ！」

シルム「オイラ達もやるよ！勇気はみんなにあるんだから！」

シェルマル「俺達の絆を見せましょう！」

ジユク「俺達が歴史を変える！」

レビィ「未来がこんなのに変えるのは嫌だしね！」

ジュティア「もちろんよ！神様に未来を変えるなんてたまったもんじゃないわ！」

レオ「そうだな！せっかくの歴史を台無しにされるのは嫌だ、だから俺達の世界を！」

ヴォル「未来を！」

アクア「変えてみせるよ！」

クレス「お前に未来をめっちゃくちゃにさせない！」

ミゲール「そうだ！これはカイル達の世界なんだ！」

アトリ「テメェに未来は変えさせねえよ！」

デイン「そうだヨ！こんな未来は嫌だヨ！」

マリア「偽りの幸福なんてただの夢よ！私達みんながいるんだから！」

ミント「これ以上好き勝手させません！」

チェスター「そうだ！俺達は歴史を変えてやる！」

アーチェ「本当の幸せをね！」

すず「覚悟はできています！」

k「行こう！」

クラウド「俺達はいつでもついてるぜ！」

カイル「リアラ、行こう！俺達の歴史を取り返しに！」

ドルク「そして俺達も行くぜ！歴史を取り返す旅によ！」

リアラ「ええ！」

みんなは頷き、ドルク自身とリアラのペンダントが光り、ドルク達は1000年前へと時間移動した。

残されたのはエルレインのみだった

エルレイン「おろかな…その先には悲しみしか待っていないというのに…」

そう彼女は言った…

誰もいない彼等に

依頼89 1000年前へ！（後書き）

カイル「みんなそれぞれ思いがあるんだね…ドルクもすごいな」

ドルク「そうか？」

ジューダス「ここまで説得力あるような感じだが…かなり威圧感も感じるな」

ドルク「おいそれどういう意味だよりオン」

ジューダス「僕はジューダスだ！」

レオ「まあまあリオン」

ジューダス「お前もか！」

次回は天地戦争時代：1000年前に行きます

依頼90 天才科学者登場！（前書き）

ついにあの天才科学者の登場です。

ドルク「どんな奴なのかだな」

まあ見てからのお楽しみ、依頼90

ドルク「刻んどけ！」

依頼90 天才科学者登場！

1000年前の何処かの場所

みんなは倒れていたがすぐに目を覚まして起きた

そこは吹雪が吹いていて、雪が降り積もっていた。ここは何処かの基地のような場所みたいだ

カイル「ここが1000年前の世界、天地戦争時代か…」

シルム「ついたのはいいけどこれからどうする？」

ジューダス「まずは情報を集めなくてはな、エルレインがどうやって天地戦争の勝敗をひっくり返すつもりなのか…それがわからないことには動きようがない」

たしかにジューダスの言うとおり、情報を集めておかねければわからないのだ

クラウド「情報は基本だしな…それにしても…」

k「ここは何処なんだろう？」

ドルク達は何処にいるのかわからない、そこにロニが口を開く

ロニ「ここって…地上軍の拠点じゃねえか？ほら、イクシフォスラ―が置いてあった」

シエルマル「イクシフォスラー？」

ドルク達はイクシフォスラーという言葉に首をかしげる

ジューダス「そういえばドルク達は別の世界から来たんだっただな」

カイル「でも、なんで俺達の世界に来たの？」

シルム「そういえばそうだね、それじゃあ話すね」

……

シルムはカイル達にこれまでの事を説明した。

ジューダス「なるほどな…つまりこの世界に来たのは大いなる実りを手に入れてドルク達の世界にある黒い世界樹をなんとかするとい
うのか…」

ロニ「だからドルク達もこの世界に来たんだな」

ドルク「ああ」

なんとかドルク達の説明が終わり、カイル達もドルク達にこの世界に何が起こっているのかを説明した（ほとんどジューダス（リオン）が説明しているのだが）

ジユク「なるほどな、お前達はそれぞれ違う時代から来て」

レヴィ「歴史を元に戻す旅をしているのね」

ドルク達は納得した。

ジューダス「それにここはちょうどいい、ここなら情報も集めやすい」

シエルマル「じゃあまずはここにいる人達から話を聞いてみましょう」

ドルク「シエルマル：普通にタメ語とかでいいぜ？」

シエルマル「え？でも？」

シエルマルは戸惑うが

ドルク「みんな仲間だ、このぐらいの方が話しやすいだろうしな」

シエルマル「そうですか：いや：そうだね」

とりあえずシエルマルはタメ語で話すことになった、ドルク達は情報を集めるべく地上軍の拠点で情報収集をすることに

……

ドルク達が歩いていると何処からか何かに向かってきた、それはロボットのようだが：人型の形ではなく：リングのような形をして真ん中に緑のコアがあった

カイル「：なんだ？」

すると誰かの声が聞こえる

???? 「待ちなさ～～い！」

そこから一匹のポケモンがロボットを追いかける、足は細く、蛇のようなポケモンだ：草蛇ポケモンのジャノビーだ、声からして♀と
いうか女性のようだ

ジャノビー「こらあっ！あんたのマスターはこの私なのよっ！言う
こと聞きなさい！」

さらに逃げるロボット、ドルク達は避ける

ジャノビー「ちょっとばかり試作パーツを組み込んだぐらいで暴走
するなんて！こらあ～～～～！」

ロニ「なんだ？」

ナナリー「さあ…」

ドルク達も何がなんだかわからない状態だった、だがジャノビーは
ロボットを追いかけるがロボットは逃げてしまう。

ジャノビー「止まれているのがわからないのこのポンコツが！ス
クラップにして、ジャンク箱行きよ！」

するとそのロボットはジャノビーに振り返り見る

ジャノビー「な、何よ…」

今度は逆にロボットがジャノビーを追いかける

ジャノビー「こらあゝゝゝっ！私にあんたのマスターだって言ってるでしょうがっ！」

シルム「あのゝちよつとすみません」

シルムが声をかけるが

ジューダス「無駄だシルム、どうやら取り込み中らしい」

するとジャノビーはドルクの後ろに隠れる

ドルク「うわっ！？おい！？」

ロニ「ちよ、ちよつとあんた！何隠れてんだよ！」

ジャノビーはドルクから離れる

ジャノビー「ちよつとあんた達！あれ、チャツチャと片付けちゃつて！」

ロニ「：もしかしてそれは俺達に言っているのか？」

ロニが振り返りジャノビーに言う

ジャノビー「他の誰に言ってるように聞こえる？」

ミゲール「ってか俺達関係ないじゃん！」

カイルは安堵の表情を浮かべる

ロニ「まったく、いきなりこんなことに巻き込まれるとは…おい姉ちゃん、怪我はなかったか？」

ドルク達は振り向いてさっきのジャノビーへと視線を向ける

ジャノビー「……」

するとジャノビーは黙ってロニの元に向かう

ロニ「な、なんだよ？俺の顔になんかついてるのか？」

????「……………とうっ！」

すると突然ジャノビーはロニを飛び蹴りというか正確的には尻尾を使って叩いたと言った方が正しいだろう

ロニはいきなり叩きつけられて倒れたがすぐに立ち上がる

ロニ「てえ！なっ…なっ…何しやがるこの野郎！」

突然の事でロニはキレてジャノビーに怒る

しかしジャノビーは平然としていた。

ジャノビー「何って？仕返し」

ロニ「はあ!？」

ロニは訳が分からずだった

仕返しとはどういうことなのだろうか？

ジャノビー「私のH R X ー2型壊したでしょ？だから仕返し」

と、彼女はそう言う

どうやら暴走していたあのロボットはH R X ー2という名前らしい
ロニ「仕返しって……お前自分で「片付けちゃって！」とか言っ
ただろうが！」

たしかに彼女は「片付けちゃって！」とは言った……しかし彼女は平
然とした顔で

ジャノビー「いいじゃない、本来なら軍法会議ものところが飛び
蹴り……というか尻尾叩きで済んだのよ？」

それにドルクとカイルが驚く

ドルク「軍法会議だと……？」

カイル「それじゃこれって……地上軍のものなの！？」

すると彼女はとんでもない事を言う

ジャノビー「ま、しょうがないわよねえあんたたち、未来と別世界
から来たんだから事情もわからなかったんだろうし」

ジューダス以外の全員『!?!』

なんとジャノビーはなぜか彼等が未来から来たとか別世界から来たと言ったのだ、だがなぜ彼女はカイル達が未来から来て、ドルク達が別世界に来たのを知っているのだろうか?

カイル「ちょ、ちょっと待ってよ! 何にも言っていないのにどうして!?!」

ドルク「俺達が別世界に来たのかも言っていないねえのに言いやがった...」

すると彼女は少しすつとんきゆうな感じで

ジャノビー「あ、当たってた? 一番可能性がないものを言ってみただけだ」

ジューダス「カマをかけた、というわけか... まんまと乗せられたな」

ミゲール「ってかあんたって預言者か何かか?」

ミゲールはジャノビーに言う

ジャノビー「あら、私は預言者でもなんでもないわよ?」

どうやら本人は違ったらしい

ジューダス「それにしてもどうして、僕達が未来人だなどと思ったんだ? それにドルク達がなぜ別世界から来た住人だと思ったんだ?」

ジャノビーは説明した。

ジャノビー「根拠は、時空間の歪みから生ずる大気中の成分の変化からあくびの仕方まで、36通りほどあるけど、ま、一番大きかったのは「勘」ね」

リアラ「勘…？」

リアラは勘の事で疑問に思った

ジャノビー「ほら、女の勘はカオス理論をも超えるってよく言うじゃない」

ドルク達はみんなで輪になって集まった

カイル「ね、ねえ？「かおすりろん」って何？」

ナナリー「さあ…」

レオ「俺にもさっぱりだ〜」

ある意味こっちがカオスに思えるのは気のせいだろうか…

ミゲール「俺もさっぱりでわからない〜」

マリア「頭に矢でも刺したら頭よくなるわね（黒）」

マリアは何かやばいことを考えていた。

k「カオスってたしかかなり面白いこととか」

クラウド「DS的な感じって意味じゃねえ？」

kとクラウドはそうのように考える

シェルマル「でもよくみんなカオスとか言う時ってあるよね（汗）」

ジユク「そういえばそういうのあったな（汗）」

レビィ「そこは事情があるんじゃないかしら（汗）」

シェルマル、ジユク、レビィはカオスという言葉に嫌々な事だと思っ
っている。

ロニ「ってかなんか別の話になってるじゃねえか（汗）とにかくこ
の姉ちゃんはやばいぞ、とっととずらかろうぜ」

ロニはずらかると言うが

ジューダス「しかしあのロボットを操っていたということはおそら
く、軍の関係者だろう、しかも機械を操っているということはハロ
ルド博士の助手かもしれない」

カイル「たしかハロルド博士って俺達…というかドルク達は使っ
ていなかったけどイクシフォスラーを作った人だよね？」

シルム「そのイクシフォスラーって何なの？」

シルムもイクシフォスラーが何なのかわからないというかドルク達

にはわからないだろう

ドルク「そのハロルド博士って奴はすげえんだな…でもイクシフォスラーってのも見たことないな」

クレス「僕もだよ…レアバードぐらいならわかるけどそれは見たことないな」

ジューダス「そりやそうだろう、まあ後で説明してやる。とりあえず博士ならばエルレインの介入に関しても何か掴んでいるかも知れない、それに博士は、軍師カーレルの双子の弟だ、軍関係の情報に詳しいだろう…やはりハロルド博士に面会を…」

すると話の輪から外れているジャノビーが口を開く

ジャノビー「呼んだ？」

ドルク達が彼女に振り向いて

カイル「よ、呼んでないよ！」

再び話の輪へ

アクア「でもあの人本当に学者なのかな？」

ロニ「まずそれが疑わしいよなあ…泣く子も黙る天才科学者の助手っていうには無理がねえか？」

ジャノビー「ねえ、呼んだ？」

再び彼女が言い、またドルク達が振り向く

ドルク「だから呼んでねえって！」

ジャノビー「だって今「天才科学者」ってそれ、私の事でしょ？」

彼女はそう言う、なぜ彼女は天才科学者が自分の事を言っているのか？

ロニ「……あんたじゃねえよ、あんたの上司：かどうかは知らねえがハロルド博士って知ってるんだろ？」

ジューダス「もしできるのなら会わせてほしい、話がしたいんだ」

ジャノビー「話がしたいの？それならお安いご用よ」

彼女は承諾した。

シルム「ホント？ねえそのハロルド博士って人のところまで案内してよ！」

しかし彼女は首を横に振って

ジャノビー「その必要はないわ、さ、話して」

なぜか彼女が話し相手だった……どういふことなのか？

ドルク「ちょっと待ってくれ！話がちげえんじゃねえか？俺達はハロルド博士って人に話があって……」

ジャンビー「だからここで話せばいいじゃない！わかんない奴ねえ！」

ロニ「だあーかあーらあー！俺達はハロルド博士に話があるんで助手であるあんたには…」

すると彼女は助手に疑問に思い

ジャンビー「助手？私が？誰の助手なの？」

ジューダス「お前はハロルド博士の助手じゃないのか？」

ジャンビーは首を横に振り

ジャンビー「私は助手なんかじゃないわよ」

ロニ「ハア、アホらし…さ、行こうぜ」

すると彼女の口から衝撃的な言葉が

ジャンビー「だって私がハロルドだもの」

ロニ「はいはいわかったわかった、あんたがハロルド…」

すると全員が驚いた

ミント「えっ！？ホ、ホントですか！？」

ジュティア「あんたがハロルド博士本人？」

ハロルド「うん」

ハロルドは頷いた

ジューダス「くだらない冗談はよせ、お前がハロルド博士なわけが……」

ハロルド「あんたの背中にあるのシャルティエでしょ？」

彼女はジューダスの背中にある剣というか背中についている黒いマントに隠れている……ソーディアンであるシャルティエを指す

ハロルド「細身の曲刀で刃渡り67・3cm、柄も含めた全長は81・7cm重さは2・64kg柄はシャルティエ自身の手に合わせて若干ふくらみを持たせてる、レリーフに刻まれてるのはジェルベ模様、属性は地、主に石や岩などを用いた晶術しょうじゅつを使用……あ、初期状態で使える晶術も聞きたい？」

ちなみに晶術とはこの世界で言う魔術の事である。

ジューダス「そこまで詳細なデータを……」

ジューダスは冷静ながら驚く

ハロルド「把握していて当然よ、設計者なんだから」

しかしロニなど納得できない者達が

アトリ「でもおかしいぜ？ たしかハロルド博士って男だったって聞いたぜ？」

しかし彼女：ハロルド本人は嬉しそうな表情で

ハロルド「あ、やっぱりそういうことになってるんだ！いやゝ男の名前にしとけばみゝんな勘違いすると思っただのよねゝ案の定みんなまんまと騙されてるってわけね！グフ、グフフツ♪」

面白く笑うハロルド：天才科学者が女だったというのはドルク達には驚きだった

リアラ「じゃ、じゃああなたは本当にハロルド博士：」

ハロルド「ああ、ハロルドでいいわよ「博士」って言葉の響きが硬すぎてかわいくないし」

ナナリー・ジュティア「かわいくないって：」

ナナリーとジュティアは同時に啞然と言う

ハロルド「さて、じゃ行きましょうか」

ドルク「ちょっと待てよ！行くって何処へだ？」

そう、何処に行くのかわからないのだ

ハロルド「みんなにあなた達を紹介するわ、私の部下ってことでね、そしたらラティスロウの中でも動きやすいでしょ？：それにこれは真面目な話、あんた達がこの時代に來た理由、絶対に内緒にしておいてね」

カイル「うん、わかった！ハロルド以外の人間には絶対に言わないよ」

しかしハロルドは首を横に振る

ハロルド「違う違う！私にも内緒にしておくの！」

カイル「え？だって…」

彼女には理由があった

ハロルド「こんな面白い問題があるのに答えをいきなり聞いちゃったらつまらないじゃない！いい？私が考えてる最中は答えを絶対に言っちゃダメよ！」

みんなは呆れた表情をする

チェスター「何がなんだかな（汗）」

アーチェ「先が思いやられそう（汗）」

ハロルド「それじゃ、ラティスロウの中へレッツゴー！」

ドルク「とにかく行こうぜみんな」

ドルク達はハロルドの案内でラティスロウへと向かった

依頼90 天才科学者登場！（後書き）

ハロルド「やっと私の登場ね、みなさんどうも！こんにちは、こんにちは、ごきげんよう！私ハロルドⅡベルセリオス、天才科学者のハロルドⅡベルセリオスでございませう★」

おい、何俺の司会的なのとっちゃってるわけ？

ハロルド「まあまあ作者、あんただけだと余計不安な感じになりそうだから私がこの場をしきらせたいのよ」

ドルク「ある意味変わり者だな」

ハロルド「グフフッ！ポケダンでまさかの私の活躍が見れるなんて光栄ね」

活躍っておい（汗）

ハロルド「さて今回は私の魅力を語るわよ♪」

語りません（汗）何嘘予告してるんだよ（汗）次回はついにあの者達がポケモンの姿で登場！

依頼91 再会と作戦（前書き）

ついにあの者達とのご対面です。

ドルク「誰だ？」

ハロルド「まあ見てみればわかるわよ、それじゃあ依頼91、行くわよ♪」

依頼91 再会と作戦

前回、ドルク達は1000年前の天地戦争時代へとやってきた。そこに♀のジャノビーがHRX-2の試作パーツにより故障でドルク達に片付けさせられる。なんとかドルク達はHRX-2の暴走をおさめた：

しかもハロルドは女性で目の前でジューダスの背中にあるソーディアン、シャルティエの事を詳細に言い、さらに彼女自体がソーディアン開発者だったのだった

そんなドルク達はハロルドと一緒にラティスロウへと向かっていた。

……

その道中

ナナリー「ねえハロルド、あんた未来の事が気にならないのかい？」

ナナリーがハロルドに未来の事が気にならないのか聞いてきた。しかし彼女は

ハロルド「どうして？ 未来なんか知っちゃったら楽しみが減っちゃうじゃない」

ドルク「でもよ、未来がわかればこれからの戦いが楽になるとかになるんじゃないか？」

しかしハロルドは指を立て

ハロルド「あんたアホね★答えがわかってる問題を解いたって面白くもなんともないじゃん」

シルム「面白いのか面白くないのかが判断基準なのね(汗)」

つまりたとえで言うアニメやゲームがネタバレになったら楽しめという面白くないということだ

ドルク「なるほどな、それがお前の判断ってわけだな」

するとハロルドは面白い笑みで

ハロルド「そ！ちなみにあんた達と一緒に行動してるのも面白そうだからよ」

すると突然ハロルドは目をキラキラさせ

ハロルド「時を越えてきた未来人と別世界の者達との対面なんてめったにできない体験じゃない♪」

たしかに言われてみればそうだろう、時を越えてきた未来人と別世界の住人が過去の者と対面するなどめずらしいことだ

ロニ「しっかしあのハロルドⅡベルセリオスが女だったなんてビックリしたよなあ！歴史学者の驚く顔が目に見えかぶぜ」

ロニがそう言うが

ジューダス「現代に戻って、学者達に話したところで信じてはもら

えないだろうがな」

レオ「（そうかもなあゝやっぱリオンは変わらないな）」

レオはそんな親友？の顔を見てホッとする。

ジューダス「（そういえばあいつ…僕を見ているようだが…：そういえばアクアがスタンみたいとか言っていたが…：ドルク達も何か知っていたそうだな、後で聞いておくか）」

ジューダスは冷静にそう思っていた。何かわかったような感じだ

ハロルド「語り継がれた歴史なんてみんなそんなもんよ、自分達に都合がいいようにねじ曲げられたり、改ざんされたり、噂が一人歩きすることだってあるしね」

ミゲール「噂が一人歩きって…：あんたのが計画的犯行に思えそうだが」

ミゲールはそう言うがハロルド本人は逆に嬉しそうな顔で

ハロルド「グフフツッ！1000年間も騙しとおせるなんて、すべて私の思惑通りってワケね★」

クレス「はあゝ（汗）」

クラウド「あんたってある意味天才かもな（汗）」

みんなが呆れたようになる。

ハロルド「そういえばドルク、あんたって元人間で世界樹自体なのよね？」

突然ハロルドがドルクに言う

ドルク「そうだが？」

するとハロルドは目を再びキラキラさせて

ハロルド「ちよつとあんたの体を調べたいのよ♪いや調べさせてちよくだい♪あんたを解剖すれば何かわかりそうだし♪」

しかしドルクは

ドルク「いやわかっててもそれは無理だ、ってかお前なく解剖って俺を殺す気か」

ドルクはそんな予感がした。

ハロルド「えゝ調べたかったのになゝ世界樹を取り込んだ人間の生態とか色々な事がわかりそうなのになゝ」

と、残念そうに言う

シルム「ハロルド、ドルクを実験に利用しないでよ（汗）」

シルムはハロルドに注意した。

クラウド「まあ俺もドルクとかの仲間をそんな風にはしねえけど…敵とかの死体を利用したりはするぜ（黒）」

と、なぜかダークな感じになるクロウド

アクア「怖いよ（汗）」

マリア「じゃあこいつを実験にさせるとか（黒）」

マリアは逃げるミゲールを掴んでそう言う

ハロルド「あら、それもいいわね♪」

と、何処からかハロルドはドリルを取り出した

なぜかチュイーンと嫌な音が聞こえる

ミゲール「やゝめゝてゝ！！」（泣）」

ミゲール、涙目（汗）

そんなバカ騒動している間に大きな建物についた、そこにある入口から入った

……

中に入ると他の者達が集まっていた。さらに広く、何処かの司令室のようだ

ハロルド「ここが作戦会議室よ、ちょうど全員そろってるみたいね」

ハロルドが今いる者達を順に紹介した。ちなみに全員ポケモンの姿

だった

ハロルド「まず上にいて一番偉そうなのがリトラー」

リトラーと言う者の姿は頭に王冠のようなものがついていて、手が平たいポケモン、ペンギンポケモンのエンペルト

ハロルド「後、私から見て左から、ディムロス、シャルティエ、イクティノス、そして私の前にいるのが兄貴のカーレルよ」

ディムロスと呼ばれる者の姿は龍のような顔にオレンジ色の体色に両翼、尻尾には炎が灯っている。かえんポケモンのリザードン、シャルティエの姿は両目は赤いコンタクトのような半球体のものに覆っていて尻尾には3つのひし形を合体させたものがついていて、翼の端らへんは赤くそっている。精霊ポケモンのフライゴン、イクティノスと呼ばれた者の姿は赤いトサカのようなものが頭についていて鳥のような姿をしている。もうきんポケモンのムクホークだ、そしてハロルドの兄であるカーレルという者の姿は蔓のようなものが体についていて上品な姿のポケモン、ロイヤルポケモンのジャローダだ、それぞれ軍服などを着ていた。ちなみにハロルドはピンクのブーツにローブ、両手首などには黒いファアがついている。

レオ「（ディムロス！？）」

レオは驚く、それはそうだろう…レオはディムロスの事を知っている。なぜかという…レオ…スタンのソーディアンが…ディムロスなのだから…かつて一緒に戦った相棒が今ここにいるのだから…しかしここは1000年前なのでレオ自体の事は知らないだろう

レオ「（そうか…そうだよな…ディムロス達がいるならそう考えら

れるからな)」

レオはとりあえず再会をぐっところえた

ドルク達は入ってきて、そこにディムロスが彼等に気づき言う

ディムロス「なんだハロルド？今は会議中だぞ後にしろ」

厳しい表情でハロルドを注意する。しかしハロルドはお構いなしに

ハロルド「すぐ済むからちょっと待って、私の新しい部下よ、みんなよろしくね」

そんなハロルドにディム罗斯は

ディムロス「新しい部下？誰の許可を得たんだ？」

許可とかなんとかを言うディムロス、そこにイクティノスが言う

イクティノス「しかも一般人の子供を？何を考えているのですハロルド」

一般の子供とはたぶん見た目からしてカイルとかリアラとかのことだろう、ドルクとシルムは年齢的には未成年、クレスとミントも同じだ、見た目からまとめるとカイルとリアラ、アトリやデイン、クロウドやk、シエルマルだろう

ハロルド「私のHRX-2型を倒したと言えは納得してくれるですよ？」

と、リトラーに向かって言う

シャルティエ「あれをですか！？そりゃすごい…」

シェルティエは絶賛したがデймロスは納得していなかった

デймロス「しかし一般人は一般人、子供は子供…それにそのグレイシアもなんだか大丈夫なのかも心配になる…認めるわけにはいかないな」

しかしドルク達などが反論する。

カイル「ちょ、ちょっと待ってください！子供子供って」

ドルク「だが俺達は」

デймロス「君達二人は黙っていたまえ！」

デймロスは二人を一喝

ハロルド「とにかくそういうことだから、この子達は工兵隊に所属させるわ、工兵隊の人事権は部隊長である私にあるはずよね？」

ハロルドは負けじとデймロスに言う、しかしデймロスも

デймロス「認められん、全兵士の人事権は中将の私が握っている」

だがハロルドはさっと呆れた感じに

ハロルド「あっそ、なら私はこれから別行動を取るから、ダイクロ

フト突入作戦も勝手にやってもらうことになるけどそれでもいいのね？」

そこに彼女の兄…カーレルがハロルドに向かって言う

カーレル「おい、ハロルド！」

彼は止めようとしたその時

リトラー「そこまでだ」

リトラーが話を止める、みんながリトラーに視線を向けた

リトラー「彼等を地上軍の正式な兵士として認める」

リトラーはドルク達を正式な兵士として認めた

ディムロス「リトラー総司令！」

ディムロスは反論するが

リトラー「ディムロス中将、我が軍の最終決定権は私にあるはずだが？…それにハロルド君の事だ、一度言い出したら聞かないだろうしな」

ハロルド「さっすが、話がわかる！」

カーレル「ハロルド！総司令に向かってなんて口を…！」

しかしリトラーは落ち着いた感じで

リトラー「まあまあカーレル中将、そんなことよりも自己紹介してくれないかね？」

リトラーはドルク達に視線を向け、自己紹介をしてくれと言う

カイル「あっ、はい！」

とりあえずはドルク達は自己紹介した。

ドルク「ドルク：ドルクⅡグランハートだ」

と、ドルクは名前にグランハートをつけて言う、前に氏名とかの事が前々からあったのでもしもの時に氏名を考えていたのだ

シルム「シルムⅡフレアライトといいます」

シエルマル「シエルマルⅡタチツキです」

ジュク「ジュクⅡラプターだ」

レビィ「レビィⅡラプターっています」

ジュティア「ジュティアⅡアクアリスよ」

ドルク達の自己紹介が終わり、ミゲール達だ

ミゲール「ミゲール・アルベイン、よろしくな」

クレス「クレス・アルベインです」

アトリ「アトリ・アルベインだ、赤ちゃんでもやれる、よろしくな」

デイン「デインだよ」

マリア「マリア・アルベインといいます、足手まといにならないようにしますのでよろしくお願いします」

ミント「ミント・アドネートといいます」

チェスター「チェスター・バークライトっています」

アーチェ「アーチェ・クラインよ…」

すず「藤林すずと申します」

ミゲール達の方の自己紹介が終わり、レオ達の紹介だ

レオ「レオといいます」

アクア「僕はアクアです」

ヴォル「ヴォルだ…」

クラウド「クラウド、よろしくな」

k「僕はkと申します」

残ったカイル達も自己紹介した。

カイル「えっと、カイルⅡデュナミスです」

ロニ「同じく、ロニⅡデュナミスだ」

リアラ「リアラと申します」

ジューダス「ジューダスと名乗っている」

ナナリー「ナナリーⅡフレッチさ」

リトラー「うむ、よろしく」

全員の挨拶がすみ

リトラー「君達はハロルド君の部下として工兵隊に配属される」

ディムロス「だが勘違いしてもらっては困る、現場の指揮をとるのは私だ、私の命令には必ず従ってもらう」

ハロルド「はいはい！わかってるって」

ハロルドは厳しいディムロスに対してわかったような態度をとる

ハロルド「それよりディムロス、作戦の説明してたんでしょ？もう一回最初からしてくれる？」

ディムロスは呆れたような表情で

ディムロス「こいつらも連れて行くつもりか？」

ハロルド「私の護衛だからね、文句ある？あるなら…」

言う途中でデймロスは強制的に納得し

デймロス「わかったわかった」

デймロスは作戦を説明する。

デймロス「本作戦の目的は二つある、一つは我が軍に投降の意を示したベルクラント開発チームの救出だ、そして…」

そこでカイルが質問してきた

カイル「あの…ベルクラントってなんですか？」

ロニ「あのなあ、前に話しただろうが、ダイクロフトにある兵器だよ」

デймロス「続けていいかね？」

不機嫌そうにデймロスは言う

デймロス「そしてもう一つ、すでにその任にあたり敵将ミクトラの策におちた同志二人の救出にある…すなわち、クレメンテ殿とアトワイトだ」

ドルク「なるほどな…で？俺達の任務は？」

そこでハロルドが説明する

ハロルド「ダイクロフトまでの移動手段の確保よ、もう目星はついてるから後は人手がいるだけ」

しかしここで問題が

アクア「人手って言われても僕達は機械とかいじれないよ?」

シルム「オイラも少ししか機械に詳しくないから」

だがハロルドは余裕の表情で

ハロルド「ああ大丈夫、ただのゴミあさりだから」

リアラ「ゴミ…あさり?」

ハロルド「まっ、行けばわかるわよ」

ハロルドはデймロスに視線を向けた

ハロルド「デймロス、これで終わりよね? んじゃ、私達は出かけるから」

デймロス「頼んだぞハロルド、お前の無理は飲んだんだ、今度はそっちが…」

言いかけようとしたとき

ハロルド「はいはい、わかってますって」

わかったようにハロルドは言ってドルク達に視線を向け

ハロルド「じゃ、行きますか！」

と、ラデイスロウから出た

……

外に出たドルク達

ドルク「なあハロルド、そろそろ何処に行くのか教えてくれよ」

ハロルドはドルク達に視線を向ける

ハロルド「ここから東にある『物資保管所』よ、ベルクラントに撃たれて今は使われてないけどね」

チェスター「でもそんなところで何をするんだ？」

と、チェスターは質問した。

ハロルド「言ったじゃない、ゴミあさりよ、移動手段を確保するつたって飛行艇が丸ごと落ちてるわけないでしょ、だから使える部品を集めて作るの、とにかく黙ってついてくる！部品さえ集まれば、チヨチヨイのチヨイでできるんだから」

ジュティア「ついていくのはいいけど、あたし達、この時代の地図なんて持ってないわよ？」

ナナリー「東って言われてもどっちに行けばいいんだい？」

そう、ドルク達はこの時代の地図をもっていない

ハロルド「そんなことだろうと思ってね、ホイ、地図！それがあればわかるっしょ」

ドルク「これでなんとかいけるな」

ドルク達は出発した

……

歩いてる途中

マリア「ハア…ハア…」

クレス「母さん、あまり無理しちゃ」

マリアは突然疲れたした

クレス「みんなちょっと休憩していいかな？」

ドルク「ハロルド、いいか？」

ドルクはハロルドに聞く

ハロルド「そうね、少し休みましょう」

少し休憩することに

ジューダス「レオ、ちょっといいか？それとドルクとシルムも」

レオ「え？」

ドルク「俺達は構わないぜ」

ジューダスはレオ、ドルク、シルムを連れて少しみんなと離れた所に

ドルク「で？何のようだ？」

ジューダス「ちょっとな…レオ…お前、スタンだろ？」

ドルク・シルム・レオ『!?!』

ドルク達は驚いた表情をする

ジューダス「フッ、やっぱりな…どうもレオを見るとあいつだと思
ってしまってたな」

レオ「やっぱわかつちやったか…お前も変わらないなりオン」

レオはジューダスにかつての親友の名を言った

ジューダス「お前もな…とりあえずは内緒にしておく…特にカイル
もどうかかわらない」

レオ「そうだな…俺はバルバトスに殺され、気づいたらバクフーン
に転生した…あの時俺は死んだ感じだった…でも俺は生きている」

レオは自分の胸を軽く叩く

ドルク「今のところは俺達はわかっているがクレス達やカイル達はわかってないからな」

シルム「内緒にはしてるけど」

ドルクとシルムはそう言う

ジューダス「そうか…まあ僕もまさかあいつがポケモンに転生したとは思ってなかったからな」

レオ「リオン…」

ジューダス「今はジューダスだ…たとえバレてもお前は僕の事をジューダスと呼べ、もしバレた時は…リオンでもいい」

ジューダスは少しツンとした態度で言う

レオ「わかったよりオン…とりあえずはそうしておく」

ドルク「それじゃあ戻ろうぜ」

シルム「もうマリアさんの方もよくなったと思うし」

レオとジューダスは頷いて四人はみんなの元へ

依頼91 再会と作戦（後書き）

ドルク「デймロスがリザードンって…作者、たしかラッシュのイメージCVもデймロスだったよな？」

本当はバシャーモでもいいけど…やっぱりザードンということで

シルム「こういう風の吹き回し（汗）」

ジューダス「だが一応言うが、1000年も前だ、デймロスはス
タンの事を覚えていないからな」

それがもう一つの運命って感じかもね…次回はゴミあさりです。

ジューダス「お前が言ってどうする（汗）」

いいだしっぺハロルドだし

依頼92 物資保管所

物資保管所

緑色の建物でなぜか荒れ果てていて大きく穴が開いた場所が上からだに見える

ミント「ここが、物資保管所ですね」

アクア「ずいぶんと荒れ果てているね」

だが

ハロルド「建物の原型を留めてるんだからマシな方よ、直撃じゃなかったらこの程度で済んだのよ」

ロニ「ぞつとしねえなあゝなんでベルクラントみたいなもん作っちゃまったんだか…」

たしかにロニの言うとおり、なんでベルクラントみたいなのが作られたのか

ハロルド「なんでって、新しい地表の生成のためじゃない知らなかったの？」

カイル「え？そうなの？」

カイルは知らなかったようでわからなかった

レオ「（俺は知ってるけどな）」

レオはスタンのため知っている。ただ知っている者と知らない者もいる。ハロルドが説明する。

ハロルド「元々ベルクラントは地表を細かく粉碎し空に巻きあげるためのシステムだったの、で、その巻き上げた石や岩を使って空に浮遊大陸を作って街や村を作るつもりだったのよ」

ジューダス「本来ならば、すべての人がその浮遊大陸に移民するはずだった、だが、天上人と呼ばれる特権階級の人間達だけが使うことになったんだ」

と、ジューダスは背を向けて言う

ナナリー「それに反発した地上人が反旗をひるがえしたのが天地戦争なんだよね」

ジューダス「そうだ、そして戦争になった途端、ベルクラントはその姿を兵器へと変えた…」

ベルクラントは元々兵器でなくシステムだった…しかし移民は天上人と呼ばれる特権階級の人間達のもしか使うことはできなかった。それが地上人への反発となり、天地戦争は起こってしまった。

レオ「（ヒューゴもイレヌさん…みんなどうしてそうなってしまったんだ…俺にはわからない…どうしてそうなったのか…）」

レオはあの時…つまりカイルがいる時代の18年前の事を思い出していた。

操られて利用された者：一緒に夢を競い合った者：色んな人をレオは出会ってきた。そして彼は英雄となった：しかしレオは殺されてポケモンへと転生した。スタンという名前を隠し、レオと名づけてとあるトレーナーと仲間達と一緒に：

だが思い出はそう簡単に消せない：スタンとして旅立った記憶、デイムロスと出会った記憶：そして今いるアクアとヴォルとの記憶：記憶の中でスタンとしての記憶：過去を封印したが：もう自分の時代に来てしまった。そして：古い友であるジューダス：リオンⅡマグナスとの再会、運命というのは何が起こるのかわからない：それが運命である。

さて、話を戻そう、カイルが建物に入ろうとしたらハロルドが止める

ハロルド「ちょい待ち！：なんだか変なニオイがするわねえ」

ハロルドが入口近くに行ってニオイを嗅ぐと

ハロルド「あちゃあ、マズった！科学物質がもれちゃってる」

ドルク「何っ！？それじゃあ中に入れないのか？」

ドルクは中に入れないのか？とハロルドに言う、だがハロルドは

ハロルド「ああ、だいじょぶだいじょぶ、かなりヤバイけど10分くらいなら我慢できるわよ、たぶん」

ミゲール「マジで？」

ハロルド「マジで」

ハッキリとマジでと言うハロルド

ハロルド「いい？よく聞きなさいよ？目的のブツは資材置き場の一番奥にあるコンテナに保管されてるわ、でもそれを開けるには何個ものプロテクトを突破しなくちゃいけないの、あちこちに『プロテクト解除用のキー』が落ちてるはずだからそれを全部手に入れるのよ」

ドルク「わかった、だがホントに中に入って大丈夫なのか？」

ドルクの質問にハロルドは

ハロルド「10分くらいならだいしょぶって言ったでしょうが…でも、10分過ぎたら命の保障はできないわよ、いい？10分よ10分！」

10分と強調して言うハロルド、これは命がけの作業だ

クレス「でもちょっと待ってくださいハロルドさん、僕の母とか病気持ちとかは大丈夫なんでしょうか？」

マリアなのだが彼女は元気に思えるが病気持ちだ、なぜミゲール自信を厳しくするときだけは元気なのかは…大人の事情である（汗）

ハロルド「そうね、病気持ちだと命の保障ないわね、後でガスマスクぐらいは作ってあげるけど、ここに残った方がいいわね」

マリア「ごめんなさいみなさん」

マリアは謝るが

ドルク「ここは俺達に任せてくれ、あんたの体に無理させちまうかな」

クレス「そうだね、ここは僕が残るよ」

ミゲール「それじゃ俺は」

マリア「お前はここに残れ!!」

マリアの一喝でミゲールは留守番（強制的に）

アトリ「俺も赤ちゃんだから影響受けそうだから残るわ」

ハロルド「そうね、こっちも後でガスマスクは作っておくわ」

チェスター「俺達も残った方がいいかもな」

アーチェ「そうね、あたしも残るわ」

すず「私も残ります」

ミント「私も、ドルクさん達だけでお願いします」

結局ファンタジアチームは残り、残ったメンバーで中に入る事になった

……

中に入ると毒ガスのおいなどがツンと鼻にくる

シルム「ゴホッゴホッ！これは10分どころじゃないかも」

ドルク「たしかにな、ここは分かれて探すしかねえかもな」

ハロルド「そうね、それなら確実に探せるわ」

ここでドルク達は分かれて探すことにした。

ジャンケンなど色々とやった結果

ドルク班はドルク、シルム、シエルマル、ジユク、レビイ、ジユデ
イア

カイル班はカイル、リアラ、ロニ、ジューダス、ナナリー、ハロルド

クラウド班はクラウド、k、レオ、アクア、ヴォルとこのようなメ
ンバーとなった

ジューダス「それからソーサリースコープを渡しておく」

ジューダスはドルクとクラウドにソーサリースコープを渡した、ソ
ーサリースコープはこの世界で使われるレンズという物質を使って
見えないものを見つけることができるすぐれものだ

ドルク「ありがとな…俺達は1階だな」

ドルク班は1階へ

カイル「俺達は地下の方に行くよ」

カイル班は地下1階へ

クラウド「俺達は2階だな」

クラウド班は2階へ

……

ドルク「エナジーバスター！」

ドルクがエナジーバスターで魔物を一掃する

ドルク「ここは敵が多いな」

悪態をつくようにドルクは言う

シルム「ソーサラスコープで探してるけど…ん？」

シルムは何かを見つけた…それは2階からだった

シルム「これって」

とあるコンテナ部分を空けてみた、そこにはチップがあった、そこに

カイル「みんな〜！」

クラウド「こっちもチップ持ってきたぞ！」

他の班が戻ってきた

ドルク「これで3つ全部だな」

ハロルド「そうだけどどこかにマスターキーはあるはずよ、でもこのチップを持ったまま外に出したらだめだからね」

シルム「え？なんで？」

ハロルドが説明した、この3つのチップは温度変化に弱いため外は吹雪になっているため出ると今までの苦労が水の泡になる

ジユク「そうになるとマスターキーを探すか：残された時間はないしな」

たしかにここに入ってますでに7分も経過しているのだ

クラウド「あ、それなら入口近くのコンテナにマスターキーがあるぜ」

クラウドが言う、ルカリオ特有の波動感知能力があるためすぐにマスターキーは見つけられた

……

入口付近のコンテナに3つのチップを使った、そこにはマスターキーがあった

ハロルド「これがマスターキーね、これで大抵のプロテクトは外せ

るわ、マスターキーは温度変化で壊れたりしないからいったん外に出て休憩しましょう」

ドルク「そうだな…急がないとな」

ドルク達は急いで外へと出た

……

クレス「おかえり、大丈夫だった？」

クレスが心配そうにドルク達に声をかける

k「さすがにここはきついよ…でもまだマスターキーだけ手に入れて残った二つのキーを手に入れないといけないし」

そう、マスターキーを手に入れても高レベルのプロテクトを解除していない

シエルマル「やっぱ新鮮な空気は吸っておかないと」

シエルマルはスーハー・スーハーと息を吸ったり吐いたりしてる

すず「かなりのものですねこれは」

マリア「ごめんなさい…」

マリアは悲しそうに謝る

ドルク「謝ることじゃねえよ、色々負担かけたら大変だからな」

ドルクがマリアを気遣う

アクア「でもまだ二つの解除プロテクト用のキーを手に入れないとね」

クラウド「大丈夫だ、ここは波動で一気に見つけりゃあいいし…それに毒ガスは鋼タイプをもってる俺には効かないしな」

シルム「あっ！」

そう、クラウドはルカリオの姿をしている。つまり毒ガスは毒タイプのようもので鋼タイプや同じ毒タイプのポケモンには効果はない

ハロルド「あら〜それならポケモンを調べたいわね…ちょっとクラウド、あんたの体解剖していい？」

ハロルドは目をキラキラさせて言う

クラウド「ちょっと待て！？そこまでやるな！ってか死体なら大丈夫だが」

なぜか怖いことを言うクラウド

ジューダス「ふざけてないで入るぞ」

ジューダスが保管所に入る

ドルク「行こうぜ」

ファンタジア組はここに残り、他のメンバーも入った

……

まずは2階で

ハロルド「これはセルキーね」

セルキーを手に入れた

ハロルド「これが上位レベルのプロテクト解除キーよ、『マスターキー』『セルキー』『バイオキー』この3つのキーを資材コンテナにえばプロテクトを解除できるわ、でも『セルキー』『バイオキー』は温度変化に弱いから、外に出ちゃだめよ」

シルム「つまりさっきのと同じだね」

シルムは納得する

ドルク「後はバイオキーか、クラウド」

クラウド「わかってる！」

クラウドは波動を使って集中する

……

地下1階

レオ「あった！」

機械に刺さっていたバイオキーをドルク達は手に入れた

ドルク「後は…」

アクア「資材コンテナに急ごう！」

ドルク達は奥の資材コンテナへと向かう

……

ドルク達は3つのキーを使って資材コンテナを開けた、ハロルドが必要な物をコンテナから取り出す

ハロルド「ん〜と、必要な部品はバルブとノズルと耐熱材と…」

色々と選んで

ハロルド「よし！これだけあれば十分だわ、あとは組み立てるだけね」

ドルク「こんなガラクタの寄せ集めで空を飛ぶ乗り物なんてできるのか？」

ドルクがハロルドに質問する

ハロルド「これだけの材料があるのよ？普通作れない？」

シェルマル「いや…それできるのハロルドさんだけだと思うよ（汗）」

たしかに普通の人なら絶対にできないだろう

クラウド「俺はできるんだけどな」

自信よくクラウドは言う

ハロルド「みんなそう言うのよねえよくわからないわ」

いや大体がハロウド自体しかできないことだからだ、よくわからないと言われても違和感がない

ドルク「用は済んだんだろ？とっとと戻ろうぜ」

レオ「そうだな」

みんなは急いで物資保管所から脱出した

依頼92 物資保管所（後書き）

さて、久しぶりの更新で遅れてすみませんでした…バトル部を終わ
りまで更新して荒らしなどで色々とかける気分になかった事申
し訳ありませんでした！

ドルク「まあなんとか更新できたな」

シルム「そうだね」

ハロルド「まあ色々あるだろうし、さて次回いくわよ！」

へいへい…今回はベルグラント（1回目）に突入します

依頼93 作戦開始（前書き）

ついに作戦開始です

ドルク「さて…どういくかな」

そんな依頼93

ドルク「突撃だ!!」

依頼93 作戦開始

ドルク達は物資保管所から地上軍拠点へと戻ってきた

ハロルド「じゃあ私は早速マシンの製作にとりかかるからリトラー司令への報告、よろしく」

ドルク「お、おい！」

カイル「えっ！？ちょ、ちょっと待ってよ！」

ハロルドは「飛べー飛べーロケットー♪」と歌いながらマシン製作に向かう

ジユク「なんか不安だな（汗）」

ロニ「ああ、あいつに任せて本当に大丈夫なのか？」

ジユクとロニは不安になる

ナナリー「さあ…」

ミント「たしかに大丈夫なのでしょう（汗）」

シルム「と、とにかくリトラーさんのところに行こうよ」

ドルク達はラティスロウへと向かった

……

ラティスロウ

作戦会議室にはリトラー、ディムロス、カーレルがいた、だがディムロスに焦りが感じられた

ディムロス「ダイクロフト内部の見取り図はまだ出来ていないのか？時間がかりすぎてるぞ」

カーレル「構造も複雑だし、作成班はここのところ徹夜作業が続いている仕方がないだろう」

ディムロス「しかし…」

ディムロス自体はまるで急いでいるように思える…それは誰かのためなのか…イラだちがディムロスに響く

カーレル「言いたくはないが、今回の作戦は、準備期間が短すぎる…普段の君なら、ここまで時間に余裕のない作戦スケジュールは組まないはずだ」

ディムロス「わかってる、しかし我々には時間がないんだ」

入口でドルク達は話を聞いていた

ロニ「……なんか入りづらい雰囲気だな」

たしかに…今話しているためか入りたくても入りにくい、カーレルの声が話し声が聞こえる

カーレル「ここで焦ってもしょうがない、どのみちハロルドのマシンが出来ないことには動きようがないしな」

ディムロス「それにしても遅いなハロルドは、どこで油を売っているのか…」

カイル「入ろう、みんな…」

入りづらいだろうがドルク達はラティスロウの中へと入った

…

作戦会議室

リトラー「おお、君たちか、首尾はどうだったかね？」

ドルクは報告する

ドルク「必要な材料はそろっている…今ハロルドが組み立て作業に取り掛かっている」

リトラー「うむ、ごくろうだった、ハロルドのマシンが完成するまで待機していてくれ」

待機を命じられたが

カイル「あの…まだそんなに疲れてませんか、手伝えることありませんか？」

カイルが手伝えることがあるのかと聞く、しかし

ディムロス「その必要はない、作戦開始まで休養を取りたまえ」

カイル「あの、でも…」

ディムロス「これは命令だ」

ディムロス自体ピリピリとしていた。

ドルク「……」

カーレル「まあ好意はありがたく受け取っておくよ、ありがとうカイル君」

カイル「はい…」

カイルは落ち込んで顔を下げた、カーレルはディムロスに視線を向ける

カーレル「ディムロス、見取り図は完成したら私室に持って行かせる、君も休んでくれ」

ディムロス「…わかった、後は頼む」

ディムロスは私室に戻っていった

カーレル「ふう、やれやれ…」

カーレルは呆れたような表情をした

リトラー「気苦労をかけるな、カーレル君」

カーレルはリトラーに視線を向く

カーレル「本来なら、部下への配慮はディムロスの専売特許なんですけどね…ま、たまにはいいです」

その疑問にナナリーが問いかけてきた

ナナリー「部下への配慮って…あのディムロスさんがかい？」

カーレルはドルク達に向く

カーレル「ああ、君達は知らないのか、彼はね…兵達の間でもっとも人気があるんだ、『突撃兵』と異名を取るほどの強さも理由の一つなんだがそれ以上に部下への接し方がある。えこひいきや差別をせず、常に公明正大、辛いときには励まし、喜びは共にわかちあう」

『ま、人気があって当然だな』と付け加えて言った

ロニ「へえ…こう言っちゃなんだが正直、見えないねえ」

レオ「(ディムロス…いつもああなのはらしくないな…どうしたんだ…)」

スタンであるレオは自分のパートナーでもあったディムロスの事を思っていた

カーレル「ディムロスも余裕がないのさ」

シルム「え？」

カーレル「今度の作戦は、必ず成功させなくてはいけないそのプレッシャーのせいだろう」

カイル・レオ「そうなのか…」

同時にカイルとレオは言う

カイル「え？」

レオ「あ、いやなんでもないんだ…」

レオは恥ずかしそうになる

カイル「？」

カイルは首をかしげる

カーレル「だから、彼の事を悪く思わないでくれ、今度の作戦が終わればいつものディムロスに戻るはずだ」

カイル「はい！わかりました！」

カイルは頷いた

レオ「（あいつがプレッシャーなんてなかった…ディムロス…）」

レオは不安になりながらもドルク達と一緒に士官用の部屋で休むことにした

……

士官用の部屋はカーレルの部屋となっている。

カイル「なんかさ、ワクワクしてくるよね！あのソーディアンチー
ムと一緒に戦えるなんてさ！」

カイルは嬉しそうだった

ジューダス「浮かれていると怪我をするぞ」

カイル「言われなくてもわかってるよ！」

カイルは怒った表情をする

ドルク「そうだな…戦場に行くから油断はできねえ」

カイル「ドルクは見た目からして慎重だね」

カイルはドルクに視線を向ける

ドルク「まあブレイブのリーダー兼ギルド『ブレイブ』の親方だからな」

ドルクは胸を叩く

クレス「たしかにね、ドルクは見た目は怖い感じもあるけど優しいからね」

クレスは付け足すように言う

カイル「へえーそうなんだ」

カイルは納得する

ロニ「まあたしかにな…それにソーディアンチームといやあ伝説上の英雄、しかもとびきり有名ときてる、落ち着けて方が無理な話さ、ましてやこいつ…カイルの英雄好きときたら筋金入りだからな」

リアラ「ふふっ！そうね」

リアラは笑う

ドルク「まあでもカイルって結構そうかもしれないねえーな（笑）」

ドルクも笑う

カイル「あ、リアラとドルクまで笑った！ひでーなー！」

カイルは怒るが

リアラ「でも…カイルだって私から見たら立派な英雄なんだけどな」

カイル「そ、そうかな…」

カイルは照れる

ドルク「おっ！照れちまいやがってこの♪」

ドルクはカイルをじゃれる

カイル「なんだよドルク」

カイルも返す

シルム「よほど仲良くなってるね」

クレス「そうみたいだね」

シルムとクレスはそう言う

ナナリー「はいはいごちそーさま！なんせカイルはリアラだけの英雄だもんね」

ナナリーはこの場をおさめる

レオ「俺ちよつと風に当たってくるよ」

アクア「大丈夫？」

アクアは心配そうに声をかける

レオ「大丈夫だ」

レオは部屋を出た

ドルク「俺も腹減ったからどつか食いに行って戦いに備えてくるぜ」

シルム「オイラもドルクが心配だから一緒に行くね」

ジューダス「僕も風に当たってくるか」

ジュティア「あたしも」

カイル「えっ？」

ドルク、シルム、ジューダス、ジュティアは部屋を出た

ミゲール「さてその間俺h」

マリア「ナンパしたらどうなるかわかってるんだろうな？」

マリアがミゲールを引っつかんでボコボコにする

ミント「クレスさん、話が…」

クレス「ん？あ…僕も風に当たりたいな」

アーチェ「え？ちよっと！」

ミント「私もちよっと」

クレスとミントも部屋を出た

アーチェ「気になる」

アーチェは気になる様子

チェスター「おいおい、色々あんだから行くなよな？」

チェスターに止められぶーと頬を膨らませるアーチェ

k「なら見学とかしとこうよ」

kの提案でみんなは頷くが

ロニ「俺はちょっと外の空気吸ってくるわ、おいナナリーお前も付き合えよ」

ナナリー「え？なんであんたに付き合わなくちゃいけないのさ！」

ナナリーは反論するがロニが近づいて小声で言う

ロニ「気いきかせろよバカ」

ナナリー「わ、わかった、けど、勘違いしないでよ！仕方なくなんだからね！」

ロニ「へいへい、行くぞ」

ロニとナナリーは部屋を出る、他のメンバーも出るがkは『カイルとリアラは残って』と言って部屋を出た

残されたカイルとリアラだけとなってしまった

……

外ではドルク、シルム、ジュティア、レオ、ジューダスの4人が囲んでいた

レオ「あゝようやく喋れるゝ」

レオは解放したような感じで言う

ドルク「まあ正体がスタンだってまだ明かすわけにはいかねえな」
とりあえず5人はこの場で話すことができる機会をうかがっていた。
理由はやはりスタンであるレオの事だろう

ジューダス「とりあえずスタン、お前の話を聞かせてもらおうぞ」

レオ「あ、ああ…」

レオはジューダスに今までの事を話す、バクフーンに転生したことなどを

ジューダス「なるほどな…お前は僕と同じようなわけだな」

ドルク「正確にはジューダスはエルレインによって生き返ったんだろ？」

ドルクはそう言う

ジューダス「そうだ、それにしても驚いたな…スタン、お前がそのトレーナーの元で育ててられていたとはな」

レオ「いや、死んだと思ってたけど…転生した理由はまだわからないんだ、それにその間カイルも立派になっていたなんて…俺はカイルを見守ってるしかできない…ましてや今術とかも練習してるが

うまくできないんだ…」

そう、スタンであるレオはソーディアンであるディムロスを使って
でないと晶術は使えない…練習はしているがほとんどポケモン技な
どで中々術を発動することができない

ドルク「たしかにな…でもジューダスは他の術覚えてるしな」

ジューダス「まあ僕のは色々あってだがな」

ジューダスは言えない…ある意味大人の事情というのが入っている
だろう、そこに

クレス「そうだったんだ…」

ミント「まさかこんなことが」

5人『!?!?』

そこにクレスとミントが来た

シルム「クレスさんにミントさん!?!?」

ドルク「まさか聞いてたのか?」

クレスとミントは頷いた

レオ「すまないな…内緒にしてくれ、この事はみんなに言わないで
くれ…そのうち明かそうと思うんだ、その時まで」

クレス「うん、君がそう言うならそうするよ…」

ミント「みなさんの事が気になっていてついていったんです。まさかそんなことが」

クレスとミントは悲しい表情をする

ジュティア「それより気になるわね…デймロス自体のあのピリピリした感じは」

ジュティアはデймロスの何かを感じていた

レオ「元々あいつはそんなじゃなかった…俺もデймロスと一緒に
の時はあんな風にはなっていない…何かあいつにも事情があるんだ
ろうな」

レオはそう考える

ドルク「たしかにな…あの雰囲気は何かあるだろうと思うぜ？」

ドルクもデймロスから感じた気持ちを感じていた

クレス「たしかに、部下を思っているのならこのような行為はしないよね」

クレスはそう言う

ドルク「きつと何かあるんだろうな…大切な人とか何かだと思うぜ？」

ドルクはそう考えた

レオ「大切な人か…わからなくなった」

レオは混乱する

シルム「無理しない方がいいよ、とりあえず戻ろうか…ディムロスさんもきつと大丈夫だと思うし」

ジューダス「そうだな、僕はハロルドの様子を見に行ってくる」

ジューダスはハロルドの元へ

ドルク「そんじゃあ戻ろうぜ」

ドルク達は戻っていった

……

次の朝

作戦会議室

ドルク達は作戦会議室に集まった

リトラー「君達、ちょうどよかった、これから作戦の説明を行うところだ始めてくれ、ディムロス」

ちょうどみんな作戦の説明を始めるところだった、ディムロスが作戦の説明をした

ディムロス「まず、ハロルドのマシンでダイクロフトに強行着陸する、その後、チームを二手にわけろ…Aチームはベルクラント開発チームおよびクレメンテ、アトワイトの両氏の救出、Bチームは敵の攪乱をおこなう、Aチームが救出した後は制御室を奪取、ダイクロフトの全機能を一時的にマヒさせる、ダイクロフトがマヒしているスキについてAチームとBチームは合流、脱出ポッドでラティスロウへ帰還する」

という内容だった

シャルティエ「あの…ハロルドさんのマシンは帰りは使えないんですか？」

シャルティエはそう質問する。それにハロルドが応える

ハロルド「ああ、強襲用につてことだったから片道しか想定してないのよ」

イクティノス「マシンを帰りにも使うとすれば敵に破壊されないよう守備人員を割かなくてはいけなくなる、少数精鋭で突入するこの作戦でこれ以上の兵力分散は愚行だろう」

さらにイクティノスが付け加えてシャルティエに説明した

ディムロス「そういうことだ、では各チームの割り振りを発表する。

Aチームは私、イクティノス、シャルティエ、カーレルだ」

Aチームはディムロス、イクティノス、シャルティエ、カーレルの4人だ

ディムロス「Bチームはハロルドだ、護衛の人間は…」

ディムロスが話してるところでハロルドが割って入る

ハロルド「もちろんカイル達とドルク達よ、構わないでしょ？」

ディムロス「了解した…以上だ、質問は？」

誰も質問で手をあげる者はいなかった

ディムロス「今回の作戦は必ず成功させなくてはいけない…何があってもだ、よろしく頼むぞみんな！」

リトラー「会議はこれまでだ、各員格納庫にて集合せよ、健闘を期待している」

ディムロス達は先に格納庫へ

ジューダス「さすがはディムロス、地上軍の総司令官だけのことはある、作戦の前だというのに平常心を忘れていない」

ロニ「なるほどねえ…これなら兵士に人気があるのもわかるな」

レオ「（あれ？何か忘れてるような気が…）」

レオは何か心に引っかかるような感じがした、その何かがわからな
い…

ハロルド「…やれやれ、兄さんの言うとおりホントに余裕ないみた

いね」

カイル「え？だってディムロスさん、すごく堂々としてたけど…」

カイルはそう言うがハロルドは首を振る

ハロルド「いつもの言葉が出てないのよ」

リアラ「いつもの言葉？」

リアラは首をかしげる

シルム「その言葉って？」

シルムがハロルドに問いただす

ハロルド「あいつは作戦前に部下にこう言うのよ『生きて、帰ってこい』って」

レオ「（そうだ…あいつあの時もそうだった…いつもこの言葉を言っていた…引かかっていたのはこういうことだったのか…）」

レオは心に引かかる忘れていたのを思い出した

ジュティア「あら、部下思いのいい人に思えるわよ？」

ジュティアはそう言うが

ハロルド「でも、今日は言わなかった…他人の事が目に入っていないなんてらしくないわ」

カイル「そうだったのか……」

カイルは心に何か重いのが降ったような感覚がした

ハロルド「ま、とにかく格納庫へ向かいましょ」

ドルク達は格納庫へと向かった

……

格納庫からハロルドの作ったマシンがロケットのように発射し、ダイクロフトへと向かって飛ぶ、ダイクロフトの何処かの場所へとぶつかった

ドルク達はダイクロフト内部へと着いた

ドルク「あゝいってえゝなあゝ」

カイル「イテテテテ……もうなんなんだよこのマシン！飛び方も着地もメチャクチャじゃないか！」

痛々しくなるドルク、カイルは作った本人であるハロルドに文句を言う

ハロルド「メチャクチャじゃないわよ、ちゃんと揺れ方とか衝撃も計算して軌道を入力したもの」

ロニ「……ちょっと待て、ってことはわざとこういう風に飛んだのか!?!」

しかしハロルドは反省せず

ハロルド「このぐらいドツタンバツタンしないと飛んでるって感じがしないでしょ？」

シルム「そこまでやるんだね（汗）」

ハロルドが天才なのかを疑うように思える…これが本当に天才科学者なのだろうか（汗）

ハロルド「うんうん、計算通り格納庫に到着したわね、ほら、これが脱出用ポッドよ覚えておいてね」

視線を脱出用ポッドに向ける、古い薄茶色をした機械がそうらしい、そこから兵士達の声が聞こえる、どうやら気づかれてしまったようだ

カーレル「まずいな、思ったよりも早く気づかれてしまった」

ディムロス「なに、いつかは見つかるんだ、それが少しばかり早まっただけのことさ…よし、作戦開始だ！ハロルド、攪乱は任せたぞ、他の者は私に続け！」

ディムロス達4人は先に行った

そこから敵が現れた

ドルク「お前等の相手は俺達だ！きやがれ！！」

ドルク達は構えた

剣を持った魔物が襲ってくる

シルム「スライディングバレット！」

シルムはスライディングで滑り込んで撃つ

シルム「そこから裂空斬！！」

シルムは滑り込んでから飛んで回転斬りで圧倒する

ドルク「大地のエネルギーよ！食らえ！！グランドダッシャー！！」

大地の破壊のエネルギーが敵をのみこむ

カイル「火炎放射！さらに爆炎剣！」

カイルは火炎放射を放つ、さらにそこから剣を炎で纏い斬りつける

……

数分後

敵は倒れてしまっている

ロニ「ほい一丁上がりっ！さ、俺達もとっとと行こう…」

行こうとするが

ハロルド「ちょい待ち！」

ハロルドが待ったをかけた

ドルク「どうした、ハロルド？」

ハロルド「あんた達、このモンスターと戦ったことがあるの？」

それは今襲ってきた魔物と戦ったことがあるのかを聞かれた

ドルク「いや、俺達は初めてだ」

クレス「僕達も戦ったことなかった魔物だよ…カイル達は？」

カイル「俺達はあるけど…それがどうしたの？」

ハロルドはモンスターの死体を調べる

ハロルド「なるほど…ドルク達は別世界から来たのだからないわね
…つまりカイル達と同じように未来から来た奴がいるってわけね」

リアラ「どうということ？」

倒したモンスター達はドルク達やクレス達でも見たことがない

マリア「たしかに気になることがあるわね…」

ミゲール「俺達でもこんなモンスターは対峙していなかったしな」

ドルク「俺もどんな奴だろうとかかかってきたがこういう奴は初めて
だな」

それぞれそう言う

ハロルド「そうよね…カイル達以外このモンスターは私見たことないもの、こいつと似たようなのは今も存在してるけど、それよりも異常なまでに進化してるわ…つまりこれは誰かが未来から連れて来たってこと、心当たりある？」

カイル達には心当たりがある人物といえバ…

ロニ「ありもあり、大ありさ…エルレインって奴の仕業だよ」

ジューダス「おそらく奴の手下がすでに天上軍に入り込んでいて支援しているのだろうな」

考えられるならエルレインしかないとカイル達はそう思っているだろう

ハロルド「ふむふむ…つまりあんた達の目的の一つは歴史修正のわけね、そのエルレインって奴が天上軍に肩入れしてこの戦争を勝たせようとしている。で、それを阻止するためにあんた達はこの時代に来た」と

リアラ「ええ、その通りよ…私達はエルレインの歴史介入を防ぐためにここに来たの」

リアラがハロルドに説明する

ドルク「でも俺達は歴史介入目的もあるが別の目的だぜ」

ドルク達は別世界に來た目的は言わなかった：ハロルド本人が答えを知るのはつまらないという彼女の考えも考えてのことだ

ハロルド「わかってるわ：それにしても歴史をいじるなんてずいぶんと面白そうなことやってるじゃない、そいつ神様気取りね」

リアラが首を振る

リアラ「いえ、神の名を語ってるんじゃないわ：本当に神を降臨させてその力を使っているの」

ハロルド「本物の神の力！？ってことは、あんた達神様に喧嘩売ってるわけ！？」

ハロルドは驚く

カイル「ま、まあそうなるかな」

するとハロルドは

ハロルド「：フフ、フフフッ！」

カイル「ハロルド！？ど、どうかした！？？」

ハロルドは笑っていた。それはまるで何か面白いことでもしたいような気分に見える

ハロルド「面白くなってきたじゃない！神様と喧嘩なんて最高だわ！よし！私の頭脳が神をも凌駕^{りようが}すること証明して見せるわっ！」

気合が入るハロルド

カイル「は、はぁ……」

カイルは呆れたような表情をする

ハロルド「さ、そうとわかったらこんなところでグズグズしてられないわ！作戦続行！行くわみんな！」

ハロルドは気合十分に言う

クレス「ハロルドさんすごい気合入ってるね…ハハ（汗）」

クレスは苦笑いをする

ドルク「まあいいや…とにかく暴れてやるぜこのやろ…！！」

ハロルド「あら、ドルクが言うなら私も暴れるわよ…！！」

もはや気合十分なのはドルクもだった

クラウド「よしトコトン暴れて（黒）」

クラウドは何か企んでるようだった

ドルク「よっしゃあ！行くぞデメエ等…！！」

ロニ「なんでお前が仕切るんだよ！」

ロニはつつこみをするが

ドルク「聞きてえか？」

ロニ「あ？」

ドルク「聞きてえよなあ、俺の事…」

ハロルド「聞きたいけど答えわかるのもね…」

ハロルドは困る

ドルク「じゃあハロルドは俺が何者か応えられるのか？」

ドルクの言葉にハロルドは

ハロルド「応えてやるわよ！あんたってポケモンだけど本当は…人間でしょ？」

クレス「あ、当たってる！？」

クレスは驚く

ドルク「ほうくやるじゃねえか…それじゃあ言わせてもらうぜ！！俺はドダイトスのドルク！元人間だ！テメエ等のハートに刻んどきな！！」

ドルクはポーズを決め、そこからエレクトリックギターのシャウトが響いた

ハロルド「後は他になんのかだけど…とりあえず行くわよ！！」

ドルク達ブレイブは早速行動を開始した

依頼93 作戦開始（後書き）

ハロルド「面白くなってきたわね♪」

あんたの脳自体もどうなのか（汗）

ハロルド「あら、どうせドルクとかいい戦力がいるんだから暴れな
いとね♪」

なんだか頭が痛い（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8918p/>

ポケモン不思議のダンジョン ブレイブトレジャーズ

2011年11月21日12時32分発行